

上並榎南遺跡

信越本線北高崎・群馬八幡間烏川橋りょう
改良工事事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告

1985

日本国有鉄道信濃川工事事務所
財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団
法人

資料	(財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-352
		135
No. 1-2460	平成2年3月31日	(7)

上かみ並なみ榎え南みなみ遺跡



京焼系及び瀬戸・美濃系陶器(下段左端のみ京焼系)



肥前及び船載陶磁器(下段右の4点は船載陶磁・上段中央の2点は唐津系・他は伊万里系)

序

信越本線北高崎・群馬八幡間の鳥川にかかります橋りょう改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を、当事業団が受託し、調査に着手したのは、暑さも次第に増してきました7月に入ってからであります。以来、発掘調査から整理に至る一連の事業も順調にすすみ、ここに調査報告書を刊行する運びとなりました。

上並榎南遺跡と命名しました本遺跡では、弥生時代から近世江戸時代に至るまで、それぞれの時代の、様々な営みの跡が発見され、この地域に住む人々の長い歴史の一端を知る、数々の資料を得ることができました。なかでも、隣接する集落の中に、今なおその一部を残す、並榎城に関連する資料は、城郭史研究の上で貴重な資料といえましょう。

昭和59年の夏は、例年になく暑い日が続きました。この酷暑の中で連日続けられた調査、引き続いての整理、そして報告書の刊行に至るまで、一連の事業が、短期間のうちに完了いたしましたのも、日本国有鉄道信濃川工事事務所の関係者の方々をはじめ、地元地権者、調査担当者、そして、調査に参加していただいた方々等、多くの人々の御指導、御協力の賜物であります。ここに、厚く感謝の意を表します。

多くの方々の力が結集されている本報告書が、真に有効に活用されんことを念じ序といたします。

昭和60年 3月25日

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清 水 一 郎

例 言

1. 本書は信越本線北高崎・群馬八幡間烏川橋りょう改良工事に伴い、実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査区は並榎城跡の1部にあたるが、調査区は群馬県遺跡地図では「南遺跡」となっている。したがって本書では両者を含め、町名を冠して「上並榎南遺跡」と呼称した。
3. 事業主体は、日本国有鉄道信濃川工事事務所である。
4. 発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が下記により実施した。

期 間 昭和59年7月18日～昭和59年9月25日
調査担当 石坂 茂、徳江秀夫、大西雅広
5. 整理作業は、昭和59年9月26日～同年11月28日の約2ヶ月間現地で行った。その後、昭和59年12月1日～昭和60年3月31日までの4ヶ月間は、群馬県埋蔵文化財調査事業団で行った。担当は下記のとおりである。

整理担当 大西雅広
本文執筆 神保侑史、石坂 茂、徳江秀夫、大西雅広、新倉明彦（分担は目次に姓を記した）
遺物接合・復原・実測 小暮正子、塚越カツミ、塚越トク、南雲富子、東野登志、東野文子
山口シゲコ（以上現地）
実測・トレース・図版作成 高橋順子、嶋崎しづ子 南雲富子（以上埋文調査事業団）
なお、弥生式土器、中・近世陶磁器の実測とトレースに関して、下記の方々の協力をいただいた。
石井弘子、大川明子、鈴木紀子、中山悦子、福島恵理子、茂木順子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一、宮沢健二
6. 並榎城跡について、山崎 一氏より玉稿をいただいた。
7. 本書作成にあたって、各資料について下記の方々から御教示をいただいた。（敬称略）

中・近世陶磁器 仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）、軽石・地質 新井房夫（群馬大学）
石材 飯島静夫（群馬県地質学協会）、城郭史 山崎 一（群馬県文化財保護審議会委員）
8. 本書作成にあたって、下記の方々から御指導・協力をいただいた。（敬称略）

高崎市教育委員会、白石保三郎、梅沢重昭、大沢秋良、松本浩一、神保侑史、相京建史
飯田陽一、井川達夫、石塚久則、大江正行、笠原秀樹、木津博明、国定 均、定方隆史、
関 晴彦、谷藤保彦、柳岡良宏、山口逸弘、山本朋子、横倉興一、吉田有光
9. 出土遺物や実測図・写真等は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 調査記録用のグリッドは5 m×5 mで、工事用基準杭（D—0、D—12）を基準に設定した。基点は南西とし、南北方向をアルファベット、東西方向を数字で表記した。
2. グリッドの基準としたD—0杭の座標は、第Ⅸ系 $X=37691.514$ ・ $Y=-75966.526$ 、D—12は、 $X=37699.813$ ・ $Y=-75907.103$ である。
3. 遺構実測図の縮尺は不統一であるため、各々にスケールを付した。
4. 遺構実測図中の断面基準線は、海拔で表わした。
5. 遺物実測図の縮尺は、土器 $\frac{1}{5}$ ・板碑 $\frac{1}{4}$ ・石臼 $\frac{1}{6}$ ・不明石製品 $\frac{1}{6}$ を原則とした。
6. 遺構名及び、遺構番号は、調査時に付したものを原則として使用した。変更したものは、()内に調査時のものを記した。また、溝には欠番が生じている。
7. 遺構実測図中の方位記号は、磁北を表わす。
8. 遺物写真の縮尺は、実測図の縮尺に近づけることを原則とした。
9. 土器の色調は、農林省水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修による、新版標準土色帖を使用した。表現方法については、マンセル表示ではなく色名を使用した。また、土器胎土中に含まれる石の粒径区分もこれに従った。なお、陶磁器の色調は土色帖では表現できないものがあり、一部に貫用的な表現を使用した。
10. 周辺の遺跡位置図に使用した地図は、国土地理院発行25000分之1地形図の「下室田」「富岡」「前橋」「高崎」である。

目 次

巻頭図版
序
例 言
凡 例

I 経過と環境

1. 調査に至る経過 ----- (神保)--- 1
2. 遺跡の位置と地形 ----- (石坂)--- 2
3. 周辺の遺跡 ----- (徳江)--- 3
4. 遺跡の基本土層 ----- (石坂)--- 9
5. 調査の概要 ----- (石坂)---10

II 検出された遺構と遺物

1. 弥生時代～平安時代 ----- (大西)---13
 - 4 号 溝 ----- 13
 - 9 号 溝 ----- 15
 - 18号土 墳 ----- 18
 - 3 号 溝 ----- 19
 - 1号住居跡 ----- 22
 - 3号住居跡 ----- 23
 - 2号住居跡 ----- 24
 - 4号住居跡 ----- 26
2. 中世～近世 ----- (大西)---27
 - 2 号 溝 ----- (遺物、徳江)27
 - 5 号 溝 ----- 37
 - 6 号 溝 ----- 39
 - 7 号 溝 ----- 42
 - 8 号 溝 ----- 51
 - 10号溝 ----- 15
 - 11号溝 ----- 53
 - 1 号 井 戸 ----- 53
 - 2 号 井 戸 ----- 55
 - 3 号 井 戸 ----- 57

- 4 号 井 戸 ----- 58
- 5 号 井 戸 ----- 59
- 6 号 井 戸 ----- 60
- 1号土 墳墓 ----- 62
- 2号土 墳墓 ----- 63
- 22号土 墳 ----- 63
- 3号土 墳墓 ----- 63
- 4号土 墳墓 ----- 64
- 5号土 墳墓 ----- 65
- 土 墳 (1～36号土 墳) ----- 66
- 1号柱穴列 ----- 75
- ピット出土遺物 ----- 75
- 遺構外出土遺物 ----- (徳江)---78

III 調査の成果と問題点

1. 遺構について ----- (大西)---83
 - 弥生時代中期後半の遺構 ----- 83
 - 中・近世の遺構 ----- 83
 - 小 結 ----- 84
2. 遺物について ----- (大西)---85
 - 中・近世の遺物 (板碑、新倉)85
 - 小 結 ----- 87
3. ま と め ----- 87

IV 付章 並榎城跡

1. 史的考察 ----- 89
2. 遺構の観察 ----- 91

挿 図 目 次

第1図	地形区分図	2	第36図	8号溝・出土遺物実測図	52
第2図	周辺遺跡位置図	5	第37図	11号溝実測図	53
第3図	柱状断面図	9	第38図	1号井戸・出土遺物実測図	54
第4図	遺跡地形図	11	第39図	2号井戸実測図	55
第5図	4号溝実測図	13	第40図	2号井戸出土遺物実測図(1)	56
第6図	4号溝出土遺物実測図	14	第41図	2号井戸出土遺物実測図(2)	57
第7図	9号溝実測図	16	第42図	3号井戸実測図	57
第8図	9号溝出土遺物実測図(1)	17	第43図	3号井戸出土遺物実測図	58
第9図	9号溝出土遺物実測図(2)	18	第44図	4号井戸実測図	58
第10図	18号土壌・出土遺物実測図	18	第45図	4号井戸出土遺物実測図	59
第11図	3号溝実測図	20	第46図	5号井戸・出土遺物実測図	60
第12図	3号溝出土遺物実測図	21	第47図	6号井戸・出土遺物実測図	61
第13図	1号住居跡・出土遺物実測図	22	第48図	6号井戸・出土遺物実測図	62
第14図	3号住居跡実測図	23	第49図	1・2号土壌墓・出土遺物実測図	63
第15図	3号住居跡出土遺物実測図	24	第50図	22号土壌・出土遺物実測図	64
第16図	2号住居跡・出土遺物実測図	25	第51図	3号土壌墓・出土遺物実測図	64
第17図	4号住居跡実測図	26	第52図	4号土壌墓・出土遺物実測図	65
第18図	4号住居跡出土遺物実測図	27	第53図	5号土壌墓・出土遺物実測図	66
第19図	2号溝実測図	31	第54図	1・2号土壌実測図	68
第20図	2号溝実測図	32	第55図	3～6号土壌実測図	69
第21図	2号溝出土遺物実測図(1)	33	第56図	6～11号土壌・出土遺物実測図	70
第22図	2号溝出土遺物実測図(2)	34	第57図	11～16号土壌・出土遺物実測図	71
第23図	2号溝出土遺物実測図(3)	35	第58図	17～21号土壌・出土遺物実測図	72
第24図	2号溝出土遺物実測図(4)	36	第59図	23～27号土壌・出土遺物実測図	73
第25図	2号溝出土遺物実測図(5)	37	第60図	27～30号土壌・出土遺物実測図	74
第26図	5号溝実測図	38	第61図	33・35号土壌実測図	75
第27図	6号溝実測図	40	第62図	1号柱穴列実測図	75
第28図	6号溝出土遺物実測図	41	第63図	ピット出土遺物実測図(1)	77
第29図	7号溝実測図	46	第64図	ピット出土遺物実測図(2)	78
第30図	7号溝実測図	47	第65図	遺構外出土遺物実測図(1)	80
第31図	7号溝出土遺物実測図(1)	47	第66図	遺構外出土遺物実測図(2)	81
第32図	7号溝出土遺物実測図(2)	48	第67図	遺構外出土遺物実測図(3)	82
第33図	7号溝出土遺物実測図(3)	49	第68図	遺跡付近表採遺物実測図	82
第34図	7号溝出土遺物実測図(4)	50	付図1	下並榎の砦	90
第35図	7号溝出土遺物実測図(5)	51	付図2	北城址	90

付図3 並榎城址 -----	91	付図5 城砦の分布図 -----	92
付図4 並榎城址地籍図 -----	92		

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧表 -----	6	表3 中・近世出土遺物一覧表 -----	87
表2 土壙一覧表 -----	66		

図 版 目 次

図版1 遺跡全景	6・7号溝
発掘区全景	6号溝テラス状平坦部
図版2 4号溝	図版11 7号溝
4号溝遺物出土状態	7号溝東半
4号溝	8号溝
9号溝	11号溝
図版3 9号溝遺物出土状態	図版12 1号井戸
9号溝遺物出土状態	2号井戸
18号土壙	3号井戸
図版4 3・4号溝	図版13 4号井戸
3号溝	5号井戸
3号溝遺物出土状態	6号井戸
図版5 3号溝遺物出土状態	図版14 1号土壙墓
1号住居跡	2号土壙墓
1号住居跡炉跡	22号土壙土層断面
図版6 3号住居跡	図版15 22号土壙
3号住居跡炉跡	5号土壙墓
2号住居跡	6号土壙
図版7 2号住居跡遺物出土状態	図版16 6号土壙遺物出土状態
4号住居跡	8号土壙
4号住居跡遺物出土状態	9・10・11号土壙
図版8 2号溝B—B'土層断面	図版17 12号土壙
2号溝西側礫出土状態	12号土壙遺物出土状態
2号溝	13号土壙
図版9 2号溝・5号溝重複部分土層断面	図版18 19号土壙
5号溝土層断面	23号土壙
5号溝	26号土壙
図版10 6号溝土層断面	図版19 26号土壙遺物出土状態

- 28・29号土壙
33号土壙
図版20 35号土壙
1号柱穴列
1号柱穴列近接
図版21 4・9号溝出土遺物
図版22 9号溝、18号土壙、3号溝出土遺物
図版23 3号溝、2・4号住居跡出土遺物
図版24 2号溝出土遺物
図版25 2号溝出土遺物
図版26 2・6号溝出土遺物
図版27 6・7号溝出土遺物
図版28 7号溝出土遺物
図版29 7号溝出土遺物
図版30 7号溝出土遺物
図版31 7・8号溝・1号井戸出土遺物
図版32 2号井戸出土遺物
図版33 3～5号井戸出土遺物
図版34 6号井戸、2号土壙墓出土遺物
図版35 2～5号土壙墓、6・10・12・17・21号
土壙出土遺物
図版36 24・26・27号土壙、ピット出土遺物
図版37 遺構外出土遺物
図版38 遺構外・周辺表採遺物

I 経過と環境

1 調査に至る経過

国鉄信越本線の北高崎駅、群馬八幡駅間にかかる烏川橋りょう改良工事に伴い、当該工事区域内の文化財の所在及び取扱いについての照会が、日本国有鉄道信濃川工事事務所（以下、国鉄と称す）より群馬県教育委員会管理部文化財保護課（以下、文化財保護課と称す）にあったのは昭和58年6月24日のことである。その後7月1日に国鉄側は、文化財保護課に来課して、工事概要について説明を行い、文化財調査に対する協力を求めた。さっそく、文化財保護課は当該地の現地調査を実施し、土師器片、須恵器片の散布及び並榎城跡の堀跡を確認した。そして、試掘調査の必要性を感じ、用地買収の一部が完了した昭和59年3月21日に国鉄の立合いのもとに、文化財保護課文化財保護主事西田健彦が試掘調査を行なった。その結果、並榎城跡の堀跡及び平安時代の住居跡1軒が確認された。試掘調査結果は昭和59年4月2日付けにて文化財保護課より国鉄に回答がなされ、同時に文化財保護課より当該地域の文化財の現状保存が申し入れられた。しかし、当該地域は工事の性格上、現状保存が極めて難しいところから文化財保護課、国鉄との間で協議が重ねられ、最終的に記録保存の措置がとられることとなった。昭和59年5月30日付けにて、国鉄は文化財保護課に当該地域の文化財調査を改めて依頼してきた。この依頼は、さらに文化財保護課より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団と称す）に調査依頼があり、当事業団が昭和59年度事業の一環として実施することになった。事業団は調査の具体的な方策をめぐって国鉄、文化財保護課と数回協議を重ね、それが整った昭和59年6月28日に事業団より国鉄に対して当該工事区域の調査計画書が提出された。そして昭和59年7月2日付けにて国鉄と事業団は、「信越本線北高崎、群馬八幡間橋りょう改良工事業業用地内（群馬県高崎市上並榎町字南）埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。契約締結後国鉄と事業団は調査に関する細部の検討、協議を行い、用地問題が解決した昭和59年7月18日に調査に着手し、9月25日に調査を終了させた。調査期間中には、地元の高崎市上並榎町地区の人々には、調査を進める上で数々の御協力をいただいた。特に上並榎第1区長の塚越五郎氏には調査に従事する作業員の募集その他でお世話になった。また、排土の置場所の関係では、同所の中島宏氏、中島徹氏、綱中正昭氏、調査事務所用地では中島ナツヨ氏より土地の借用方について御協力をいただいた。ここに明記して、感謝する次第である。調査終了後は、直に発掘調査報告書作成にとりかかり、10月より11月の2ヶ月間は地元の上並榎町の調査事務所で作業を進め、12月以後は事業団内で、これを行なった。そして、以下に報告するところの調査結果をまとめることができた。なお、最後になるが発掘調査から調査報告書刊行までの間、日本国有鉄道信濃川工事事務所市川忠夫、二岸幹雄、和田耕治、山内利男、山田善宜、同高崎改良工事区岡庭秀治、白倉昭司等の各氏から調査に対する並々ならぬ配慮、協力を賜ったことを記しておきたい。

I 経過と環境

2 遺跡の位置と地形

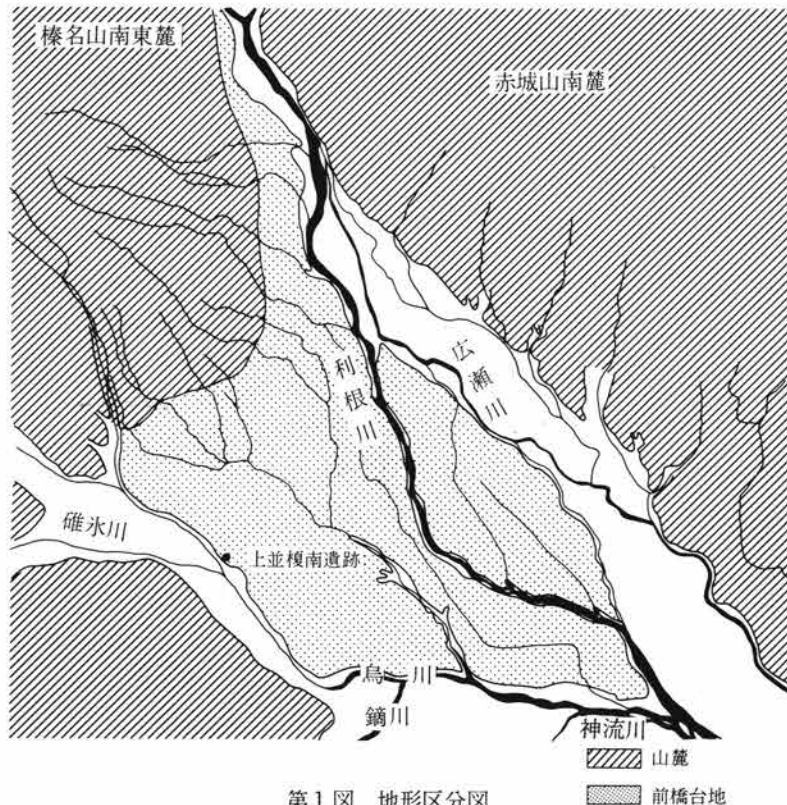
上並榎南遺跡は高崎市上並榎町字南872番地を中心に所在し、国鉄信越線北高崎駅より北西約1.5kmに位置する。

県央部にそびえる榛名山（最高峰掃部ヶ岳：標高1448m）の南東麓に接して、前橋市や高崎市の市街地をのせる平坦な台地が広がっている。この台地は前橋台地と総称されているが、北東側を広瀬川（旧利根川）により、また南西側を烏川によってそれぞれ侵食され、その端部には10m前後の切り立った崖線が形成されている。前橋台地から榛名山南東麓末端にかけては、榛名山麓から流出する中小河川と末端湧水によって複雑に入り組んだ沖積地が形成されており、最近こうした沖積地内より、日高・同道・御呂呂遺跡をはじめとして浅間山や榛名山の火山に覆われた埋没水田跡が数多く検出されている。

現在の利根川は、前橋大手町付近より前橋台地を貫流するという不自然な流路をとっているが、旧流路はその東側を流れる桃ノ木・広瀬の両河川およびそれに挟まれた沖積地帯であり、16世紀以降の流路変更によって現在のような河道となったものと推定されている。

烏川は県西部の角落火山に源を発し、榛名山麓末端や前橋台地を侵食しつつ南東方向に流下しているが、途中で碓氷川、鐺川、神流川などの河川を集めながら、玉村町五料付近で利根川に合流している。烏川の上・中流域では上・下2段の河岸段丘が発達している。

上並榎南遺跡は、碓氷川との合流点より約19km遡った烏川左岸の前橋台地上に立地し、標高約98mで烏川河床との比高差は5～6mである。当遺跡の東側は、榛名山麓末端の湧水を源とする小河川の佐賀野川が南流して烏川へと注ぎ、また西側には小規模な谷が南北に延びている。これらと台地の比高差は、烏川と同様約5m程であり、16世紀に当遺跡内に築造された並榎城は、こうした三方を隔絶された自然地形をたくみに利用している。



第1図 地形区分図

3 周辺の遺跡

上並榎南遺跡は並榎城域の一部であり、これに関係する溝や柱穴群が検出された。また、その他に弥生時代中期、古墳時代、平安時代、中・近世の遺構や遺物が検出された。ここでは本遺跡を理解する上での歴史的環境について時代別に、そして地形にそくした形でふれてみたい。しかしながら、文章中にも記したとおり、周辺は市街化が進行しており、これと地形の成因等との関係もあり取り上げた資料は発掘調査による成果が中心となっている。

(1)先土器・縄文時代 先土器時代の遺物については調査例が皆無に等しい。岩野谷丘陵や榛名山南東麓には多数の遺跡が存在する可能性がある。前橋台地には上部ロームのみが堆積していることや市街化の進行から、遺跡の存在はより限定された状況にあると言える。その中で八幡中原遺跡¹¹、熊野堂遺跡から単独の出土例がある。縄文時代についても調査例が少なくこの時代の様相を復元することは非常に困難である。岩野谷丘陵では大平台遺跡で中期の大集落が検出されている他、諏訪平遺跡をはじめとした包蔵地も多く確認されている。相馬ヶ原扇状地とその末端、前橋台地ではその分布がやや稀薄である。ただし、近年、調査例の集中した井野川流域では熊野堂、雨壺遺跡などがある。また、頼政神社古墳の調査時には縄文中期の包含層の存在が確認されており、烏川左岸の段丘上にも遺跡の存在が予想される。

(2)弥生時代 現在までに弥生中期前半の資料は知られていない。中期後半になると、他地域においては前橋市庚申塚遺跡¹²のように環濠をめぐらせた集落の検出例が知られる。本遺跡の立地する上並榎町から下和田町にいたる烏川左岸の段丘上には同時期の遺跡が帯状に分布している。上並榎遺跡、並榎町遺跡、恵徳寺遺跡、高松町遺跡、竜見町遺跡、竜見町Ⅱ遺跡、城南小遺跡などの存在が指摘されている。しかしながら、これらの遺跡の生産域について現在の地形からはその復元が困難である。後期に入るとその分布はやや拡大しているようである。また、井野川流域においても、熊野堂遺跡や浜尻遺跡などで中期後半の住居跡や溝が検出されている。沖積地を臨む台地縁辺に立地していたと考えられる。後期には中期後半の居住域が引きつがれるとともに、やや拡大し、検出の住居跡数も増している。また、烏川左岸河岸段丘上と井野川流域の間の微高地や台地上にも下小鳥遺跡の例のように小さな分布がある。岩野谷丘陵の小支谷の谷口縁辺や碓氷川、河岸段丘上にも後期の遺跡が分布する。引間遺跡では³⁷軒とともに方形周溝墓が検出されている。

(3)古墳時代 居住域の立地等で弥生時代後期と古墳時代前期の間には大きな変動は認められない。熊野堂遺跡の例からみても大間々扇状地Ⅱ面末端とことなり遺跡は弥生時代後期から継続しているものが多い。後期の遺跡についても詳細について今後検討しなければならない点が多いが、烏川左岸段丘上も井野川流域も伝統的な地域として遺跡が継続している。

熊野堂遺跡で検出された浅間C軽石によって埋没した畠跡や芦田貝戸遺跡に認められたC軽石下の水田跡や畠跡の立地関係は古墳時代前期の集落景観を復元する上で重要な資料となろう。また、井野川流域を中心にF PやF Aの下から水田跡を検出している。古墳時代前期に生産域となった地域はその後の火山災害により埋没した水田を技術を駆使し、土地の状況に合致した形態に変化させることにより復旧させている。このようなことを実施し、生産基盤の確保につとめた政治的背景の追求については三ッ寺Ⅰ遺跡¹⁴の居館跡の分析とともに今後の課題となろう。

古墳については居住域との関係を論ずるには両者とも資料が不足している。本遺跡からは多数の円筒埴輪や形象埴輪の破片が出土している。また、北接して稲荷塚古墳と呼称される円墳も存在している。遺跡の北、

I 経過と環境

約0.8kmには狭い沖積地をはさんだ微高地上に上並榎稲荷山古墳をはじめとした数基の古墳があった。稲荷山古墳の主体部は舟形石棺を有しており、保渡田の八幡塚古墳、薬師塚古墳、愛宕塚古墳⁵⁾など周辺の同時期の首長墓との共通性が認められる。

(4)奈良・平安時代 棗原遺跡をはじめとした相馬ヶ原扇状地の扇端に近い沖積地には広い範囲で浅間B軽石下の水田跡が検出されている。部分的にはこれより下位の水田跡の検出例はなく古墳時代以降にこの地域の開発がおこなわれたことも考えられる。また、井野川流域の遺跡においてもB軽石下の水田跡が検出されている。熊野堂遺跡や融通寺遺跡においては浅間C軽石下の水田跡の上層にこの時代の住居跡が検出され地形の変化とともに居住域が拡大していったことが確認できている。大八木水田遺跡では一辺109mの大区画とその中を更に区画する畦畔が検出されている。この地域は『和名類聚抄』の群馬郡八木郷、長野郷に比定されよう。

菊地町から群馬町の熊野堂遺跡にかけては東山道の通過地点として考えられている。寺ノ内遺跡や御布呂遺跡、熊野堂遺跡では浅間B軽石に埋没した道路状遺構が検出されている。

(5)中世 並榎城は和田氏との関係が強い城跡であったと考えられている。和田氏は並榎城から南東2.3kmに位置する和田城を居城とし、室町時代から戦国時代に至るまで続いた地方豪族であった。室町時代、和田氏は関東管領、上杉氏に属していた。また、群馬県西部のこの地域は箕輪城を居城とした長野一族の勢力範囲になっていた。しかし、上野国には一国を統治するほどの勢力の成長はなく、関東管領、上杉氏の没落とともに越後上杉、武田、北条といった他国の戦国諸大名により、争奪、戦乱の場となり、一戦ごとに地方豪族の帰属関係がかわる状態であった。和田氏も関東管領、上杉氏の没落後、長野氏、武田氏、滝川一益、北条氏と主君を変え、豊臣秀吉の北条支配とともに没落していつている。

前述の長野氏は1566(永禄9)年、武田信玄の侵略により滅亡したが、高崎市の北東部から群馬町を中心に、一族や家臣の居館跡が残っている。寺ノ内館跡や浜川館跡は発掘調査が実施され、館跡の区画を示す堀や土塁のみでなく、掘立柱建物や井戸などの生活遺構が多く検出され、それらの遺構からは、土師質土器、陶器、石臼、播鉢といった遺物が多く出土している。

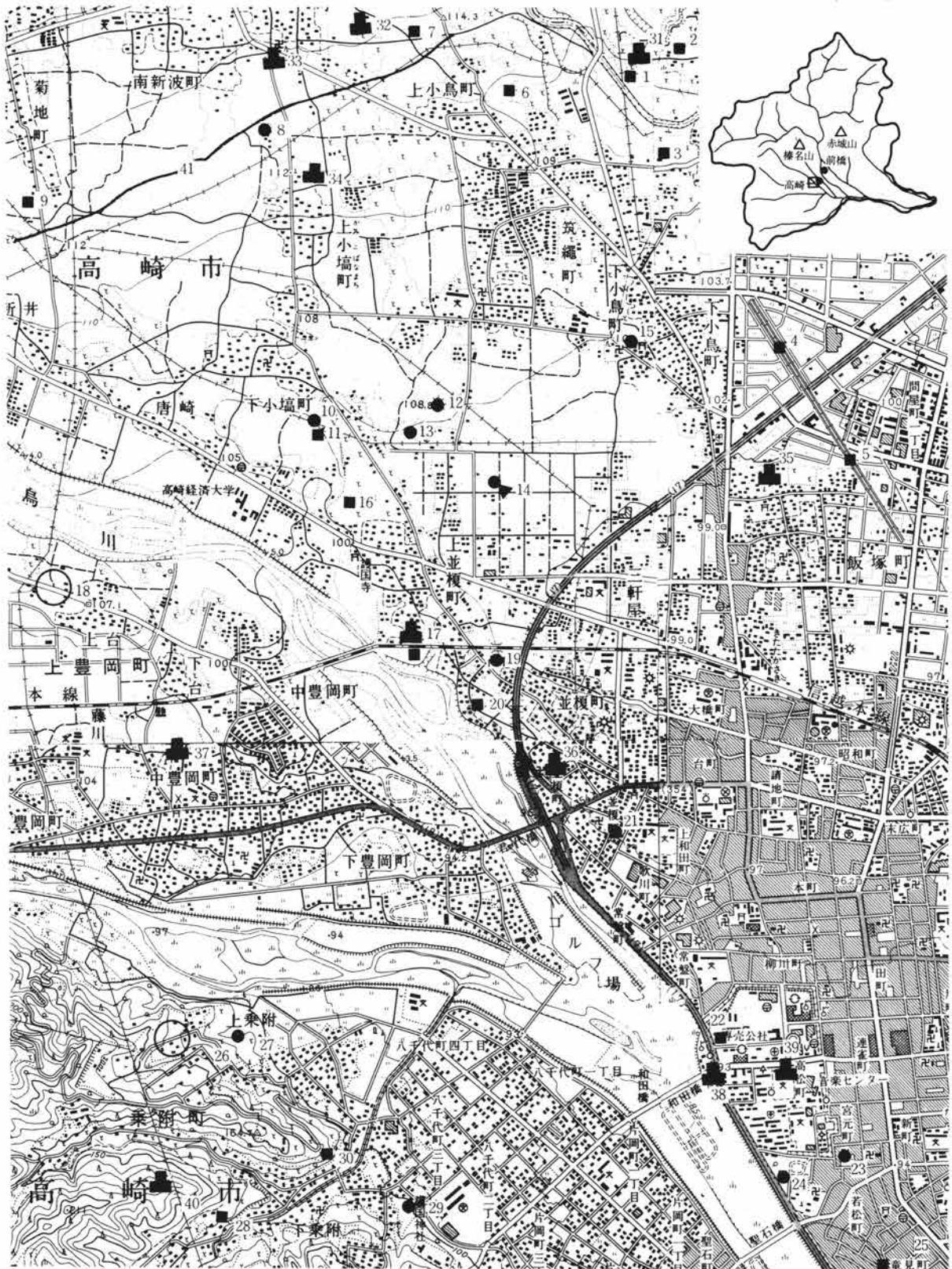
(6)近世 徳川家康の関東入府に伴い、1590(天正18)年箕輪城には井伊直政が封ぜられている。その後、井伊は1598(慶長3)年、山城の箕輪城から移り、旧和田城のあった和田に築城し、地名も和田から高崎と改めている。以後、明治維新に至るまで高崎藩、藩主は井伊—酒井—松平—安藤—大河内(松平)一問部—大河内と譜代大名が続いた。1598(慶長3)年に中山道が制定され、その他の諸街道が整備されるにおよび高崎は交通網の一拠点となった。城下町は経済の中心地として発展している。

本遺跡の北、約0.4kmには高崎から室田宿(現在の群馬郡榛名町)を経て信州方面へ至る信州街道(室田道)が東西に通過している。また、三国街道は高崎宿から金古宿(現在の群馬郡群馬町)をへて越後方面に至る重要路であった。

長野堰は中世、長野氏により開さくされたといわれる用水路である。現在の榛名町本郷で烏川の水を取水し、高崎市の北東部から東部の約1700haの水田が灌漑された。江戸時代には高崎藩がこれを管理していた。

註

- 1 高崎市の西部若田丘陵上に位置する。縄文時代後期の土壇、古墳時代中期から奈良・平安時代の住居跡が検出されている。先土器時代の遺物はスクレパー、石槍、剝片が出土している。神戸聖語他、『八幡中原遺跡』高崎市教育委員会 1982(昭和57)年
- 2 参考文献30を参照
- 3 神戸聖語他、『引間遺跡』高崎市教育委員会 1979(昭和54)年を参照
- 4 古墳時代の居館跡と考えられている。区画内からは掘立柱建物跡や祭祀遺構、櫓列などが検出された。
- 5 群馬郡群馬町所在の前方後円墳。八幡古墳は全長12m、二重の周堀を有しており6世紀前半の築造と考えられている。薬師塚古墳は6世紀中頃の築造と考えられている。愛宕塚古墳は全長92m、6世紀の前半の築造と考えられている。



- 集落、その他
- ○ 古墳・古墳群
- 居館跡・城跡

0 1 : 25,000 1 km

第2図 周辺遺跡位置図

3 周辺の遺跡

図中 番号	遺 跡 名	時 期	遺 構				遺 跡 の 概 要	文 献
			住居跡	生産跡	墓跡	そ の 他		
14	上並榎 稲荷山古墳	古 墳			○		前方後円墳。明治年間に発掘され、舟型石棺の主体部を有していた。「甕十九口、楡二本、矢根石五合、甲冑数領現われたり」と記されている。埴輪を有していた。	(15)
15	綜覧 六郷村6号墳	古 墳			○		遺跡台帳では全長36mの前方後円墳で後円部のみ残存しているとされている。	(1)
16	上並榎遺跡	弥 生				包蔵地	1951（昭和26）年、採土中に弥生土器を多数出土。住居跡の存在が予想される。遺物は約2,500㎡の範囲に散布する。	(1)
17	上並榎南遺跡	弥 生 古 墳 平 安 中・近世	○ ○ ○			溝 溝 溝・井戸 土壌	本報告の遺跡	
18	台古墳	古 墳			○		烏川右岸の台地上に位置する。周辺には横穴式石室を主体部に有する径10～20mの円墳が散在する。	
19	虚空蔵山古墳	古 墳			○		径10m弱の円墳。鶏の雌雄の埴輪を出土する。	
20	幅遺跡	弥 生				包蔵地	1952（昭和27）年発見される。烏川左岸の段丘上に位置する。弥生中期後半の土器を出土する。	(1)
21	神明塚	古 墳			○		烏川左岸の段丘上に位置する。	(1)
22	高松町遺跡	弥 生				包蔵地	弥生中期の包蔵地。	(1)
23	綜覧高崎市 218号墳	古 墳			○		径20m程の円墳と思われる。	(1)
24	頼政神社古墳	縄 文 弥 生 古 墳			○	包蔵地 包蔵地	烏川左岸の段丘上に位置する。古墳は円筒埴輪や社殿の石垣などの状況から7世紀横穴式石室を主体部に有するものと考えられている。1974（昭和49）年の調査で、墳丘下から縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代前期の土器を出土した。	(19)
25	竜見町遺跡	弥 生 奈 ・ 平				包蔵地 包蔵地	烏川の段丘上に位置する。北関東西部における弥生中期後半の土器「竜見町式」の標式遺跡である。	(18)
26	御部入古墳群	弥 生 古 墳	○	○			碓氷川右岸、岩野谷丘陵上の小支谷に面する東南斜面に立地する。6～8世紀初頭にいたる横穴式石室を主体部に有する円墳が群集する。御部入古墳は載石切組積の横穴式石室を有する。1967（昭和42）年に45基の中の22基の調査が実施される。墳丘下に弥生時代後期の住居跡を検出した地点もある。	(20)
27	蛇塚古墳	古 墳			○		御部入古墳群の南側の支丘陵に立地する。径6mほどの円墳。	(1)
28	諏訪平遺跡	古 墳			○	包蔵地	荒久沢川の左岸にある。縄文時代中期の土器片が散布する。周辺には径10m程の横穴式石室を有する円墳が点在する。	(1)
29	綜覧高崎市 109号墳	古 墳			○		径15m程の円墳で横穴式石室を有する。	(1)
30	乗附庵寺	奈良 ～ 平 安				寺院跡	荒久沢川の左岸段丘上に位置する。礎石と考えられる礎が存在するが建物の構造等を明らかにするには至っていない。周辺に布目瓦が散布し、それらは8世紀の第Ⅲ四半紀の年代が考えられる。	(21)

I 経過と環境

図中番号	遺跡名	時期	遺構				遺跡の概要	文献
			住居跡	生産跡	墓跡	その他		
31	熊野堂館跡	中世				館跡	唐沢川右岸の台地上に立地する。熊野堂遺跡の調査時に中世の溝が検出され、これにより、内外郭2郭を有する館跡が想定された。区画の内側からは小穴や井戸跡が検出されている。	(3)
32	寺ノ内館跡	中世				館跡	南北220m以上、東西265m、外・中・内堀をもった館跡。掘立柱建物跡、27棟、井戸10基、土墳墓10基を検出した。	(13)
33	北城跡	中世				城跡	方200m程の規模をもつ。戦国時代、長野業政の家臣、北爪周防守政勝の居城と言われる。二重の堀を有し、南側は大川とよばれる自然河川により画されている。	(22)
34	八木屋敷跡	中世				館跡		
35	上飯塚城跡	中世				城跡	東西170m、南北130mの内外二郭からなっていたと考えられ、一部には土塁が残っている。和田氏関連の遺構と考えられる。	(25)
36	下並榎砦跡	中世				城跡	東西75m、南北65mの規模である。	(25)
37	根津陣屋跡	中世 ～江戸					常安寺の境内にあり、東西100m、南北80mの規模で周囲に堀をもっていた。根津甚平の居所である。	(25) (14)
38	和田城跡	中世				城跡	1428(正長元)年、和田義信により築城されたといわれる。当初は小規模なものと思われるが、山崎一氏によれば4郭を構えた並郭式とされている。1590(天正18)年の和田氏滅亡とともに落城した。並榎城の本城とされている。	(22)
39	高崎城跡	近世				城跡	1598(慶長3年)井伊直政が箕輪城から移封され、旧和田城のあった地に築城を開始したもの。その後、諸城主により整備され、1717(享保2)年ごろに完成したとされている。城域は南北720m、東西500m、西側は烏川の流路でその段丘上に立地する。遠構をふくめると南北1.5km、東西1kmになる。城下町は中仙道の要所として重要な地点となった。	(14) (22)
40	寺尾上城跡	中世				城跡	碓氷川の支流、荒川沢川左岸の丘陵頂部に位置する。寺尾中城は寺尾、下城は山名の丘陵上にある。東西300mの城域内に9ヶ所の堀切りと7個ほどの分郭が見られるという。	(22)
41	(推定) 東山道	古代					東山道の路線については研究の途上にある。図中の部分は野後駅(安中市)と群馬駅(前橋市総社町周辺)を結ぶルートである。寺ノ内遺跡、御布片遺跡、熊野堂遺跡の浅間B軽石下から道路遺構が検出され、東山道との関係が検討されている。	(25)

註

- 1 表中の遺跡名の項で総覧とは『上毛古墳総覧』を表わす。
- 2 遺構—生産跡の項の○は水田跡、□は畠跡の検出されたことを示す。Cは浅間C軽石(4世紀中頃降下と考えられる)FAは榛名山二ツ岳火山灰層(6世紀前半の降下と考えられている)Bは浅間B軽石(1108年降下と考えられている)を表わす。
- 3 遺跡の概要の項のC、FA、Bも註1と同様の意味で用いた。

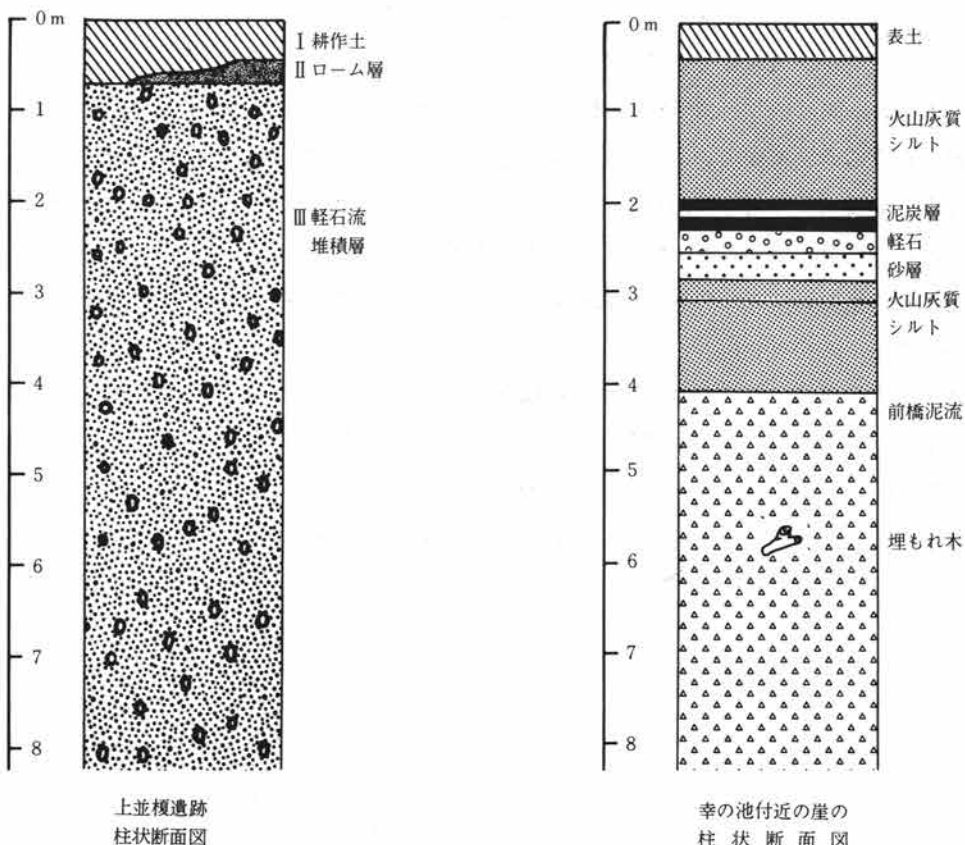
4 遺跡の基本土層

前橋台地は一見すると扇状地形を呈しているが、これを構成する地層は上部から表土（黒色土）、褐色火山灰質シルト層（水成ローム）、火山泥流堆積物などから成っている。

褐色火山灰質シルト層は、上部ローム層に対比されるものであり、この層中に約1万3千年前の堆積と考えられる泥炭層（前橋泥炭層）を挟在させる地域もある。また、火山泥流堆積層（前橋泥流層）は、安山岩角礫や火山灰質土を主体として約10m以上にも及ぶ厚さで堆積しており、約2万4千年前の中部ローム堆積期に浅間火山を給源とした火山泥流によって形成されたものと堆定されている。

本遺跡はこの前橋台地上に立地するものであるが、その基本土層はⅠ層：表土層（耕作土）、Ⅱ層：ローム層、Ⅲ層：軽石流堆積層の3層に分層される。Ⅰ層は約50cmの厚さで堆積し、浅間Aを主体とした軽石粒を多く含む灰褐色土である。Ⅱ層は調査区域内の一部に10～20cmの厚さでその堆積が確認されたが、Ⅲ層との層位関係からみて、上部ロームに比定されるものと考えられる。また、Ⅲ層は多量の普通輝石安山岩質の軽石の他に、少量の円礫や流木などを含む軽石流であり、その層厚は中世の井戸跡壁面で確認できただけでも10m以上に達している。群馬大学の新井房夫教授の御教示によれば、このⅢ層は上部ローム中・後期に属する可能性の高い軽石流であるとされているが、その給源については判明していない。

したがって、このⅢ層に関しては前橋台地を構成する中部ローム期の前橋泥流層と異なることが予想され、今後両者の関係やその給源について問題となろう。



第3図 柱状断面図

(文献 28より)

5 調査の概要

調査の方法

上並榎南遺跡周辺は、以前より中世の並榎城域として認知されていた区域であり、国鉄信越線はこの城域を東西に横断していた。今回の発掘調査はこの信越線の烏川にかかる橋梁改良工事に伴うものであるが、調査開始以前より、並榎城の本丸・二の丸をはじめ周濠の一部の検出が予想された。

そこで、本調査の開始に先だって県教育委員会により、遺物包含層の有無や遺構確認面までの堆積土層、および並榎城に伴う施設やその他の遺構確認のためのトレンチ試掘調査が行なわれた。その結果、遺物包含層は無く、遺構確認面（Ⅱ・Ⅲ層上面）までの堆積土層は厚さ約20cmの表土層のみで、並榎城に伴う掘立柱建築や周濠の他に土師器を伴う遺構の存在が想定された。当事業団が本調査に入るにあたり、こうした試掘調査による所見をふまえ、遺構検出のための表土の掘削を大型重機によって行なうことにした。

調査区域には、工事前ベンチマークを基本として5×5mの方眼を設定し、また今後の発掘調査に備えてこの方眼の位置を国家座標上にプロットした。

発掘調査区域は最大幅約20m、奥行き約200m、総面積2,220m²の三角形を呈した狭少な範囲であり、かつ国鉄の在来線に隣接しているために、その調査にあたっては多くの制約を受けざるを得なかった。特に並榎城に伴う周濠や井戸の調査段階では、列車の通過による振動のためにのり面や周壁の崩壊の危険性があり完掘できずに途中で調査を断念したものもある。

遺構の概要

発掘調査によって検出された遺構は、弥生時代、古墳時代、平安時代の住居跡や溝状遺構、土塋をはじめとして、16世紀後半の築造と考えられる並榎城に伴う濠や掘立柱建築遺構、土塋（墓）等である。

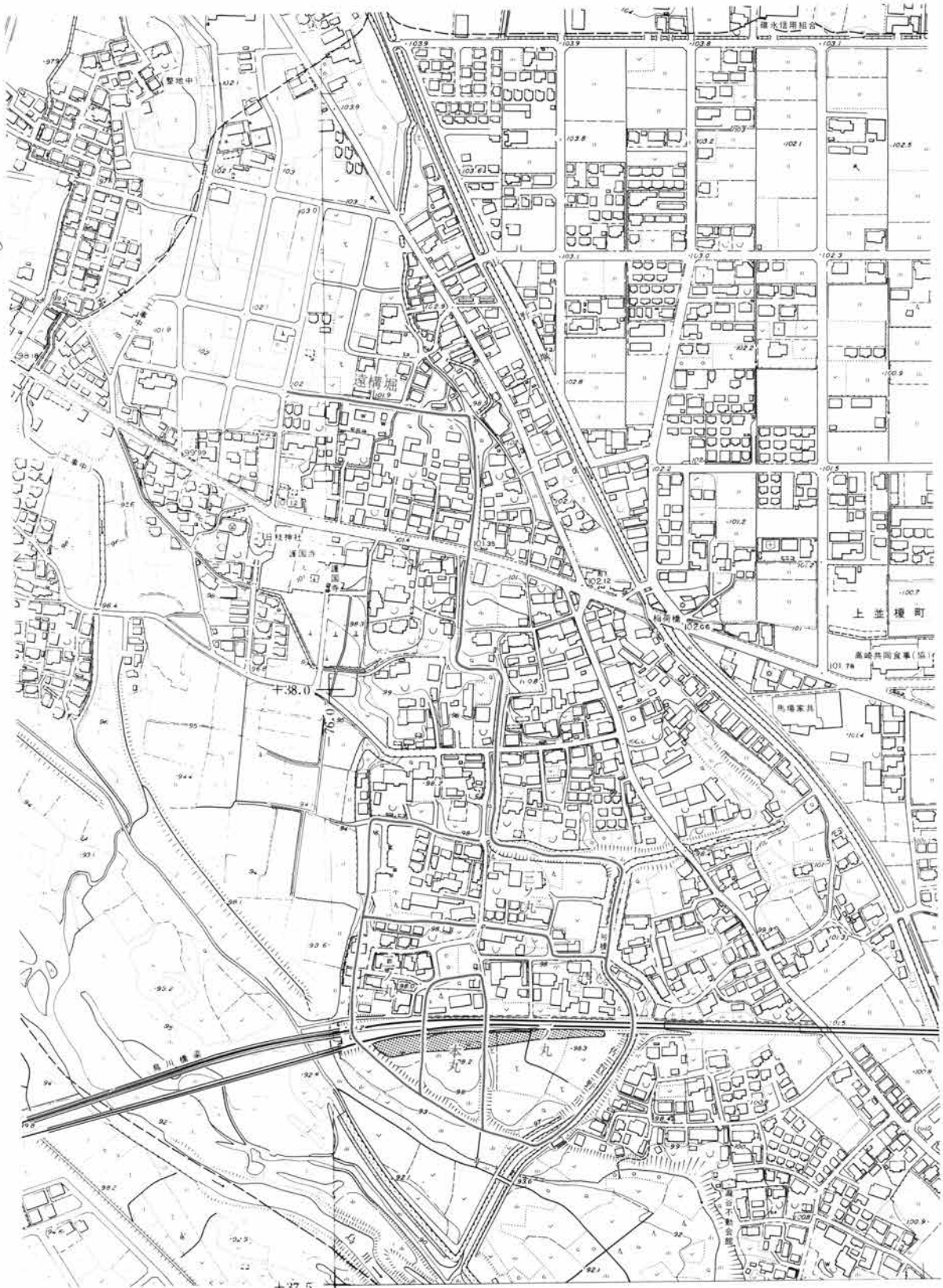
弥生時代——中期後半から後期にかけての遺構・遺物が中心であり、中期後半では2条の溝状遺構（4・9号）と土器を伴う1基の土塋（18号）が、また後期では2軒の住居址（1・3号）がそれぞれ検出された。

古墳時代——中期に属する溝状遺構（3号）が1条検出されたのみで、他の遺構は検出されなかった。また、遺物としては滑石製模造品や勾玉、埴輪破片等が検出されたが、古墳そのものは検出されなかった。

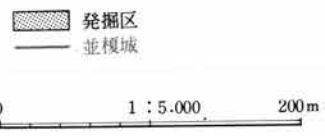
発掘区域外に6世紀代の稲荷古墳が存在しており、これとの関連も考慮される。

平安時代——上層からの攪乱によって残存状態は極めて悪いが、2軒の住居跡（2・4号）が検出された。10世紀代の灰釉陶器を伴出している。

中・近世——16世紀後半の築造と考えられる並榎城の周濠の一部（5・6・7号溝）や掘立柱建築遺構と目される柱穴群が検出された。柱穴は多数が混在しているために、建築物としてその間どりを復元することは困難であった。また、時期は明確ではないが、並榎城の築造以前と考えられる溝状遺構（2号）や中世から近世にかけての井戸（1～6号）、および31基の土塋や5基の土塋墓（1～5号）が検出されている。



座標系 第Ⅸ系
 高崎市発行 2,500分の1
 地形図(昭和55年)を使用



第4図 遺跡地形図

Ⅱ 検出された遺構と遺物

1 弥生時代～平安時代

4 号 溝

遺 構 (第5図、図版2)

発掘区西端で検出された。発掘区北西隅から東へ8 m延び、3号溝に先端を破壊される。3号溝の東では検出できなかった。溝の幅・深さは、東に行くに従って狭く、浅くなる。その規模は西側で上端1.2m、下端20cm、深さ73cmを測る。また、東側では上端40cm、下端10cm、深さ26cmを測る。法面は、中央部で57°～61°の傾斜を持つ。溝は直線的でなく、等高線に沿って緩く湾曲している。

出土遺物は全て土器であり、東半に集中している。土器は18個体出土しているが、図示したのはその内10個体である。遺物は全体に溝底より浮いた状態で出土しており、最も、底に近いものでも6.6cm離れていた。自然石が17点出土しているが、平面的・垂直的分布は土器と同じ傾向を示す。本溝出土遺物は、全て弥生時代中期の竜見町期に属する。また、本溝は位置・時期などから考えて、18号土壇や9号溝と続いていたと考えられる。

遺 物 (第6図、図版21)

1. 壺。受け口状口縁の破片である。胎土は細砂を多量に含む。色調は鈍い黄橙。遺存状態が悪く、器表は剝離している。口縁外面に、沈線による鋸歯状文が施されている。

2. 甕。「く」の字状に外反する口縁の破片で、肩部に波状文を施す。胎土は粗砂を含む。色調は鈍い黄橙。遺存状態が悪く、器表は剝離している。波状文の単位や施文の回転方向は不明。

3. 甕。器肉が厚く、大型品の胴部と考えられる。内面は横位ハケ調整。外面は羽条の櫛目を施す。胎土は粗砂を少量含む。色調は鈍い橙色。外面の器表は少し剝離している。

4. 壺。頸部の破片である。二条の沈線間に鋸歯文を巡らす。この下には刺突を1列巡らし、細い沈線を垂下させる。縦位沈線の横には波状文の1部が残存している。これらの文様施文以前に、横位のハケによる調整が施されている。胎土は粗砂を少量含む、鈍い褐色を呈する。内面の器表は剝離している。

5. 壺。底部の破片である。内外面共に丁寧にナデられている。胎土は細砂を少量含む。色調は橙色。

6. 壺。底部の破片である。外面は粗いヘラミガキ。内面は横位ハケ目。内底は粗いナデ調整を施す。

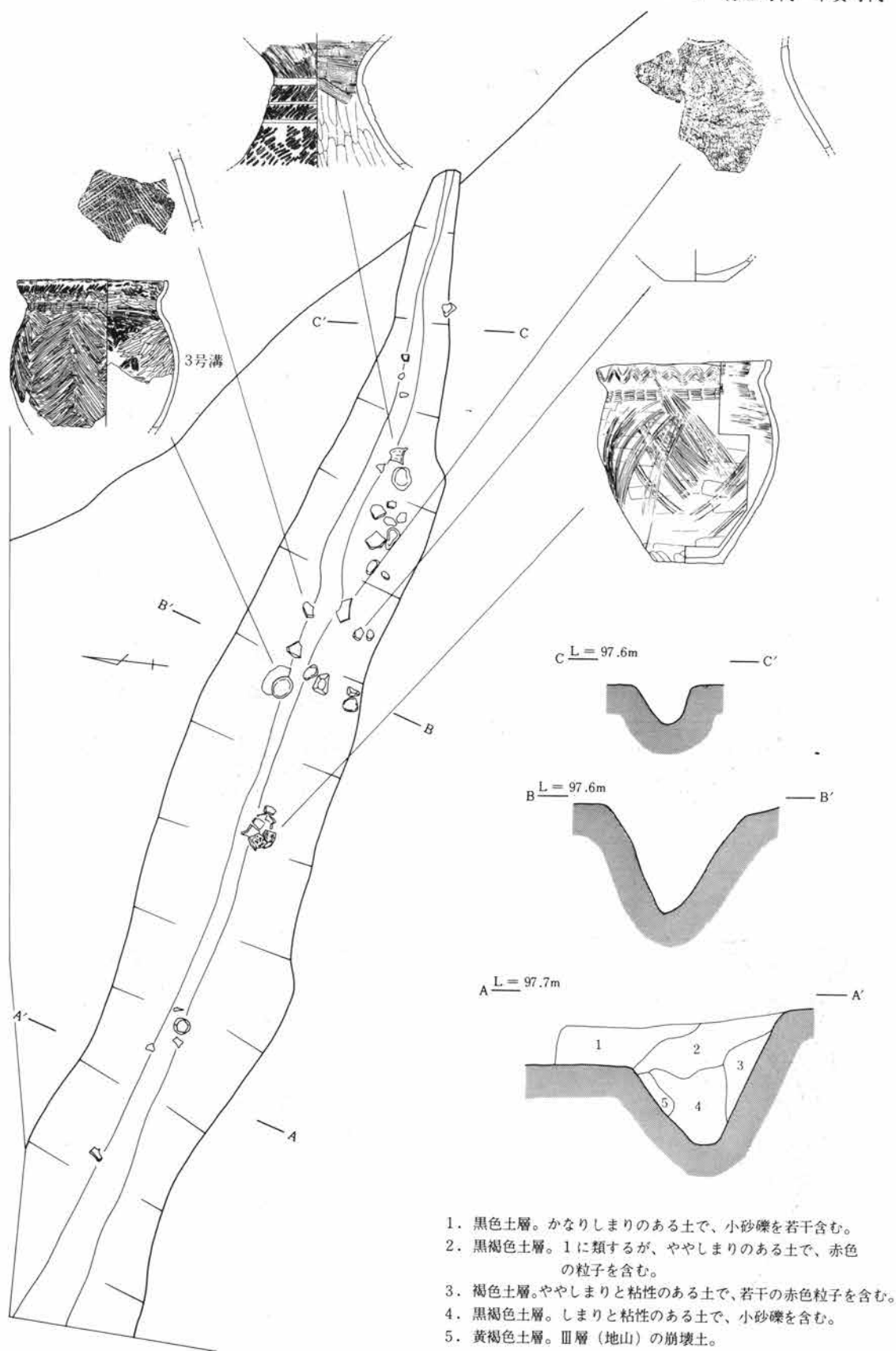
7. 壺。頸部～胴部上半の破片。頸部下位に沈線をめぐらす。外面はハケ成形の後縦位ヘラミガキ調整。沈線下の縄文は、ハケ成形後、ヘラミガキ以前に施されている。胎土は細砂を含む。色調は橙色。

8. 壺。口縁下位～胴部上位の破片。口縁外面はハケ目調整を行う。頸部以下はLRの縄文を施文し、後に2条の沈線を巡らす。胎土は細砂を多量に含む。色調は赤褐色。

9. 甕。最も遺存状態の良い土器である。内面は、細密なハケ成形の後、ヘラミガキ調整を施す。外面は、ハケ成形の後、羽状の櫛目を施す。尚、口縁外面と端部にはLRの縄文を巡らす。頸部には簾状文を施す。それぞれの施文順位は、縄文・簾状文→波状文・羽状櫛目である。胎土は細砂含む。色調は鈍い黄橙色。

10. 甕。全体に歪みのある甕である。口縁外面に波状文、頸部に簾状文、胴部に羽状櫛目を施す。施文順位は、波状文・簾状文→羽状櫛目である。器表の磨滅が著しく、内面調整は不明。胎土は細砂を含む。

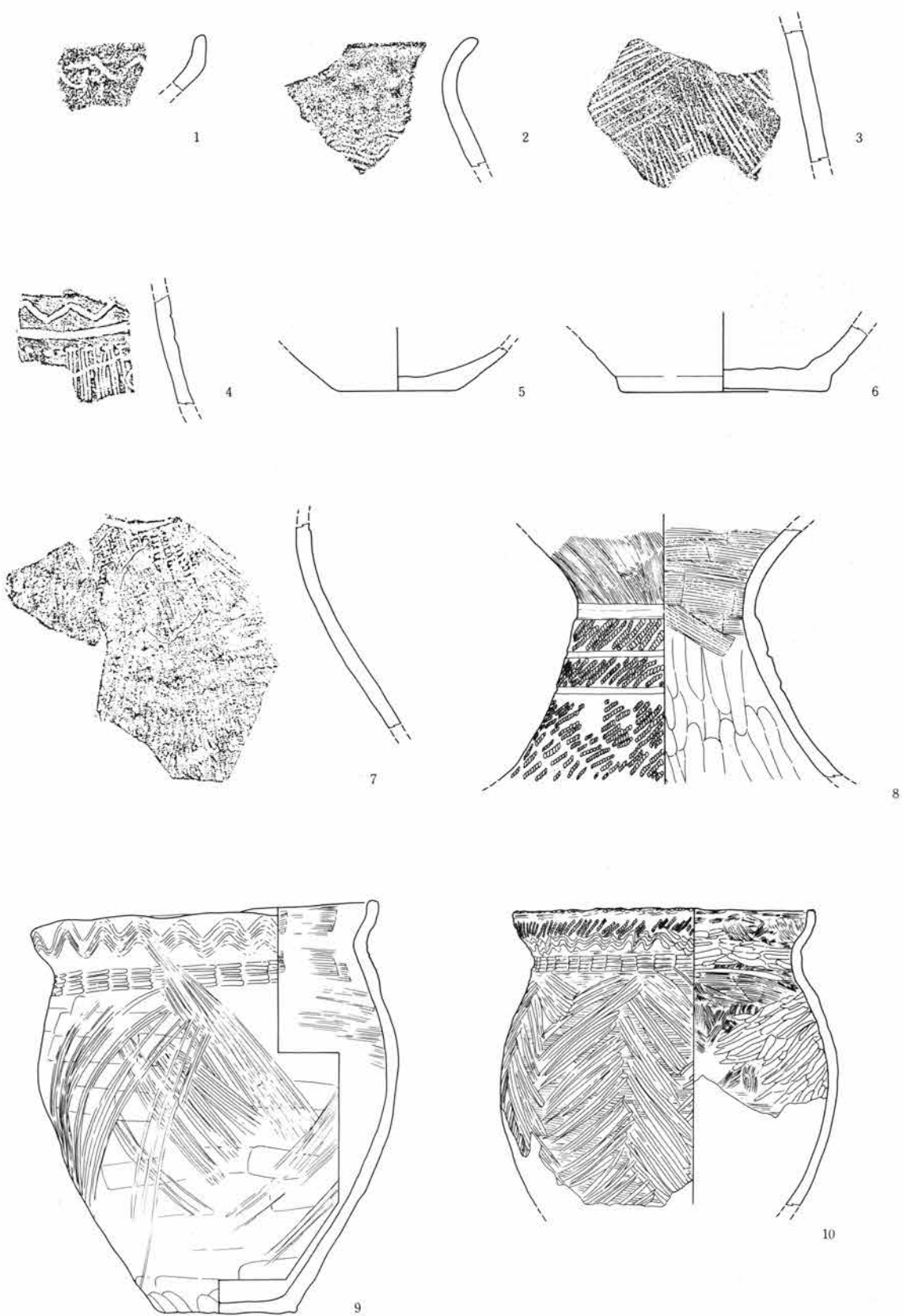
1 弥生時代～平安時代



第5図 4号溝実測図

0 1 : 40 1 m

II 検出された遺構と遺物



第6図 4号溝出土遺物実測図

0 1 : 3 10cm

9 号 溝

遺 構 (第7図、図版2・3)

5号溝の北東から、発掘区に沿うように位置する。長さ9.2mに渡って検出され、西は5号溝に破壊される。東は発掘区外に延びる。上端82cm、下端12～20cm、深さは40cmを測る。2号住居跡と重複するが、住居跡の掘り込みが浅いため、殆ど影響を受けていない。遺物は東半からの出土が多い。東端出土の12・13・15・16は時期的に異なり、同一レベルで集中して出土している。このため、他の遺構の存在が予想される。

遺 物 (第8・9図、図版22)

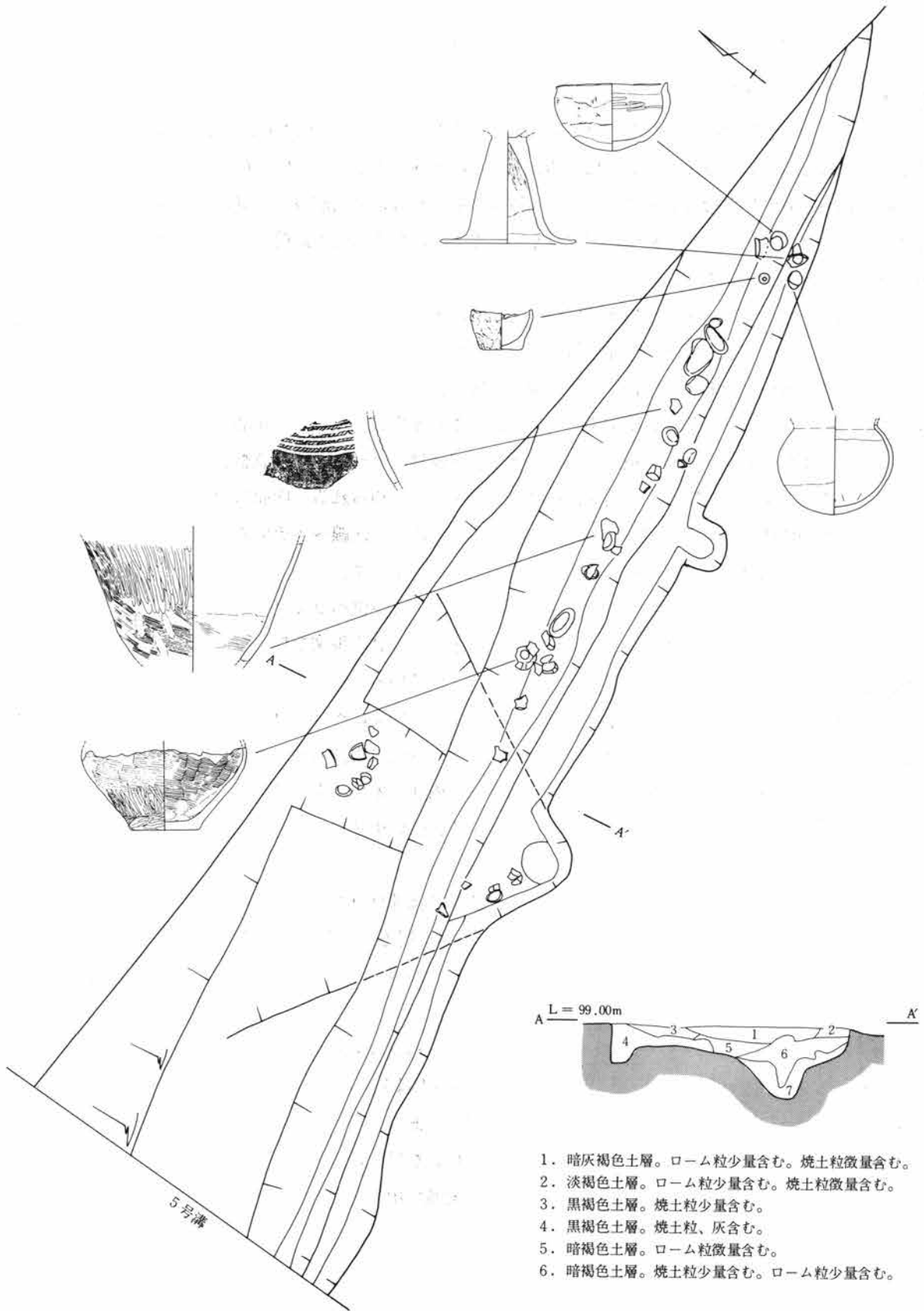
1. 壺。胴部上位の破片である。施文順位は、縄文→沈線→ナデである。縄文は無節のLである。胎土は礫を含む。色調は鈍い橙色。縄文部に赤色塗彩が認められる。
2. 壺。肩部の破片である。上位にはLRの縄文を施し、下位はハケ目調整を施す。
3. 壺。口縁外面～端部にLRの縄文を施した後、2条の鋸歯状文を施す。頸部には波状文を施す。
4. 壺。口縁端部にLRの縄文を施す。外面はナデ、内面は横位ヘラミガキ調整。
5. 壺。沈線間に鋸歯文を施す。鋸歯文部にはLRの縄文が認められる。内面は細密なハケ目調整。
6. 壺。2条の沈線下にLRの縄文を施す。施文順位は、縄文→沈線→ナデである。
7. 甕。頸部に左回りの簾状文を巡らし、胴部に羽状の櫛目を施す。
8. 壺。頸部にLRの縄文を施した後、沈線を巡らす。肩部は縦位ヘラミガキ調整。
9. 壺。口縁は受け口状を呈する。口縁端部から肩部まで、LRの縄文を施す。その後口縁と頸部下位に鋸歯状文、沈線を施す。頸部上位のナデ調整は最後に行われている。
10. 壺。胴部下位の破片である。右下がりのハケ成形の後、縦位のヘラミガキ調整を施す。
11. 壺。胴部最大径より下位。外面は斜位ハケ目の後、部分的に縦位ヘラミガキを施す。
12. 罎。外面はヘラケズリ成形後、上位のみナデ調整。内面に木口状工具による成形痕残る。
13. 罎。外面は粗いヘラ削り。内面は木口状工具による、強いナデを施す。胴部上位を僅かにナデのみで、他に器面調整を行わない。
14. 椀。丸底のもので、口縁内面には鈍い稜を有する。口縁部はヨコナデ調整。
15. 手づくね土器。口縁の歪みは大きく、比高差は4.5mmを測る。外面に比して内面の調整は丁寧である。
16. 高杯。袖は広く開く。脚端部は、上方に反り上がる感がある。内面には、絞り目が残る。筒部外面はナデ調整。袖部はヨコナデ調整。
17. 不明。底部は器肉が厚く、高台状になる。内外面共に器表は磨滅する。
18. 不明。下半を欠失する。上半は、上位に行くに従い器肉は薄くなる。上端は器表が磨滅しているため、口縁か否かの判断は困難である。内面調整は上位まで丁寧であり、高杯の脚部とは異なる。
19. 壺。肩部～胴部の破片である。胴部はやや縦長の球状を呈する。
20. 砥石。大形の砥石である。4面共に、使用による磨滅で中央が凹んでいる。流紋岩製。

10 号 溝

遺 構 (第7図)

9号溝の北に接し、平行して検出された。規模は不明である。底部近くまで砂利が入り込んでおり、遺物の出土もなく、時期・性格は不明。

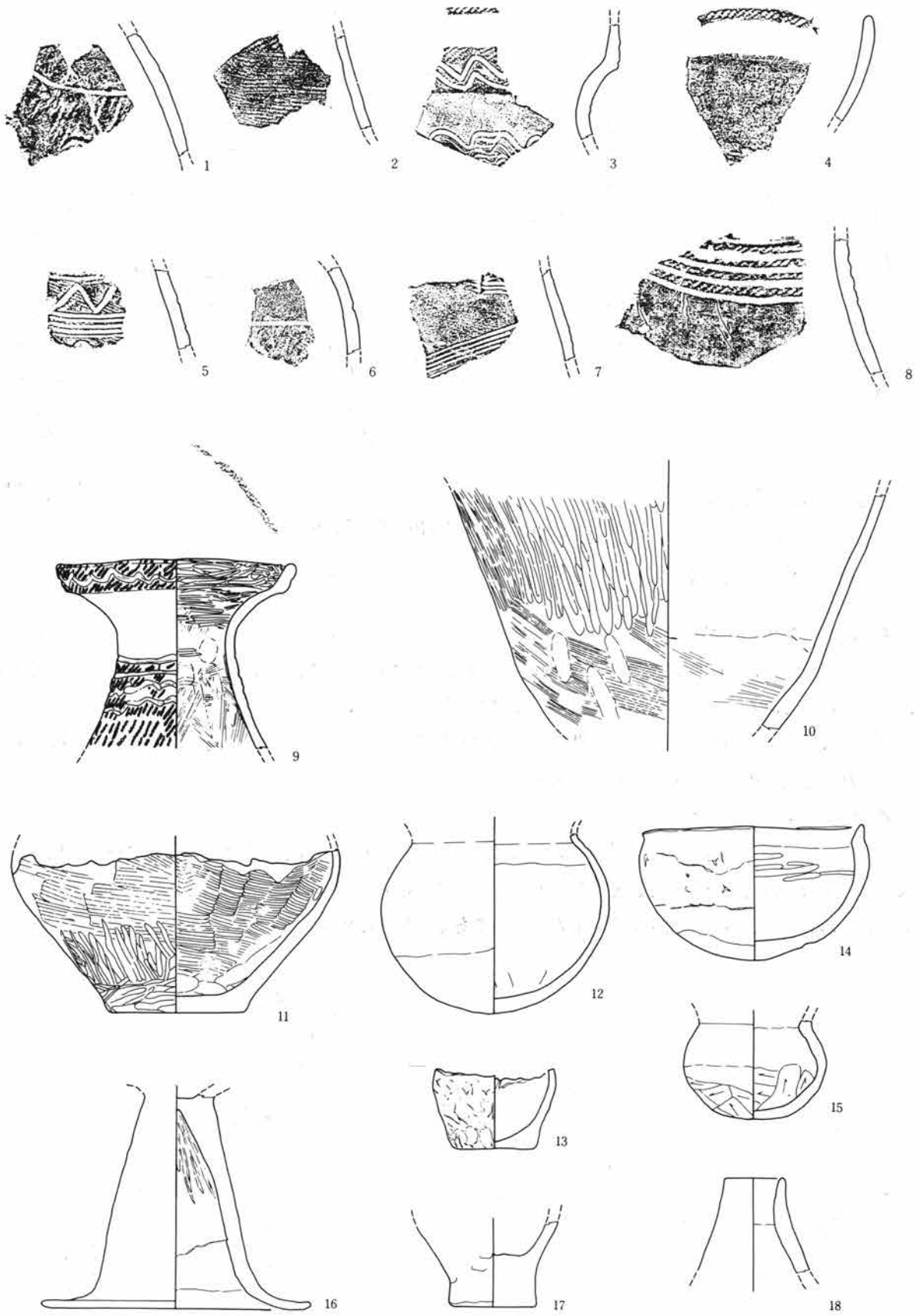
II 検出された遺構と遺物



第7図 9号溝遺実測図

0 1:40 1m

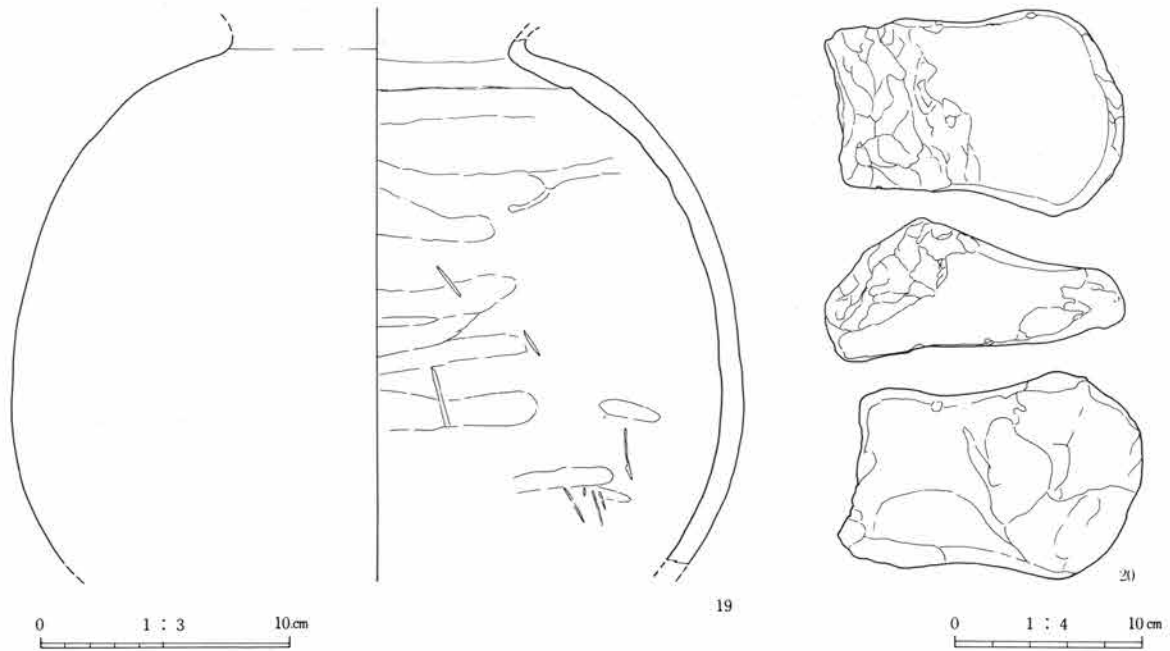
1 弥生時代～平安時代



第8図 9号溝出土遺物実測図(1)

0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物



第9図 9号溝出土遺物実測図(2)

18号土壙

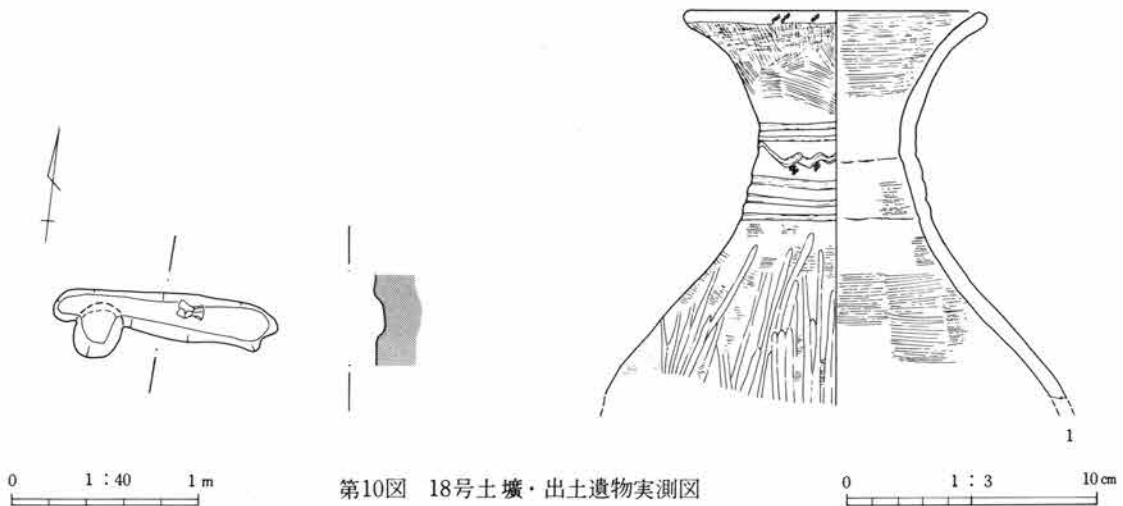
遺構 (第10図、図版3)

2号溝の北2.2m、4号溝と9号溝の中間に位置する。長さ1.8m・幅15~18cm・深さ5cmを測る。底は平坦で、幅10cmである。底部に密着して壺形土器が1個体出土している。

本土壙は、出土遺物から弥生時代中期後半に属すると考えられる。また、4号溝と9号溝との位置関係から、これらと同一の溝である可能性が考えられる。

遺物 (第10図、図版22)

1. 壺。頸は細く、肩部以下は「ハ」の字状に開く。口縁は大きく開き、端部にはLRの縄文を施す。頸部には5条の平行沈線を巡らし、その間にLRの縄文地に鋸歯文を施す。また、沈線間にも縄文が施されていたと思われるが、器表が剥離しているため不明である。胎土は粗砂を多く含む。色調は橙色。



第10図 18号土壙・出土遺物実測図

3 号 溝

遺 構 (第11図、図版4・5)

発掘区西端の崖に沿って検出された。規模は長さ8.2m、上端幅1.4～1.6m、下端幅30～85cm、深さ50cmを測る。北西は発掘区外に延び、南東は烏川の崖に至る。遺物出土状態を図示し得たのは、土器35個体、自然石33個体である。両者の出土状態は同じ傾向を示す。平面的には中央部にやや集中するものの、全体から出土している。レベル的には、底から20～40cm浮いた状態で、最も底に近い土器で7cm浮いている。しかしこれらの土器はいずれも磨滅がなく、完形品が出土していることなどから本遺構の時期を示すと考えられる。

遺 物 (第12図、図版22・23)

1. 壺。口縁は「コ」の字状を呈する。肩部は張らず、丸味を帯びて胴部に至る。外面は左上がりのヘラケズリ成形で、後のナデ調整は非常に雑である。胴部内面は右上がりのヘラケズリの後、雑なナデ調整を施す。肩部内面のナデ調整は、やや丁寧である。頸部内面の接合痕は明瞭に残る。胎土は礫・粗砂を含む。色調はにぶい黄橙色。

2. 壺。底部の小破片である。内外面の成形・調整は1と同じである。胎土は礫・粗砂を含む。色調は内面が灰黄褐色。外面は明赤褐色である。1と同器形の壺の底部と考えられる。

3. 壺。内外面共にナデ調整を施す。胎土は細砂を多量に含む。色調はにぶい橙色。

4. 罎。造りは非常に雑で、頸部の屈曲の度合や、胴部の丸味は場所によってかなり異なる。胎土は礫を含む。色調はにぶい褐色。

5. 罎。口縁径は胴部最大径よりやや小さく、口縁は大きく開かない。頸部内面には稜を有する。底部は小さい平底である。胎土は粗砂を含む。色調は橙色。胴部内面のみ黒褐色。

6. 罎。口縁径と胴部最大径がほぼ等しい。胴部の丸味は強く、底は平底状である。頸部内面に、鋭い稜を有する。胎土は粗砂を含む。色調はにぶい橙色。胴部内面のみ黒褐色。

7. 甕。口縁は「く」の字状を呈する。口縁や胴部の歪みは大きい。胴部外面は横位ヘラ削り後、粗いナデ調整を施す。胎土は粗砂を多量に含む。色調は橙色。

8. 台付甕。胴部下位の破片。外面は左上がりのヘラケズリ成形。内面はナデ調整を施す。接合痕が明瞭に残る。胎土は粗砂を含む。色調は赤褐色。

9. 台付甕。肩の張りは弱く、胴部最大径は中程に近い位置にある。外面はヘラケズリ成形の後、ナデ調整を施す。胎土は細砂を多量に含み、明赤褐色を呈する。

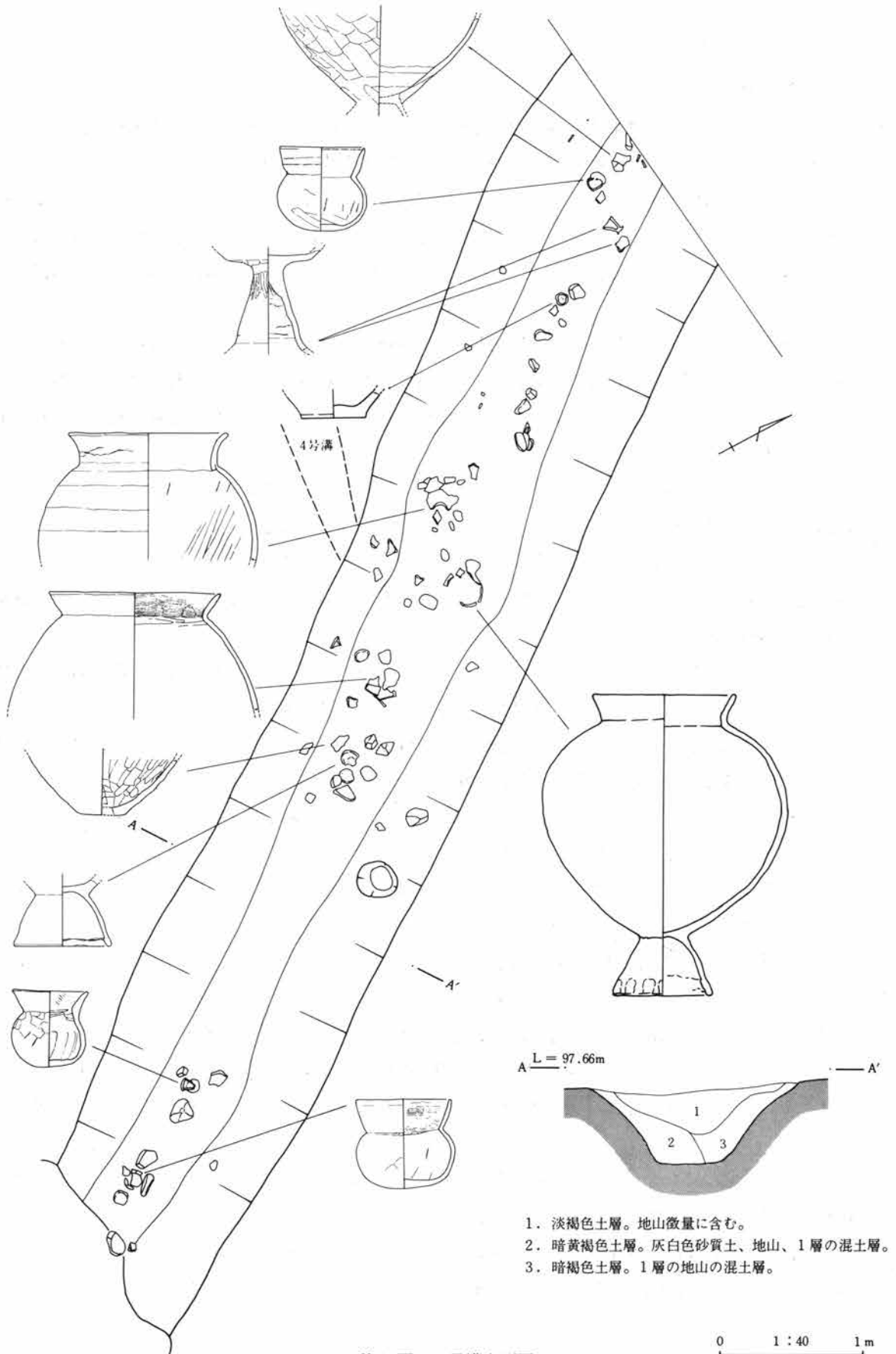
10. 台付甕。器肉は厚く、端部の折り返しは幅が狭い。胎土は粗砂を含む。色調は明褐色。

11. 高杯。三方の透しを有する。内面は丁寧なナデ調整を施す。外面及び割れ口は、磨滅が著しい。外面の調整痕は不明。胎土は粗砂を含む。色調は浅黄色。ローリングが著しいため、本溝には伴わないと考えられる。

12. 高杯。杯部下位に稜を有し、脚部の袖は広く開く。筒部内面には、絞り目や紐造り痕が残る。筒部外面は粗い縦位ヘラミガキを施す。胎土は細砂を少量含む。色調は橙色。

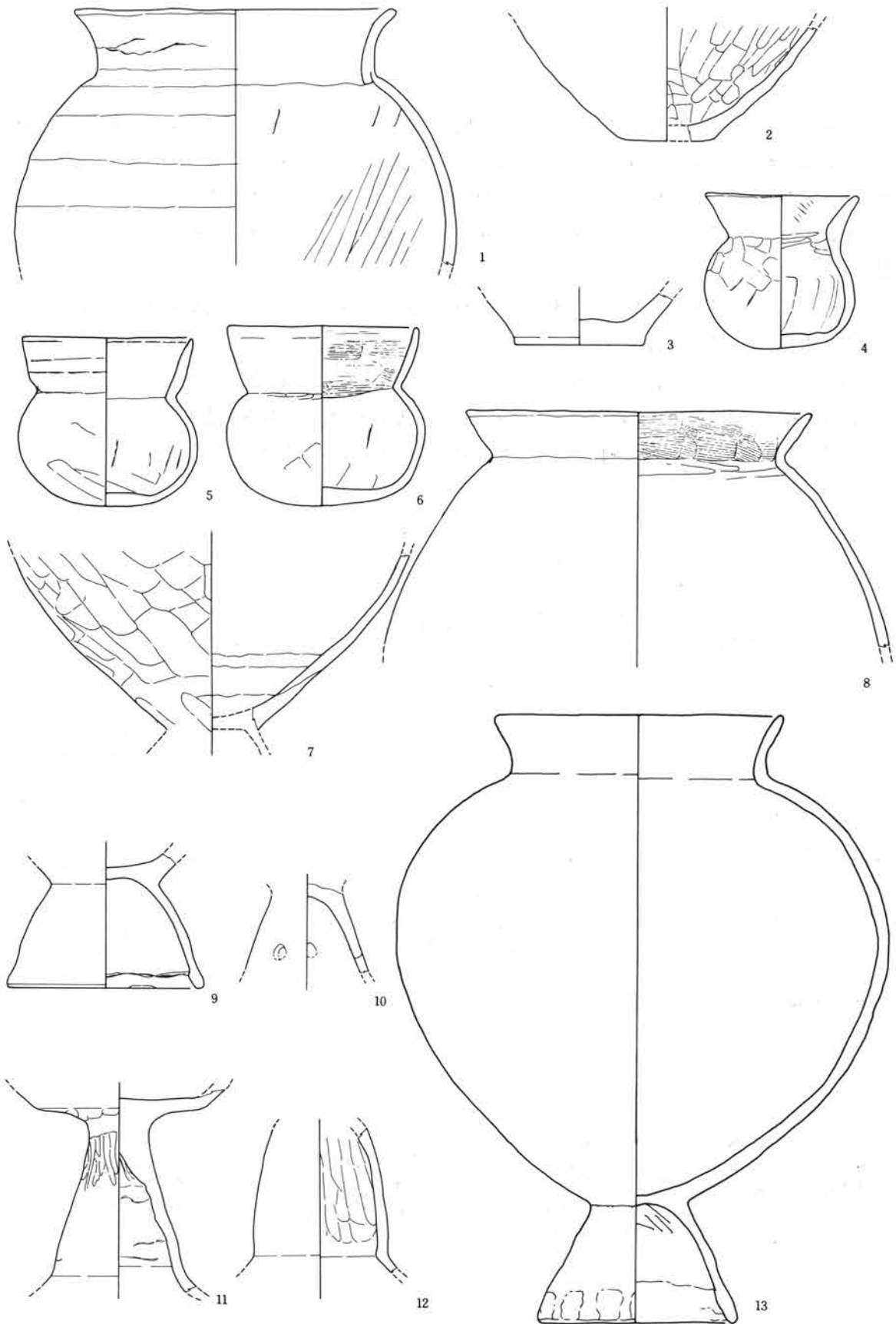
13. 高杯。器肉の薄い筒部の破片である。外面はナデ調整であるが、上位にはヘラミガキが認められる。内面は絞り目が残る。胎土は細砂を少量含み、緻密である。色調は外面がにぶい橙色、内面が褐灰色。

II 検出された遺構と遺物



第11図 3号溝実測図

1 弥生時代～平安時代



第12図 3号溝出土遺物実測図

0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物

1号住居跡

遺 構 (第13図、図版5)

本遺跡中、最も遺存が良好な住居跡である。北西隅を7号溝に破壊され、南半は未発掘であるため平面形は不明である。規模は東西が5m、南北は不明である。確認壁高は5~15cmである。床面は地床と考えられ掘り方は認められない。炉は地床炉で、北壁中央付近に設ける。炉の西側に存在するピットは、位置から判断して柱穴と考えられる。深さは61cmを測る。北東の柱穴は検出できない。周溝は検出できない。

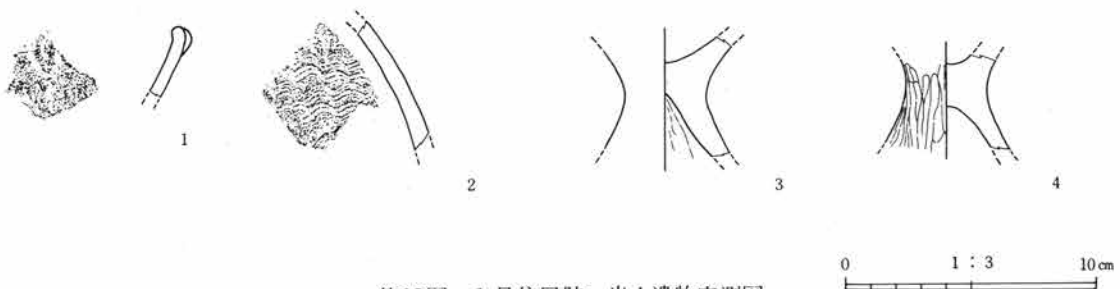
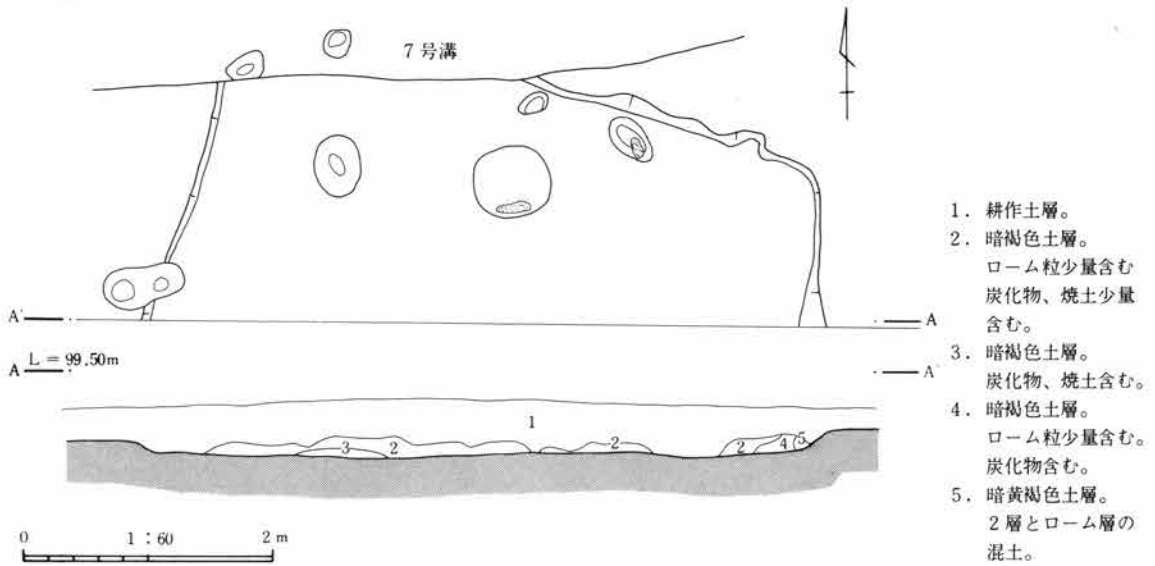
遺 物 (第13図)

1. 高杯。口縁部の小破片である。端部は内側に小さく屈曲する。外面には浮文を貼付する。内外面に赤色塗彩を施す。胎土は粗砂を含む。

2. 壺。肩部の破片で、簾状文が認められる。胎土は粗砂を含む。色調は鈍い赤褐色。

3. 高杯。脚部の破片。外面は縦位ヘラミガキ。胎土は細砂を含む。色調は浅黄色。

4. 高杯。脚部の破片。外面は縦位ヘラミガキ。胎土は細砂を含む。色調は鈍い赤褐色。



第13図 1号住居跡・出土遺物実測図

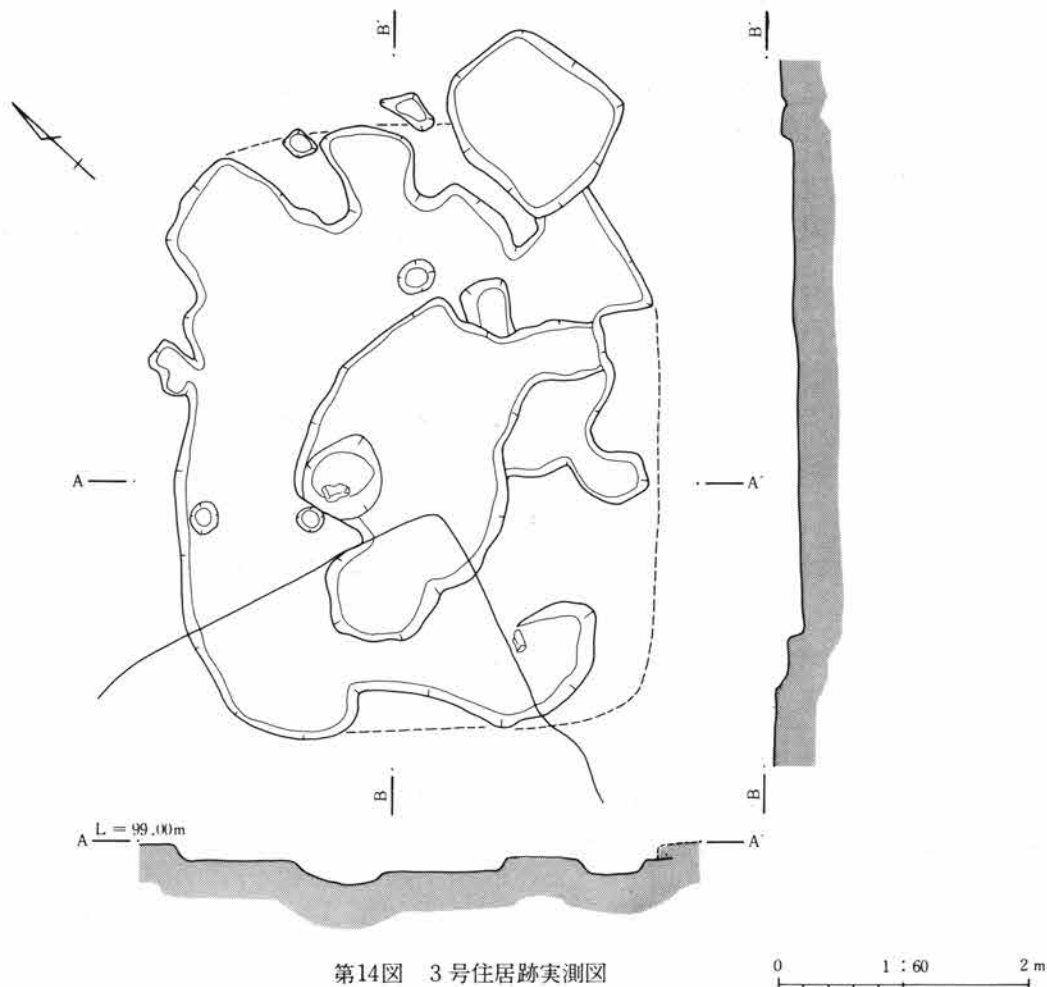
3号住居跡

遺構 (第14図、図版6)

5号溝の約4m東、9号溝の80cm南に位置する。遺存状態は非常に悪く。壁や床は明確ではない。平面形は隅丸長方形と考えられ、規模は長軸4.7m、短軸3.7m推定される。炉は地床炉で、住居跡中央からやや南西寄りに設けられている。後述する4号住居跡と重複するが、重複関係を土層で判断することは不可能であった。しかし、本住居跡に炉が存在し、4号住居跡にカマドが存在するため本住居跡が古いと考えられる。

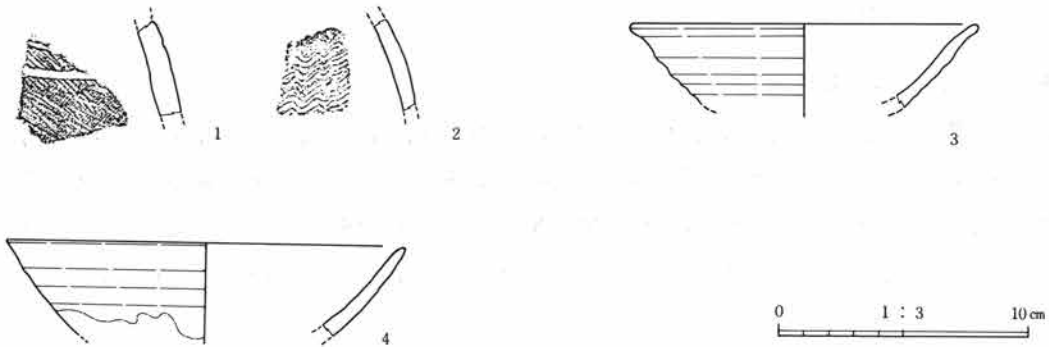
遺物 (第15図)

1. 壺。肩部の破片と考えられる。外面は右下がりのハケ成形の後、2条の沈線を施す。内面調整は、器壁が剥離しているため、不明である。胎土は細砂を含む。色調は鈍い黄色。
2. 壺又は甕。肩部の小破片である。外面は波高の低い波状文を施す。内面は横位ヘラミガキで器面調整を行う。胎土は細砂を含む。色調は浅黄色。
3. 須恵器、杯。口縁～体部の破片である。外面のロクロ目は目立つ。口縁端部は小さく外反する。器面が磨滅しているため、ロクロの回転方向は不明。胎土は礫を少量含む。焼成は甘い。色調は灰白色。
4. 灰釉陶器、碗。口縁～体部の破片である。体部外面の調整はやや粗いが、口縁は丁寧である。灰釉は薄く施す。美濃製。



第14図 3号住居跡実測図

II 検出された遺構と遺物



第15図 3号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡

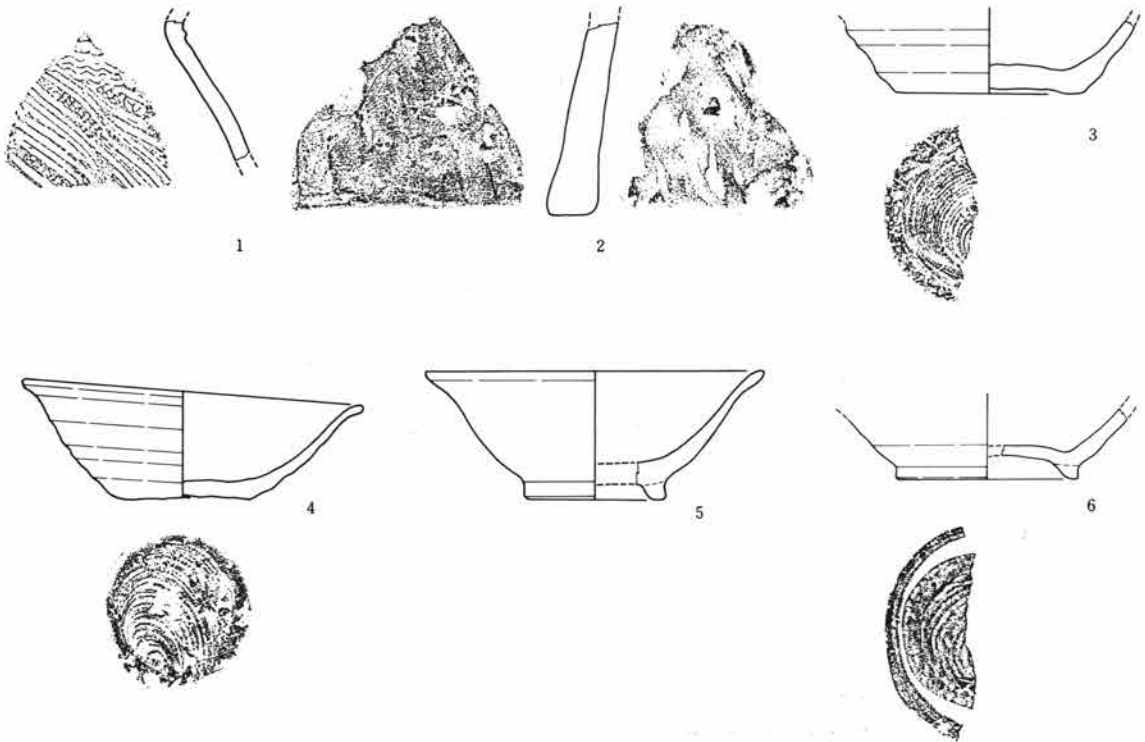
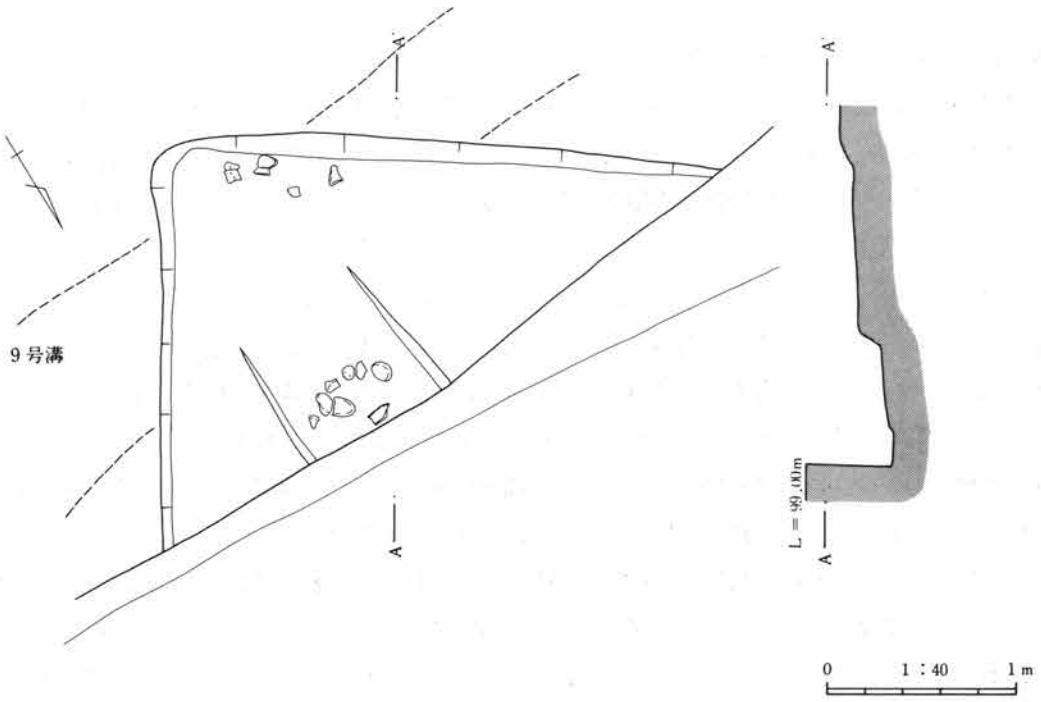
遺構 (第16図、図版6・7)

5号溝の約4m東に位置し、9・10号溝と重複する。重複関係は9号溝が古く、10号溝は新しい。遺存状態が悪く、壁や床面は明瞭ではない。また北半は未発掘であるため、平面形・規模は不明である。南東隅に焼土や灰が遺存しており、カマドと考えられる。確認壁高は、遺存の良い部分で10cmを測る。遺物は須恵器の杯。碗が各2個体出土している。

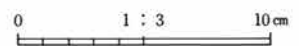
遺物 (第16図、図版23)

1. 壺。肩部の破片である。外面は肩部直下に波状文を巡らし、その下に右下がりの斜位櫛目を施す。この櫛目間には縄文(LR?)が見える。施文順位は、縄文→櫛目→波状文である。内面は、粗い横位ヘラミガキ。胎土は細砂含む。色調は鈍い褐色を呈する。
2. 円筒埴輪。基部の破片である。外面は板状工具による縦位ナデ、内面はナデ調整を施す。また、端部内面には布目状の圧痕が残る。胎土は細砂を少量含む。色調は橙色。割れ口は、やや磨滅する。焼成はやや甘い。
3. 須恵器、杯。外面のロクロ目は深く、稜を成す。外面は、糸切りのため、凹んでいる。底部は、回転糸切り無調整。胎土は粗砂を多量に含み、砂っぽい感を受ける。比重は軽く、持ち重りはしない。焼成は良好である。色調は明褐色。
4. 須恵器、杯。底径は5.7cmと小さく、体部は外方に広く開く。口縁端部は小さく外反する。体部外面のロクロ目は弱い。見込みの調整は粗い。底部右回転糸切り無調整。胎土は細砂を多量に含む。焼成は良好である。色調は灰白色。
5. 須恵器、碗。腰部に丸味を有し、口縁端部を小さく折り返す。全体に調整が丁寧である。外面のロクロ目は、ほとんど平坦に調整されている。口縁は、布か皮で回転ヨコナデを施し、内面は見込み付近まで、コテが当てられている。高台は貼り付けている。胎土は細砂を含む。焼成は良好で、色調は灰白色。
6. 須恵器、碗。腰部は直線的で、見込みと体部内面の境は明瞭である。高台は貼り付けている。胎土は細砂を含む。焼成は灰黄褐色。割れ口は少し磨滅している。

1 弥生時代～平安時代



第16図 2号住居跡・出土遺物実測図



II 検出された遺構と遺物

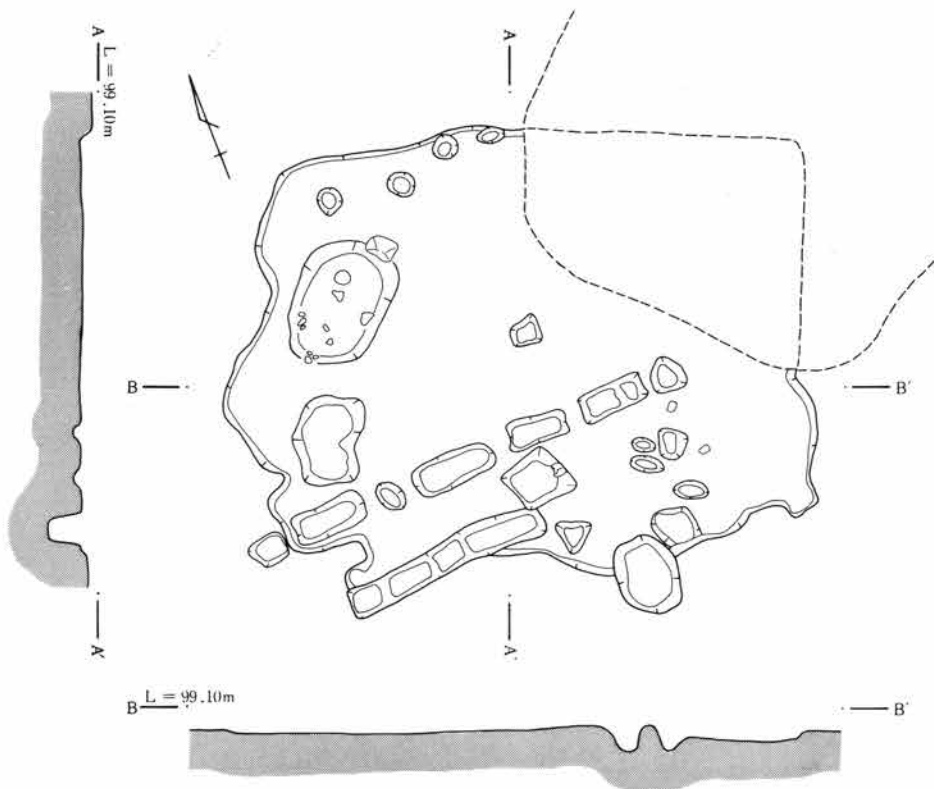
4号住居跡

遺構 (第17図、図版7)

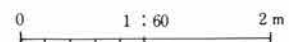
5号溝の1.3m東に位置し、3号住居跡と重複する。遺存状態が悪く、床面や壁は明確でない。平面形・規模は不明である。しかし検出状態から長軸4.3m、短軸3.4m前後と推定される。南東隅には焼土が認められ、カマドと考えられる。西壁付近の掘り込みは、掘り方の可能性があるが土層では判断できなかった。

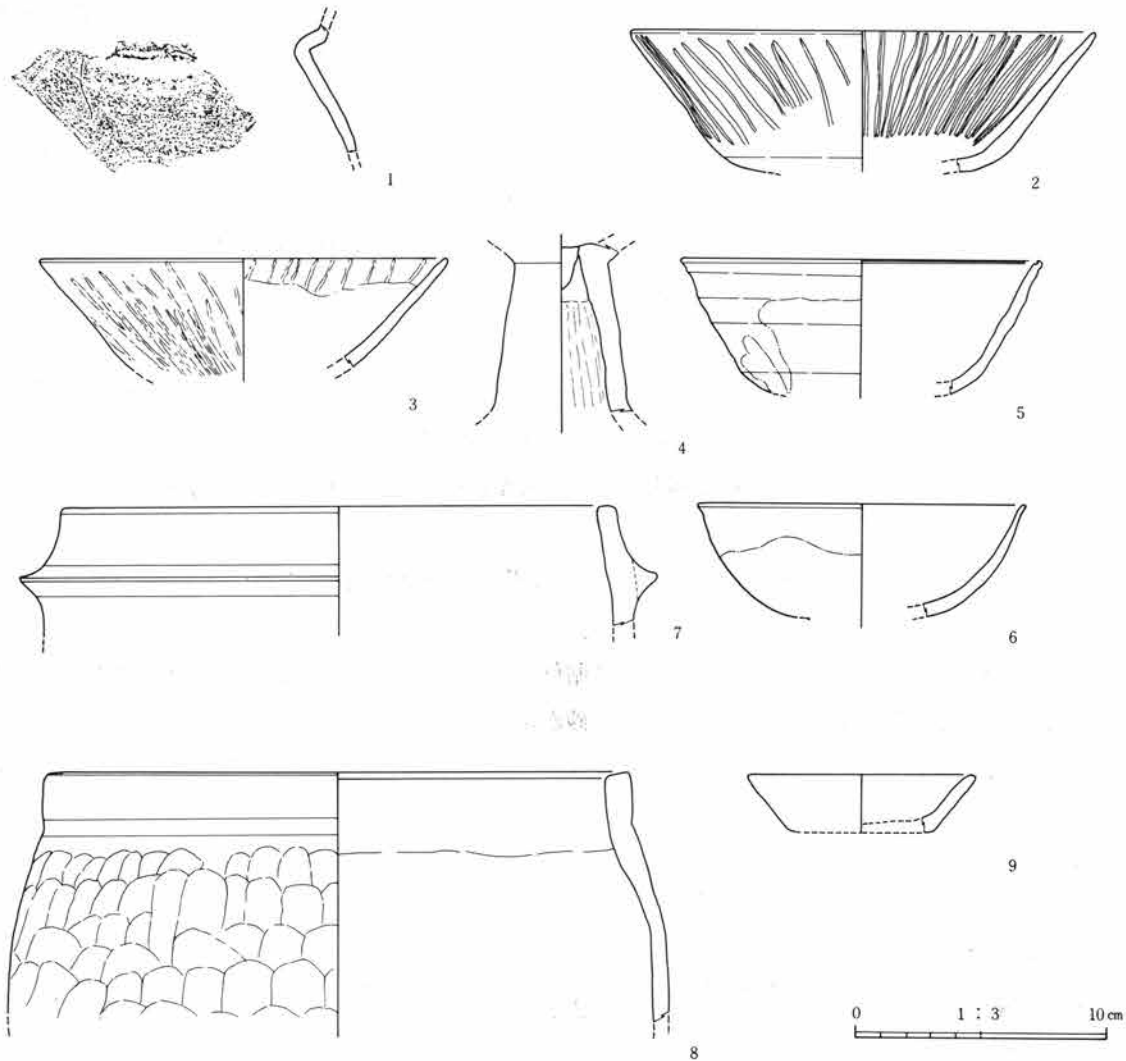
遺物 (第18図、図版23)

1. 甕。「S」字状口縁甕の破片である。外面は横位ヘラ削りの下に、右下がり斜位ヘラ削りを施す。
2. 高杯。杯部の破片である。内外面には、暗文状のヘラミガキを施す。色調は鈍い赤褐色。
3. 高杯。杯部の破片である。内外面には、暗文状のヘラミガキを施す。内面の器表は剥離する。
4. 高杯。脚部の筒部である。袖は屈曲して外反する。内面に絞り目残る。
5. 灰釉陶器、椀。腰の湾曲は強く、体部は直線的に延びる。口縁端部は小さく外反する。端部内面に細かい沈線を1条巡らす。胎土は礫を少量含み、灰白色である。美濃製。
6. 灰釉陶器、椀。腰部～体部は丸味を帯びている。体部外面の調整は粗い。口縁端部は小さく外反する。胎土は灰白色で緻密である。内面は体部までコテを当てている。美濃製。
7. 羽釜。口縁部の小破片である。胎土は粗砂を含み、やや粗い。色調は橙色で、焼成は良好。
8. 土釜。肩部～口縁に行くに従い、器厚を増す。頸部外面は沈線状に凹む。胎土は礫を多く含み、粗い。色調は鈍い橙色。
9. 皿。体部 $\frac{1}{3}$ 程の破片で、底部を欠く。胎土は細砂を含み、粗い。色調は鈍い橙色。



第17図 4号住居跡実測図





第18図 4号住居跡出土遺物実測図

2. 中・近世

2号溝

遺構 (第19図・20図、図版8・9)

本丸と二の丸を分ける西側の堀(5号溝)から、西北西に25m延び、遺跡西端付近で北に屈曲する。屈曲部以北は未発掘である。幅は確認面で5.5～6m、溝底で1.5～2.3mを測る。深さは5号溝と交わる部分で1.5m、中央で2m、西端で2.3mを測り、西側に傾斜している。底部東側と中央の2ヶ所に、比高差20cmと5cm程の段差が各々1ヶ所認められる。溝の断面形は、ほぼ逆台形を呈する。しかし、5号溝と交叉する部分は逆三角形になっている(図版9)。

埋沈状況は、図示したA-A'付近ではほとんどが自然堆積である。人為堆積と考えられる埋土は、平面精査時に1cm前後確認されたのみである。これに対し、B-B'付近では1～5層が人為堆積と考えられ、北側から堆積している。同様な土層、及び堆積状況は本丸と二の丸を分ける堀(5・6号溝)についても観察されている。これらの土層については、土壘を崩して埋めたものとするのが妥当であろう。本溝の人為

II 検出された遺構と遺物

堆積土直下には礫の集中が認められた。この礫中から、16世紀後半(55)と17~18世紀(54)の瀬戸・美濃系天目茶碗が出土している。これにより、人為堆積の上限を17~18世紀と考えたい。また下限については、6・7号溝で浅間A軽石の降下軽石層が検出されていること、B—B'の1層上に浅間A軽石を多量に含む砂質土の堆積が認められたことにより、天明3年(1783年)以前と考えられる。

本溝からは多くの遺物が出土しているが、時期を決定できる資料の出土はない。しかし、東の溝底から50cm程上の北壁に土塋墓(第 図)が築かれており、溝の時期の下限が与えられる。土塋墓から出土した土師質土器の年代観は15世紀後半と考えられ、本溝は15世紀後半頃には機能していなかったと考えられる。

遺物 (第21~25図、図版24~26)

1. 壺または甕。底部の破片である。平底で外面に綱代痕を明瞭に残している。綱代の編み方は、本越え、本潜り、本送りである。色調はにぶい橙色。胎土中に粗砂を含んでいた。
2. 甕。胴部破片である。3本の沈線を施し、RL縄文を縦位に充填させている。色調はにぶい橙色である。
3. 壺。胴部破片である。沈線を施し、これにボタン状貼付文がつく。貼付文には刺突が加えられている。色調はにぶい橙色。胎土中には細砂が含まれている。
4. 壺。胴部破片である。沈線施文後、ボタン状貼付文が加えられている。貼付文には6つの円形刺突文が施されている。色調はにぶい橙色。胎土中には細砂が含まれる。
5. 壺。破片である。沈線文が施され、これにそって列点状の刺突文と櫛歯状工具による波状条線が垂下する。色調はにぶい橙色。
6. 壺。頸部下半の破片と思われる。横位の沈線がめぐり、LR縄文が充填されている。色調は外面が橙色、内面は黒色である。胎土中に細砂を含む。
7. 壺。頸部下半の破片である。横位の沈線がめぐり。色調は明赤褐色である。
8. 甕。口縁部破片である。先端は押圧により波状を呈する。内外面ともよくみがかれている。色調は赤褐色。焼成は良好である。
9. 甕。胴部破片と思われる。簾状文がめぐり、その下に6本1単位と思われる羽状直線文が施されている。色調は橙色。胎土中には粗砂とともに輝石の混入がめだつ。
10. 甕。胴部破片と思われる。6本1単位の羽状縄文が斜めに施されている。色調はにぶい橙色。
- 11・12. 甕。口縁部破片である。同一個体と思われる。先端には3本1単位の櫛描波状文が施される。また、頸部には簾状文が施文されている。内外面ともよくみがかれているが先端にはススが附着している。色調はにぶい橙色。焼成は良好である。
13. 甕。胴部破片である。4本1単位と思われる乱れた波状文が3段施されている。色調はにぶい橙色。胎土中に細砂を含む。
14. 甕。口縁部から胴上半部の破片である。口縁部はS字状を呈する。屈曲部から上は短く、器肉も厚い。胴部の外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデを施している。色調はにぶい橙色。
15. 甕。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部の外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデを施している。色調はにぶい橙色。胎土中に少量の砂、粗砂を混入する。
16. 壺。口縁部である。先端は短く直立し尖る。口縁部と胴部の接合部分には沈線状のナデが施されている。外面は全面にいてねいなナデが施された後、タテ方向に棒状工具によるミガキが施されている。内面もナデ後、斜めにミガキが施されている。先端は狭い幅でヨコナデ。色調は橙色である。胎土中に粗砂が含ま

れる。

17. 高杯。杯部である。先端はやや直立ぎみに立ち上がる。下位に弱い段を持ち屈曲し脚部へ続く。調整は内外ともナデである。色調は明赤褐色。

18. 高杯。杯部である。下位に弱い段をもち屈曲する。これより上位は大きく外反し、先端は直立気味に短く立ち上がりやや尖る。調整は外面がヨコナデ、内面がナデである。色調は明赤褐色。

19. 高杯。脚部である。円筒状をなし、下位はややふくらんでいる。杯部とはソケット状に結合されていた。調整はナデ後、ミガキが施されている。内面には指頭によるシボリ痕があり、下位はナデが加えられている。色調は赤褐色。

20. 高杯。脚部である。下ぶくれの柱状をなす。調整は外面がミガキ、その上に棒状工具によるミガキが加えられている。内面にはシボリ痕を残す。色調は赤褐色。

21. 甕。口縁部の破片である。先端は丸味をもって外反する。調整は内外面ともヨコナデ、色調はにぶい赤褐色であるが焼成時の黒斑が残る。

22. 甕。口縁部から胴部にかけての破片である。調整は内外面ともヨコナデである。色調は赤褐色である。胎土中には、軽石、長石粒を多く含む。

23. 卮。体部の破片である。器形は横に張る。底部は平底に近いと思われる。外面はていねいなナデ、内面は指頭によるナデである。色調は赤褐色。

24・25. 蓋、胎土、色調等から同一個体の可能性がある。須恵器。口縁部の先端は短く外反し尖る。口縁部から天井部へは一条の沈線をへて屈曲している。調整は右回転のヘラケズリ、色調は暗灰色。

26. 円筒埴輪。破片である。基底部に近い部分と思われる。外面の刷毛目は13～14/2cm（2cmの間隔の中に13～14本の刷毛目が残る）である。円弧2本からなるヘラ記号が残っている。

27. 円筒埴輪。破片。刷毛目は1単位8本以上の施文具による。外面に指頭のあたった跡が残る。

28. 朝顔形埴輪。破片。外面の突帯の上は横方向のナデ、下はタテ方向の刷毛目である。施文具は7/2cmである。内面も外面の突帯が付されている位までをナデ、それより下位は斜め方向の刷毛目が施されている。残存部下位には横方向のナデ。

29. 円筒埴輪。破片である。刷毛目は5本1単位で幅は6～7mmである。年輪に間隔のある施文具が用いられている。突帯は下側の稜が低い。

30. 円筒埴輪。突帯は張りが弱く低いものである。突帯の上には円形の透孔がつく。刷毛目は17/2cm。

31. 円筒埴輪。突帯の下、横ナデに接するように円形の透孔が切られている。断面の最終的な調整は右回転と思われる。刷毛目は8/2cm。

32. 円筒埴輪。断面三角形の低い突帯を有するものである。刷毛目は浅く、7/2cmである。

33. 円筒埴輪。32と同様の断面三角形の突帯である。刷毛目は6/2cmである。

34. 円筒埴輪。突帯は断面三角形。刷毛目は8～9/2cmである。割れ口は磨滅して丸味をおびている。内面はあらいナデが施されている。

35. 円筒埴輪。突帯は低い。外面にタテ方向に施された刷毛目は7/2cmである。内面にも刷毛目残り、その上に弱いナデが加えられている。

36. 円筒埴輪。刷毛目は年輪に間隔のある施文具が用いられ、強い調子で施文されている。7/2cm。突帯には強い横ナデが施されている。透孔は最終的に左回りの調整が施されている。

37. 円筒埴輪。刷毛目は7/2cmである。突帯は高く、丁寧なナデが施されている。

II 検出された遺構と遺物

38. 円筒埴輪。刷毛目は7～8/2cmである。突帯は低いが上面に強いナデが施され、稜が鋭い。突帯に接するように径の小さな透孔が切られている。裏面にも刷毛目が強く残る。

39. 円筒埴輪。刷毛目は8/2cmである。刷毛目施文→突帯貼付→ヨコナデという調整順序が明瞭に残っている。内面の一部に刷毛目が残るが11/2cmと表面と施文具が異なる可能性もある。

40. 円筒埴輪。口縁部の破片である。口径28cm。ラップ状に外反している。先端は外側につままれたように三角形の形状をしている。刷毛目は左上に向かって施されており、7～11/2cmである。内面にも左上に向かって刷毛目が施されている。

41. 円筒埴輪。基底部の破片である。刷毛目は6～8/2cmである。

42. 円筒埴輪。基底部の破片である。刷毛目は6/2cmである。端部は内外面に弱いかえりがある。内面には指頭によるナデが明瞭である。

43. 円筒埴輪。基底部の破片である。径、15.2cmに復元できる。刷毛目は年輪の間隔があまり、施文のタッチも弱い。7/2cm。内面には指頭によるオサエの痕が残る。

44. 壺または甕。須恵器の胴下半から底部にかけての破片と思われる。胴部にはカキ目が施されている。底部は回転ヘラ切りで、胴下端には手持ちヘラケズリが施されている。色調は灰色。白色の鉱物粒を少量含む。7世紀中頃の所産と思われる。

45. 椀。須恵器の底部破片である。回転ヘラ切り後高台が付されている。色調は灰白色である。

46. 杯。須恵器である。右回転のロクロ引き上げによる成形で、糸切り痕を残す。9世紀中頃のものである。

47. 椀。灰釉陶器である。ロクロ使用の付高台である。

48. 椀。高台を有する。底部には左回転のロクロ使用による糸切り痕が残る。高台は退化して低くなっている。色調は赤褐色。胎土中に砂を多く含んでいる。

49. 椀。丸味をおびた器形をなす。高台は右回転のロクロで貼付されており、断面三角形を呈する。底部の糸切り痕は消されている。色調は外面が明赤褐色。内面が黒色である。

50. 長頸壺。須恵器で頸部の破片である。外面には自然釉がかかっている。色調は灰白色である。

51. 甕。口縁部の先端は外反し尖っている。調整は内外面ともヨコナデ。色調はにぶい橙色である。

52. 羽釜。口縁部の先端は平坦な面をなす。鏝は体部成形後に貼付している。内外面ともヨコナデ。

53. 甕。大型の甕の底部破片と考えられる。胴下端にはケズリ後ナデが施されている。底部には右回転の糸切り痕が残っている。胎土中には多量の砂粒が含まれている。色調は暗灰色である。

54. 碗。瀬戸・美濃系の天目茶碗である。口縁部の復元径は11.6cmである。外面の下半の一部を残し鉄釉が施されているが釉の厚さは薄い。17～18世紀の所産であろう。

55. 碗。瀬戸・美濃系の天目茶碗である。口縁部の径は11.4cmである。外面の一部に露台部がある。他は鉄釉が施されている。16世紀の後半にあたる。

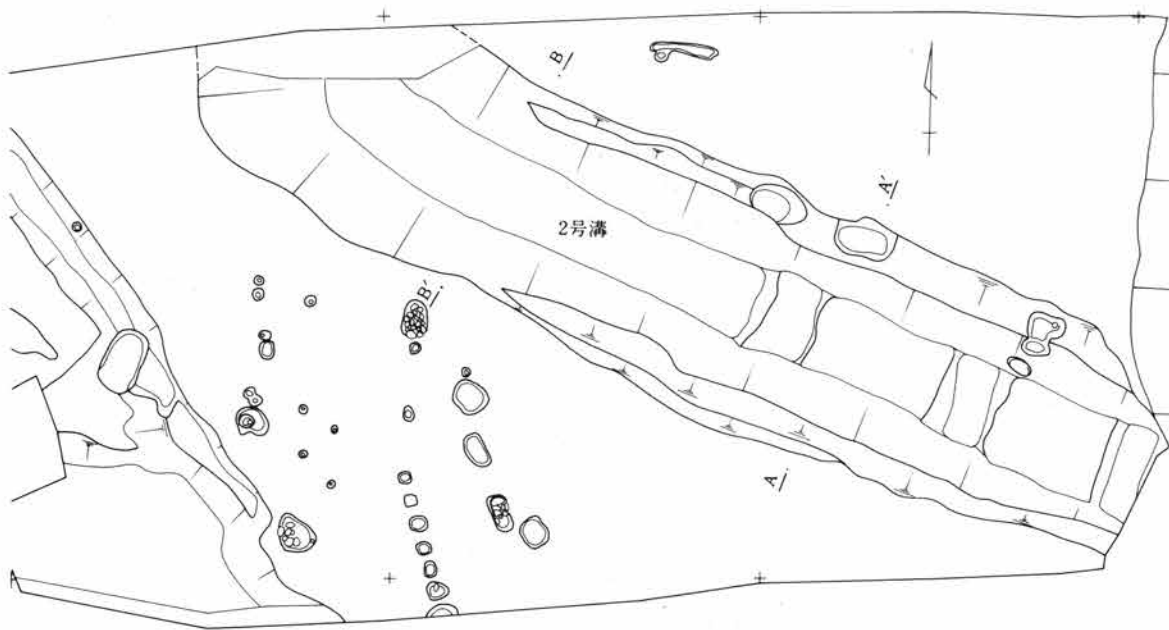
56. 小皿。土師質土器である。回転のロクロ使用による成形で底部に糸切り痕を残す。色調は淡黄色。胎土中に細砂を含んでいる。

57. 皿。美濃系の皿である。底部には削りだしの低い高台がつく。乳灰色の志野釉がかかる。

58. 火鉢。大型の火鉢の口縁部破片である。先端は内側に弱くかえる。外面には断面三角形の隆帯がつきその下に沈線がめぐっている。この間には菱形のスタンプ文が付されている。

59. 瓦。布目跡を残す。

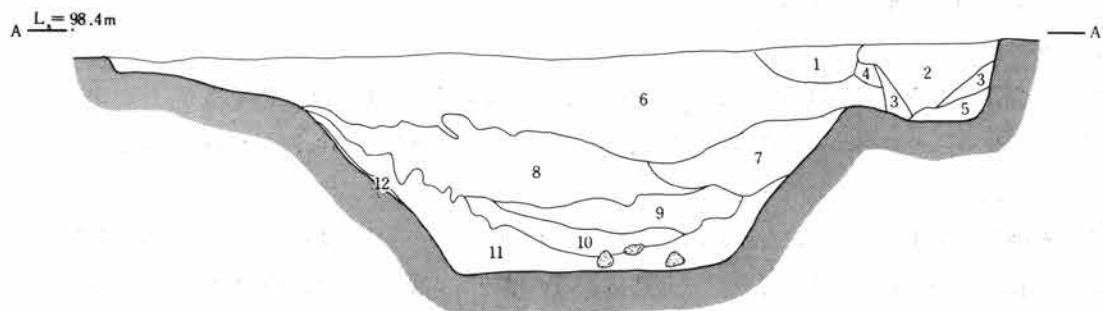
- 60. 瓦。湾曲の内面に布目跡を残す。
- 61. 瓦。布目跡は認められない。
- 62. 瓦。布目瓦である。端部はヘラによって切りはなされている。色調は灰褐色である。
- 63. 瓦。丸瓦の破片と思われる。色調は暗灰色である。一端はヘラによる面取りがおこなわれている。
- 64. 瓦。布目瓦である。色調は灰褐色。
- 65. 不明石製品。石材は角閃石安山岩の転石である。自然面を加工して、播鉢状の凹穴がつくられている。凹穴の反対の面には弱い加工痕がある。凹穴製作時あるいは使用時につくられたものと思われる。
- 66. 古銭。天聖元宝（1023～）、北宋銭である。
- 67. 古銭。??元宝。



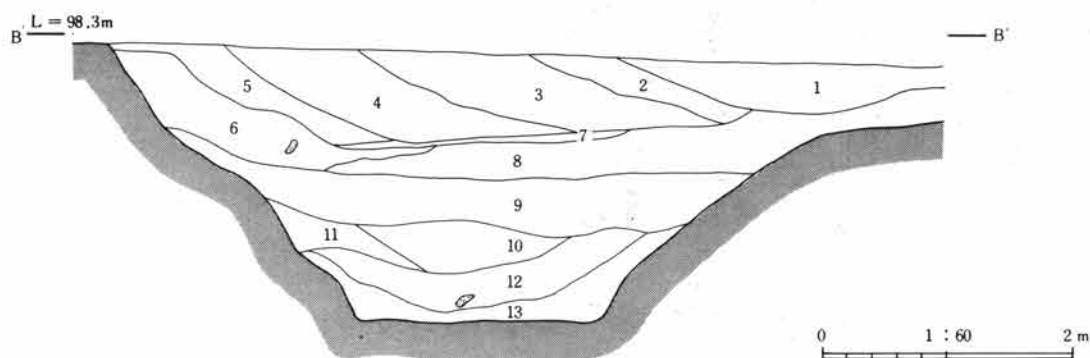
第19図 2号溝実測図

0 1 : 200 5 m

II 検出された遺構と遺物

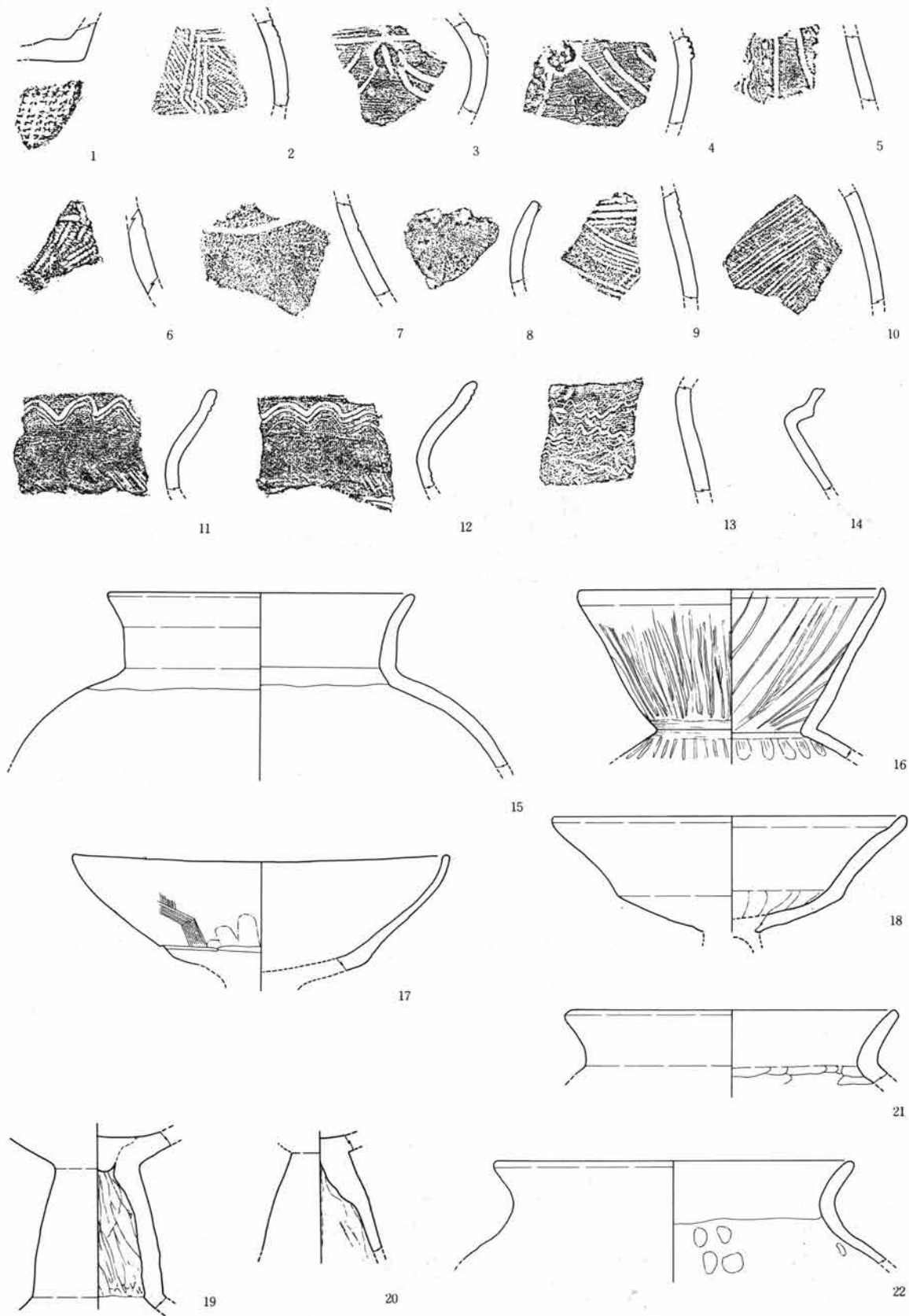


1. 黒褐色土層と3層ブロックとの混土層。
2. 1に類するが、3層ブロックの混入量が多い。
3. 灰褐色土層。3～4層のブロックや粒子を含む、しまり少ない土。
4. 灰褐色土層。ややしまりのある土で、3層のブロックを少量含む。
5. 黒褐色土層。3層の粒子をかなり多含む。
6. 灰褐色土層。しまりのある土で、3層の少ブロックや3層内に含まれる軽石が多く含まれる。
7. 灰褐色土層。6層に類するが、3層ブロックがより多く含まれる。
8. 黒色土層。やや粘性のある土で、小礫を若干含む、しまりの少ない土。
9. 灰褐色土層と3層との混土層。
10. 黒色土層。やや灰色を帯びた土で、粘性を帯びる。
11. 黄灰色土層。3層以下の土が細かく砕かれた土で、しまりの少ない土。
12. 黄白色土層。地山の土で、軽石を多量に含み、堅くしまった土。



1. 黄褐色土層。地山を主体とするが、少量淡褐色土を含む。
2. 暗黄褐色土層。地山小ブロックと暗褐色土の混土、しまりない。
3. 黒褐色土層。地山を少量含む。
4. 暗黄褐色土層。2層と同様な色調であるが、地山と暗褐色土が均一に混ざる。
5. 暗黄褐色土層。2層に比してやや黒味が強い。
6. 暗褐色土層。地山を微量に含むのみである。
7. 淡褐色土と、灰色砂質土の混土層。粘性ややあり。
8. 淡褐色土層。地山微量含む。
9. 淡褐色土層。地山微量含む。8層に比してやや明るい色調を呈する。
10. やや黒味を帯びた淡褐色土層。地山ブロック含む、黒褐色土少量含む。
11. 淡褐色土層。灰色砂質土少量含む。
12. 淡褐色土層。灰色砂質土を淡褐色土の混土層。
13. 黄褐色土層。地山の崩壊土。しまりない。

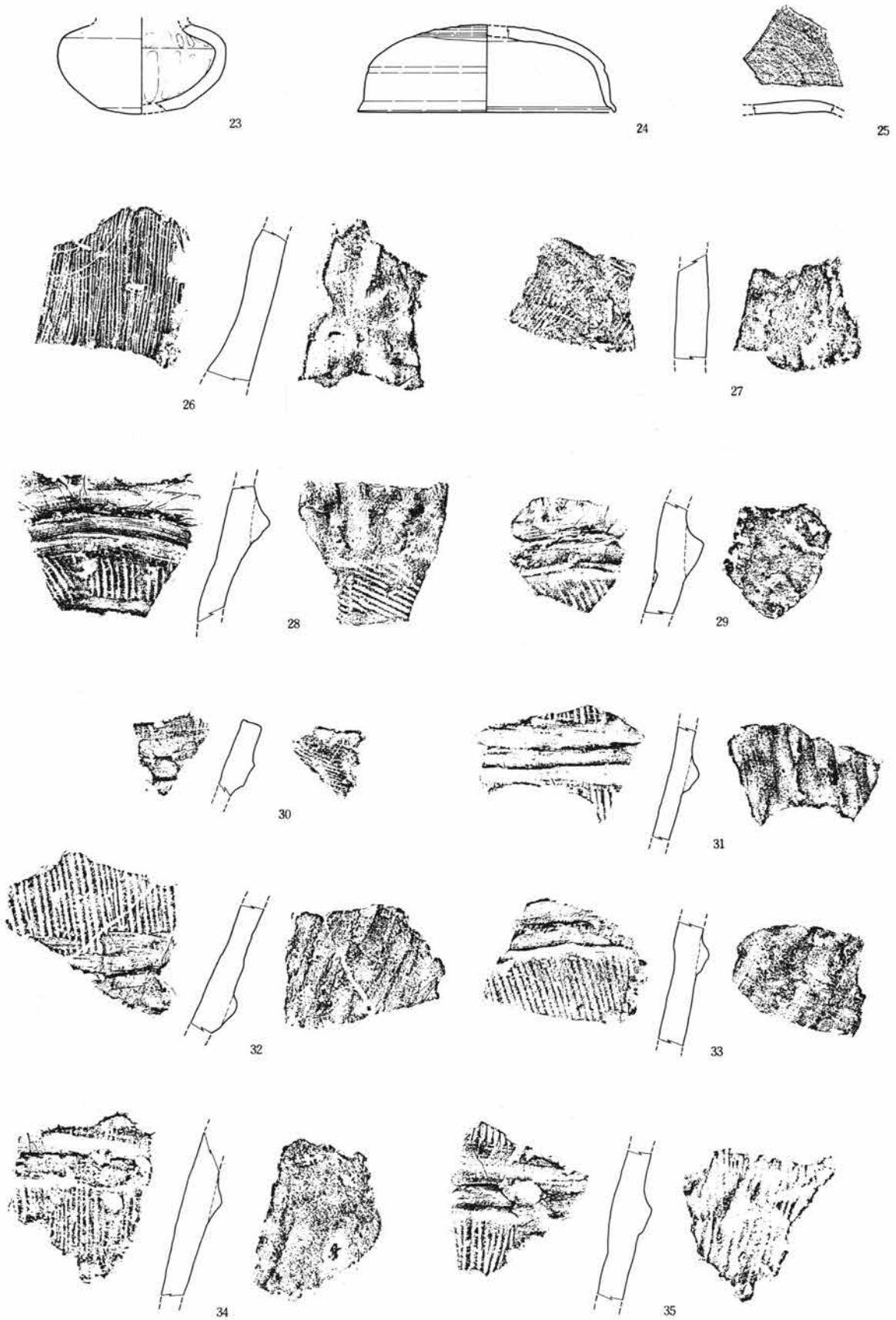
第20図 2号溝実測図



第21图 2号沟出土遗物实测图(1)

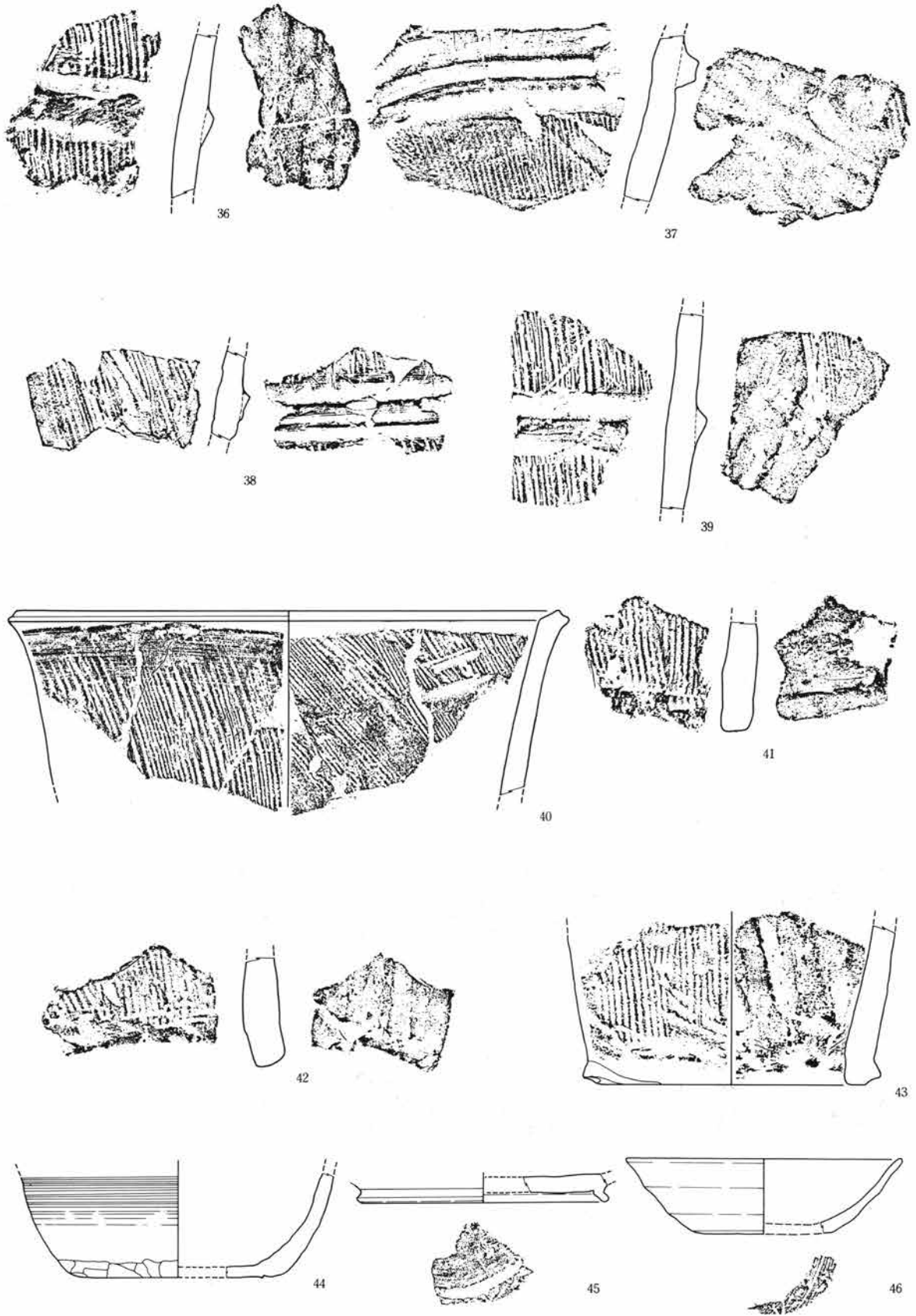
0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物



第22図 2号溝出土遺物実測図(2)

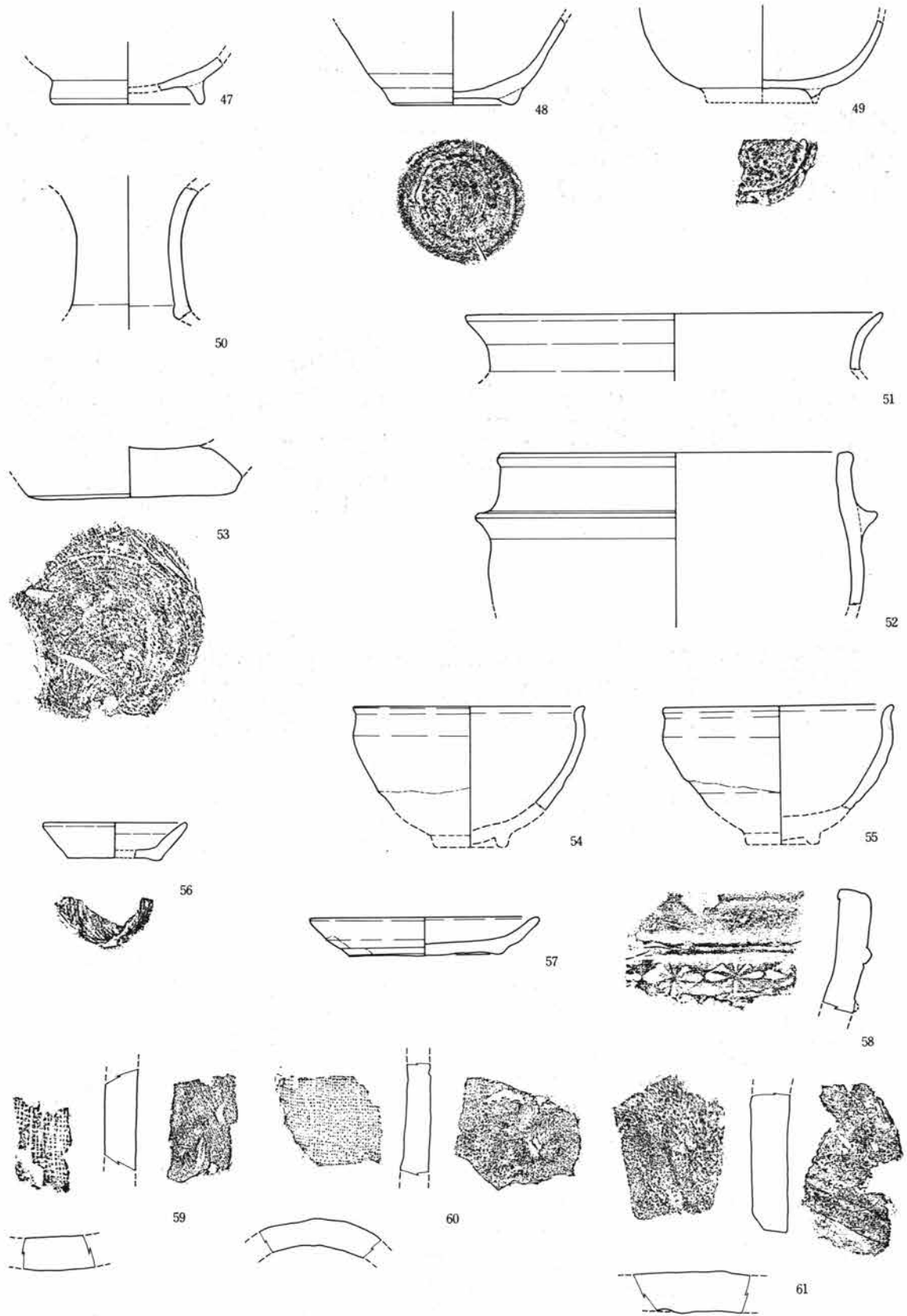
0 1:3 10cm



第23图 2号溝出土遺物実測図(3)

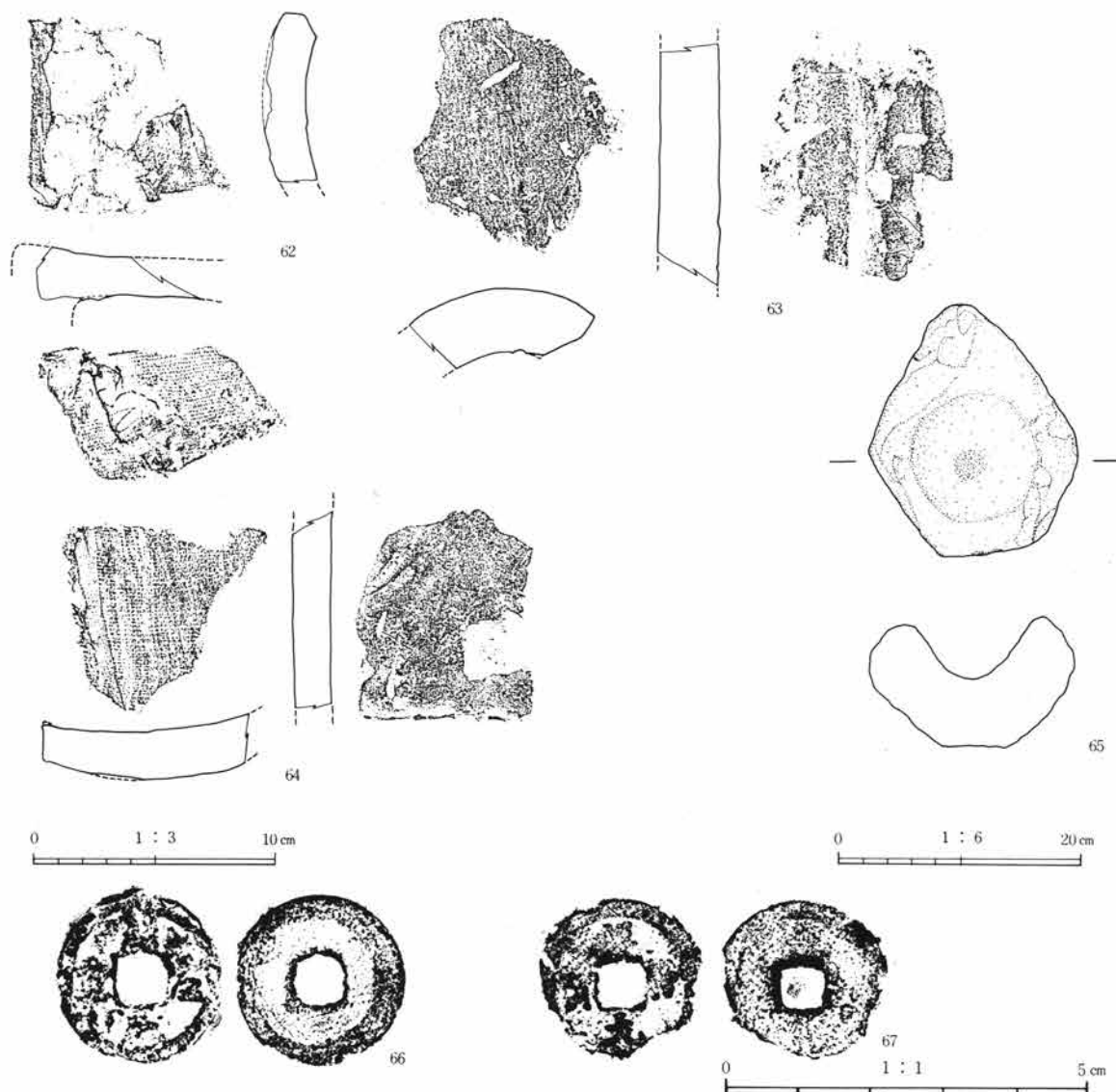
0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物



第24図 2号溝出土遺物実測図(4)

0 1 : 3 10 cm



第25図 2号溝出土遺物実測図(5)

5号溝

遺構 (第26図, 図版9)

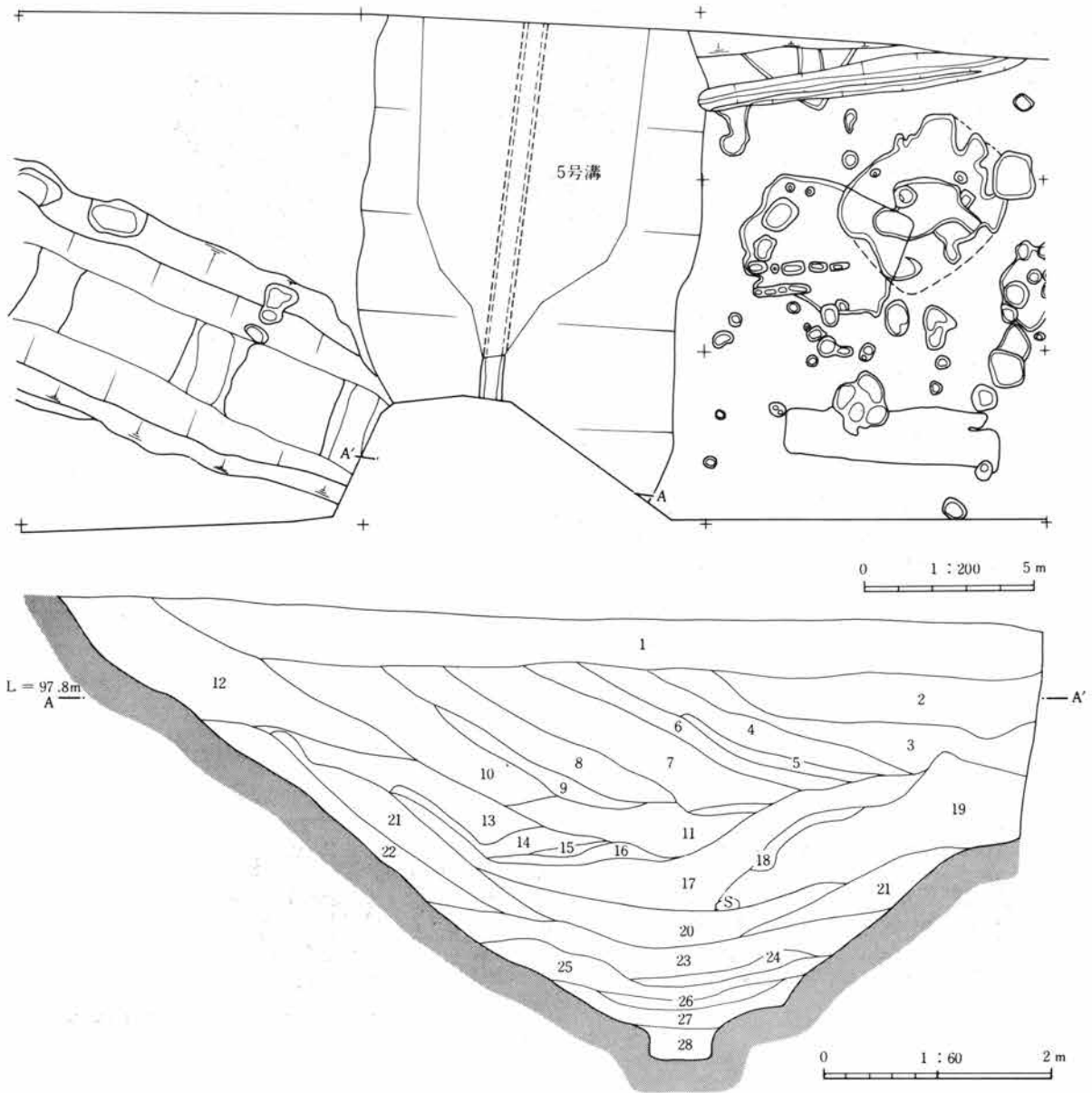
本丸と二の丸を分ける西側の堀である。長さ14mを確認したが、完掘できたのは1.3mのみであった。上端幅9.6m、下端幅70cm、深さ3.8mを測る。壁の角度は約45°である。本溝は発掘区の南西で2号溝と重複している。2号溝調査時にトレンチで、2号溝から本溝に向って傾斜する3層を確認しているが、両者の比高差は2.2mと著しいため、新旧関係は不明である。

埋沈状況は2～11層が東側からの人為堆積土で、これ以下は自然堆積である。自然堆積土中の20層が東側からの人為堆積土で、これ以下は自然堆積である。自然堆積土中の20層は浅間A軽石の純層の可能性はある。したがって本溝は、天明頃には1m程しか埋まっていなかったと考えられる。

遺物

本溝からは少量の弥生式土器や埴輪の小破片が出土したのみで、図示しうるものは出土しなかった。このため、遺物から本溝の時期を推定することは不可能である。

II 検出された遺構と遺物



1. 黒褐色土層。耕作土。
2. 黒褐色土層。黄色土（地山）ブロックを少量含む。
3. 黄色土と黒色土との混土层、地山の軽石を多量に含む。
4. 黒褐色土層。黄色土（地山）を若干含む。
5. 3に類する土。
6. 4に類する土。
7. 黒褐色土層。黄色土の小ブロックがかなり多量に含まれる。
8. 暗褐色土層。黄色土の粒子が多量に含まれる。
9. 8に類するが、黄色土を多量に混入。
10. 黄灰色土層。少量の黒褐色土が混在している。
11. 7に類するが黄褐色（地山）の混在量が多い。
12. 褐色土層。少量の黄色土ブロックを含む。
13. 褐色土層。かなり多くの軽石（地山）を含む。
14. 褐色土と黄色土との混土层。
15. 灰層。炭化物を多く含んだ灰。
16. 茶褐色土層。黄色土を少量含み、下部に青灰色の粘質土が、約2cmの厚さで推積。
17. 灰褐色土層。軽石粒（浅間A?）を多量に含む。
18. 黄灰色土層。褐色土と黄色土との混土层。
19. 灰褐色土層。17よりもやや色調の明るい土で、浅間Aを多量に含む。
20. 灰褐色土と浅間Aの混土层、純層に近い浅間Aが多量に含まれるが、二次堆積の感もある。
21. 褐色土層。かなり多くの浅間Aを含む。
22. 21に類するが、やや色調の暗い土。
23. 灰色土層。粘性を帯びた土で、砂礫をかなり多く含む。
24. 灰褐色土層。23に類するが、やや色調の明るい土。
25. 青灰色土層。粘性ある土で、小砂礫をかなり多く含む。
26. 灰色土層。シルト質の土で、粘性に富む、小砂礫を若干含む。
27. 黄褐色土層。地山の崩落堆積した土。
28. 砂層。ラミナ状の堆積をなしている。下部には径10cm大の円礫を多量に含む。

第26図 5号溝実測図

6 号 溝

遺 構 (第27図, 図版10)

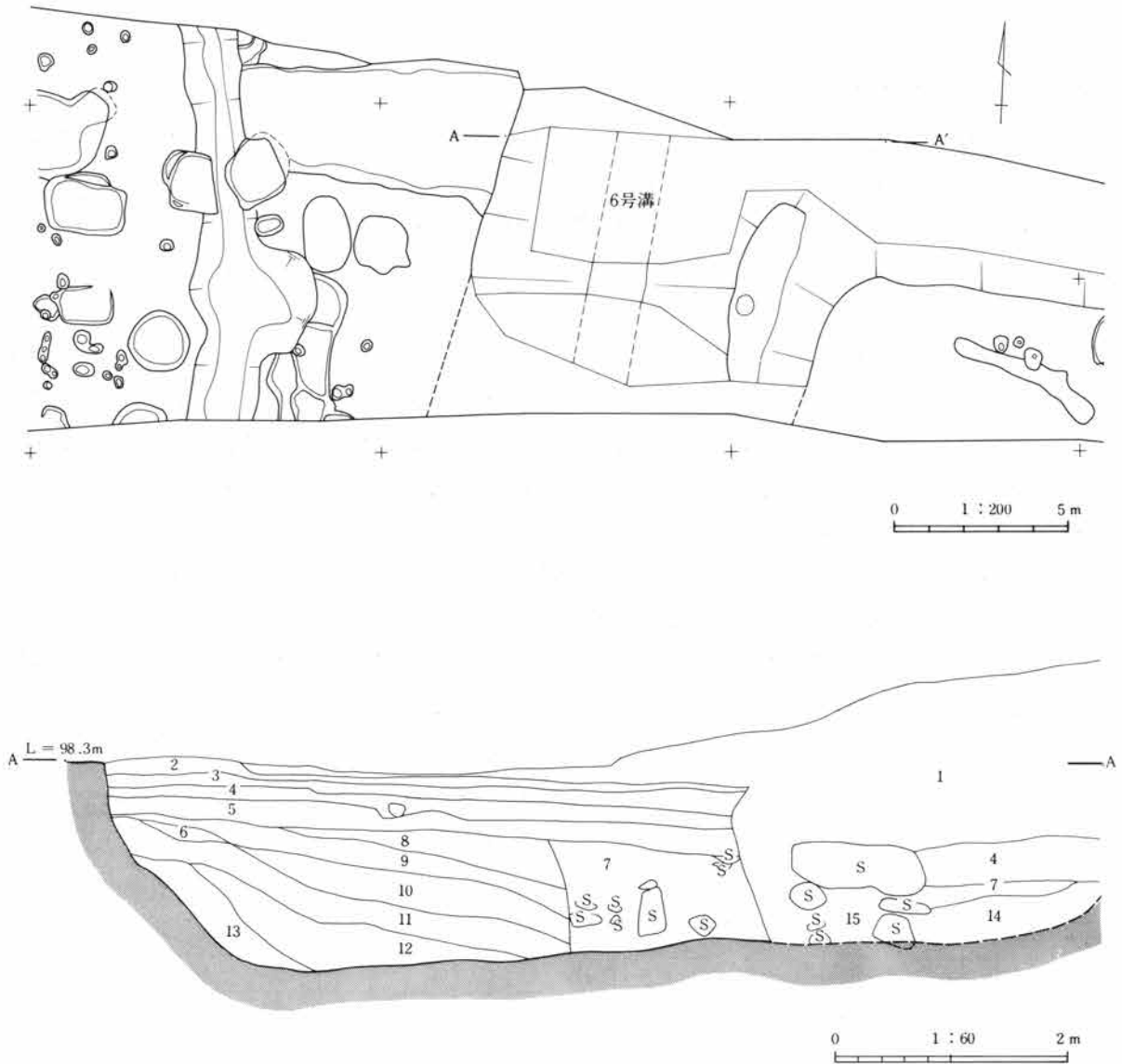
本丸と二の丸を分ける東側の堀である。この堀は調査区以南では現状でも谷状になっており、農道として利用されていた。6号溝付近の発掘区は幅7mと狭く、線路に近いので完掘できたのは1mのみであった。堀は上端幅10.2m、下端幅1.6m、深さ3.2mの葉研堀である。東壁には、幅1m程のテラス状の平坦部がある。堀の北東部は7号溝に続くが、この部分は危険防止のため1.5mの深さで発掘を中心した。このため両者の形状や深さの違い、ひいては掘削時期の違いについても不明である。

本溝も前述の5号溝同様、土塁を崩したと考えられる人為堆積土が本丸側から堆積している。この人為堆積土直上には6号土壙が築かれ、底に浅間A軽石の降下堆積層が水平に認められた。したがって、本溝は天明3年(1783)以前に土塁を崩し、埋め立てていると考えられる。なお、上層断面に人為堆積後、天明3年以前の落ち込みが確認されているが、時期や性格は不明。また、石組は天明3年以後である。

遺 物 (第28図, 図版26・27)

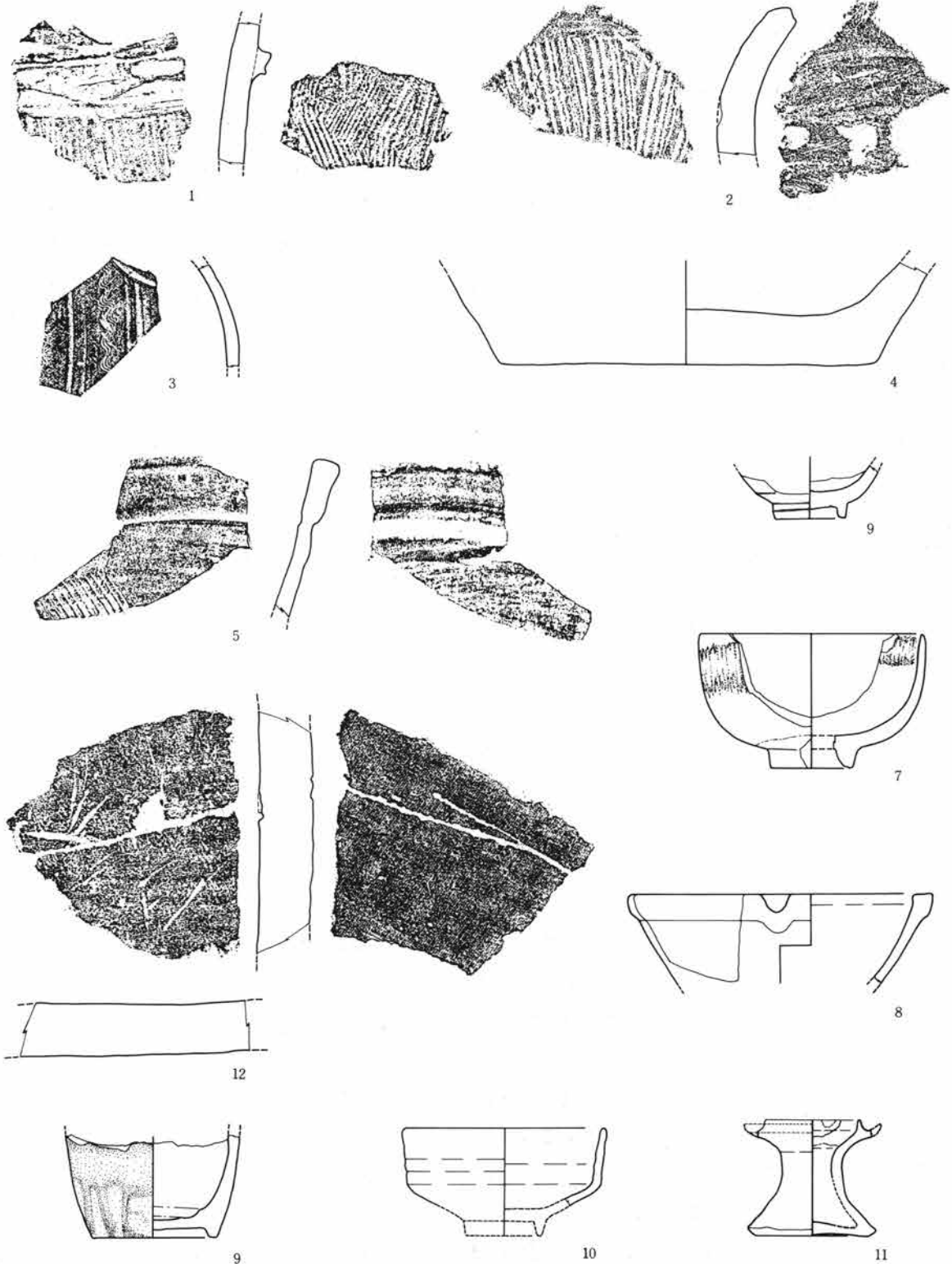
1. 円筒埴輪。タガの部分で、内外面にタテハケが認められる。ハケは2cm間に7本である。胎土は礫・粗砂を含み、緻密である。色調は橙色。焼成は良好。
2. 円筒埴輪。口縁部の破片である。外面は2cm間に6本のタテハケを施す。内面はナデ調整。胎土は礫・粗砂を多く含む。焼成は甘く、にぶい橙色を呈する。割れ口は磨滅する。
3. 須恵器、提瓶。肩部の破片。にぶい凹線間に縦位の波状文を施す。胎土は粗砂を多く含む。色調は器表が灰黄色、断面がにぶい橙色を呈する。俵形線も同じ文様を有するが、胎土から提瓶と判断した。
4. 壺。弥生時代後期の大形壺底部と考えられる。胎土は礫・粗砂を含む。色調はにぶい黄橙色。割れ口の磨滅が著しい。
5. 瀬戸・美濃系、播鉢。口縁部下5.4cmまで櫛目を施す。基本単位は $12+\alpha$ 本である。胎土は淡黄色で、ざっくりしている。暗赤褐色の錆釉を薄く施す。陶器。18世紀?。
6. 伊万里系、碗。高台径3.4cmのやや小型の碗。釉はやや白濁しており、呉須の発色はにぶい。磁器。18世紀。
7. 瀬戸・美濃系、碗。高台から口縁に至る小破片である。透明感のあるオリーブ色の鉄釉を腰部から高台脇にかけて施釉する。胎土は灰白色で、粗砂を含む。口縁内外面には淡黄色の带状斑がある。尾呂茶碗と呼ばれるものである。釉には貫入が入る。陶器。18世紀後半。
8. 瀬戸・美濃系、片口鉢。片口部を欠く。胎土は灰白色。オリーブ黄色の灰釉を薄く施す。陶器。19世紀(幕末)。
9. 瀬戸・美濃系、徳利。高台は内削りで径6cmを測る。胎土は灰白色で、気孔が目立つ。灰釉は外面に厚く、内面に薄く施す。陶器。19世紀(幕末)。
10. 小鉢。腰部は強く張り、口縁は弱く外反する。胎土は灰白色で、緻密。やわらかみのある明緑灰色の灰釉を施す。細かい貫入が入る。半磁器製。18世紀後半～19世紀前半。瀬戸・美濃系?。
11. ひょうそく。胎土は白味を帯びた灰白色で、緻密である。口縁内面から脚の面取り部分まで灰釉を施す。粗い貫入が入る。半磁器製。18～19世紀。産地不明。
12. 塼状土製品。厚さ2.6cm、切り込みに直交する部分で2.8mmの反りがある。切り込みは焼成後で、割るためにつけられたと考えられる。胎土は粗砂を含み、にぶい橙色を呈する。胎土から中世と考えられる。

II 検出された遺構と遺物



1. 耕作土層。
2. 黄茶褐色土層。ローム層主体で、暗褐色土、淡褐色土を微量含む。
3. 淡褐色砂質土層。浅間A軽石を多量に含む。上層は軽石細かく、下層は大きい。
4. 浅間A軽石層。
5. 淡褐色土層。砂を少量含む。しまりがあり、硬い。土壌底部に続く層である。
6. 暗灰褐色土層。砂質でローム粒、A軽石層含む。
7. 淡褐色土層。ローム層、暗褐色土層含む。川原石多く含む。
8. 暗黄褐色土層。ローム層と暗褐色土の混土。
9. 黒褐色土層。ローム粒少量含む。角安微量含む。
10. 暗黄褐色土層。ローム層と暗褐色土の混土。8層に比して均質。
11. 黒褐色土層。ロームブロック含む。下層はやや砂質。
12. 灰褐色砂質土層。黒褐色土、ローム層少量含む。川原石含む。
13. 暗褐色土層。ローム粒少量含む。
14. 暗褐色土層。13層に比してローム粒少なく、黒味を帯びる。
15. 灰褐色砂層。

第27図 6号溝実測図



第28図 6号溝出土遺物実測図

II 検出された遺構と遺物

7 号 溝

遺 構 (第29・30図, 図版11)

6号溝から、東二の丸部分を横断するように62mにわたって検出された。東は更に発掘区外に延びており、さかの川に至ると考えられる。さかの川と本溝の推定線が交差する部分は、既に護岸工事が施されているため、確認はできない。しかし、推定線上の畑の地主から「ここは掘っても赤土が出てこない」という話を聞いており、さかの川に続くものと考えてさしつかえない。発掘区東半は、幅が3～7mと狭い。このため、本溝は1.5m以上の発掘は中止した。溝の上端幅は5m前後であり、下端幅・深さ・形状は不明である。本溝は位置的に考えて、並榎城跡に伴う堀の可能性はある。城の堀と考えた場合、道路下の未発掘部分に土橋の存在が想定されるため、深さ70cmのトレンチを設定し、更に1mのボーリングステッキで探査したが確認されなかった。

埋没状況については、深さ1.2m～1.5mで発掘を中止したため不明である。しかし調査時に1部掘り下げた部分の所見では、深さ2m前後から地山主体の土層が観察された。この土層は、土塁を崩した土であるかも知れない。調査面より浅い部分では、表土下に炭化物を多量に含む層が、30～60cmの厚さで認められ、近世の陶磁器が出土している。土層断面を実測した地点では、地表下40～70cmの深さで浅間A軽石の降下堆積層が認められた。この軽石層は3.5m程で途切れてしまい、出土陶磁器との層位関係は不明である。なお、陶磁器は溝東半からの出土が多かった。

遺 物 (第31～35図, 図版27～31)

1. 朝顔形埴輪。肩部の破片と考えられる。外面は右下がりの斜めハケを施す。屈曲部内面には指頭圧痕が残る。胎土は礫・粗砂を多量に含む。色調は明赤褐色を呈する。

2. 形象埴輪。外面は粗いハケを施す。外面には、断面台形の突帯を貼り付ける。内面にも外面同様粗いハケを施している。胎土は礫・粗砂を多量に含む。

3. 器材埴輪。小破片であるため、器材名は不明。胎土は礫・粗砂を多量に含むが緻密である。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。器表はハケ調整を施す。

4. 器材埴輪。小破片であるため、器材名は不明。胎土は礫・粗砂を多量に含むが緻密である。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。割れ口には、接合痕が認められる。

5. 円筒埴輪。タガ部分の破片。胎土は礫・粗砂を含む。還元気味に焼成されているため、にぶい黄褐色を呈している。

6. 円筒埴輪。タガ部分の破片。胎土は粗砂を多量に含み、緻密で粘りがある。色調は灰色で、焼成も良好である。比重は重く、持ち重りのする埴輪である。

7. 円筒埴輪。基部の破片で推定復原径は14.2cmを測る。内外面共に、調整はナデ。胎土は粗砂を少量含む。色調はにぶい赤褐色。焼成は良好。

8. 伊万里系、皿。見込み周縁には、輪花が認められる。高台は内傾気味で、砂が溶着している。釉は乳濁した細貫入の入るものを施釉している。呉須はその色調から、山呉須ではなく景德鎮のものと考えられる。胎土は白色。磁器。17世紀。初期伊万里と考えられる。

9. 瀬戸・美濃系、黄瀬戸菊皿。菊花は丸ノミを使用せず、型押しで表している。胎土は淡黄色で、ざっくりしている。釉には細かい貫入が入る。17世紀前半。

10. 瀬戸・美濃系、鉢。口縁は短く、外反する。内面は小さい段を有している。胎土は黄色味を帯びた灰

白色で、ざっくりしている。鉄絵（草文？）を描いた後に、長石釉を施している。器面には粗い貫入が入る。陶器。笠原鉢と呼ばれるもので、織部釉も施されていたかも知れない。17世紀後半。

11. 瀬戸・美濃系、御深井釉摺絵皿。型押しによる変形皿である。高台はロクロを使用して貼り付ける。胎土は、黄色味を帯びた灰白色である。見込みには、鉄絵具による摺絵が施される。クリーム色がかった灰白色の御深井釉を高台脇まで施釉する。器面には細かい貫入が入る。陶器。17世紀後半。

12. 瀬戸・美濃系、双耳壺。口縁は短く、端部は肥厚している。肩部には6本1単位の櫛目がめぐらされる。この櫛目上に耳が貼り付けられる。体部下位はヘラ削り痕が認められる。胎土は灰白色。口縁内面まで、オリーブ色の褐釉を施す。口縁端部の釉は拭き取っている。陶器。18世紀。

13. 瀬戸・美濃系、碗。腰部は丸味を有し、口縁はまっすぐに立ち上がる。胎土は灰白色。黄褐色の鉄釉を施釉するが、内外面共に口縁以下の釉は薄い。このため、器面には白い小斑が多数現われている。尾呂茶碗と呼ばれるものである。陶器。18世紀後半。

14. 瀬戸・美濃系、碗。口縁がゆるく外反する尾呂茶碗である。胎土は淡黄色で、ざっくりしている。鉄釉を施釉するが、釉が薄いために光沢のない暗褐色を呈している。口縁内外面のみは、帯状に褐色に発色している。陶器。18世紀後半。

15. 瀬戸・美濃系、碗。口縁が欠失する尾呂茶碗である。胎土は淡黄色で、ざっくりしている。黄褐色の鉄釉を、高台脇まで施す。外面は釉が薄く、白い小斑が多数認められる。陶器。18世紀後半。

16. 瀬戸・美濃系、碗。尾呂茶碗の底部である。胎土は灰白色。鉄釉がやや厚くかかっているため、オリーブ褐色を呈している。見込みは更に厚く、暗褐色を呈している。陶器。18世紀後半。

17. 唐津系、碗。体部に比して、高台径は小さく高い。胎土は灰白色で、やや緻密である。透明感のある、にぶい黄色を呈した灰釉を、高台内まで施釉する。陶器。18世紀。

18. 唐津系、碗。17と同様な碗であるが、やや腰の張りが強く、高台も低い。胎土は灰色味のある灰白色で、緻密である。透明感のある黄褐色を呈した灰釉を高台内まで施釉する。器面には粗い貫入が入る。陶器。18世紀。

19. 唐津系、碗。17・18と同様な碗である。同種の碗の中で、高台は最も高い。胎土は灰白色で、緻密である。透明感のあるにぶい黄色の灰釉を高台内まで施釉する。器面には貫入が入る。陶器。18世紀。

20. 唐津系、碗。腰部内面はゆるく内湾している。高台は比較的低く、「ハ」の字状に開く。胎土は黄色味を帯びた灰白色で、緻密である。器面には貫入が入る。陶器。18世紀。

21. 瀬戸・美濃系、碗。腰は低く、外方に張り出す。体部は丸味を持って立ち上がる。胎土はクリーム色を帯びた灰白色である。釉は貫入の入った浅黄色の灰釉を施す。腰部外面に1ヶ所、呉須絵が認められる。陶器。18世紀後半。

22. 伊万里系、碗。径の小さい高台から、丸味を持って開き、口縁に至る。底部の器肉は厚い。胎土は灰白色。釉は気泡が目立ち、透明感のない明緑灰色をしている。呉須の発色は悪く、青灰色に近い。磁器。18世紀。

23. 伊万里系、碗。高台は薄く、低い。底部の器肉は厚い。胎土は灰白色。釉は明緑灰色を呈するが、気泡が目立たないため、22に比して透明感がある。「川」の裏銘が染付される。磁器。18世紀。

24. 伊万里系、碗。22と同様、くらわんか茶碗である。釉は気泡が目立ち、明オリーブ灰色を呈している。呉須の発色は非常に悪く、灰オリーブ色をしている。磁器。18世紀。

25. 伊万里系、碗。胎土は白色。透明感のある明緑灰色の釉をかける。呉須の発色はややにぶい。外面に

Ⅱ 検出された遺構と遺物

二重網目文を施す。磁器。18世紀。

26. 伊万里系、碗。低い高台と、張りのある腰部を有する丸碗。胎土は白色。釉は透明な明緑灰色を呈する。外面には呉須による笹絵を、見込みには五弁花を描く。呉須の発色は良い。磁器。18世紀。

27. 伊万里系、碗。腰部に稜を有し、体部は外湾気味に立ち上がる。胎土は白色。釉は透明な明緑灰色を呈するが、気泡が目立つ。外面には呉須による雑な竹絵、見込みには五弁花を描く。磁器。18世紀。

28. 伊万里系、碗。腰部に稜を有し、体部は外湾気味に立ち上がる。胎土は白色。釉は透明な明緑灰色を呈する。外面には、呉須による竹絵が丁寧描かれる。磁器。18世紀。

29. 伊万里系、碗。22・24と同様な器形を有する。胎土は灰白色。釉の気泡は、やや目立つ。色調は透明感の弱い明緑灰色を呈する。呉須の発色は青灰色に近い。裏銘の1部が残存しているが、判読はできない。磁器。18世紀。

30. 伊万里系、碗。胎土は灰白色であるが、高台はにぶい赤褐色を呈する。貫入の入った。明オリーブ灰色の釉を施す。呉須の発色はやや薄い、良好である。陶器。18世紀。

31. 伊万里系、碗。30と同器形と思われる。器肉は30に対してやや薄い。胎土は灰色。貫入の入ったオリーブ灰色の釉を施す。呉須の発色は良い。陶器。18世紀。

32. 伊万里系、碗。高台は雑で、変形している。明青灰色の釉を厚く施釉する。高台脇の釉は大粒の気泡が目立ち、染付がほとんど見えない。呉須は青灰色に近く発色する。陶器。18世紀。

33. 瀬戸・美濃系、皿。非常に雑な造りで、歪みが著しい。付け高台の貼り付け痕も明瞭に残る。胎土も粗く、2～4mmの礫を含むため、器面の凹凸が多い。胎土の色調は灰色。浅黄色の灰釉を、高台脇まで施す。陶器。17～18世紀。

34. 瀬戸・美濃系？、皿。高台脇の削りはシャープで、稜を有する。胎土は灰白色で、やや緻密である。浅黄色の灰釉を高台内まで施す。高台内の釉にはムラがある。見込みに2ヶ所、高台内に1ヶ所目跡が残る。陶器。18世紀前半。

35. 伊万里系、皿。底部から口縁にかけて、器厚は均一である。胎土は白色。透明感のない明緑灰色の釉を施す。裏面の唐草文は丁寧に描く。見込みには五弁花を描く。磁器。18世紀。

36. 伊万里系、碗蓋。天井部から口縁にかけて、器厚は薄く、均一である。胎土は白色。透明感のある明緑灰色の釉を薄く施釉する。磁器。18世紀。

37. 伊万里系、碗。口縁は外湾気味に直立する。胎土は白色。釉を薄く施しているため、器表は黄色味を帯びた灰白色を呈している。外面には、呉須で菊花を描く。呉須の発色は非常に悪く、灰色に近い。磁器。18世紀後半。

38. 伊万里系、仏飯器。胎土は白色。釉は透明感のある明緑灰色を呈する。脚部畳付以外は全面に施釉する。やや退化した蛸唐草文を染付する。磁器。18～19世紀。

39. 伊万里系、小杯。腰部の器肉は、体部に比して薄い。口縁は小さく外反する。胎土は灰色。気泡が目立つ。明緑灰色の釉を施す。釉に透明感はない。体部の染付はコンニャク版による。磁器。18世紀。

40. 伊万里系、小杯。39と同様、腰部の器肉は体部に比して薄い。口縁端部は小さく外反する。胎土は白色。明緑灰色の釉を施す。磁器。18世紀後半～19世紀前半。

41. 瀬戸・美濃系、碗。腰から丸味を帯びて立ち上がる。胎土は灰色。緑灰色の透明釉を、高台脇まで施す。体部の $\frac{3}{4}$ を欠失する。体部外面に、鉄絵などが描かれていた可能性がある。陶器。19世紀（幕末）。

42. 瀬戸・美濃系、片口鉢。底部のみ完存する。胎土は灰色。灰オリーブ色の灰釉を高台脇まで施す。見

込みには目跡が3つ認められる。陶器。19世紀（幕末）。

43. 瀬戸・美濃系、徳利。高台は内削りで、径は6.4cmを測る。高台内中央には糸切り痕が残る。胎土は灰白色。外面は高台内まで、薄く灰釉を施す。高田徳利又は貧乏徳利と呼ばれるものであろう。陶器。19世紀（幕末）。

44. 瀬戸・美濃系、燈明皿受皿。胎土は灰白色。内面と口縁外面に、赤褐色の錆釉を施す。体部外面以下は錆釉を薄く刷毛掛けする。半磁器製。19世紀。

45. 瀬戸・美濃系、播鉢。中型の播鉢で、口縁端部は肥厚する。外底は回転糸切り無調整である。胎土は淡黄色。にぶい赤褐色の錆釉を、全面に施す。櫛目の基本単位は15本。見込みには、同心円状の櫛目を施す。陶器。18世紀？。

46. 瀬戸・美濃系、播鉢。器内が厚く、大型の製品と考えられる。胎土は淡黄色で、ざっくりしている。にぶい赤褐色の錆釉を施す。櫛の基本単位は $11 + \alpha$ 本。18～19世紀。

47. 播鉢。腰部の小破片で、内面全面に櫛目を入れる。基本単位は不明。胎土は礫・粗砂を含み、緻密である。色調は灰色。器表は胎土中の鉄分のため、にぶい赤褐色をしている。板底。陶器。産地不明。18～19世紀。

48. 播鉢。腰部の小破片で、内面全面に櫛目を入れる。基本単位は不明。胎土は緻密である。色調は灰色。胎土中の鉄分により、器表の1部はにぶい赤褐色を呈している。陶器。産地は不明であるが、47と同一と考えられる。18～19世紀。

49. 瀬戸・美濃系？、播鉢。胎土は灰色で、やや緻密である。櫛目の基本単位は $13 + \alpha$ 本。暗褐色の錆釉を施す。口縁内面に「㊦」の押印がある。陶器。19世紀。

50. 内耳土器。焙烙状の浅いものである。耳部分の小破片で、耳の数は不明。胎土は粗砂を含み、淡黄色である。体部外面には煤が付着する。体部内面には段差を持たず、耳の下端は内底に貼り付けられている。江戸時代？。

51. 内耳土器。耳部分の小破片で、50と同器形である。胎土は淡黄色で、外面には煤が付着する。江戸時代？。

52. 内耳土器。耳部分の小破片で、50・51と同器形である。色調は断面黒色、器表は灰白色を呈する。外面には煤が付着する。江戸時代？。

53. 平瓦。胎土は粗砂を含み、灰白色。器表はにぶい黄橙色を呈する。櫛目叩きの方向は、通常とは異なる。

54. 平瓦。胎土は粗砂を少量含む。色調はにぶい黄色を呈する。割れ口は少し磨滅する。

55. 軒丸瓦。瓦当面を欠くが、端部に接合痕が残る。胎土は灰白色で緻密。器表は灰色を呈する。穿孔は焼成後である。胎土から中世の瓦と考えられる。

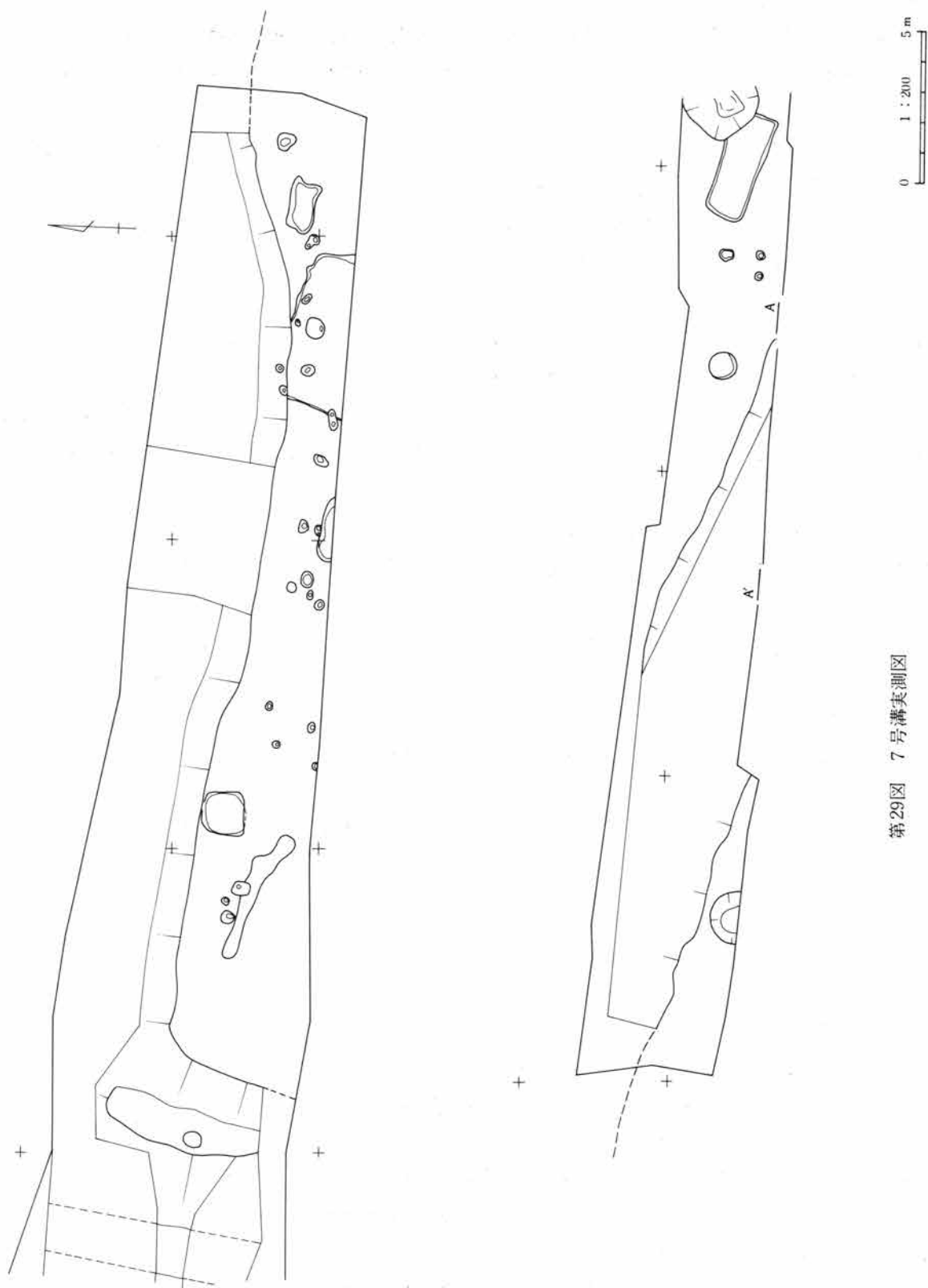
56. 砥石。約半分は欠失する。1面のみ使用している。中央は凹む。流紋岩製。

57. 砥石。両端は欠失する。2面は使用している。他の2面は未使用で、成形時のものと思われる粗い条線が多数認められる。流紋岩製。

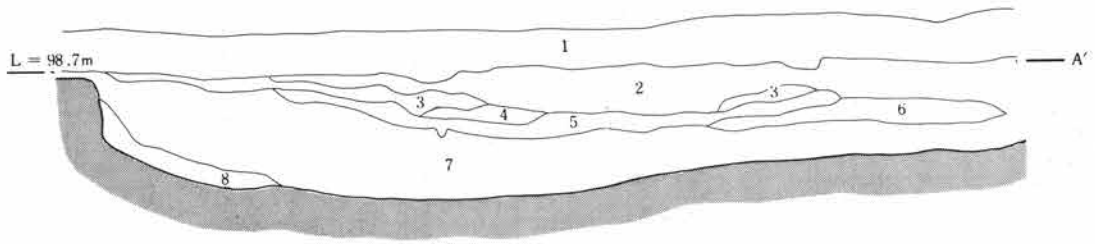
58. 石臼。上臼のすり合わせ部分の破片である。凹みや上縁を欠く。目の遺存は良く、深さ1.8～2.3mmを測る。すり合わせ部は磨滅し、光沢を放つ。輝石安山岩製。

59. 永楽通宝。初鑄年代は、1408年

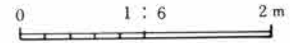
II 検出された遺構と遺物



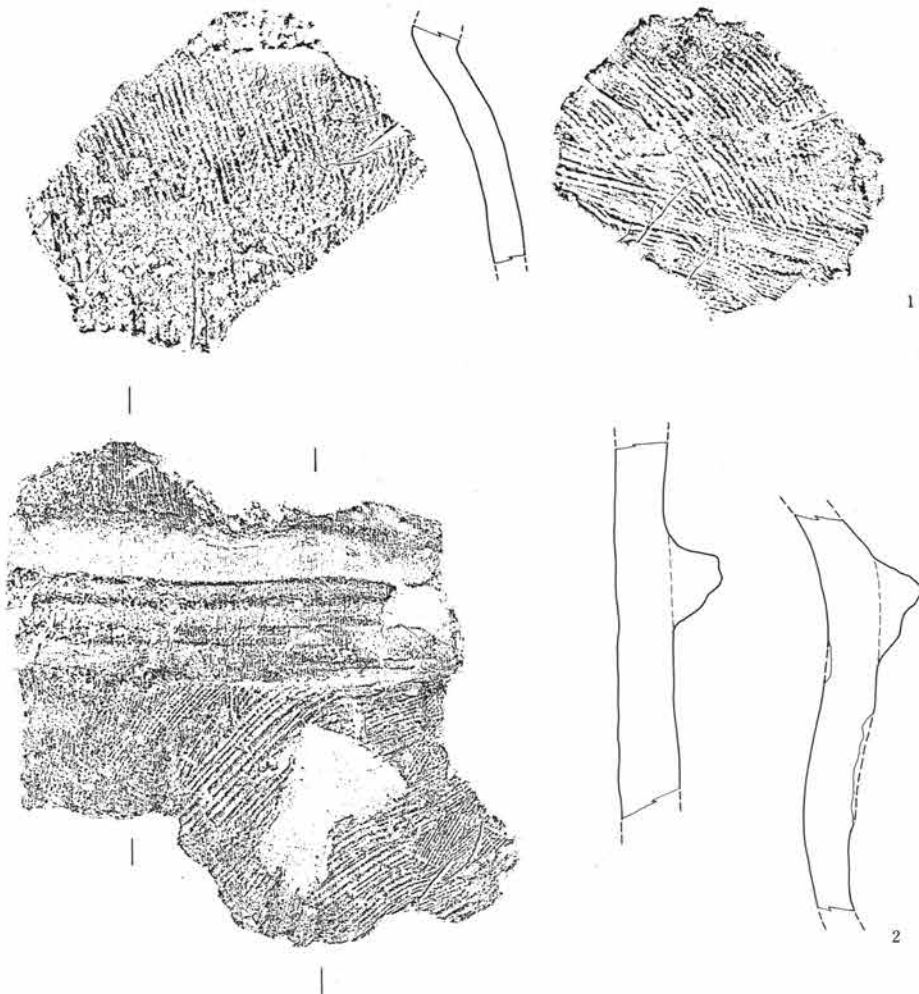
第29図 7号溝実測図



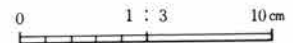
1. 耕作土層。
2. 黒色土層。黒色灰、炭化物主体で、1層含む。焼土小ブロック少量含む。
3. 茶褐色土層。炭化物、焼土粒微量含む。
4. 3層と黒色灰、炭化物の混土層。
5. 降下浅間A軽石。
6. 黒色土層。黒色灰、炭化物層。
7. 茶褐色土層。川原石を含む。
8. 7層とローム層の混土層。



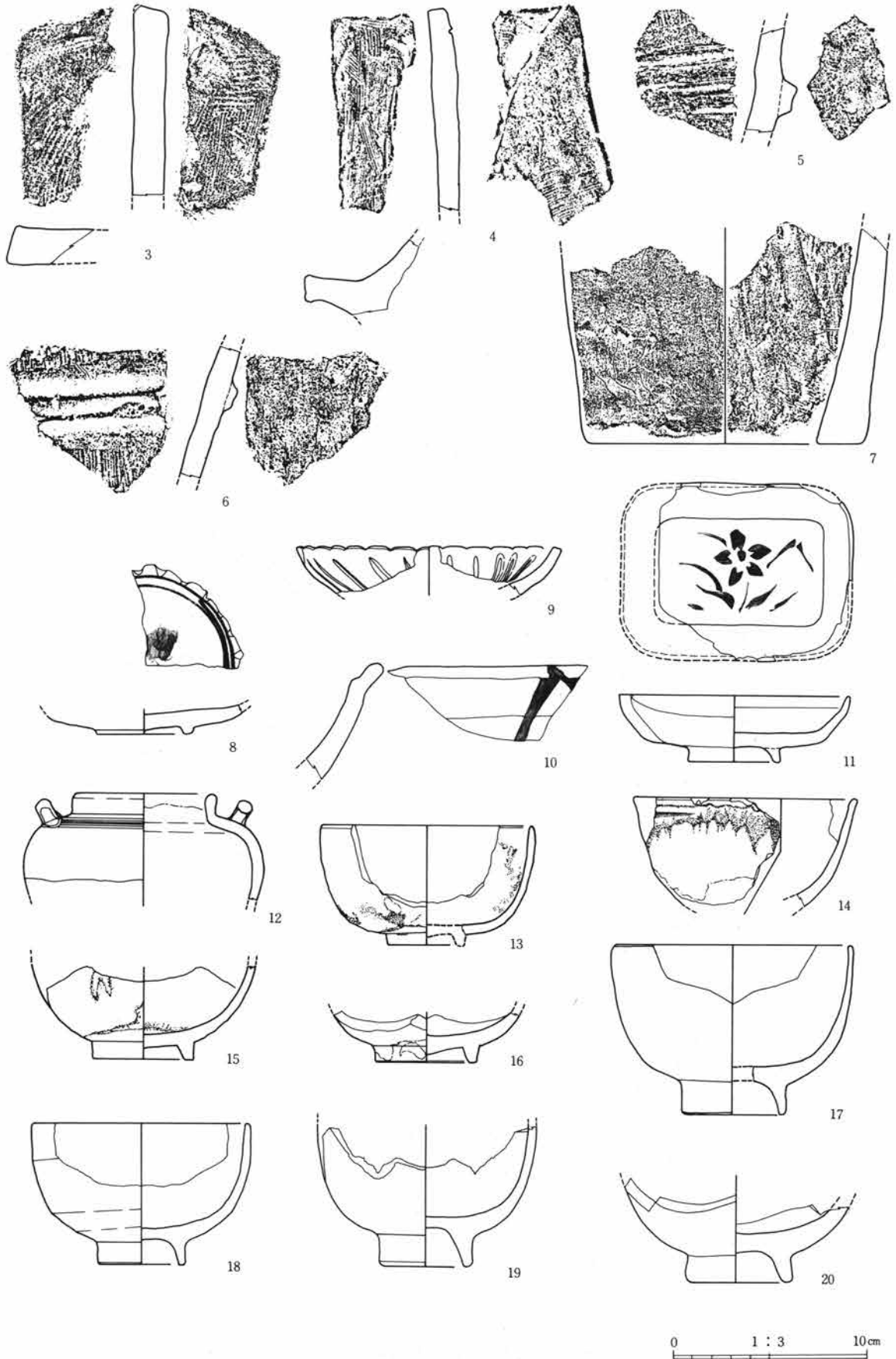
第30図 7号溝セクション実測図



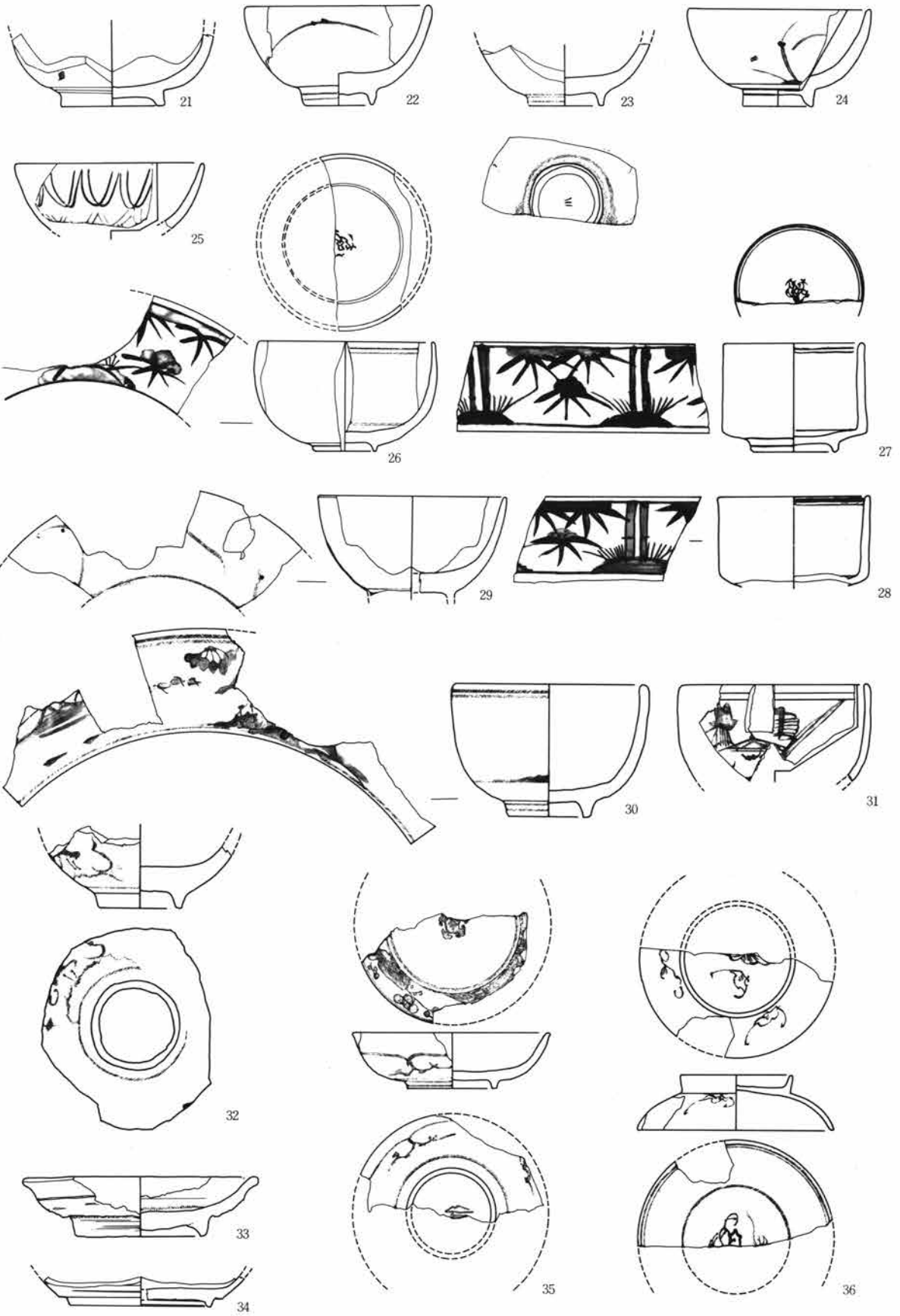
第31図 7号溝出土遺物実測図(1)



II 検出された遺構と遺物



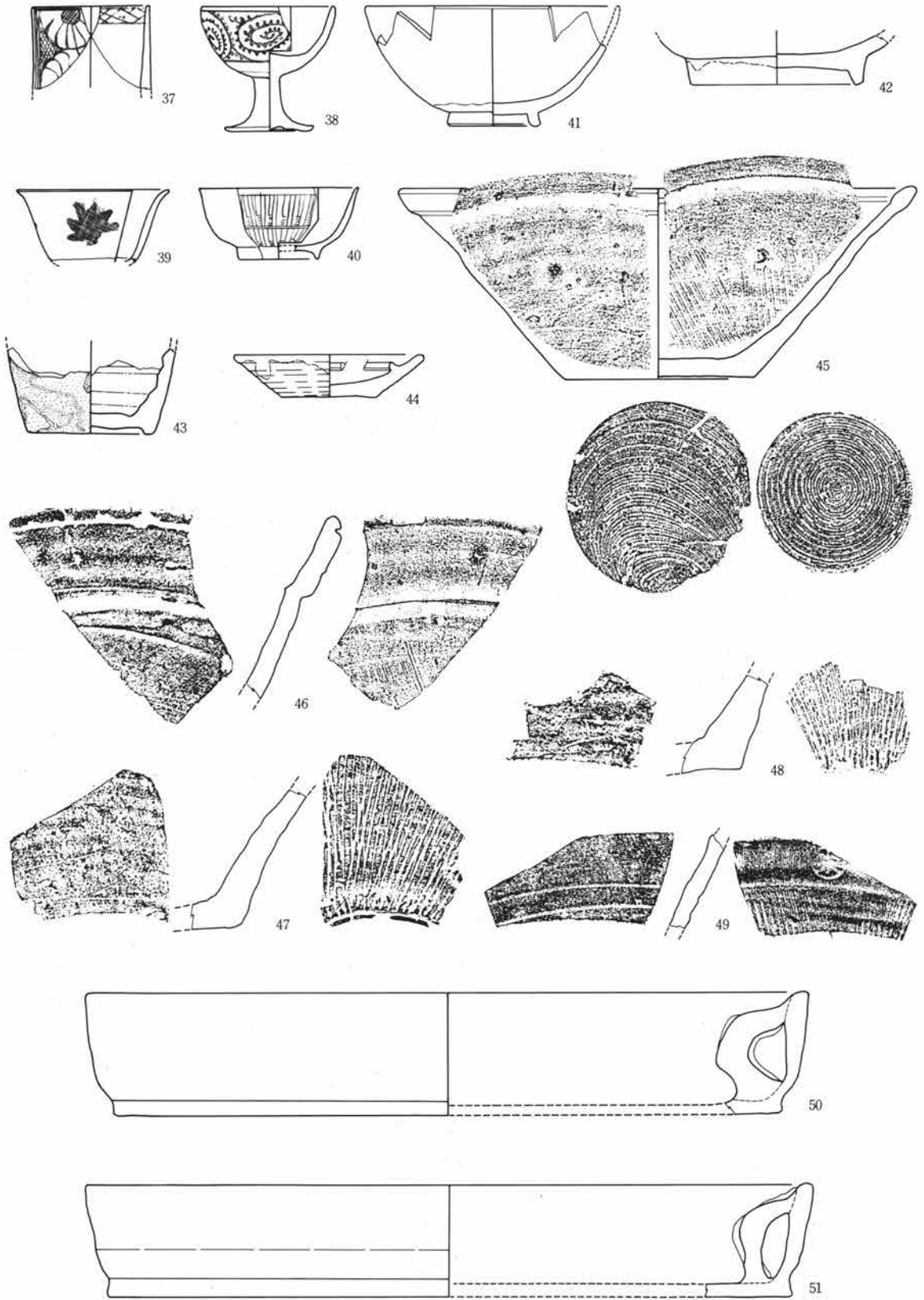
第32図 7号溝出土遺物実測図(2)



第33图 7号溝出土遺物実測図(3)

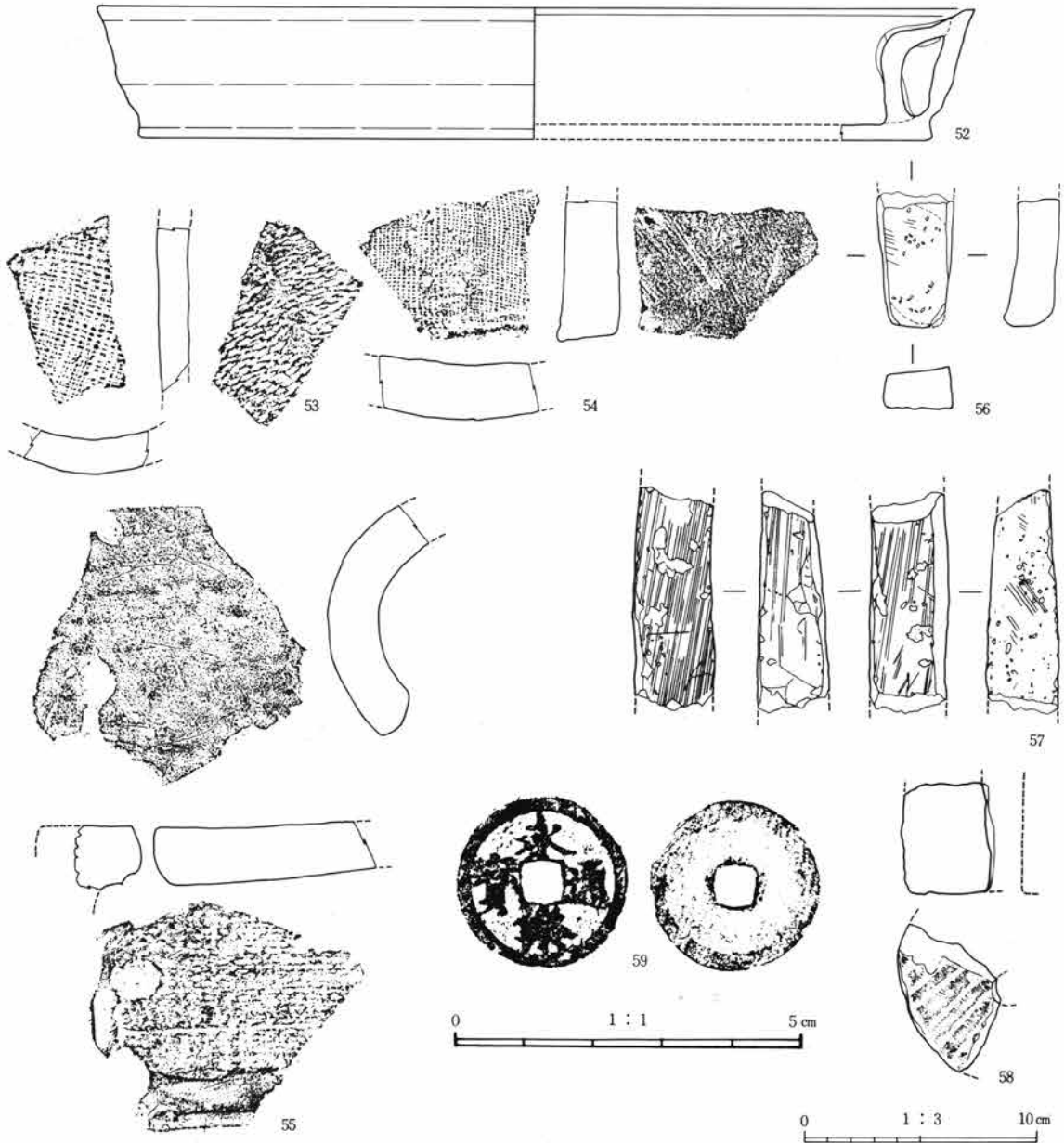
0 1:3 10cm

II 検出された遺構と遺物



第34図 7号溝出土遺物実測図(4)

0 1 : 3 10cm



第35図 7号溝出土遺物実測図(5)

8号溝

遺構 (第36図, 図版11)

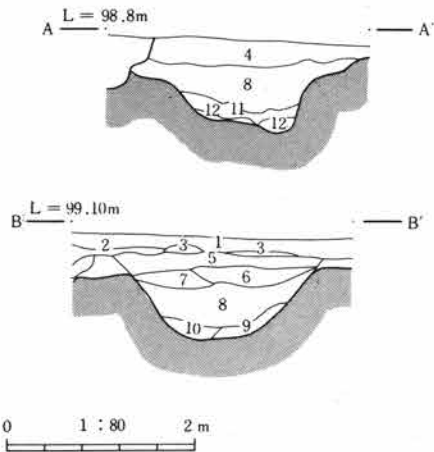
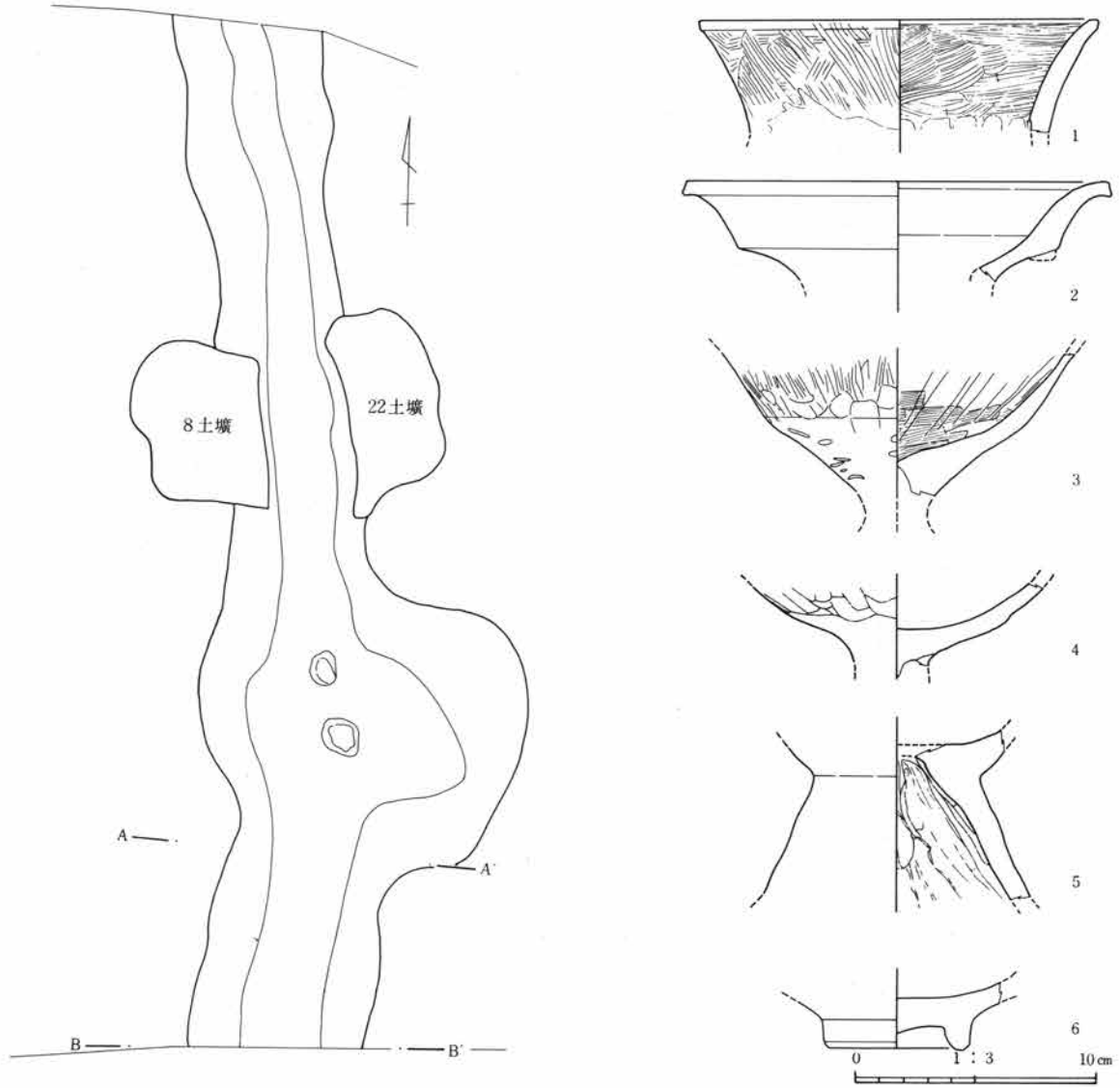
6号構の6.4m～8m西に位置する。発掘区を南北に縦断するように、長さ11.2mに渡って検出された。南北は更に、発掘区外に延びる。6・8・16・22号土壇と重複し、重複関係は全て本溝が古い。規模は、上端1.3～1.96m、下端40m～84cm深さ72～76cmを測る。溝の中央南寄りの部分は、礫を混じえた黑色土の堆積が認められ、土壇が重複していたようである。この部分からは、元～明代の青磁(6)が1点出土している。

遺物 (第36図, 図版31)

1. 壺。口縁内外面はハケ調整。端部は面取りする。胎土は細砂を含む。
2. 壺。口縁部細片。端部は面取りする。外面には凸帯の接合痕が残る。内外面は丁寧なヘラミガキ。

II 検出された遺構と遺物

3. 高杯。杯部内外面はハケ成形後、粗いナデ調整。胎土は夾雑物をほとんど含まず、緻密である。
4. 高杯。外面はヘラ削り成形後、粗いヘラミガキ。内面ヘラミガキ調整。底部には脚部との接合痕が残る。
5. 台付甕。器壁は厚く、内面には絞り目と、粗いユビナデ痕が残る。
6. 青磁碗。釉はくすんだ緑色で、高台内を輪状に削る。見込みには花文のスタンプと圏界が認められる。



1. 耕作土層。
2. 淡褐色土層。ローム層含む。普通輝石安山岩質軽石含む。
3. 黄褐色土層。ローム層主体で、暗褐色土を微量含む。
4. 黄褐色ローム層。黒褐色土小ブロック少量含む。
5. 黒褐色土層。ローム粒含まない。
6. 黒褐色土層。ローム粒少量含む。
7. 黒褐色土層。ローム粒含む。
8. 黒褐色土層。ローム粒多く含む。普通輝石安山岩質軽石含む。
9. 暗黄褐色土層。黒褐色土とロームの混土層。
10. 暗褐色土層。黒褐色土中にローム小ブロック含む。
11. 黒褐色土層。8層に比してローム粒多く含む。
12. 灰褐色砂質土層。ローム層と灰白色砂質土の混土層。

第36図 8号溝・出土遺物実測図

11号溝

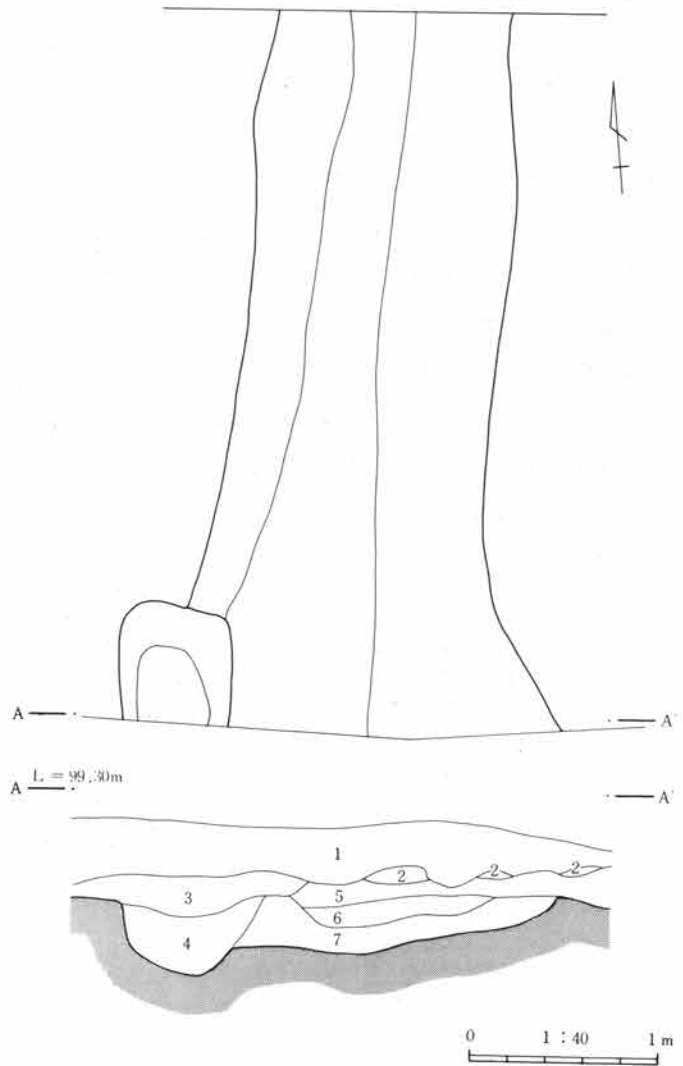
遺構 (第37図、図版11)

発掘区東端付近で、長さ3.8mにわたって検出された。南北は発掘区外に延びる。上端幅1.4～1.6m、下端幅28～80cm、深さ40cmを測る。走行方向は、ほぼ南北である。6号井戸とは18cmと近接している。

埋土最下部の土は、2・5・6・7号溝とは異なり、住居の土に近い。このため、本溝は中世以前の所産であると考えられる。

遺物

小破片すら出土せず、遺物から時期を推定することは不可能である。



1. 耕作土層。
2. 浅間A軽石層。
3. 暗褐色土層。ローム粒含む普通輝石安山岩質の軽石含む。
4. 淡褐色土層。ローム小ブロック含む。暗褐色土少量含む。普通輝石安山岩質の軽石含む。
5. 淡褐色土層。ローム小ブロック少量含む。
6. 淡褐色土層。4・5層に比して黄色味が強い。ローム粒多量に含む。
7. 暗褐色土層。ローム粒少量含む。

1号井戸

第37図 11号溝実測図

遺物 第38図、図版12)

発掘区西端の崖付近で検出された井戸である。掘り方は円筒形で、上端径1.6～1.8m、下端径80～90cmを測る。深さは10.3mで、本遺跡中最も深い。井戸と現河床面との比高は約6m、崖下端との比高は約5mである。上端下2.7m付近に、浅間A軽石を多量に含む砂質土層が確認されている。

図示した遺物は、全て上記の土層から出土している。これらの底からのレベルは、板碑が4.3m、石臼が2.5m、漆器椀が80cmである。

II 検出された遺構と遺物

遺物 (第38図、図版31)

1. 瀬戸・美濃系、碗。胎土は灰白色で、やや緻密である。貫入のある淡黄色の灰釉を、高台内まで施す。畳付の釉は拭き取る。胎土は瀬戸・美濃系にしてはやや緻密な感があるが、ここでは瀬戸・美濃製とした。陶器。18世紀。

2. 漆器、椀、口縁と畳付を欠く。黒漆の中塗上に、朱漆で上塗を施す。一般に根来塗と称される漆器である。底裏には、黒漆で「渡」の文字が書かれている。

3. 板碑。小型の板碑で、下部と右半を欠いている。黒色片岩製。

4. 石臼。下臼の完形品で、直径30.5cm、高さ8~9cmを測る。片べりが認められる。ふくみは2.5cm。すり合わせ部は磨滅が認められるものの、器面の凹凸は遺存が良く目なし臼と考えられる。輝石安山岩製。



第38図 1号井戸・遺物実測図

2号井戸

遺構 (第39図、図版12)

本丸中央で検出された断面朝顔型の井戸である。上端径2.4～2.6m、下端径60cm、深さ4.4mを測る。底には50～60cmの厚さで、浅間A軽石を多量に含む埋土が認められた。

遺物 (第40図・41図、図版32)

1. 伊万里系、大鉢。胎土は灰白色である。器面は粗い貫入が入り、明緑灰色の釉を施す。畳付は欠失する。染付陶器。18世紀。

2. 京焼系、皿。高台は低く、畳付の幅は広い。胎土は淡黄色の釉を高台脇まで施す。器面には細かい貫入が入る。見込みには目跡が3ヶ所認められる。陶器。18世紀。

3. 瀬戸・美濃系、碗。胎土は淡黄色。錆色をした柿釉を腰部まで施す。体部に1ヶ所鉄釉の斑が認められる。陶器。18世紀後半。

4. 伊万里系、碗。裏銘の1部が認められる。染付磁器。18世紀。

5. 瀬戸・美濃系、碗。内面に銅緑釉、外面に薄い鉄釉を掛け分ける。高台脇まで、回転施文具を使用した連続刺突文を施す。鎧茶碗。陶器。18世紀後半。

6. 瀬戸・美濃系、碗。内面と口縁に鉄釉、体部以下に灰釉を掛け分ける。陶器。鎧茶碗。19世紀。

7. 6と同様な鎧茶碗。但し連続刺突文は上下が逆である。陶器。19世紀。

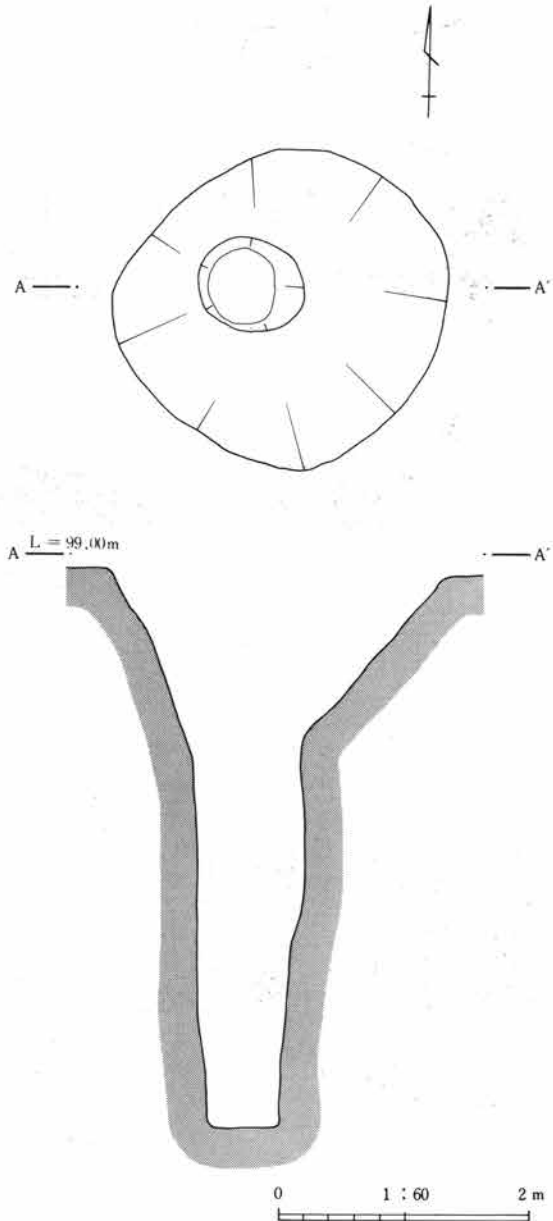
8. 瀬戸・美濃系・碗。腰部に稜を有し、体部、口縁は直線的に開く。体部に鉄砂による柳絵を描く。胎土は灰白色。陶器。柳茶碗。19世紀。

9. 瀬戸・美濃系、碗。高台脇から丸味を持って立ち上がる。胎土は灰白色。透明釉を高台脇まで施す。鉄砂による笹絵が描かれる。陶器。19世紀。

10. 丸瓦。胎土は灰色で、粗砂を含む。表に「㊦」の押印が押されている。

11. 埴状土製品。胎土は灰色で、粗砂を含む。側縁に沿って、深さ2mmの条線が焼成後に切り込まれる。これに沿った割れ口は、刃物による削り痕がある。

12. 石臼。高さ8cmの上臼破片である。目はほとんど磨滅している。目とは異った、長さ1cm程のハツリ痕が弧状に3列認められる。このハツリ痕は明瞭に残っており、目の磨滅後に刻まれたと考えられる。輝石安山岩製。



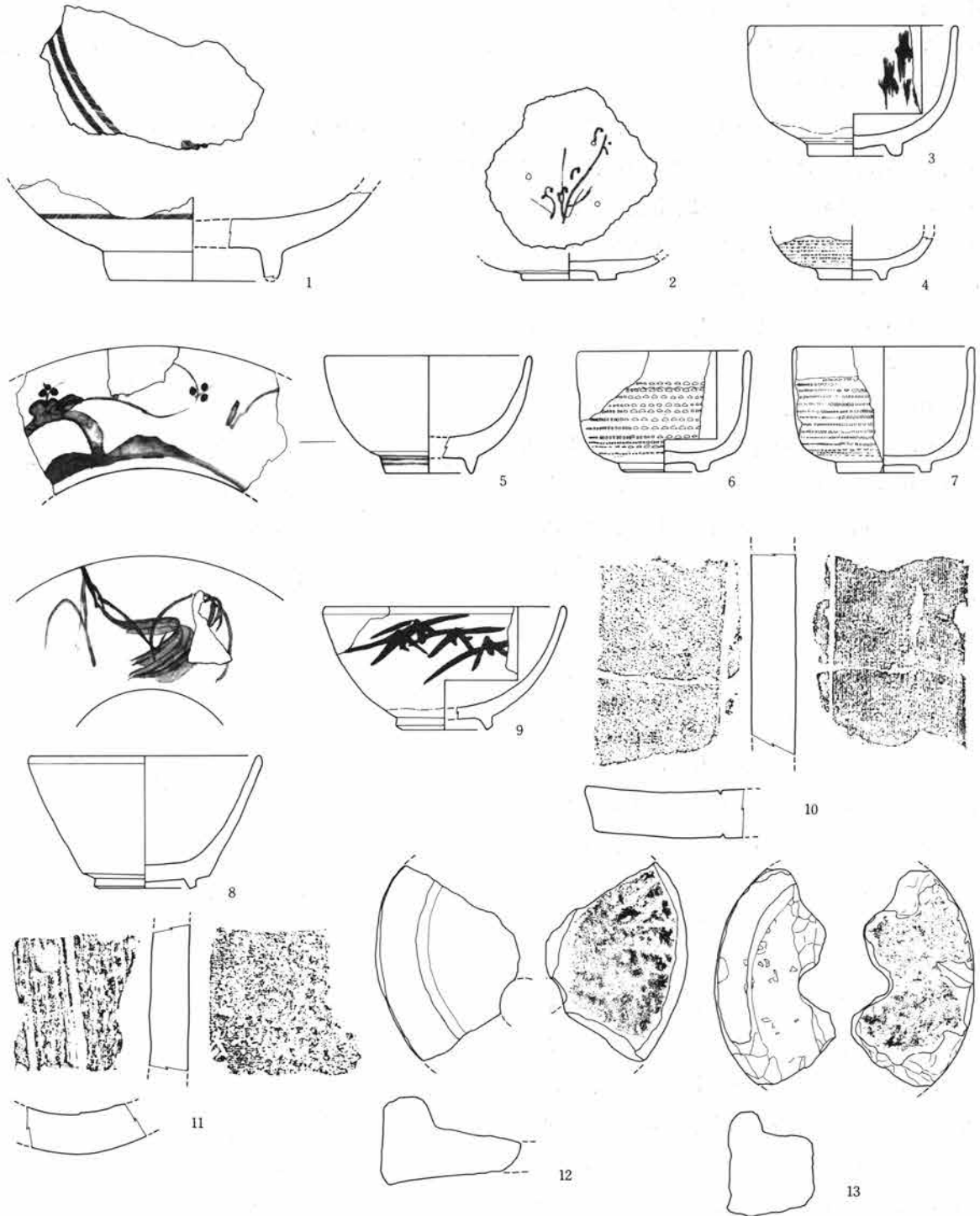
第39図 2号井戸実測図

II 検出された遺構と遺物

13. 石臼。高さ9.7cmの上臼である。磨滅が著しく、目はかろうじて認められる。輝石安山岩製。

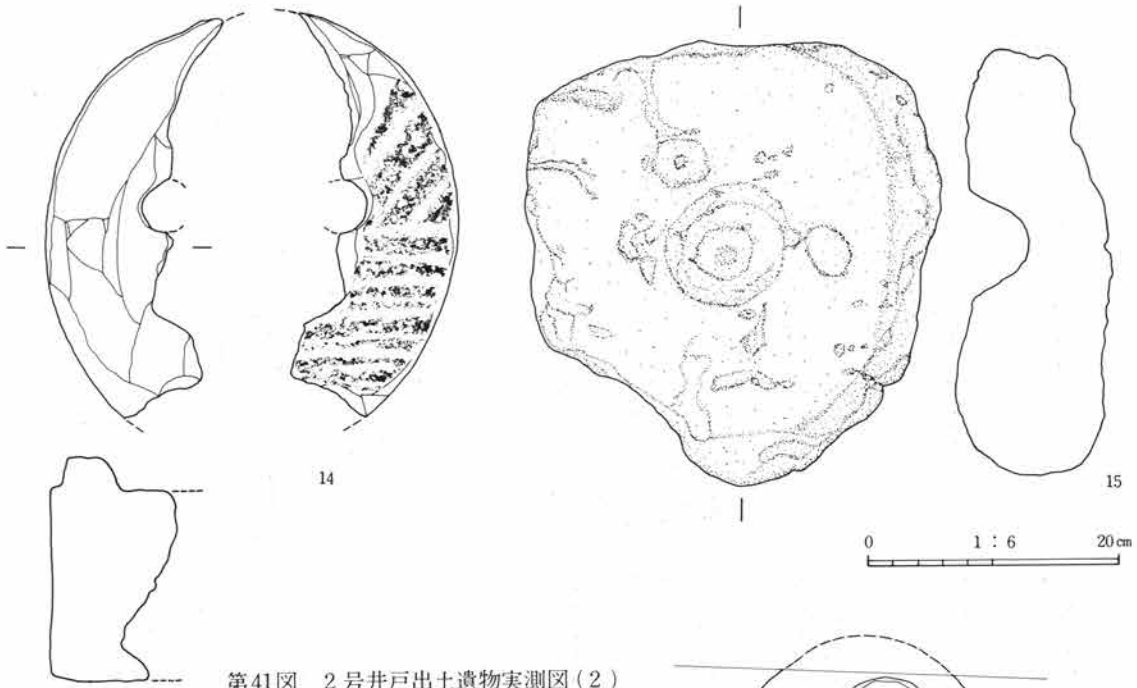
14. 石臼。高さ18cmの上臼である。目の間隔は2~2.7cmであるが、その間に浅い目が刻まれている部分がある。両者の新旧関係は不明。輝石安山岩製。

15. 不明石製品。中央に直径10cm、深さ5cmの凹みがある。用途不明。角閃石安山岩製。



第40図 2号井戸出土遺物実測図

0 1 : 3 10 cm



第41図 2号井戸出土遺物実測図(2)

3号井戸

遺構 (第42図、図版12)

本丸中央の線路際に位置する。上端は長径3m前後、短径2.7mの楕円形と考えられる。線路に近接しているため、深さ3.9mで発掘を中止した。このため、底の形状や深さは不明である。なお、3.9m地点から1mのボーリングステッキを使用した。底は確認できなかった。

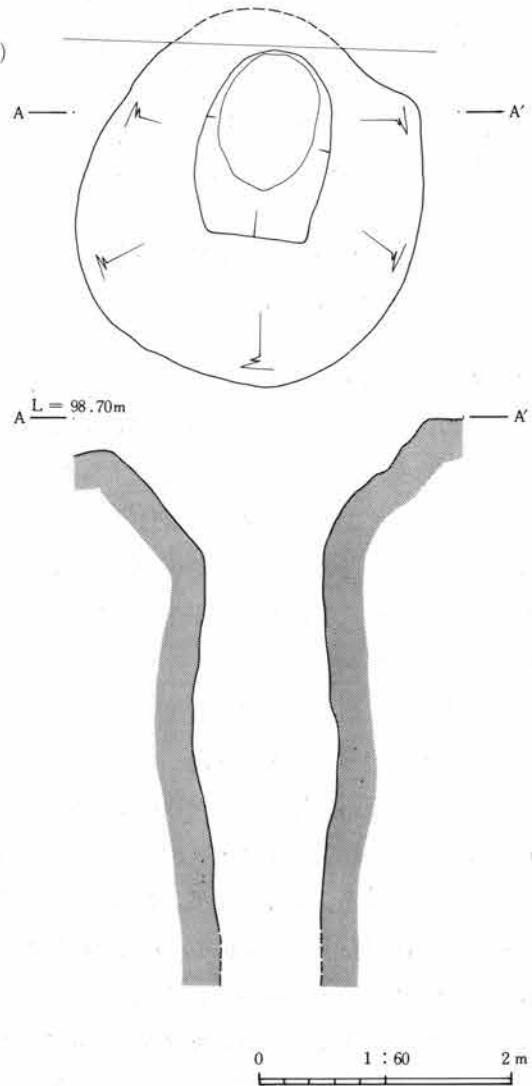
遺物 (第43図、図版33)

1. 石臼。高さ14.5cmの上臼である。上縁は平坦で、凹みは3.1cmを測る。すり合わせ部は器表が剥離しているため、目は3条しか残存していない。深さは2.5mm程であり、磨滅は著しくない。輝石安山岩製。

2. 不明石製器。両面に凹みがある。一方は深さ2.3cmで径は9~11cm。もう一方は深さ1cmで径は5cmと小さく浅い。角閃石安山岩製。

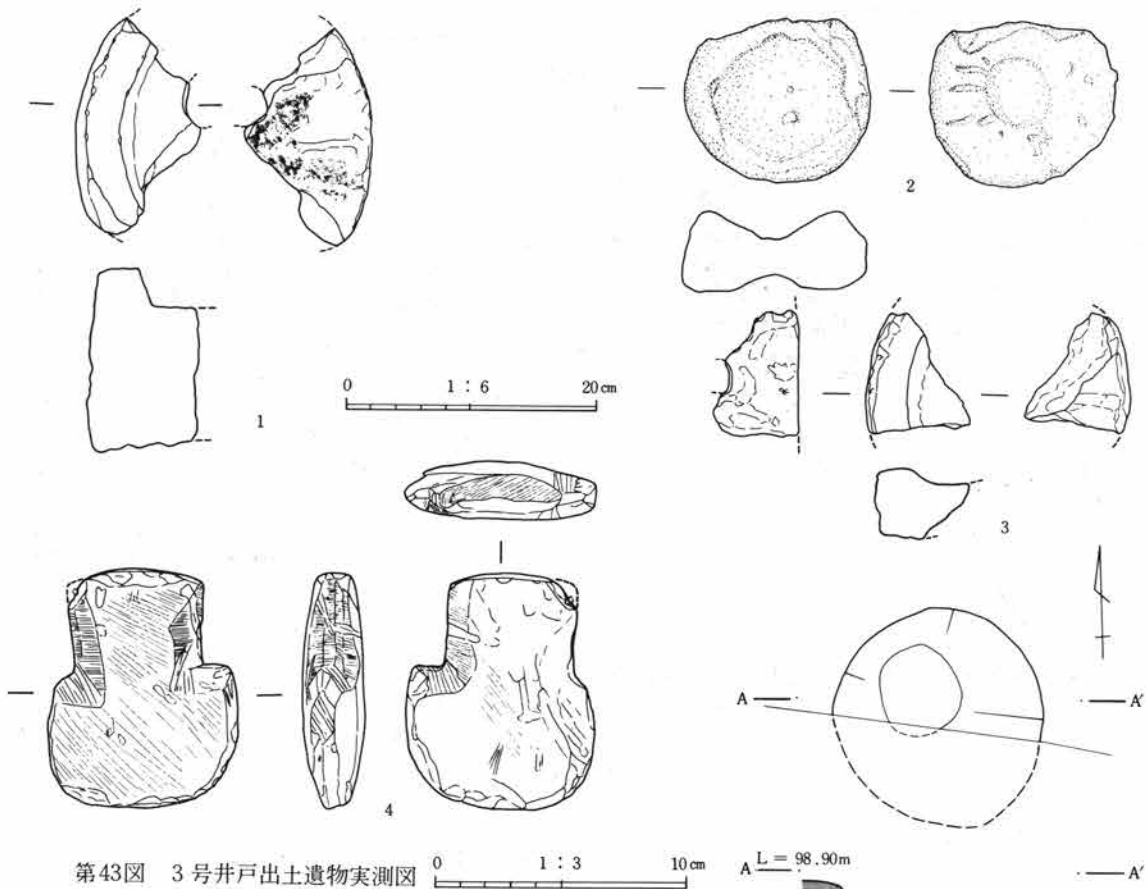
3. 石臼。上縁が平坦で、凹みが1.3cmと浅い上臼である。側面には挽き木孔がある。すり合わせ部は欠失している。輝石安山岩製。

4. 石製模造品。斧の模造品である。袋部は作らず、穿孔は隅に認められる。



第42図 3号井戸実測図

II 検出された遺構と遺物



第43図 3号井戸出土遺物実測図

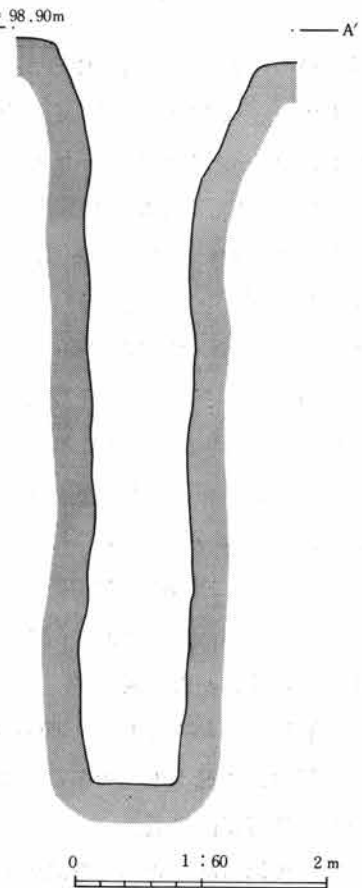
4号井戸

遺構 (第44図、図版13)

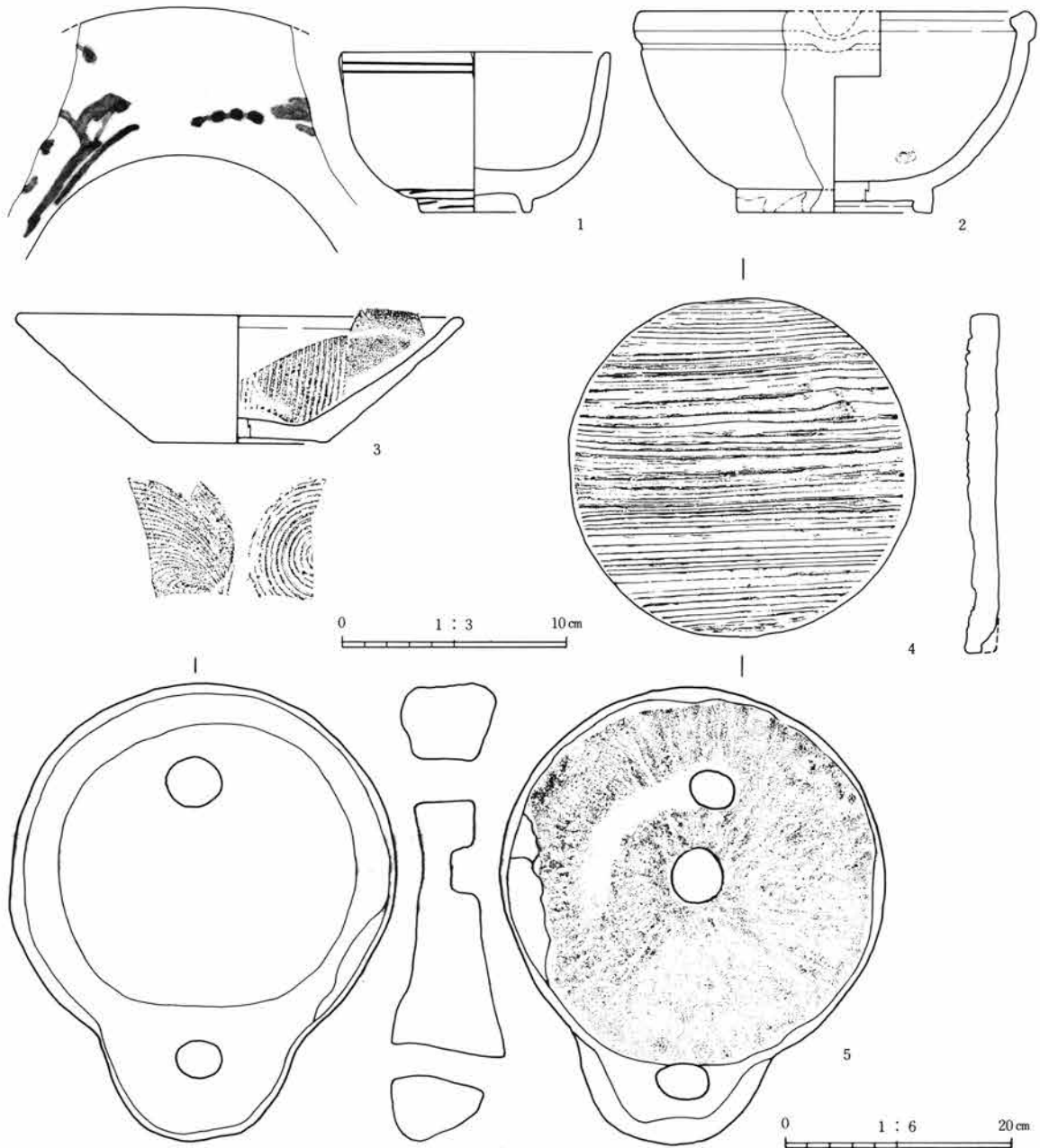
7号溝の南東に位置し、溝上端から28cmと近接している。上端は半分程が発掘区外であるが、下端は完掘できた。深さは5.8mで、断面形は朝顔型を呈している。深さ3m付近から、厚さ1mにわたって浅間A軽石混土層が認められた。この層中から碗(1)、片口鉢(2)が、これより下層から石臼(5)、桶の底板(4)が出土している。

遺物 (第45図、図版33)

1. 伊万里系、碗。胎土は灰白色で、畳付は赤褐色を呈している。明オリーブ灰色の釉を施す。陶器。18世紀。
2. 瀬戸・美濃系、片口鉢。片口部は欠失する。明黄褐色の鉄釉を高台脇まで施す。胎土は淡黄色。陶器。18世紀後半。
3. 瀬戸・美濃系、搦鉢。小型の搦鉢である。櫛目の基本単位は20本。見込みには同心円状の櫛目を入れる。底部は糸底。胎土は淡黄色。暗赤褐色の錆釉を施す。陶器。18世紀。
4. 桶。底板と考えられる。柁目材で、中央に髓が通っている。
5. 石臼。挽手孔つくり付けの上臼で、重さは10.05kgである。目は磨滅している。砂岩製。



第44図 4号井戸実測図



第45図 4号井戸出土遺物実測図

5号井戸

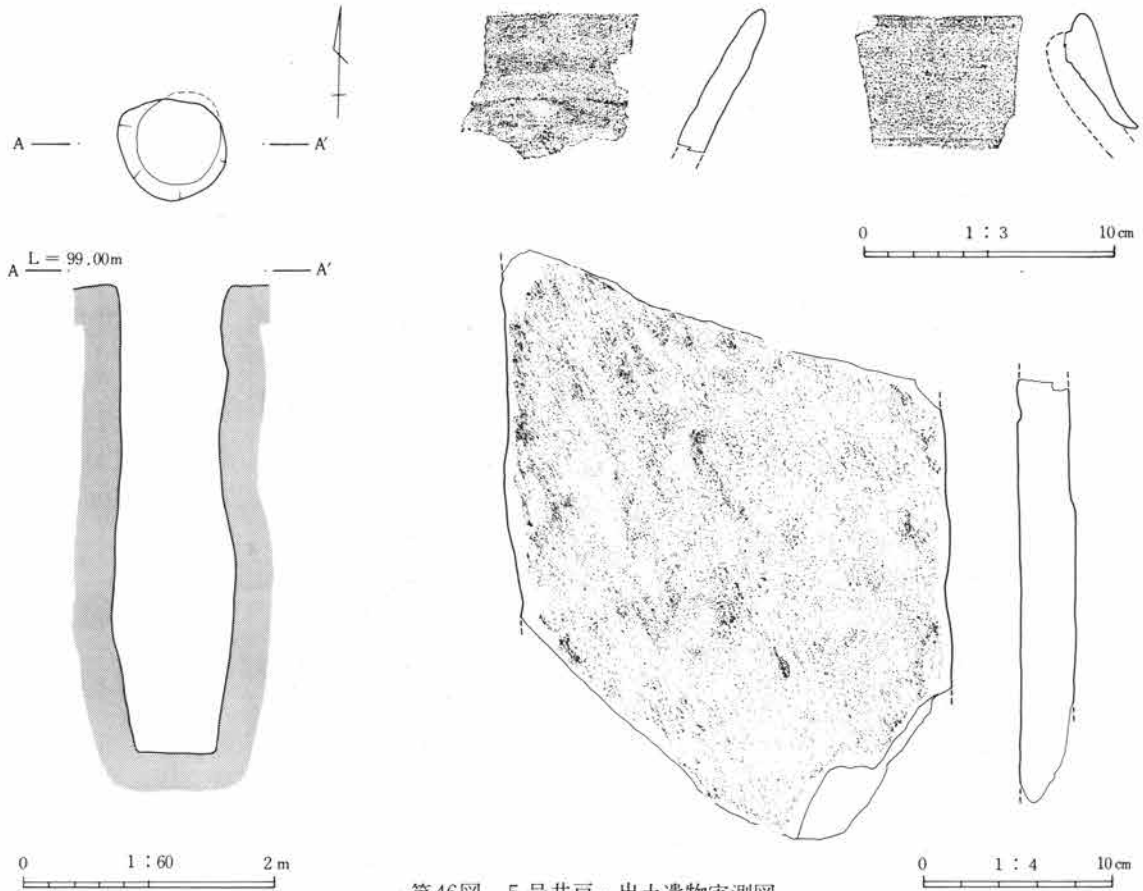
遺構 (第46図、図版13)

7号溝の北東90cmに位置する。上端径90cm、下端径70cm、深さ3.7mの円筒形を呈する。深さ3.2cmまでは10cm～50cmの礫で埋められており、この礫中から陶器(1、2)が出土している。この礫層下の埋土からは板碑(4)が出土している。

遺物 (第46図、図版33)

1. 軟質陶器、鉢、胎土は細砂を含む。色調は灰色。
2. 常滑、大甕。口縁折り返し部の破片。折り返し幅は5.3cmと広く、内側は口縁と接している。色調は暗褐色。口縁端部には自然釉がかかっている。15世紀後半。
3. 板碑。上下を欠失する。上部には蓮座が認められる。緑色片岩製。

II 検出された遺構と遺物



第46図 5号井戸・出土遺物実測図

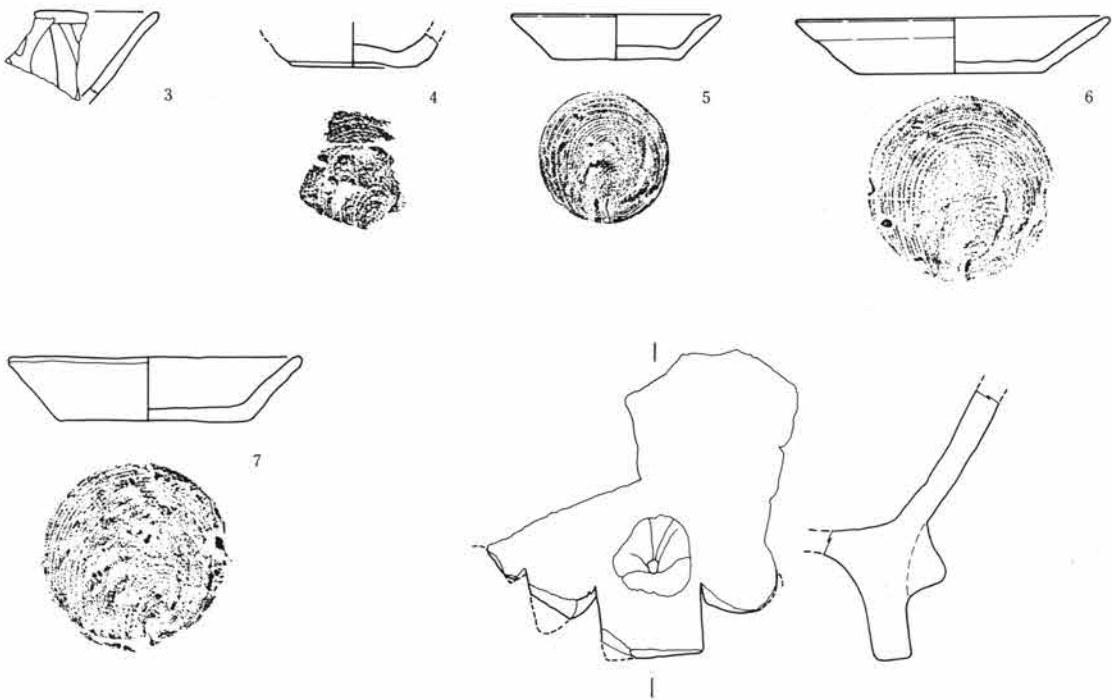
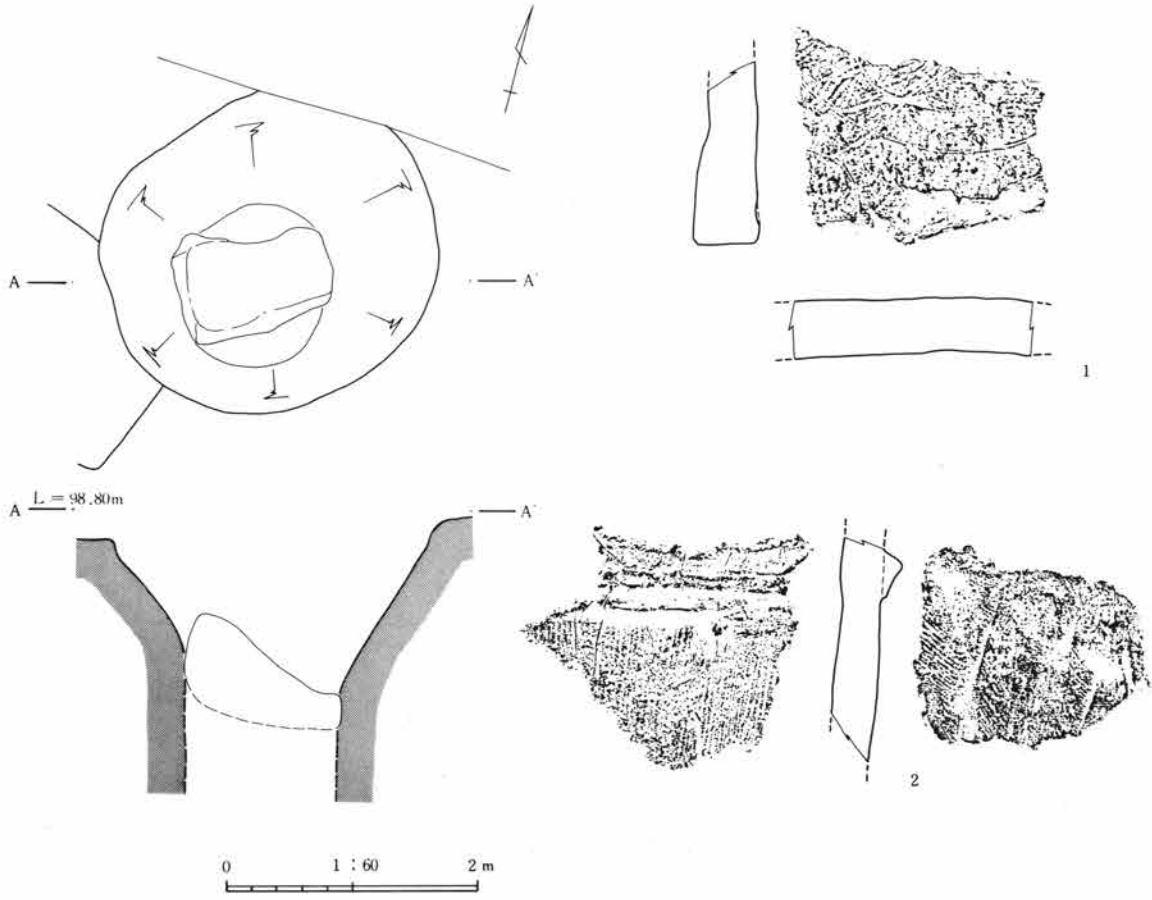
6号井戸

遺構 (第47図、図版13)

本遺跡中最も東で検出され、上端径2.35~2.7mを測る。深さ0.6~1.3mの所に、長さ1.3m、幅70cm厚さ70cm程の石があり、これ以下は発掘できなかった。

遺物 (第47・48図、図版34)

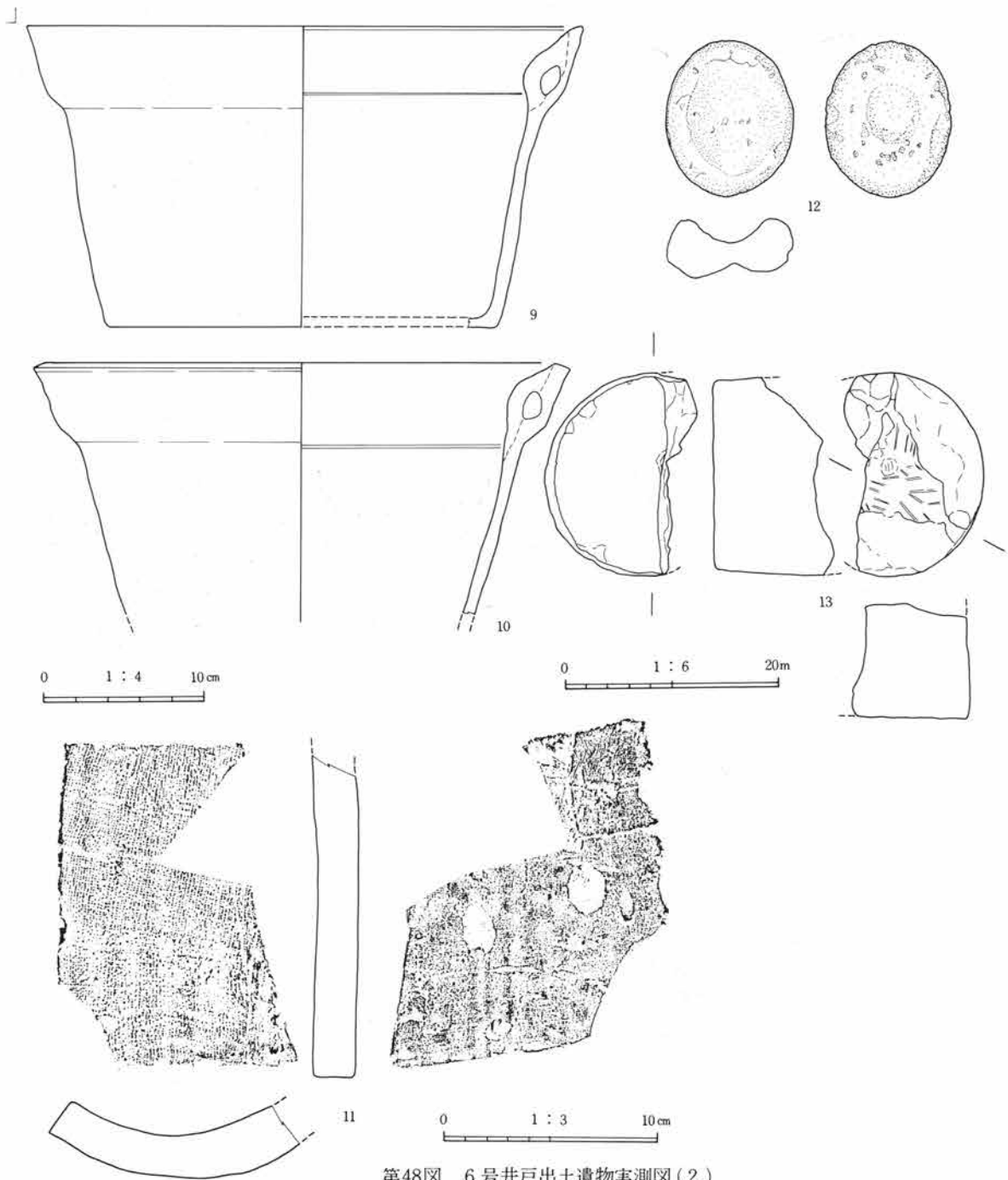
1. 器材埴輪。表面のヘラ描き沈線間に赤色塗彩を施す。胎土は礫を多量に含み、灰色を呈している。
2. 円筒埴輪。タガ部分の破片である。外面はタテハケを施す。胎土は粗砂を含む。
3. 龍泉窯系、青磁碗。鎬蓮弁文と間弁を有する。釉は青味を帯びた緑色を呈する。
4. 土師質土器、皿。胎土は細砂を含み、浅黄色。ロクロは左回転である。
5. 土師質土器、皿。口径8.3cm、底径5.2cm、器高1.8cmを測る。胎土は礫を含み、浅黄色。
6. 土師質土器、皿。口径12.2cm、底径7.4cm、器高2.2cmを測る。胎土は粗砂を少量含み、黄橙色。
7. 土師質土器、皿。5・6に比して胎土は礫を多く含む。調整は雑で、器面の凹凸が多い。にぶい黄橙色。
8. 軟質陶器、火鉢。脚部の破片である。胎土は粗砂を多量に含む。脚部は刀子による切り込みで造られる。
9. 内耳埴。口縁は外反し、内面には3mm程の段差がつけられる。色調は断面がにぶい黄色で、器表は黒色。
10. 内耳埴。9とほぼ同器形であるが、造りはシャープな感がある。色調は赤灰色。
11. 平瓦。焼成は良好であるが、色調は淡橙色。裏面の成形時の条線は明瞭で、8世紀代と思われる。
12. 不明石製品。両面に深さ2cmと1.3cmの凹みがある。角閃石安山岩製。
13. 不明石製品?。表面に凹凸は少なく、調整は丁寧である。未製品の可能性もある。輝石安山岩製。



第47図 6号井戸・出土遺物実測図(1)

0 1 : 3 10 cm

II 検出された遺構と遺物



第48図 6号井戸出土遺物実測図(2)

1号土壙墓

遺構 (第49図、図版14)

規模は長軸87cm、短軸49cm、深さ53cmである。北西隅から歯が、1本出土している。また、古銭が1枚出土しているが、遺存が悪く採拓は不可能。金種も不明である。

2号土壙墓

遺構 (49図、図版14)

斜面に堆積した黒色土中に構築されているため、掘り方は不明。埋葬は頭を北、顔を西に向けた側臥屈曲位である。

遺物 (49図、図版34)

1は金種不明。2は洪武通宝で、初鑄は1368年。3・4は永楽通宝で、初鑄は1408年。6は熙寧元宝で、1068年初鑄。5・7は元??宝。3～7は錆着していた。

22号土壙

遺構 (第50図、図版14・15)

不整円形の土壙で、人為推積土中から頭骨が出土した。

遺物 (第50図)

1. 不明石製品。角閃石安山岩製で、片面に凹みがある。

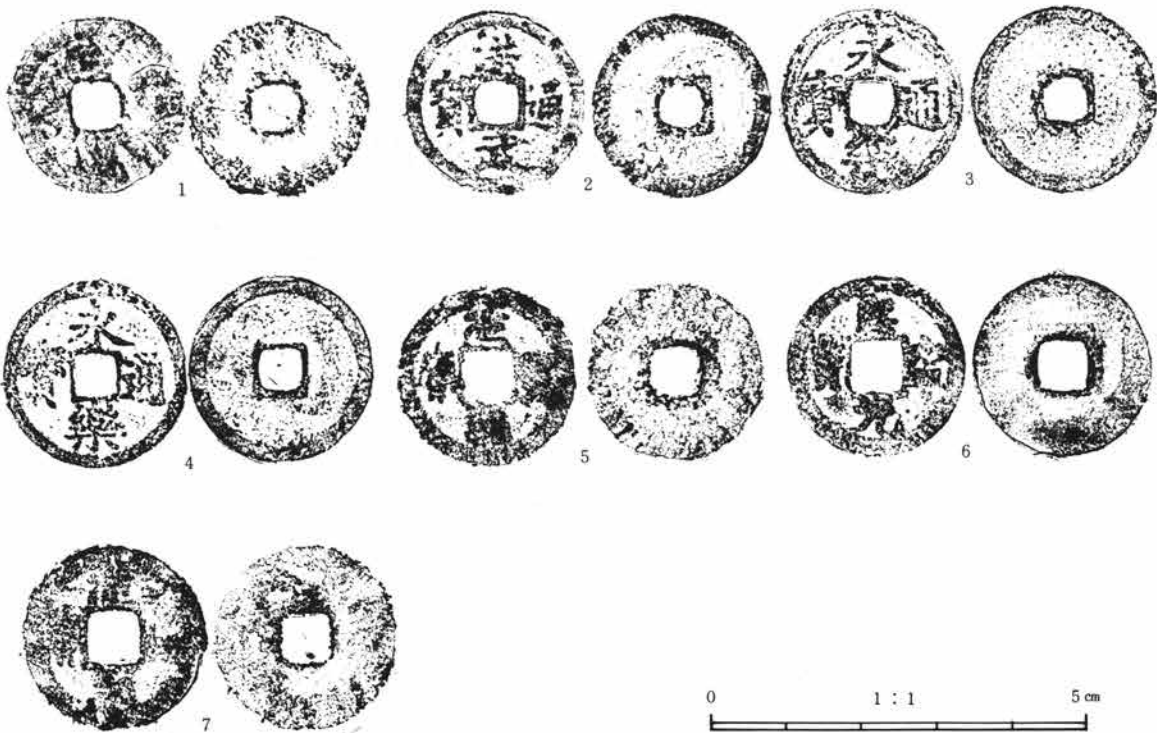
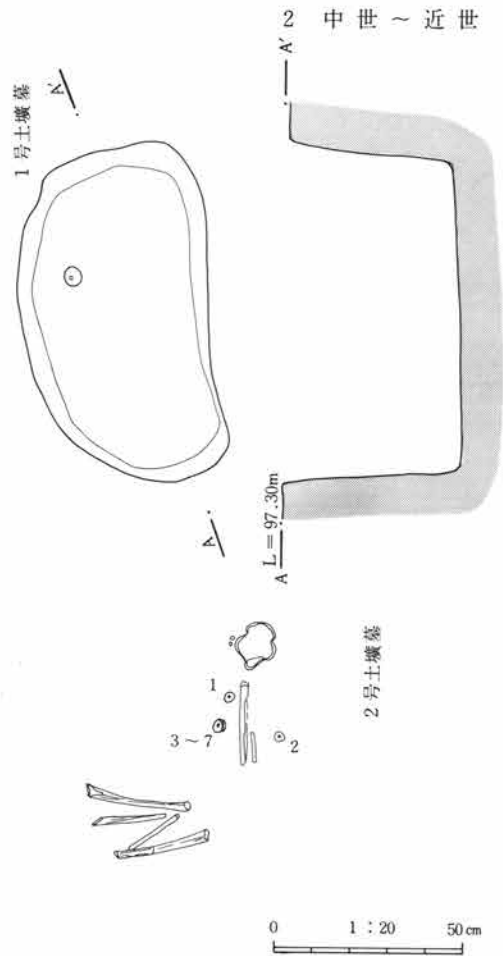
3号土壙墓

遺構 (第51図)

31号土壙と重複し、土壙より古い。

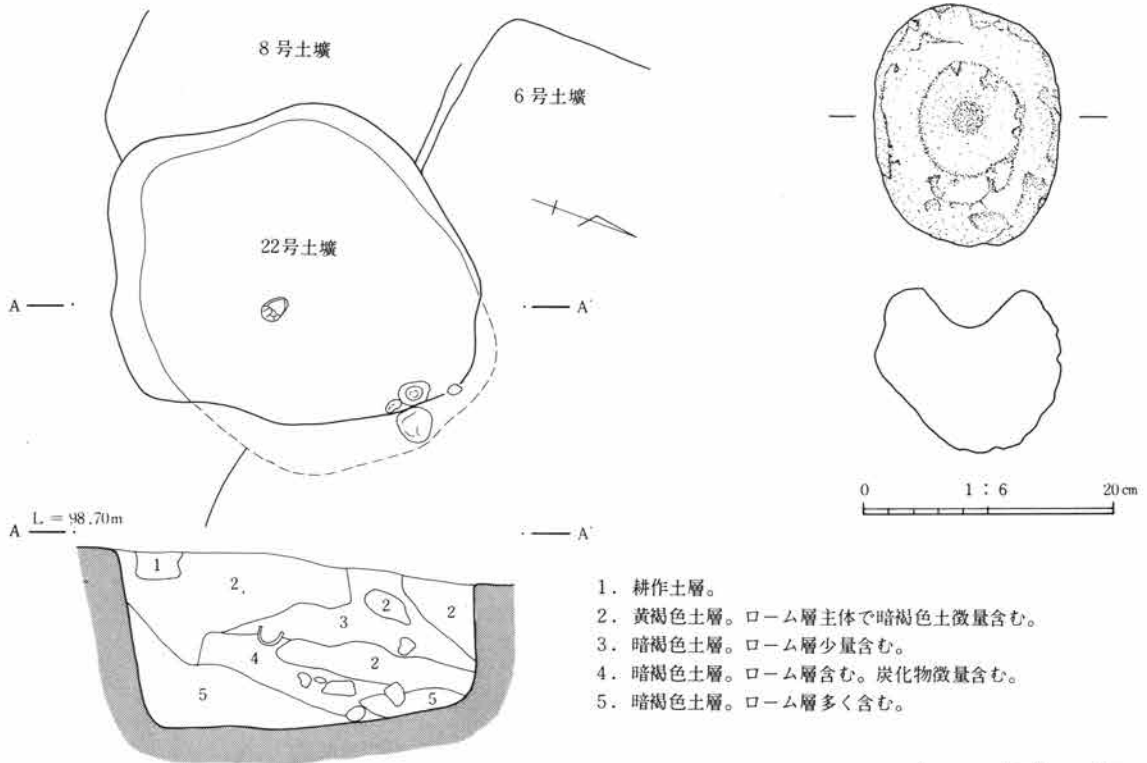
遺物 (第51図、図版35)

1. は元豊通宝で、1078年初鑄。他にもう1枚出土しているが、細片のため採拓不可能。金種不明。

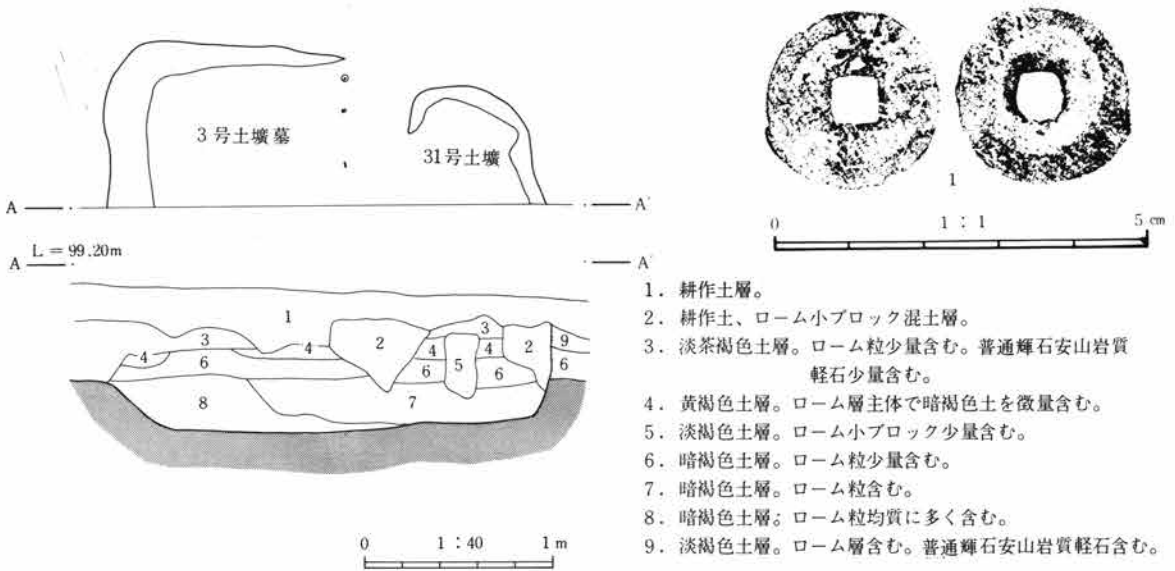


第49図 1・2号土壙墓・出土遺物実測図

II 検出された遺構と遺物



第50図 22号土壙・出土遺物実測図



第51図 3号土壙墓・出土遺物実測図

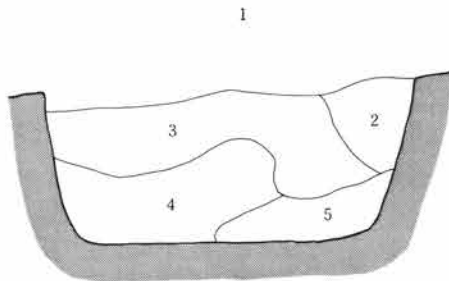
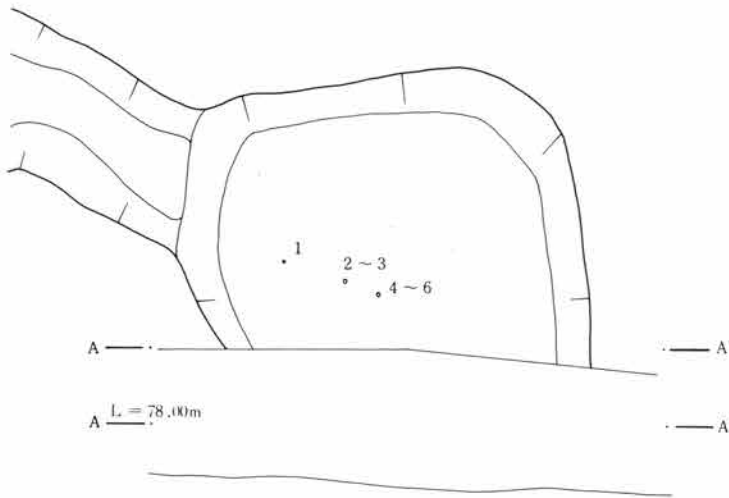
4号土壙墓 (32号土壙)

遺 構 (第52図)

発掘区の東端に位置し、南半は未発掘である。このため平面形は不明。深さは40cmを測る。人骨は検出されなかった。

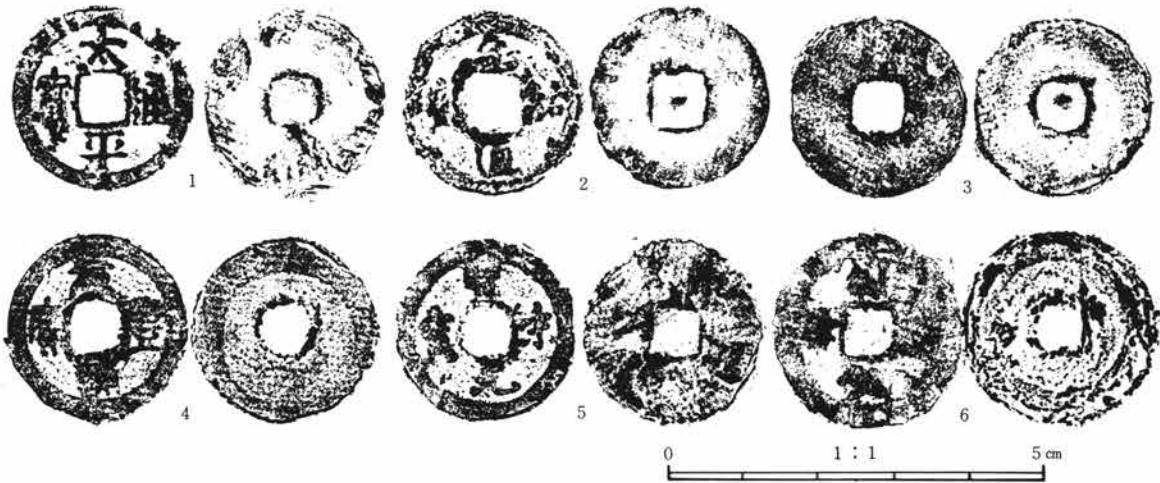
遺物 (第52図、図版35)

1は太平通宝で、976年初鑄。2は元祐通宝で、1086年初鑄。4は元宝通宝で、1078年初鑄。5は聖宋元宝で、1101年初鑄。3・6は不明。2・3は鑄着していた。4・5・6は鑄着して出土し鑄着部には赤色顔料が遺存していた。



1. 耕作土層。
2. 暗褐色土層。ローム粒少量含む。
3. 黄褐色土層。ローム層主体で暗褐色土少量含む。
4. 黄褐色土層。ローム層主体で暗褐色土含む。
5. 暗褐色土層。暗褐色土主体でローム層含む。

0 1 : 20 50 cm



第52図 4号土壙墓・出土遺物実測図

5号土壙墓 (34号土壙)

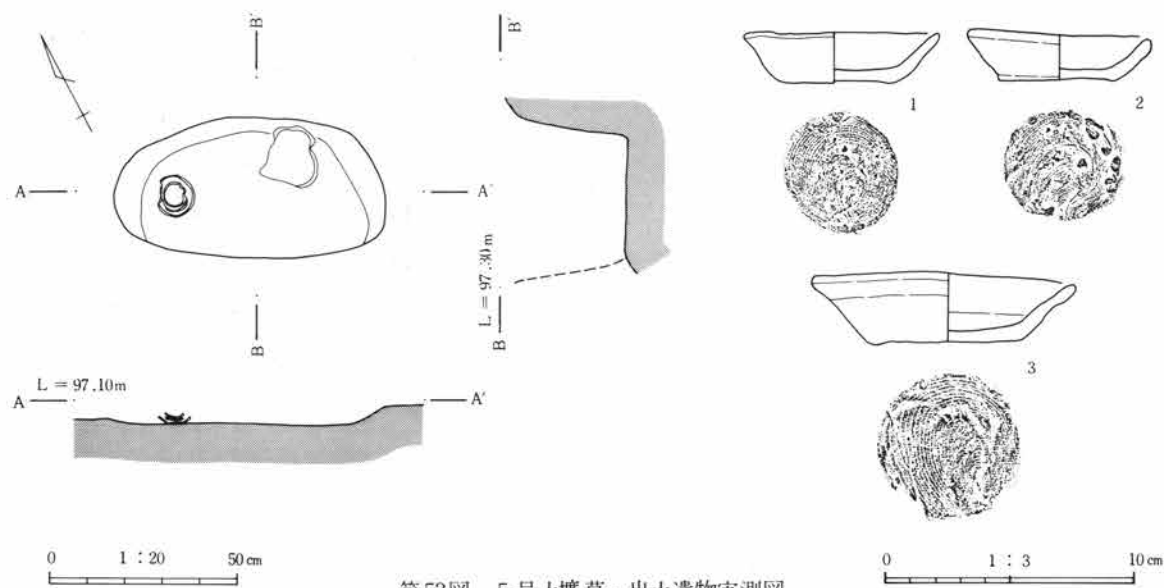
遺構 (第53図、図版15)

2号溝の北壁に構築され、溝底と上端の比高は約30cmである。北東隅からは、頭骨が出土している。

遺物 (第53図、図版35)

1. 土師質土器皿。1番上に乗っていた皿で、口縁は1部欠失している。ロクロ左回転。
2. 土師質土器皿。中央にあった皿で、体部に8mm程の礫があるために口縁は大きく歪んでいる。
3. 土師質土器皿。下になっていた皿で、口縁は少し歪んでいる。ロクロ左回転。

II 検出された遺構と遺物



土 壙

遺構

本遺跡では、36基の土壙が検出されている。このうち2基が土壙墓、1基が弥生時代の溝の1部であった。また、1基からは人骨が出土している。これらについては前述した。残る31基は時期・性格共に不明なものがほとんどである。時期の推定できる土壙は、底に浅間A軽石の降下堆積層が認められた6号土壙のみである。6号土壙からは埴状土製品(2)や尾呂茶碗(1)が出土しているが、前者は確認面、後者は土層の乱れた部分から出土しているため、土壙に伴うとは考え難い。土壙に伴う遺物を出土しているのは26号土壙のみである。26号土壙からは、土製火鉢(14)が出土している。しかし、土製火鉢は年代の推定できる資料に之しく、時期を明確にすることはできない。他の土壙からも遺物は出土しているが、すべて埋土中の出土である。これらの土壙は、埋土から中・近世に属すると考えられる。また、中には現代のものも含まれている可能性もある。

表2 土 壙 一 覧 表

土壙番号	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	遺物番号	図版番号	備 考
1	長方形	1.55	0.96	60			2号溝埋没後
2	楕円形	1.50	0.65	68			2号溝埋没後
3	長方形	2.24	1.70	29			28号土壙より新しい。
4	三角形?	1.50	1.20以上	0~13			
5	楕円形			15			
6	長方形?	9.10以上	2.2~3.8以上	20~40以上	56-1~3	15・35	6号溝内に続く。底に浅間A軽石の純層。 8・5号溝より新しい。

2 中世～近世

土壙番号	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	遺物番号	図版番号	備 考
7	長方形	2.00	1.80	9			
8	長方形	2.56	1.62	47		16	
9	長方形?	不明	不明	24		16	10・11号土壙より古い。
10	長方形?	2.14	1.20?	60		16	9号土壙より新しい。 10号土壙より古い。
11	長方形?	2.30～2.10	1.48	48	57-4・5	16・35	9・10号土壙より新しい。
12	不整形	2.90	1.96～2.50	42	57-6	17・35	
13	長方形	1.80	1.00	43		17	
14	長方形	2.00	0.84以上	65			
15	長方形	1.40	1.10	58			
16	円形	1.78	1.70	33			
17	楕円形	2.92	1.60	100	58-7・8	35	人為堆積
19	長方形	1.56	1.02	20		18	
20	?	?	?	82	58-9～12	35	21号土壙より新しい。
21	不整形	2.50	1.10	100			人為堆積
23	長方形	1.35	1.15	25		18	
24	不整形	2.12	0.94～1.34	10～37			
25	長方形	1.50	0.82	40	59-13	36	
26	長方形	1.74以上	1.50	20	59-14	18・36	南半未発掘
27	長方形	2.70	2.02	6～28	60-15～17	36	
28	楕円形	3.60?	2.80	97		19	29号土壙より古い。
29	?	?	?	98		19	28号土壙より新しい。
30	円形?	1.30	?	11			南半は未発掘
31	?	?	?	20			3号土壙墓より新しい
33	長方形	3.55	1.30	13		19	6号井戸より古い。
35	方形	1.40	1.40	26		20	下半に円礫多い。

遺 物

1. 瀬戸・美濃系、碗。胎土はクリーム色を帯びた灰白色。粗い貫入の入った、明黄褐色の鉄釉を高台外面まで施す。口縁内外面には灰白色の帯状斑が認められる。陶器。尾呂茶碗。18世紀後半。6号土壙出土。
2. 磚状土製品。胎土は礫・粗砂を含み、にぶい黄褐色を呈する。隅には、焼成前の穿孔が認められる。

II 検出された遺構と遺物

6号土壙出土。土味が中世の瓦に類似しており、中世の所産と考えられる。

3. 皆沢焼、碗。胎土は白色で、磁化している。釉は白濁し、呉須は暗青灰色になっている。19世紀前半。

4. 須恵器、杯。付高台は低く、「八」の字型に開く。胎土は粗砂を多量に含む。11号土壙出土。

5. 羽釜。底部の破片で、胎土は細砂含む。内面には粗いハケ成形痕が残る。11号土壙出土。

6. 土師質土器、皿。器高は低く、口縁は外方に開く。胎土は粗砂を少量含み、浅黄色。12号土壙出土。

7. 瀬戸・美濃系、皿。高台は低い内削りである。口縁はほぼ水平に開く。内面は鉄釉を厚く、外面は薄く施す。外面には光沢がない。胎土は淡黄色。陶器。16世紀後半。17号土壙出土。

8. 平瓦。胎土は細砂を少量含む。焼成は甘く、灰黄褐色である。割れ口は磨滅する。17号土壙出土。

9. 埴。口縁・肩部外面には、右下がりのハケ目が残っている。体部～頸部は粗いヘラミガキ調整を施す。口縁外面はヨコハケが明瞭に残る。胎土は粗砂を少量含む。色調は浅黄色。20号土壙出土。

10. 軟質陶器、鉢。胎土は礫を少量、粗砂を多量に含む。色調は灰色。底部は回転糸切り。20号土壙出土。

11. 砥石。扁平で、1面のみ使用している。刃先を研いだと思われる細かい条線が認められる。流紋岩製。

12. 不明石器品。約半分は欠失する。片面に凹みがある。角閃安山岩製。20号土壙出土。

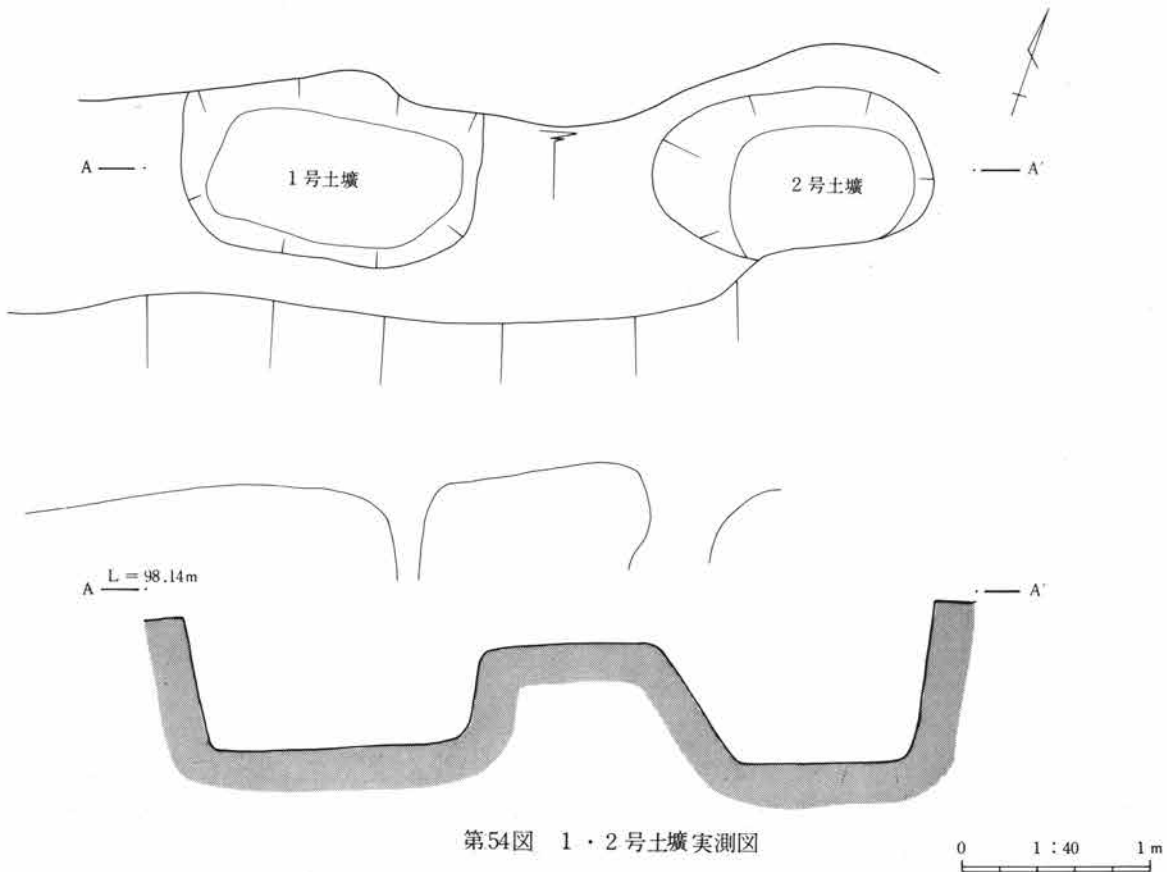
13. 須恵器、甕。胎土は細砂を含む。焼成は良好で、灰黄色。内面には自然釉が掛かる。24号土壙出土。

14. 軟質陶器、火鉢。口径47cmの大型である。脚は3つで、外面に三角形の突起を貼り付ける。器面はよくみがかれている。胎土は細砂を含む。焼成は甘い。26号土壙出土。

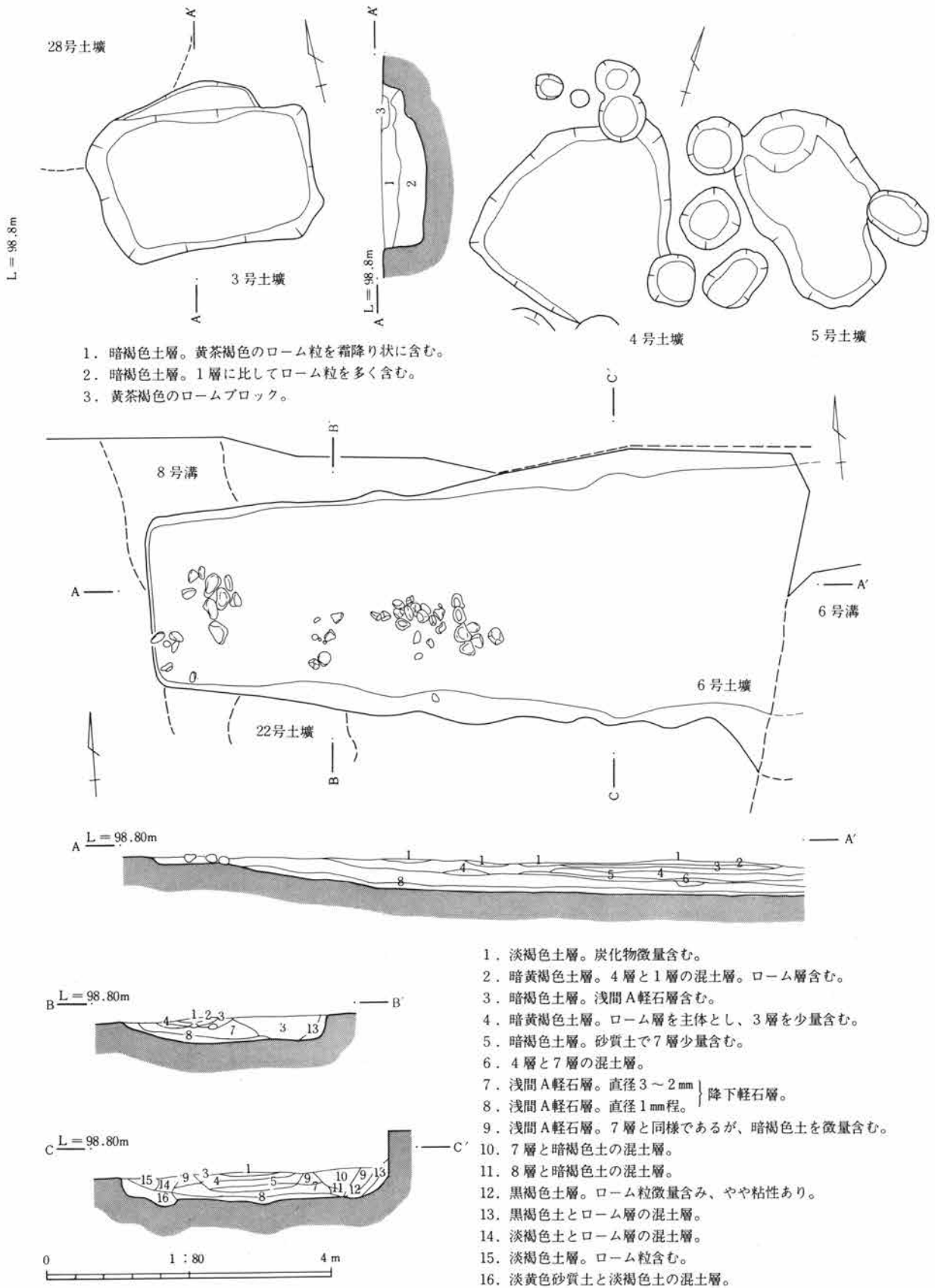
15. 壺。波高の低い波状文と二連止めの簾状文を施す。内面は粗いヘラミガキ。27号土壙出土。

16. 壺。胎土は細砂含む。内外面は赤色塗彩される。器表と割れ口は磨滅する。27号土壙出土。

17. 土師質土器、皿。器高は高く、体部は斜め上方に立ち上がる。にぶい黄橙色。27号土壙出土。

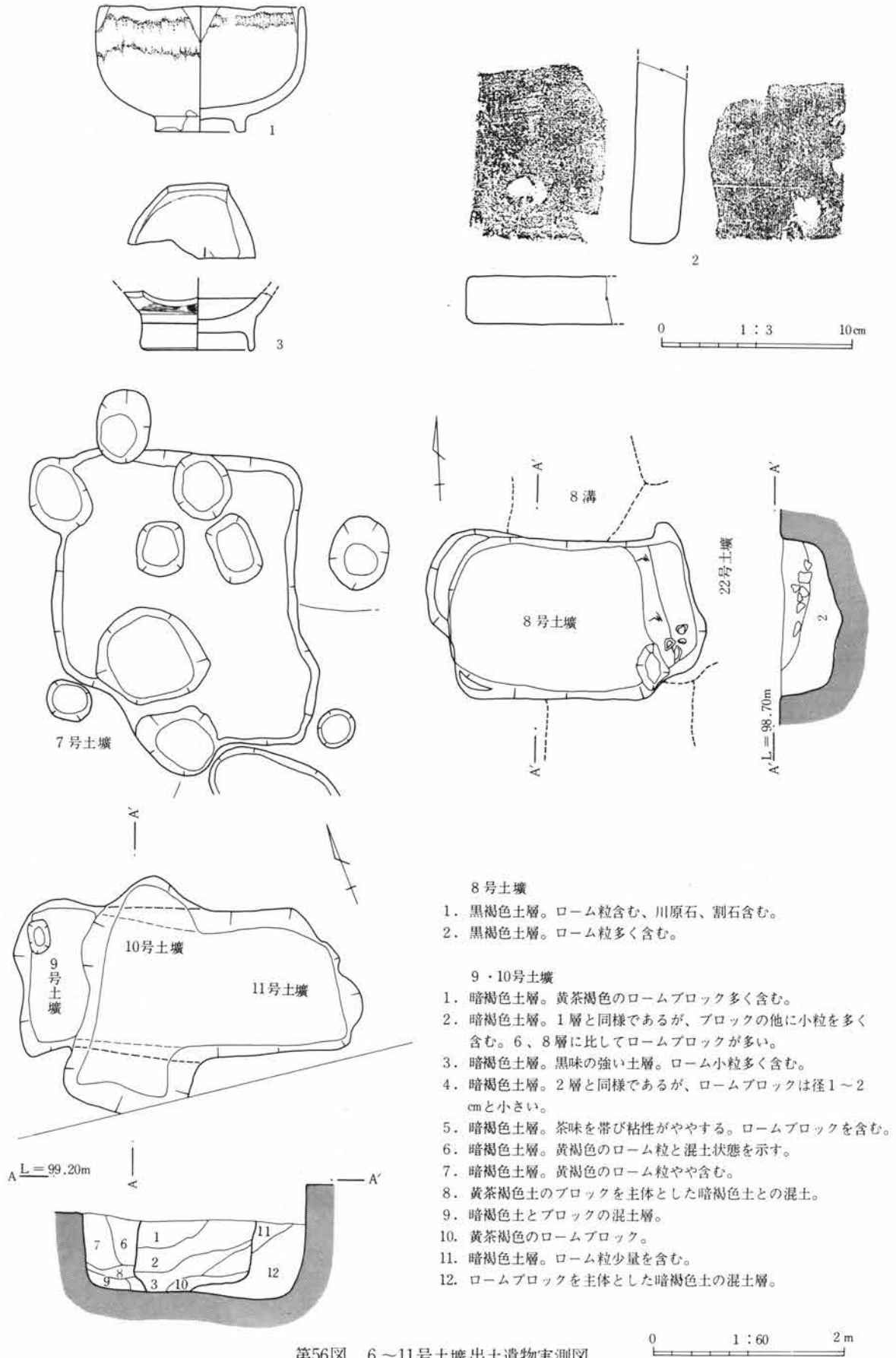


第54図 1・2号土壙実測図

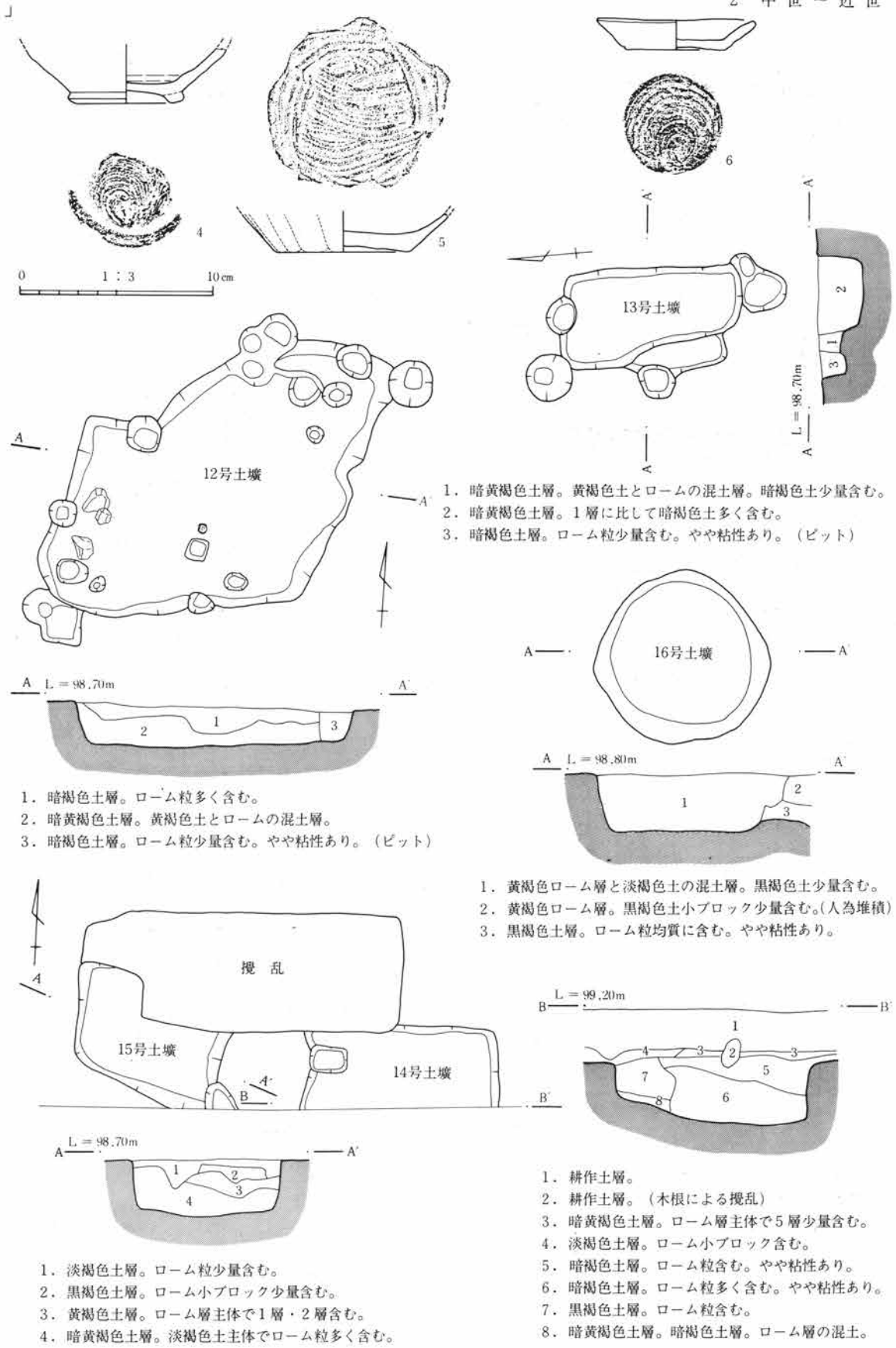


第55図 3～6号土壌実測図

II 検出された遺構と遺物



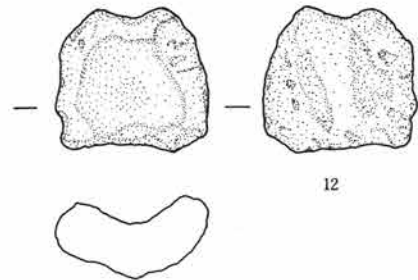
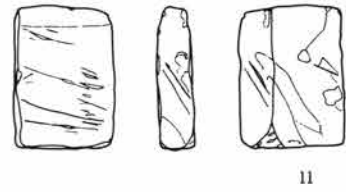
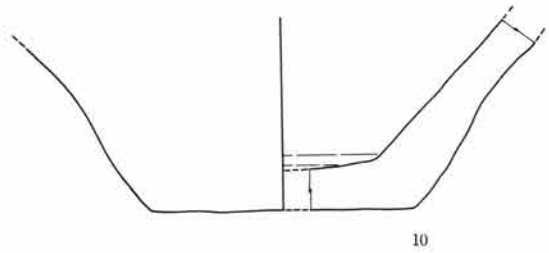
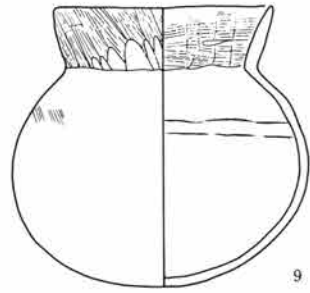
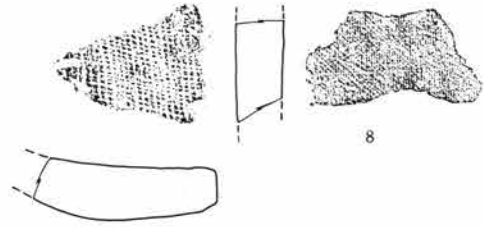
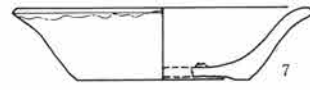
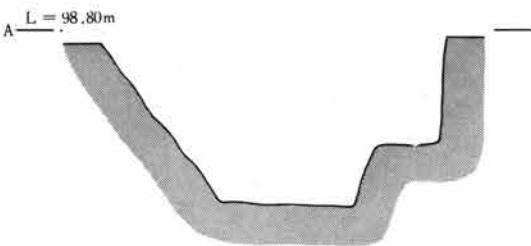
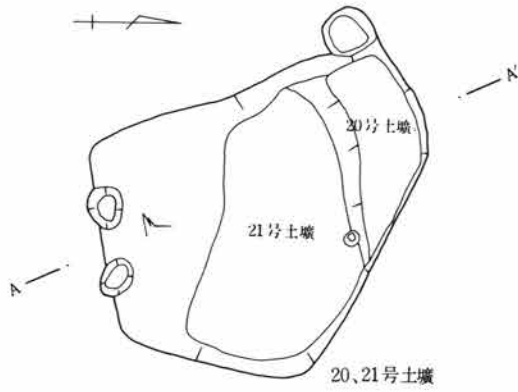
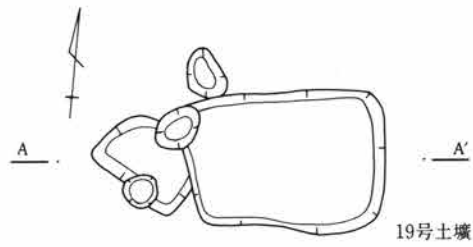
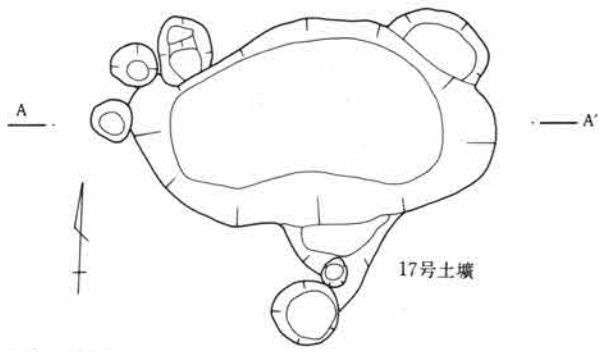
第56図 6~11号土壌出土遺物実測図



第57図 11～16号土壇・出土遺物実測図

0 1:60 2m

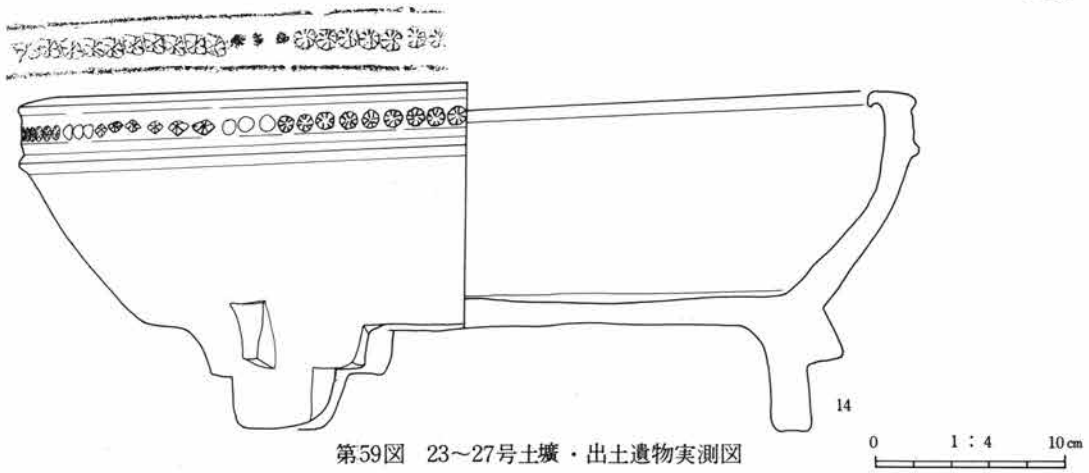
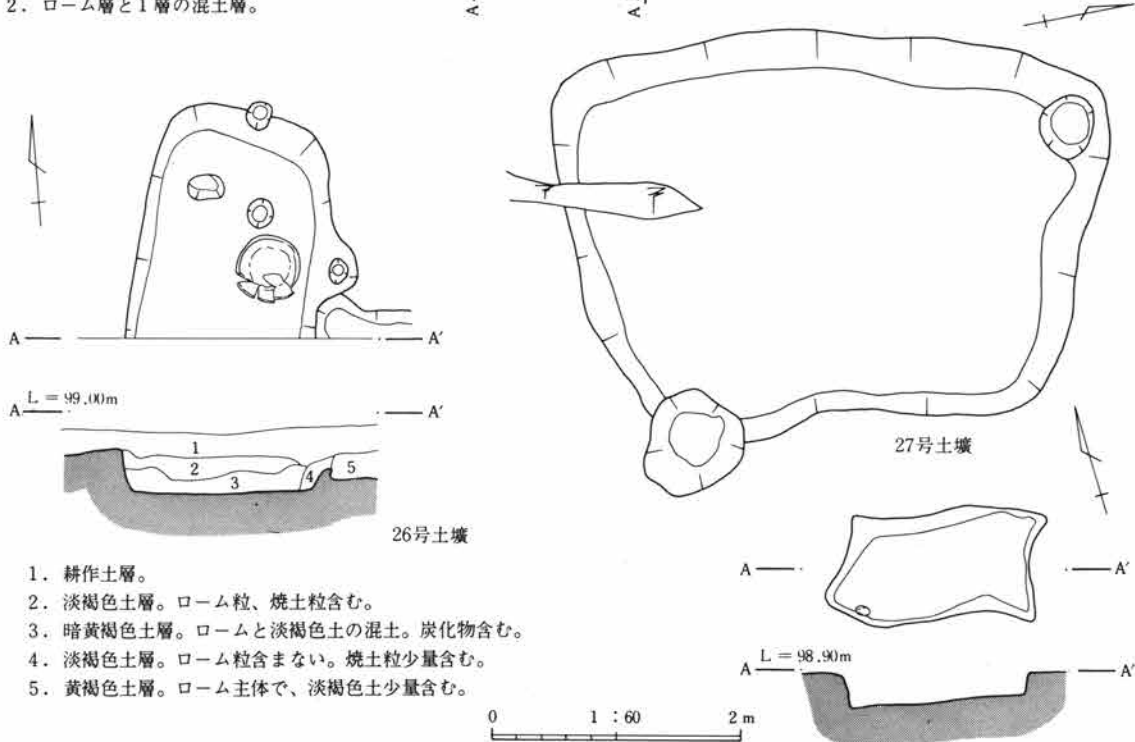
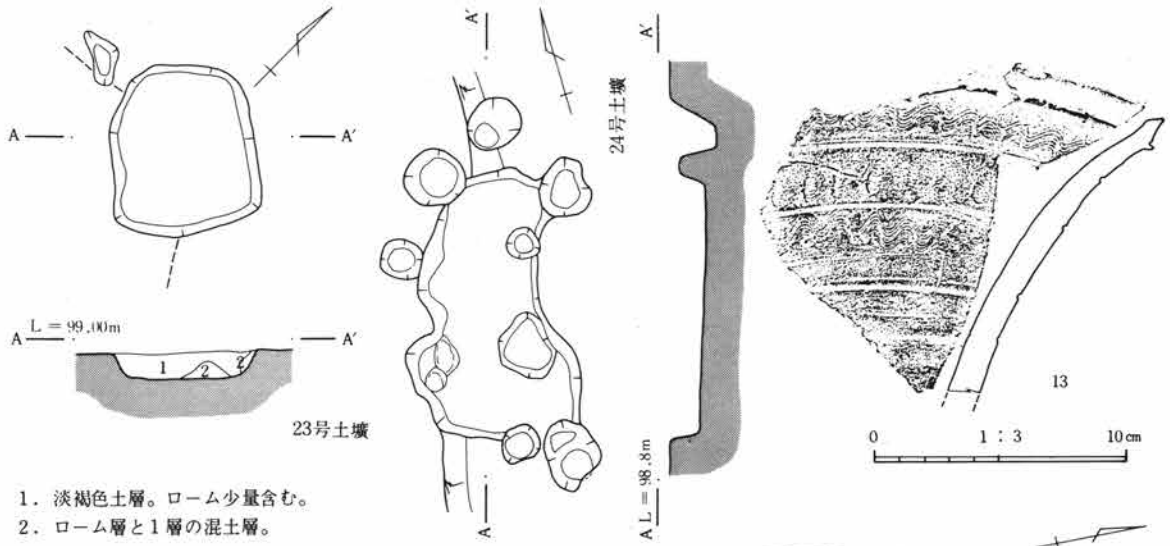
II 検出された遺構と遺物



0 1 : 60 2 m

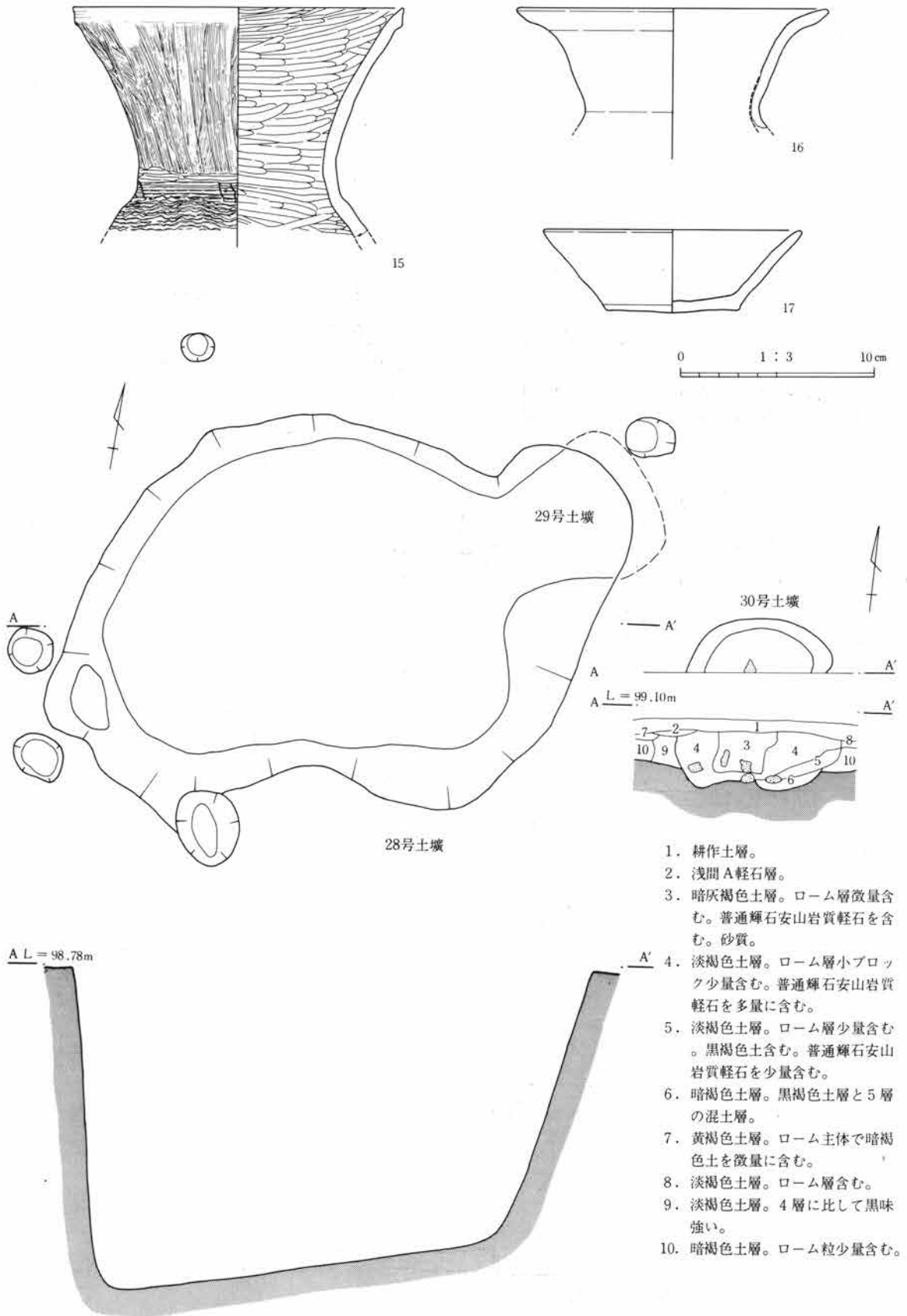
第58図 17~21号土壌・出土遺物実測図

0 1 : 3 10 cm



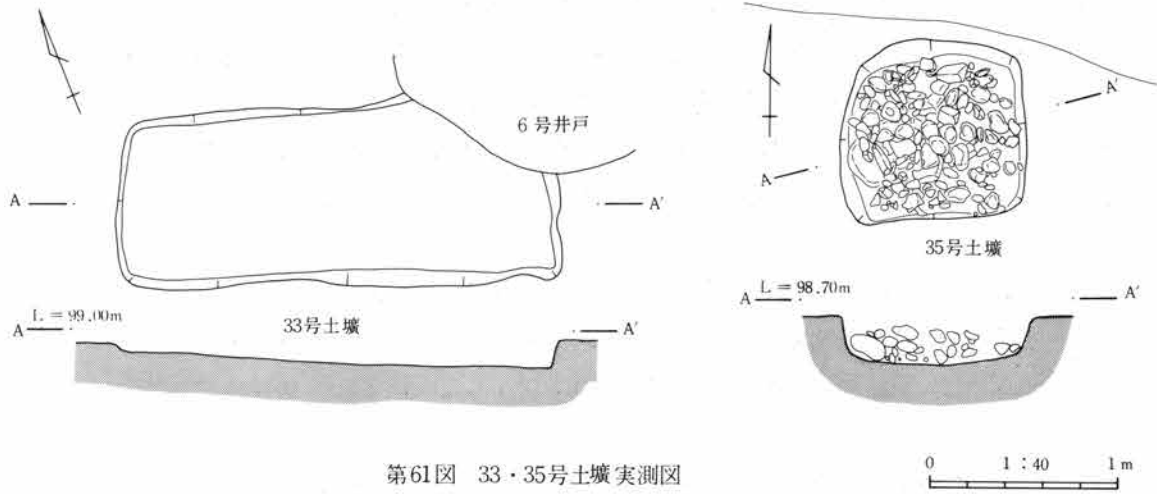
第59図 23～27号土壇・出土遺物実測図

II 検出された遺構と遺物



第60図 27~30号土坑・出土遺物実測図

0 1 : 6 2 m

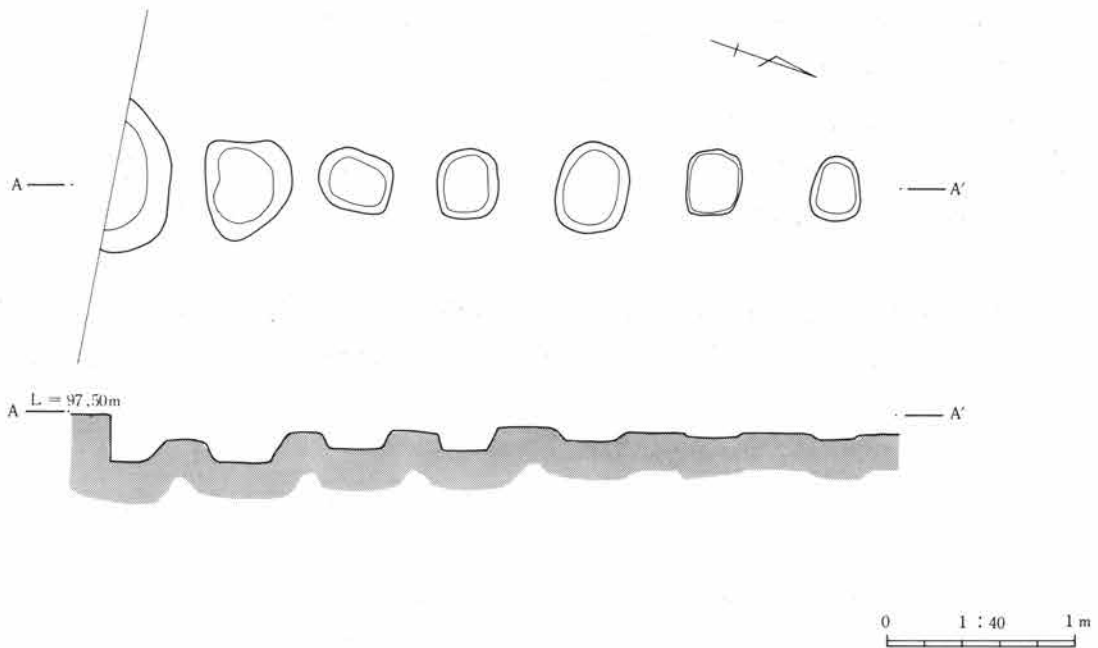


第61図 33・35号土坑実測図

1号柱穴列

遺構 (第62図、図版20)

3～5cm大の栗石を敷いている。柱穴内の埋土は、2号溝最下層と類似しており、近い時期のものであろう。



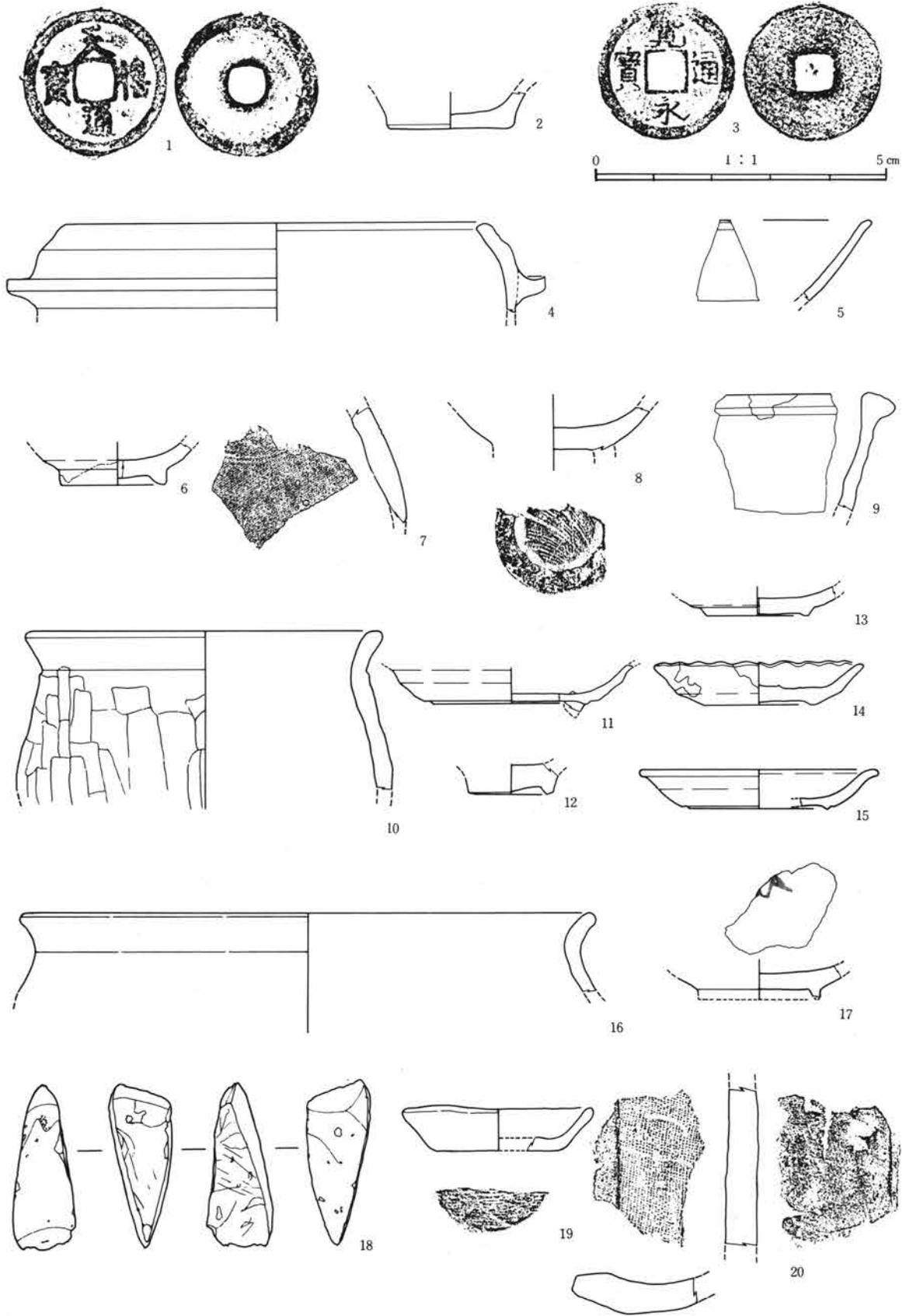
第62図 1号柱穴列実測図

ピット出土遺物 (第63図)

1. 天禧通宝。発掘区西端の栗石を持つピット1から出土している。初鑄年代は1017年（北宋）である。
2. 壺。弥生後期の壺の底部と考えられる。胎土は礫を含む。ピット5出土。

II 検出された遺構と遺物

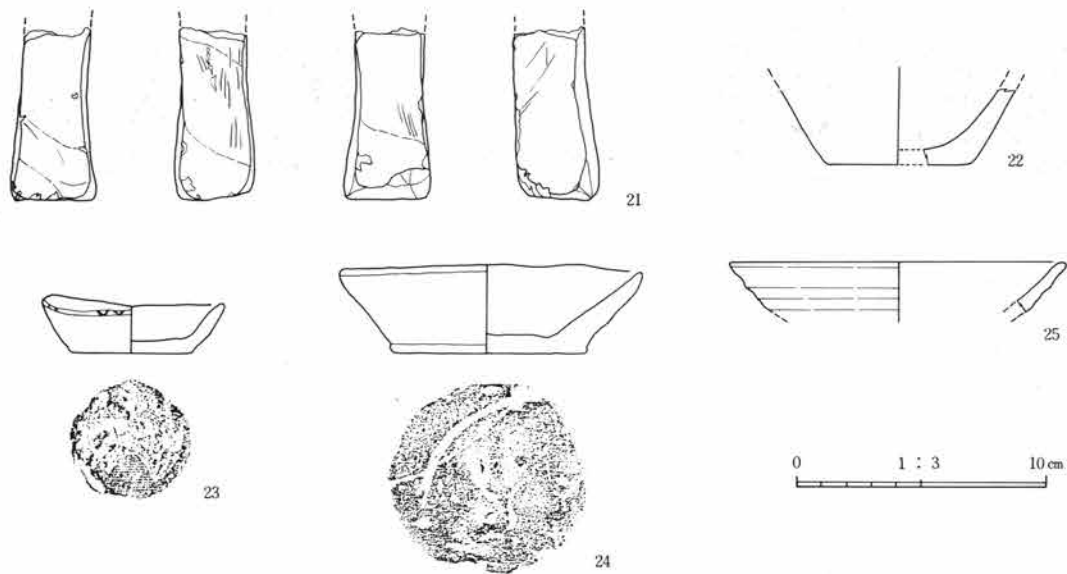
3. 寛永通宝。ピット12出土。「寶」の字は八寶」であり、新寛永である。
4. 羽釜。還元焼成により灰色を呈している。口縁は内傾し、鐙の端部は上方につまみ上げる。
5. 灰釉陶器、椀。口縁端部は小さく外反する。口縁部のみ薄く施釉する。美濃製。ピット16出土。
6. 瀬戸・美濃系、碗。胎土は灰白色。オリーブ色の褐釉を高台脇まで施釉する。18世紀。ピット17出土。
7. 古瀬戸、瓶子。胎土はクリーム色を帯びた灰白色である。肩部には4条の櫛目が施される。外面には明緑灰色の灰釉を施す。13世紀。ピット17出土。
8. 須恵器、碗。胎土は粗砂を含み、黄橙色を呈する。器表は暗赤灰色である。ピット19出土。
9. 瀬戸・美濃系、大鉢。口縁端部は外方に張り出す。胎土はクリーム色を帯びた灰白色で、ややざっくりしている。口縁端部に銅緑釉を掛け流し、全体に浅黄色を呈した灰釉を施す。細かい貫入が認められる。19世紀。ピット29出土。
10. 土釜。胎土は粗砂を多量に含む。色調は赤褐色を呈する。ピット32出土。
11. 瀬戸・美濃系、皿。体部外面のロクロ目は深い。口縁端部は小さく外反すると思われる。灰色味の強い明緑灰色を呈した灰釉を施す。胎土は灰白色である。17世紀。高台内に円錐ピンが溶着する。ピット46出土。
12. 瀬戸・美濃系、天目茶碗。高台部の破片で、胎土は淡黄色を帯びた灰白色で、礫を含む。釉は鉄釉である。18世紀。ピット50出土。
13. 瀬戸・美濃系、皿。胎土はクリーム色を帯びた灰白色で、ざっくりしている。粗い貫入を有する志野釉を、高台部まで薄く施釉する。17世紀。ピット17出土。
14. 瀬戸・美濃系、ひだ皿。腰部はヘラ削り痕が明瞭に残る。底部は内削りで、碁笥底状を呈する。胎土は灰色で、器表に白色の化粧土を施す。光沢のある暗赤褐色の鉄釉を高台内まで施す。見込みと高台内に、輪トチンの跡が残る。16世紀後半。ピット68出土。
15. 瀬戸・美濃系、皿。口縁端部は小さく外反する。高台は非常に薄い作りであるが、釉が溜って厚く見える。胎土は淡黄色である。光沢のある。乳白色の志野釉をたっぷりと掛ける。粗い貫入あり。16世紀後半。ピット70出土。
16. 甕。口縁は短かく「く」の字状に外反する。胎土は細砂を含み、灰褐色を呈する。ピット58出土。
17. 瀬戸・美濃系、皿。胎土は灰白色。高台内まで明緑灰色の灰釉を施し、見込みには呉須絵が描かれる。陶器。17世紀後半～18世紀。ピット71出土。
18. 砥石。2面の、使用による磨滅が著しいため、平面形は三角形を呈する。流紋岩製。
19. 土師質土器、皿。口縁は歪みがある。口縁はあまり開かず、斜め上方に立ち上がる。色調は橙色。ピット76出土。
20. 平瓦。胎土は礫を少量含み、細砂を多量に含む。色調は灰色。
21. 砥石。4面共によく使用されており、糸巻形を呈する。流紋岩製。
22. 羽釜。底部の細片である。外面はヘラ削りを施す。胎土は粗砂含む。色調は灰白色。ピット111出土。
23. 土師質土器、皿。口縁は歪む。端部には黒色の煤状の物質が付着し、付近はやや白っぽく変色している。燈明皿として使用したものと考えられる。ピット108出土。
24. 土師質土器、皿。体部の器肉は厚く、口縁に行くに従い薄くなる。胎土は粗砂を含む。色調は浅黄色。ピット113出土。
25. 須恵器、杯。ロクロ目は明瞭である。口縁は少し歪む。色調は灰色。ピット112出土。



第63図 ピット出土遺物実測(1)

0 1:3 10cm

II 検出された遺構と遺物



第64図 ピット出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物

1. 甕と考えられる。C-10グリッド出土。胴下半から底部にかけての破片である。胴部外面には棒状工具によるミガキが施され、赤色塗彩がなされている。底部も外面にミガキが施されている。内面は剥離が著しいがナデがおこなわれている。内面の色調はにぶい橙色。胎土には粗砂が多く混入する。

2. 甕。D-31グリッド出土。無文で内外面とも棒状工具によるミガキが施され、焼成時の黒斑が残っている。色調は明赤褐色である。

3. 甕。表土層中出土。口縁部の破片である。外面はヘラケズリ後ヨコナデを施し、頸部には5本1単位の櫛歯状工具による簾状文が2段めぐっている。内面はていねいなミガキ。色調は明褐色である。

4. 朝顔形円筒埴輪と考えられる。D-10グリッド出土。調整は外面がヘラナデ、内面が指頭によるナデである。突帯は断面が台形を呈しており、貼付後ヨコナデが加えられている。残存部の上位に透孔がつく。色調は灰褐色を帯び、焼成は硬調で須恵質である。

5. 円筒埴輪。D-10グリッドの出土である。基底部の破片である。外面には1単位10本、15/2cmの刷毛目が下から上に向けて施されている。内面にも刷毛目が施されるが部分的にすり消している。色調は赤褐色。

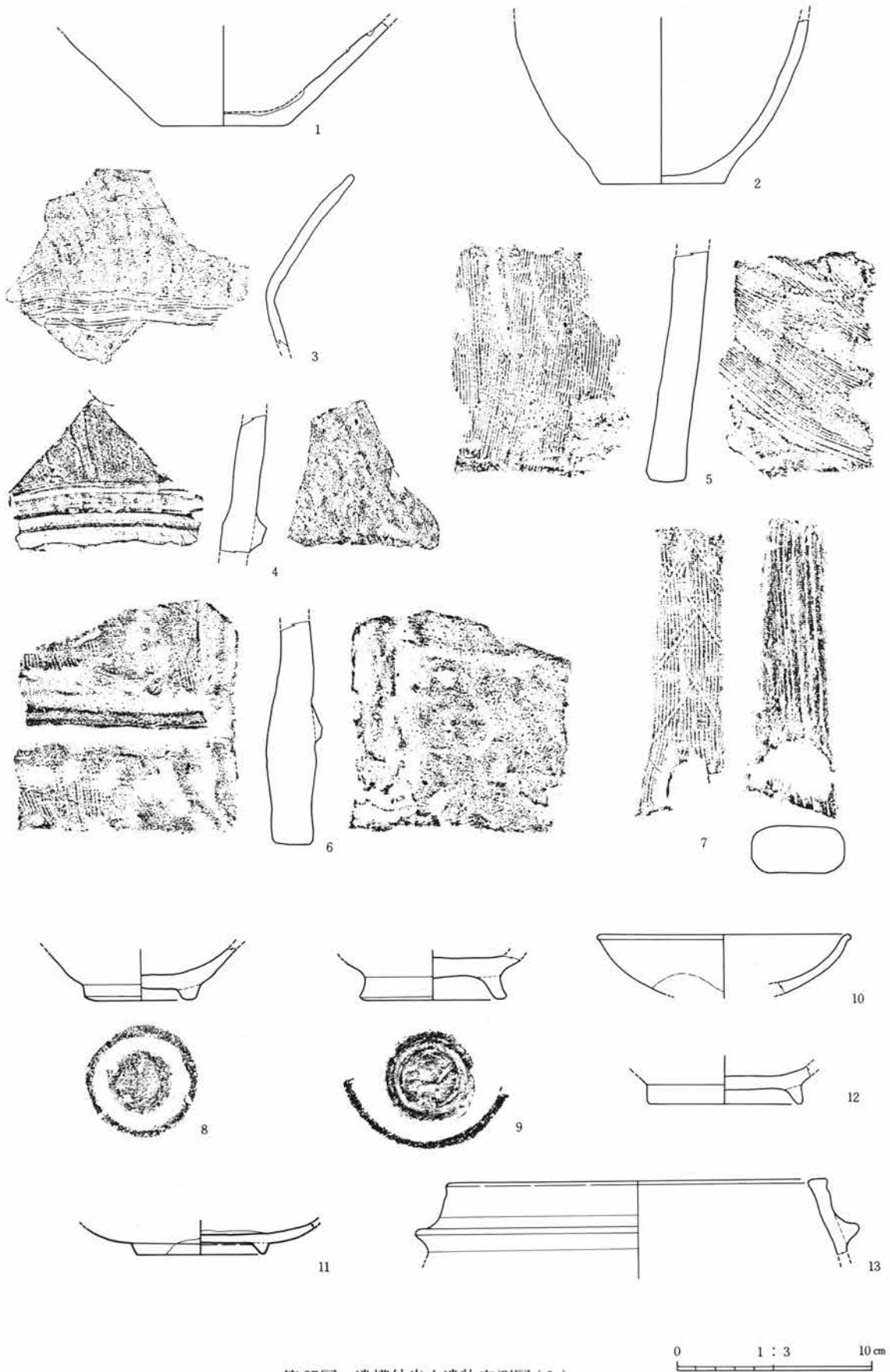
6. 形象埴輪。D-2グリッド出土。家形埴輪の部分と思われる。刷毛目は12/2cmで表面の磨滅により不鮮明である。突帯の断面は低い台形を成し、その両脇は幅2cm程に指頭によるナデが施されている。図示した下端はヘラ切りで平坦である。右側面は断面三角形で裏側に剥離痕が残る。色調はにぶい橙色。

7. 形象埴輪。D-2グリッド出土。消火器形埴輪の上端部と思われるが不明な点が多い。外面には12/2cmの刷毛目が施され、その上にヘラで山形の文様が重ねられている。内面の刷毛目は指頭でナデられている。両面ともに接合痕が残っている。色調は橙色である。

8. 椀。D-11グリッド出土。須恵器。高台はリング状でロクロを使用せず貼付している。底部に糸切り痕を残す。右回転。色調は明褐色。焼成はやや軟調、底部内面にススが付着している。

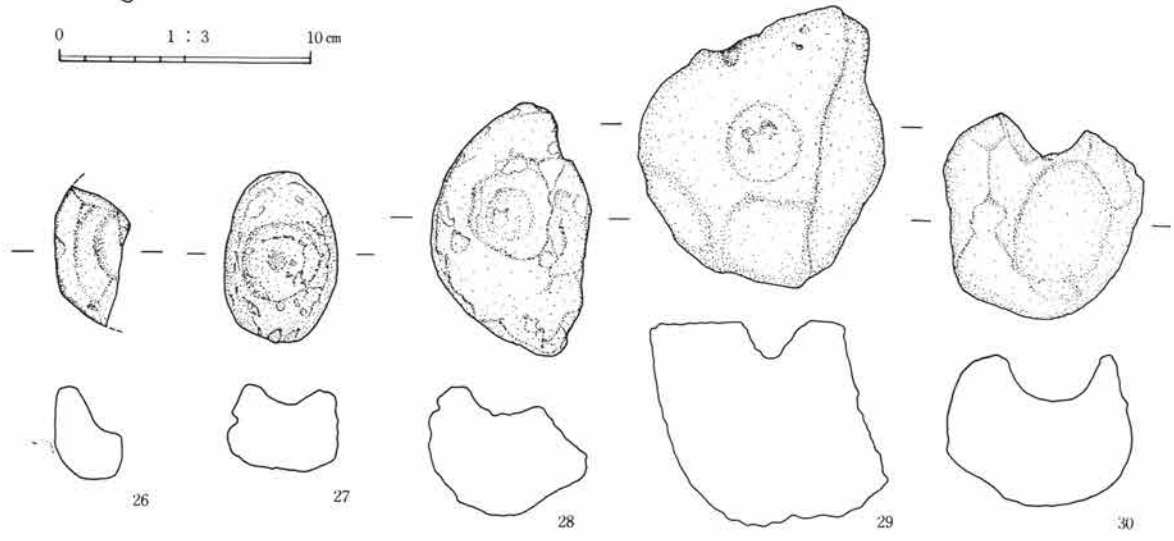
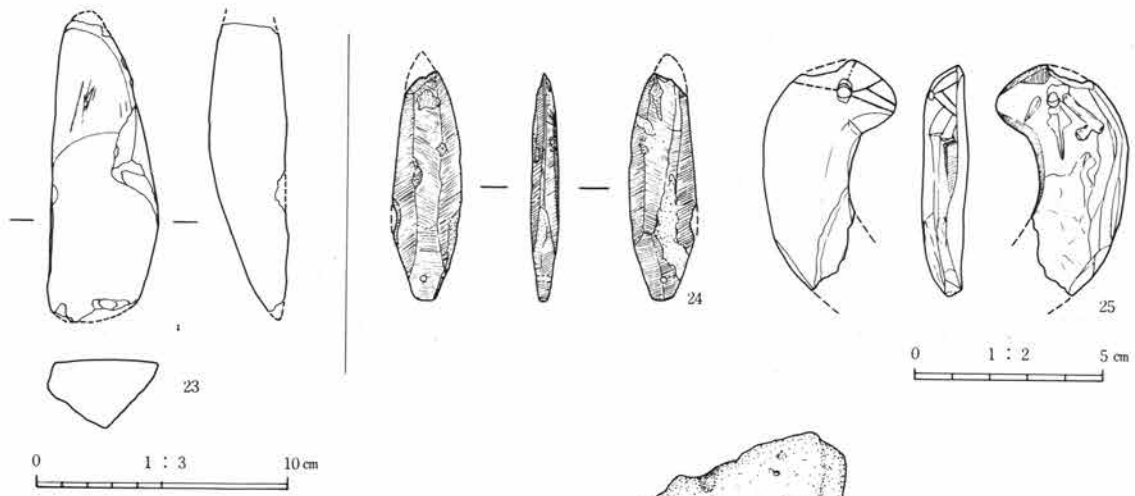
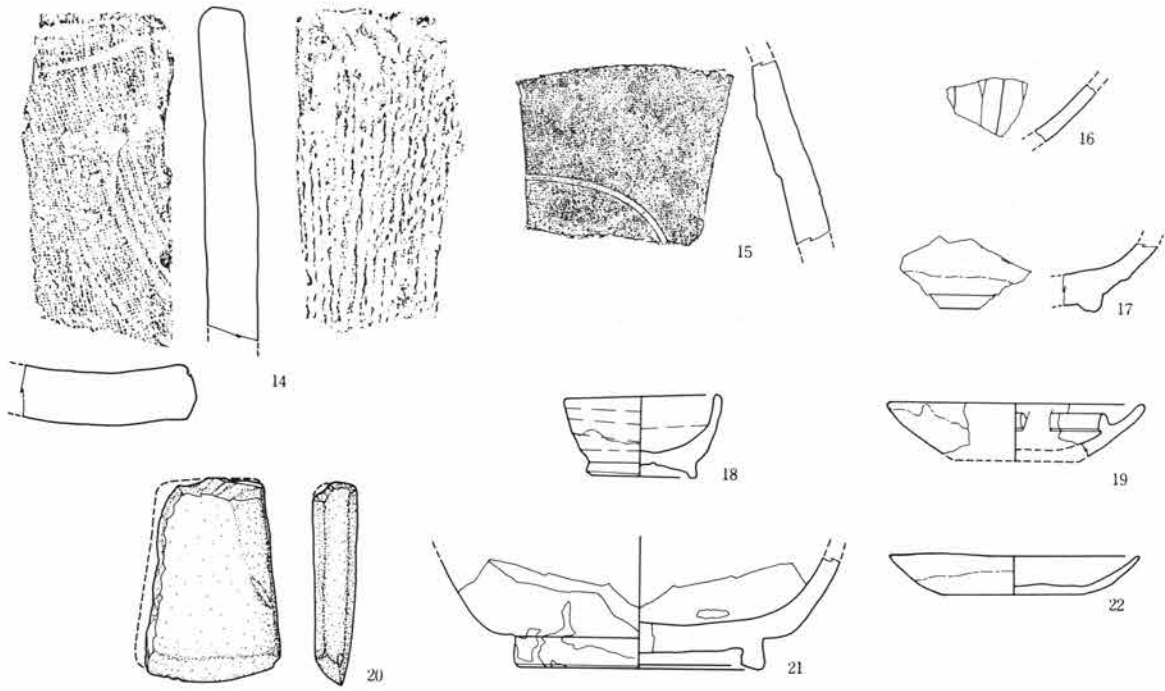
9. 椀。D-2グリッド出土。須恵器。高台は足が長く、糸切り痕は消されている。色調は暗灰色。
10. 杯。D-27グリッド出土。灰釉陶器の口縁部破片である。先端は丸味をもって外へかえる。外面と内面の一部に釉がかかる。
11. 椀。D-2グリッド出土。須恵器の底部。高台は低く、糸切り痕は消されている。外面にスス付着。
12. 椀。D-2グリッド出土。灰釉陶器の底部である。高台の断面は三角形である。
13. 羽釜。D-2グリッド出土。口縁部の破片である。先端は平坦で外側に弱いかえりがある。暗灰色。
14. 瓦。D-2グリッド出土。表面に布目痕、裏面に縄タタキ痕を残す。側面の一端には指頭によるナデ。もう一端にはヘラ切り離し後布目痕が残る。色調は灰褐色。
15. 大甕。D-13グリッド出土。常滑系の陶器と思われる。外面には乳白色の釉がかかっており、ヘラ痕がある。内面にはオサエが残る。15～16世紀。
16. 碗。表土層出土。青磁。しのぎの蓮弁文が施されている。龍泉窯系で南宋時代のものである。
17. 碗。D-16グリッド出土。天目茶碗の底部破片である。ケズリだし高台で器肉が厚い。鉄釉。露台部は暗灰色から暗褐色に近い色調で無地である。13～14世紀の所産で舶載品と思われるが製作窯は不明。
18. 小杯。表土層出土。瀬戸・美濃系で18～19世紀のものである。灰釉がかかるが、外面の下半は露胎部で生地の色調は灰白色である。高台はケズリだし高台である。ロクロ方向は右回転である。
19. 灯明皿。E-18グリッド出土。器高は低く、内面に灯芯を受ける部分がある。茶褐色の釉がかかる。
20. 偏平片刃斧。表土層出土。基部と側面の一端は欠損が著しい。各面ともていねいに研磨されている。石材は緑色岩類である。
21. 大鉢。表土層出土。底部破片と考えられる。瀬戸・美濃系。18～19世紀のものである。茶褐色の鉄釉がかかる。内面に目跡がある。
22. 灯明皿。表土層出土。内面と外面の一部に鉄釉がかかる。底部は回転ヘラケズリ。
23. 砥石。C-17グリッド出土。研面は一面のみで他は原石面。石材は流紋岩。
24. 石製模造品。D-26グリッド出土。剣形品である。鋒の先端は欠損している。茎部に径1mmの穿孔が施されている。石材は滑石である。
25. 勾玉。C-17グリッド出土。片面は偏平で断面形は三日月形を呈する。曲面はていねいな研磨が施されているが、平坦面には粗い工具痕が残る。頭部には径5mm程の穿孔がなされ、これから外縁にむかって丁字を模したと考えられる線刻がある。石材は蛇紋岩。
26. 不明石製品。C～D-15グリッド出土。上面には播鉢状の凹穴がある。部分的にノミ状の工具痕が残っている。側面、下面にも凹穴があったと思われる曲面がある。大型の凹穴をもつ石製品が割れたため、凹穴を移し、割れ口を工具で調整したと思われる。角閃石安山岩。
27. 不明石製品。D-2グリッド出土。一面に凹穴をもつ。石材は角閃石安山岩。
28. 不明石製品。表土層中出土。一面に凹穴をもち、その面は平坦に調整されている。角閃石安山岩。
29. 不明石製品。表土層中出土。凹穴を有する。角閃石安山岩。
30. 不明石製品。E-31グリッド出土。一方に凹穴を有し、その上端もていねいに仕上げている。側面にはノミ状の工具で面取りされている。角閃石安山岩。
31. 古銭。表土層出土。天保通宝（1835～）。裏面には當百（百文にあたる）と花押がある。
32. 古銭。表土層出土。天禧通宝（1017～）。
33. 古銭。表土層出土。寛永通宝と思われる。

II 検出された遺構と遺物



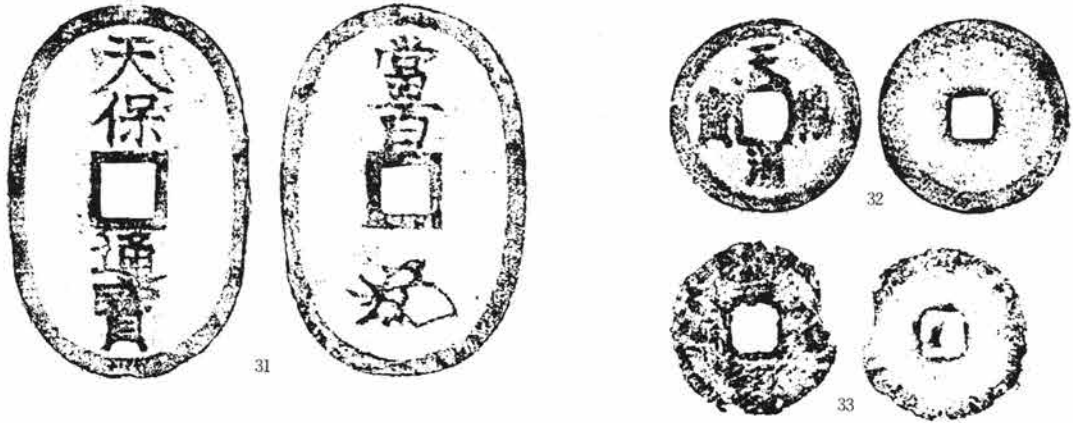
第65図 遺構外出土遺物実測図(1)

2 中世～近世



第66図 遺構外出土遺物実測図(2)

II 検出された遺構と遺物



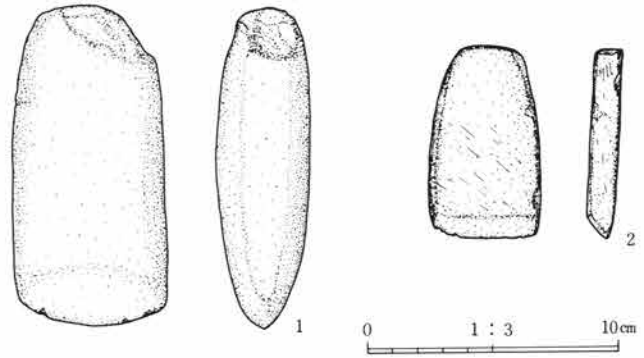
第67図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺跡周辺表採遺物

ここに紹介する2つの石斧は、地元の方が所蔵されていたのを借用し、掲載させていただいたものである。出土地は、発掘区の北側の畑地である。

1. 太形蛤刀石斧。基部には成形時の打痕が残る。刃部は、使用により片べりしている。重さは、45.0kg。変輝緑岩製。

2. 偏平片刃斧。刃部に比して、基部の幅は狭い。平面形は台形を呈する。全体に調整の研磨は、丁寧である。重さは78gを測る。変玄武岩製。



第68図 表採遺物実測図

Ⅲ 発掘調査の成果と問題点

1 遺構について

弥生時代中期後半の遺構

4号溝・9号溝・18号土壙からは弥生時代中期後半の竜見町期に属する土器が出土しており、この時期の遺構であると考えられる。各遺構の位置や方向を見ると、ほぼ等高線に沿っており、本来は同一の溝であった可能性も考えられる。

上記の3遺構以外で、竜見町期に属する遺物が出土しているのは、3号溝・2号溝などである。しかし、これらの遺構はいずれも4号溝・9号溝・18号土壙と重複・もしくは近接している。また出土遺物はすべて細片であり、混入したものと考えられる。したがって、4号溝・9号溝・18号土壙の南には、竜見町期の遺構は存在していなかったといえる。これらの遺構は発掘区の北壁に沿って位置しているため、北側の遺構の広がりを確認することはできなかった。しかし発掘区北側の畑から、弥生時代の所産と思われる磨製石斧の完形品（第68図1・2）が表採されており、中期頃の遺構の存在が推定される。

4号溝・9号溝・18号土壙を同一の溝と考えると、溝は等高線に沿うように弧を描いて発掘区外に延びる。溝の南側（弧の外側）には同一時期の遺構が存在せず、北側（弧の内側）に遺構の存在が推定される。以上の状況から、4号溝・9号溝・18号土壙は、環濠集落の濠の1部と考えられる。

県内において竜見町期の環濠集落は、清里・庚申塚遺跡が報告¹¹⁾されており、浜尻遺跡ではその可能性が示唆¹²⁾されている。両遺跡は、共に微高地上に立地している。このように立地から考えても、本遺跡の溝を環濠と考えることに無理はないであろう。

中・近世の遺構

溝・堀

本遺跡は並榎城跡の1部にあたり、内堀（5・6号溝）が検出された。この堀は、現在の地形にもその痕跡が認められ、位置の推定がなされていた³⁾。今回の調査は範囲が狭く、線路に近接しているため、1部を完掘したにとどまった。このため、時期を推定できる資料は皆無である。2号溝は本文でも述べたように、底近くに15世紀末～16世紀と考えられる土壙墓（5号土壙墓）が構築されている。これにより、2号溝は15世紀末～16世紀には、既に機能しておらず、数10cmの土砂が堆積していたと考えられる。これは、文献から考えられる並榎城の築城時期（16世紀後半）と一致しない。7号溝は底の確認すらできない状態であったため、形状・規模・時期は不明である。7号溝に近接して、15世紀後半に廃棄された5号井戸と18世紀後半に廃棄された4号井戸が構築されている。7号溝は、埋土や出土遺物から18世紀後半以降の掘削時期は考えられない。したがって7号溝の時期は、15世紀中頃以前、もしくは15世紀後半～18世紀中頃の時期が与えられる。7号溝の上端幅が、2号溝と同じであることを重視すれば、2号溝と同じ時期と考えることも可能である。また、位置を重視すれば、並榎城に伴うとも考えられる。

井戸

本遺跡からは6基の井戸が検出されているが、このうち完掘できなかったのは、3号井戸と6号井戸であ

Ⅲ 調査の成果と問題点

る。このため、この2基については、時期は不明である。

1号井戸は、底から7.5m付近の埋土中に、多量の浅間A軽石を含んでいる。これより下位の埋土中からは、18世紀代の碗が出土しており、年代を考える資料となる。また、底から80cmの埋土中より漆器碗と桶の側板が出土している。桶の側板は、小片のため図示していないが、幅は狭い。

中世における本製容器は、曲物が一般的であり、⁽⁴⁾絵巻物にも多数描かれている。桶は鎌倉時代後期頃の「直幹申文絵詞」⁽⁵⁾が初見である。しかしこの絵詞に描かれている桶は、側板の幅が広く、タガも竹ではない。このタガは、曲物の廻し側板と同じようである。⁽⁶⁾室町時代前期～中期頃の絵巻物には、今日の桶と同様、側板の幅が広く、タガの幅や場所も狭く、3ヶ所につけられている桶が散見できる。⁽⁷⁾しかしその数は、曲物に比べ、非常に少ない。⁽⁸⁾加えて桶の制作技術は関西で発達し、関東以北ではやや遅れてその技術が導入されたといわれている。このため、日常生活に広く使用されるのは、江戸時代に入ってからのことである。これにより、1号井戸の廃棄年代を17～18世紀後半に推定できる。これは、漆器碗の特徴と矛盾しない。

2号井戸は、底に接して多量の浅間A軽石を含む埋土が認められた。これにより、18世紀後半の廃棄が考えられる。この年代は、埋土上部出土陶器が19世紀代であることから考えも妥当である。

4号井戸においても、浅間A軽石を含む埋土が1m程認められ、この埋土中から18世紀代と18世紀後半の陶器が出土している。底から10cmの埋土中からは、桶の底板とタガと思われる竹片が出土している。軽石、陶器、桶から18世紀後半頃の廃棄年代が考えられる。

5号井戸は、底に50cm程土が推積していたのみで、その上はすべて礫で埋められていた。この礫中から、第V期前半の常滑大甕が出土している。また礫の最下部からは、14世紀中頃～15世紀中頃の製作と考えられる板碑が出土しており、唯一中世に属する井戸である。

以上、各井戸の年代を推定したが、15世紀代1基、18世紀代3基という結果となった。これにより、この時期、付近での居住が考えられる。

ピット

本遺跡からは、並榎城跡本丸部分を中心に、多数の柱穴と考えられるピットが検出されている。しかし、ピット数が多く、密に分布しており、発掘区も狭いため、掘立柱建物の規模や配置を知ることはできなかった。出土遺物から考えると、近世に属するピットも多数存在すると考えられる。

小 結

溝や井戸などについて簡単にまとめたが、今回の調査では並榎城の内堀が1部完掘できたのみであり、中世の井戸も1基検出されたにすぎない。このため、遺構から並榎城に関する情報を得ることは困難である。加えて、新たに発見された2号溝と7号溝の時期や性格も明確ではなく、並榎城との関連も不明である。

土壙墓は5基検出されているが、土器が出土しているのは5号土壙墓のみである。5号土壙墓は、土器から15世紀末～16世紀の年代が考えられる。土壙墓は、一般に単独で存在することは少なく、群在する。また、出土古銭中最も初鑄年代の新しいのは、永楽通宝の1408年である。以上から、5号土壙墓以外も、15世紀末～16世紀に近い時期が考えられる。

江戸時代では、18世紀代の井戸が3期確認され、18～19世紀の柱穴と考えられるピットも検出されている。18～19世紀には、この地での居住が考えられる。

本遺跡は遺構から、15世紀末以前は2号溝と5号井戸が存在し、15世紀末～16世紀にかけて墓地となっていると考えられる。その後、16世紀～17世紀代は不明である。18世紀～19世紀には、居住が考えられる。

2 遺物について

中・近世の遺物について

本遺跡から出土した中・近世の遺物は、遺構に伴う良好な資料がほとんどなく、中世遺物はその量も少ない。このため、並榎城の築城時期や存続期間を、遺構から捉えることは困難である。したがって、ここでは土師質土器皿や陶磁器などの出土遺物個々に、それぞれの編年観により年代を与え、各時期における遺物量の変化を求め、本遺跡の動態を考える一助としたい。

土師質土器皿・内耳土器

県内の土師質土器皿の変遷については大江氏の論考⁽⁹⁾があり、A～Dの4系列に分類され、それぞれに年代が与えられている。

本遺跡から、土師質土器皿は14個体出土している。これらのうちで最も古いのは、27号土壇出土の第60図17である。これはB系列の新しい段階に位置付けられ、15世紀の中頃と考えられる。他の13個体は、すべてD系列に属する。D系列は、前出のタイプに15世紀末～16世紀、後出のタイプに16世紀代の年代が与えられている。4号住居跡第18図9、2号溝第24図56、6号井戸第47図4、5号土壇墓第53図1～3、ピット第63・64図19・23・24の9個体は、前出のタイプである。後出のタイプは、6号井戸第47図5～7、12号土壇第57図6の4個体である。

内耳土器には鍋形と焙烙形があり、前者は6号井戸第47図9・10、後者は7号溝第34・35図50～52である。鍋形内耳土器は、近年の変遷観⁽¹⁰⁾によればいずれも平底化する段階に属する。この段階の下限は、富岡市稲荷森遺跡2号溝出土遺物により、16世紀末頃に求められる。一方、前出の鍋形出現段階の下限が、長楽寺1号井戸出土遺物により15世紀末以前とされている。これにより、本遺跡出土の鍋形内耳土器の年代を16世紀頃に求めることができる。

7号溝から出土した3個体の焙烙形内耳土器は、内耳の下端が底部に着けられている。このようなタイプは、現在江戸時代に位置付けられている⁽¹²⁾。また、図示していないが、底部に内耳の接合痕を有する小破片が、2号井戸埋土中から18～19世紀の陶磁器と共に出土している。したがって、3個体の焙烙形内耳土器は江戸時代に属すると考えられる。これは7号溝出土遺物の傾向と矛盾しない。

舶載陶磁器

本遺跡からは細片ではあるが、4個体の舶載陶磁器が出土している。これらのうち3個体が中国青磁で、1個体が中国陶器である。

青磁はすべて龍泉窯系で、6号井戸第47図3、遺構外第66図16、8号溝第36図6から各1個体出土している。6号井戸第47図3は、鎗蓮弁文碗の口縁である。胎土は完全に磁化しておらず、灰色を呈している。釉調は透明な、青味のある緑色である。遺構外第66図16は、鎗蓮弁文碗の体部である。釉は透明感がなく、灰色味を帯びている。6号井戸第47図3と遺構外第66図16は共に、史跡大宰府の分類による龍泉窯系Ⅰ-5b類に類する。年代は南宋で、13世紀である。8号溝第36図6は、碗の底部である。見込みには圈界と花文のスタンプがかすかに認められる。釉は厚く、大粒の気泡が目立つ。色調は透明感のない、青味のある緑色である。釉を高台内まで施した後、中央を残して釉を輪状に削り取っている。高台は幅広く、畳付外面を面取りする。元～明代、14～15世紀⁽¹⁴⁾に属すると考えられる。

遺構外第66図17は、本遺跡中唯一の中国陶器である。胎土は灰色味を帯びた黒色で、気孔が目立つ。高台

Ⅲ 調査の成果と問題点

や高台脇は、胎土中の鉄分によって暗赤灰色をしている。高台は削り出しである。南宋～元代、13～14世紀と考えられる。

板 碑

1号井戸出土の板碑は、石材として黒色片岩（緑泥片岩に類似する）を用い、主尊には阿弥陀一尊種子（キリーク）を配し、図様化（簡略化）された蓮座が付く。二条線は刻まれていない。右半部及び下部（根部）をもその有無さえわからない。残存部分から推定する全長は約40～50cm程と思われ、小型の板碑である。この板碑の造立年代については、二条線が刻まれてないこと、蓮座が簡略化されていること、種子が竹彫り（断面がU字形）であること、小型であることなどから考えて、14世紀後半から15世紀頃の造立であろうと推定される。

5号井戸出土の板碑は、石材として緑色片岩（緑泥片岩に類似する）を用いている。上部及び下部を欠損しており、また、磨滅が著しく、紀年銘は判読できない。主尊は不明であるが上部中央に蓮座が残るため、一尊種子であることがわかる。蓮座は図様化（簡略化）されており、竹彫り（断面がU字形である。）残存部分から推定する全長は1m弱と思われる。造立年代については前述の板碑とほぼ同時期の14世紀後半から15世紀末頃と推定される。

本遺跡の井戸より出土した2基の板碑は、ほぼ同時期の造立と推定され、碑面の磨滅が著しい点から、かなりの長い期間造立され、風雨にさらされた後、井戸に埋没されたものと考えられる。板碑の造立から推察されることは造立者の存在である。板碑の造立には、経済的背景・仏教思想が不可欠であり、造立者はおのずと土豪階層の人間達に限定される。このことから、本遺跡の付近にはこの土豪階層達が居住し、仏教文化及び中世の在地文化の一端を担っていたことが推察される。

国産陶磁器

国産陶磁器個々の時期については、遺物個体説明で述べているため省略し、産地別に見た陶磁器の動態について簡単にふれたい。

本遺跡出土遺物中最も古い陶器は、13世紀の古瀬戸瓶子（ピット78第63図7）である。14世紀に相当するものは出土していない。15世紀では5号井戸第46図2の常滑焼大甕がある。16世紀では瀬戸・美濃系陶器が4個体出土している。これらは16世紀でも後半に編年される。17世紀に入ると、従来の瀬戸・美濃製品に加えて伊万里系の磁器（7号溝第32図8）が出土している。18世紀になると、陶磁器の出土量は急激に増加している。瀬戸・美濃製品は前代の約3倍にあたる16⁽¹⁵⁾個体、伊万里系陶磁器19個体、唐津系陶器4個体、京焼系陶器1個体の計43個体が出土している。この中で最も増加の著しいのは、全体の約53%を占める肥前陶磁器である。19世紀になると、前代に最も量が多かった肥前陶磁器は姿を消している。これに対し、瀬戸美濃系陶器は、前代とさほど変化はない。

19世紀代の陶磁器の中で、特筆すべきものに第56図3の皆沢焼がある。第56図3は高高台碗⁽¹⁶⁾の底部で、釉は白濁し、器面には光沢がある。文様は樹木の下部にあたると思われる⁽¹⁷⁾。見込みにも呉須による文様が認められるが、帆掛舟ではないようである。皆沢焼は勢多郡富士見村大字皆沢に窯跡があり、文化10～12年から天保末年頃までの操業が考えられている⁽¹⁸⁾。第56図3の年代は、この約30年の間に求めることができる。近世の小規模な地方窯は消費地の不明なものも多く、皆沢焼も例外ではない。現在皆沢焼の消費地における報告例はなく、今回の報告が初例である。これにより、これまで不明であった皆沢焼の消費地の1つが明らかとなった。また、出土位置は異なるものの、瀬戸・美濃という大窯業地の製品と共に出土しているため、これらとの量的な比較も可能である。

小 結

本遺跡出土の中・近世遺物を、時期や産地別に整理すると表3になる。この中で最も古いのは、13世紀代の古瀬戸と龍泉窯系青磁碗である。13～14世紀では、舶載天目茶碗が1個体出土している。天目茶碗は青磁碗と共に、抹茶に使用されることが多い。当時喫茶の風習をしていたのは、禅僧か武士階級層であり、遺構の存在はないが、このような階層の存在を示唆している。15世紀では、常滑焼大甕の口縁部が出土している。常滑焼は、第Ⅴ期の前半に属する。関東地方では、この時期に常滑焼の出土量は減少し、城郭などの貯蔵用に使用されることが多くなる。16世紀では、土師質土器皿6個体と内耳土器2個体が出土している。後半では、4個体の陶器が出土しており、このうちの1個体は天目茶碗である。この時期は、内耳土器が出土していることから、付近での炊飯が考えられる。18世紀になると遺物の出土量は急増し、19世紀にはやや減少している。18～19世紀の陶磁器は、いずれも庶民の日常雑器である。この時期の陶磁器の多くは、溝や井戸の埋土中から出土しているが、いずれも破片が大きく、まとまって出土している。したがって陶磁器の多くは日常使用の破損による一次的な廃棄であると考えられる。このことは、井戸やピットの存在から考えても妥当である。18～19世紀には、一般庶民の居住が考えられる。

3 ま と め

先にも述べたように、今回の発掘区は範囲が狭く、線路に近接していたため、調査に多くの制約を受けた。弥生時代中期後半の環濠の1部と推定した溝は、南の1部を確認したにすぎず、確証はない。また、並榎城に関しても、本丸と二の丸を横断するように調査できたものの、トレンチ状の発掘であったため、内堀の1部を確認し得たにすぎず、時期も判明しなかった。このように、今回の調査で明確にし得たことは少なく、今後にも多くの問題点を残すこととなった。

陶 磁 器									
	瀬戸美濃系	伊万里系	唐津系	常滑系	京焼系	皆沢焼	不明	舶載陶器	計
13	1 ※19							2	3
↓								1	1
14								1	1
↓									
15				1					1
↓				1					1
16	4 ※20								4
↓									
17	6	1							7
↓	3								3
18	16 (3)	19	4		1				43
↓	3 (2)	2					4		11
19	10 (2)					1			13
計	50	22	4	2	1	1	4	4	88

※は註を参照

土師質土器皿・内耳埴・板碑			
	土師質土器	内耳埴	板碑
13			
↓			
14			
↓			2
15	1		
↓	9 ※21		
16	4 ※22	2 ※23	
↓			
17			
↓			
18			
↓		3 ※24	
19			
計	14	5	2

Ⅲ 調査の成果と問題点

註

- 1 文献30
- 2 文献31
- 3 文献22
- 4 文献34、文献35
- 5 文献37
- 6 器高が低く、口縁と底部の径も等しく、曲物に似ている。
- 7 文献37、「福富草紙」や「石山寺縁起絵巻」第四巻などに描かれている。
- 8 平安時代末～室町時代初期の絵巻物に、曲物は99例描かれているが、桶は2例のみである。
- 9 文献38
- 10 文献40
- 11 この年代は、同じ井戸から出土した3個体の土師質土器皿の年代と一致する。
- 12 文献41、文献42
- 13 文献43
- 14 文献44
- 15 ()内の数字は、産地や時期がやや不明確なものである。
- 16 伊万里では広東碗、美濃では太白茶碗と呼ばれている器形である。ここでは文献45の呼称に従った。
- 17 文献45の図版—1—1の実測図の下部に相当する。
- 18 文献45
- 19 古瀬戸瓶子である。
- 20 この4個体は16世紀後半のものである。
- 21 これらの内3個体は5号土塚墓出土である。
- 22 これらの内1個体は6号井戸出土で、内耳土器と伴出している。
- 23 同時期と考えられる土師質土器皿と伴出している。
- 24 図示した3個体以外に小破片であるが、同様の内耳土器が2号井戸から出土している。

IV 附章 並榎城址

1 史的考察

明治八年六月五日、大政官達によって編集され、内務省地理局に提出された上野國郡村誌控（群馬県所蔵）の巻八、上並榎村の項に「古跡、並榎壘跡村ノ西方字南ニアリ南ハ旧字郭ト云最高地東西式町拾間南北式町貳拾間西ハ烏川ニ臨ミ（水流変シテ今烏川ヲ距ルニ三町詳）五郭稜ヲナシ頗ル要害、壘主不詳和田記日地和田衆並榎將監並榎庄九郎等城外ニ居ルト因是觀之並榎氏壘砦ヲ並榎ニ築キ之ニ居リ以テ和田氏ニ属シ常ニ盛衰ヲ俱ニス天正中和田氏ニ先チ滅亡（天正九年七月上杉輝虎和田城ヲ攻ムルヤ並榎氏和田記ニ見ユ尔後見ヘス恐クハ此役戦死セシナルヘシ）壘亦廢スル來土人往々兵器ヲ掘獲スト云今ハ則民宅或ハ畠トナリ僅ニ其墟ヲ觀ルヘキノミ」とあるが、この内、和田記日云々というのは同記に、「一同九年七月、越後輝虎入道謙信和田ノ城ヘ発向…中略…和田馬乘衆申ハ新後閑左京亮、柴崎高井左衛門、横手住新井若狭、館ノ佐藤治部少輔、並榎將監、並榎庄九郎、野付囚獄、野付治部左衛門、大川原右馬助、堀籠新左衛門、高尾佐渡守、武右近、三沢丹後守、細谷右衛門、伊藤又右衛、川端玄藩、塚越市作、此外矢中七騎ト云ハ…中略…以廻文ヲ被召寄武具持參此間城内ヘ相告テ籠城…以下略」と記されているのを指すのである。

同九年は永禄九年のことで、その年九月二十七日には箕輪が落城するのである（長年寺の受連手記等による）。それに先立ち上杉輝虎が和田城を攻めたことを証する資料には次のものがある。

（白川證古文書）

其己來無差儀無音之条意外候然者去十九廐橋著城依之小田口へ早速可被罷越儀種々申理候上者過半落居之分候間西上野各類而惘望付者廿七越河和田之地被取詰由承候先以無餘儀候雖無申迄候被任誓約之筋目彼地落居候ハ急速小田へ被取越様御諷諫任入計候尚以爰元爲可相持重而小貫佐渡守差越候萬々期後信之時候 恐々謹言

正月三日 義昭

築田中務大輔殿

これは佐竹義昭から関宿城主築田政信への書状であって、上杉輝虎に、和田城を落したらば、すぐ常陸小田城の方へ向うようすすめてくれとの文意である。

上杉年譜によれば輝虎が小田城を攻めたのは永禄七年であるから、この書状はその年正月のもので、前年（永禄六年）閏十二月二十七日、輝虎が和田城を攻めたことが確実である。但し、攻略できず常陸國へ転進したのである。

もう一度は永禄日記（永禄八年、長楽寺の義哲が書いたもの）の八月二十三日のところに、「自埴生関宿へ南動ト注進ニ附而和田之陣俄ニ引ケル也トキコユ」とあって、この時は、北条勢（南）が、羽生（埴生）と関宿へ攻め寄せたので、和田を攻めていた上杉勢が撤退したというので、多分関宿へ向ったのであろう。和田記中の次の信玄感状の日付がこれに近いが、七月か八月一日頃のことが二十三日に義昭の許に聞えたというのは、遅すぎる感がある。この時、輝虎は上州に居なかった。

（和田記）

今度被籠城之处ニ被攻越兵剛敵無寸時苦勞之由誠以難尽紙面ニ候此上無ニ可盡粉骨事專一候随兩種送之猶可在口上者也 恐々謹言

IV 附章 並榎城跡

八月二日 信玄（花押）

和田兵衛大夫殿
横田十郎兵衛殿

この年二月中西上州に進攻した信玄は、三月撤退しあのであろう。
輝虎、和田城攻書の資料はもう一つある。

（謙信公御代御書集四）

今度和田城以越衆取詰候処和田喜兵衛令調儀相違剩城下江被立出無ナ方仕方ニ付昨九日我等手
討ニ仕候首於烏川令梟首畢依茲今朝外張攻破候砌我等自身鎧ヲ合数度之場國衆驚目候此節宇佐
美駿河守鴻巣表相働候間貴老申合早々鹿橋迄馳参尤候忒田北条申合近日発向仕軀ニ候我等弥和
田城下近陣ニ候間不可有油断候謹言

五月十日 謙信

太田美濃入道殿

謙信から太田資正宛になっているが、資正が入道したのは永禄五年九月頃であるから、これはそれ以後の
ものである。また宇佐美駿河守定満は、永禄七年七月五日、長尾政景と共に越後國南魚沼郡の野尻池で水死
したのであるから、この書状は永禄五年か六年の五月十日付でなければならない。

五月に輝虎が上州に在陣したのは永禄六年だけであるからこの書状は永禄六年五月十日付、上杉謙信から
太田資正（三楽斎）に和田城攻書のことを詳報し、資正を鹿橋へ招いたものである。

関八州古戦録では、永禄五年仲夏の事として、この文書と同じ内容を伝えている。しかし、月日を明記し
ていないのは、該文書を原資料としたものでないと考えられよう。

ところが、発翰者名が「謙信」となっていることは、「謙信公御代御書集」かその原典となった「下總田
事三所取輝虎書状寫」の書寫に誤りがなかったとすれば、この文書は古戦録に合せて作った偽文書というこ
とになる。

輝虎が謙信と署名するようになるのは、元亀元年（一五七〇）十一月からだからである。

これらにより、輝虎の和田城攻書は、永禄六年（一五六三）閏十二月二十七日と、永禄八年（一五六五）
七月の二回で、後者が和田記の内容に近い。

また、和田籠城の人々の名は、甲陽軍鑑、高崎近郷村々百性^{〔77〕}由緒書、清水寺本堂棟札等から摘記された
ものと推定され、籠城する筈のない反町大膳亮や新井勘解由らまで加えられている。従って並榎將監、同庄
九郎の和田籠城についても、ましてその時戦死したという推定についても史料として取り上げるには不十分
で、むしろその前段にある「壘主不詳」として取扱うべきである。今はその必要もあるまいが並榎氏は武蔵
児玉党の阿佐美氏であるという。

良好な史料とは言い難いが「永禄元年正月二十九日改め長野業政家臣録」というのに、飯塚左衛門丞忠則、
並榎の砦居住」と記されている。

明治十五年、土屋補三郎著の「更正高崎旧事記」、新町の項に「飯塚氏ノ事」として次の系図をのせ

「飯塚但馬守（根小屋城主、仕上杉家）——常仙（和田ニ帰農）——女（角田主水妻八左衛門祖）
——其（大炊助）」

○老平（補三郎号）云、…中略…飯塚継子ナクシ断絶ス。…中略…下並榎村常仙寺ハ飯塚氏ノ開
基古位牌ニ常仙庵主トアリ。又常仙ノ祖ハ飯塚村飯塚氏ナルベシト思ハル。」と推定している。飯塚

忠則の並榎の砦は、今、常仙寺となっている下並榎の砦（付図1）であろう。また根小屋城主とあるのは片岡根小屋城ではなく、飯塚城（付図2）の根小屋居住を誤伝したのでであろう。飯塚忠則も並榎城主ではなかったこととなる。

並榎城は、下之城、大類城、飯塚城と共に和田城を半円状に囲む外堡の一つで、その構造から考えれば、天正年間、北条所属の和田信業の築城（或は改修）ということになる。

これも良い史料ではないが、高崎市下小埜町の岡田伊勢松氏方にある「上毛古城記」（天保十一年…一八四〇頃の著）の中に、上並榎、和田右兵衛佐業繁とあるのは、並榎城が和田氏の築いた番城であることを示したものであろう。右兵衛佐は右兵衛大夫の誤りで信業が信輝の通称、業繁は兵衛大夫と自称している。但し、業繁も正しくは右兵衛大夫だったらしい。

2 遺構の観察

並榎城は、烏川とさ川との合流点で、両川の間にはさまれた烏川崖端に築かれている。今、國鉄信越線が城址を東西に貫き、烏川鉄橋を渡って碓氷峠に向っている。

本丸と二の丸とは囲郭構造を示すが、最初は本丸、二の丸、三の丸を南北に並べた並郭式の崖端城だったと思われる。主要部は平城だが、崖端部には山城格の腰郭を備えていたと推定されるからである。

本丸は南部、やや西寄りにあって、東西50m、南北100mの長方形で、異形の観があるが、元島名城でも昭和五十三年の発掘調査で、中心郭は50m四方であったことがわかるなど、詰めの郭にはこの程度のものもあったのである。南部の崖端には腰郭があり、本丸虎口（門）は北部にあって西面していたと思われる。昭和五十九年夏の発掘調査で東西両側の堀は、上幅7～8m、深さ4m程の薬研型空堀であるから交通壕ではなく、時には底部に水が溜ったようである。

土居は高さ2m程のものが北西部に残っていたが近年崩されてしまった。

東西の堀から東に向って、幅5～6m、深さ3m以上に及ぶ空堀が、100mのびてさ川に達し、二の丸東西部に別郭を分けていた。別郭は南北80m程で南三分の一は崖端部の腰郭になっていたと推定される。

別郭を含む二の丸は、本丸の東北西を囲み、東西230m、南北は最大170mの大郭で、西の崖端には腰郭があったらしく、東のさ川は深く窄入して強力な要害となっている。東北部には高さ2.5mの土居が断続100mに涉って残り、西北部の空堀跡は100mあまり辿ることができる。二の丸虎口は、その空堀の東端の現道路の所と推定される。

三の丸は、二の丸の北にある東西200m、南北70mの長方形の郭で、西の岸端には腰郭が構えられていたことであろう。北面東半と東面をかこんでいるさ川は、雁木折となり、それぞれの部分が直線点であり、屈折部は直角であって、内側には高さ2m以上の土居残片も見られて、人為的要素が濃厚に認められる。その上北岸に旧河跡と思われる窪地もあって、城の堀に導入したさ川の水が堀底を穿って現在の深い水路を形成したのであろう。さ川の東対岸の字名を「滝谷」というのは、さ川の烏川に注ぐ所が滝状だったことを證している。この川底の低下した原因の一つは、三の丸東北角でさ川に結びつけられた長野堰放水路によると考えられる。

三の丸北面堀跡の西半は、現道路の所と推定され、そこに追手虎口が設けられていたことであろう。今は継続しているが、そこから北に向う道路を200mあまり辿ることができる。

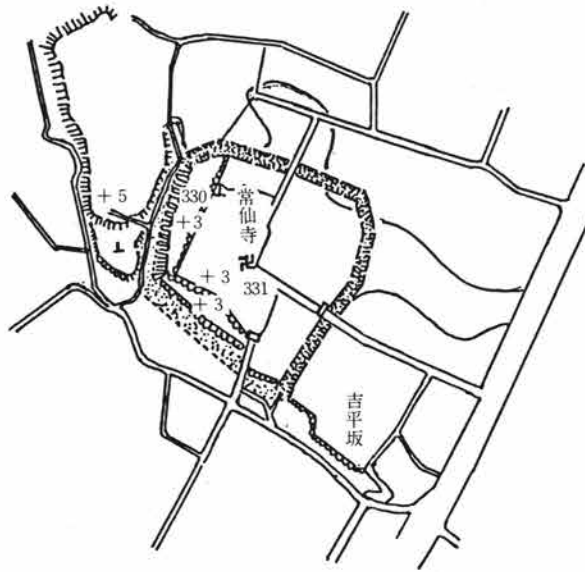
このように、並榎城は、南北230m、東西も230mの城域を占めているが、虎口跡が少なく、境目城の特徴を示す極陰の縄で、持久防禦を任務としていたことがわかる。

Ⅳ 附章 並榎城跡

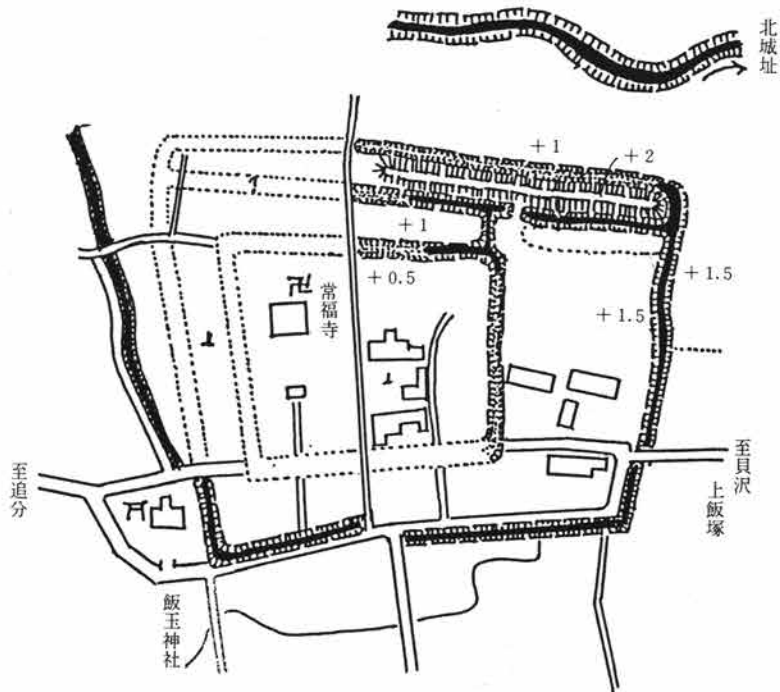
昭和五十年の発掘調査で、追手の北330mに、東西300mの遠構堀が発見された。その堀は、さ川から西の崖端まで一直線につづく。東部三分の二は現存し南側（内側）には、高さ2mの土居が盛られている。

さ川と遠構え堀及び河崖によって護られた所には、護國寺と日枝神社が並び、城下町の前身である根小屋のあったことが明らかである。しかし、現在の字宿を東西に通る旧室田街道は江戸時代のものであり、北部を東西に貫くいわゆる室田新道は明治末年の開通で、これらによる変貌で旧態は全く存在しない。

和田城の直衛外堡である下之城、大類城、飯塚城（北城）にも、それぞれ根小屋が付き、近世城下町へ発展の萌芽が見られ、中世環壕遺構と共に、中世社会構成とそれにつづく近世集落の考察に重要な研究主題となることであろう。（付図3、付図4）



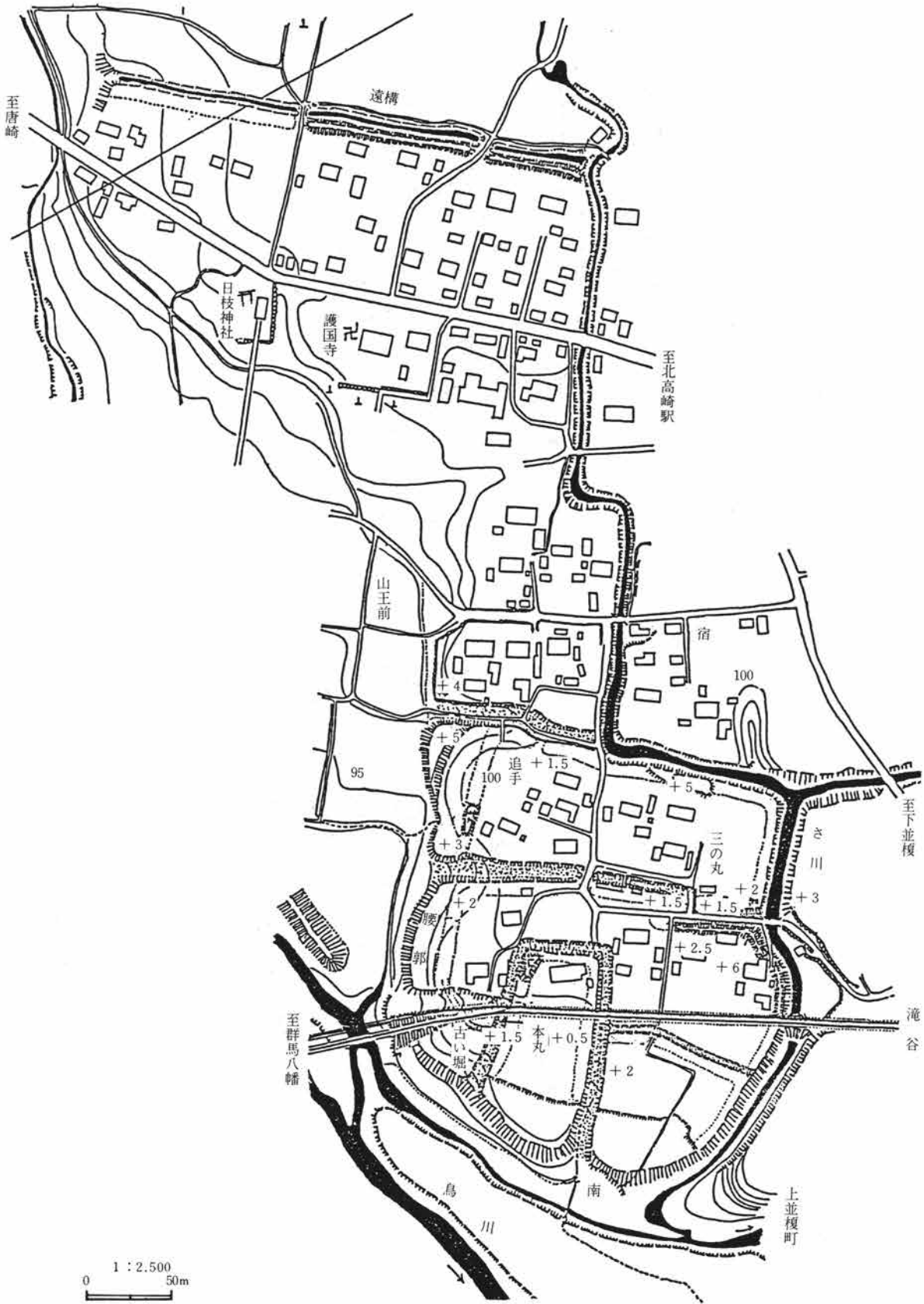
付図1 下並榎の砦



0 1 : 2.500 50m

付図2 北城址

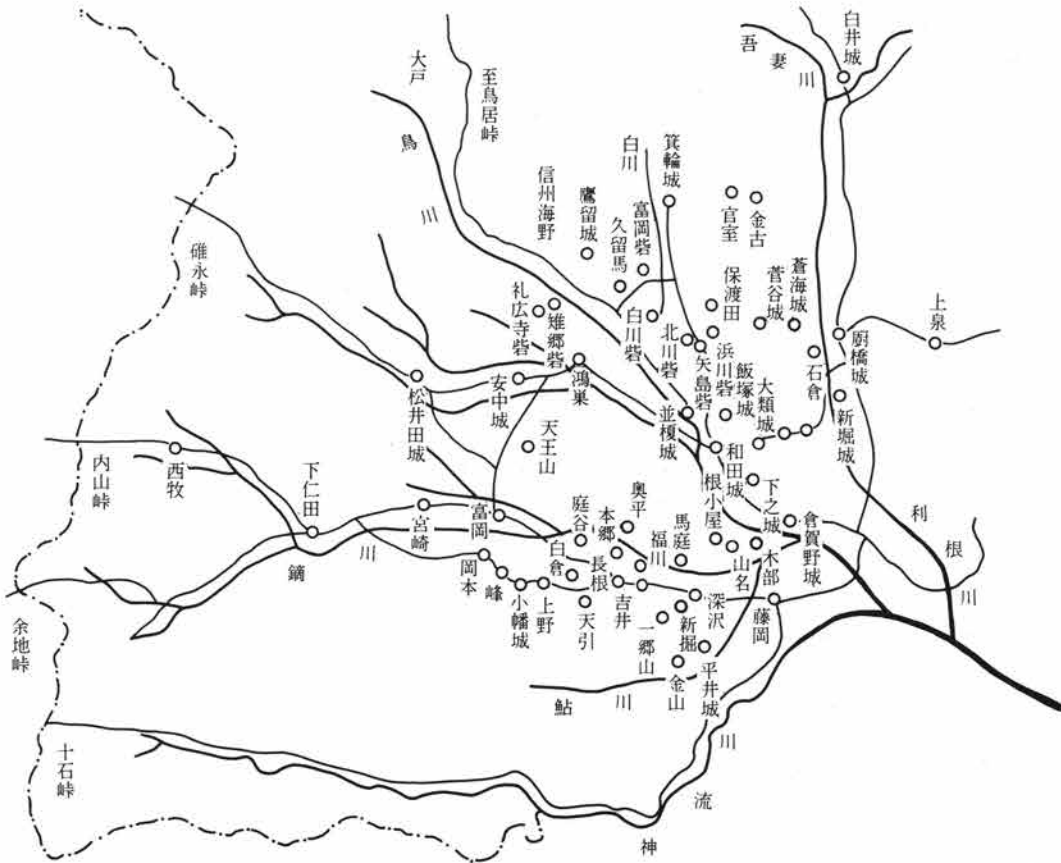
IV 附章 並榎城跡



付図3 並榎城址



付図4 並榎城址地籍図



付図5 城砦の分布図

文献24より一部加筆

参考文献

参 考 文 献

- 1 群馬県教育委員会編 『群馬県遺跡台帳(西毛編)』 1972(昭47)年
- 2 飯塚卓二他 『熊野堂遺跡1』 群馬県教育委員会・助群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団 1984(昭59)年
- 3 坂井 隆他 『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984(昭59)年
- 4 井川達雄 『融通寺遺跡』 『年報』 2 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983(昭58)年
- 5 関 晴彦 『融通寺遺跡』 『年報』 2 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984(昭59)年
- 6 石川正之助他 『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 群馬県教育委員会 1975(昭50)年
- 7 田島桂男他 『大八木水田遺跡』 高崎市教育委員会 1979(昭54)年
- 8 井川達雄 『下小島遺跡』 『年報』 3 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984(昭59)年
- 9 石川正之助他 『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』 群馬県教育委員会 1975(昭50)年
- 10 関口 修他 『矢島遺跡・御布呂遺跡』 高崎市教育委員会 1979(昭54)年
- 11 神戸聖語他 『御布呂遺跡』 高崎市教育委員会 1982(昭57)年
- 12 田村 孝他 『芦田貝戸遺跡Ⅱ』 高崎市教育委員会 1980(昭55)年
- 13 神戸聖語他 『寺ノ内遺跡』 高崎市教育委員会 1979(昭54)年
- 14 根岸省三他 『高崎市史』 第1巻 1969(昭44)年
- 15 群馬郡教育会編 『群馬県群馬郡誌』 1924(大14)年
- 16 田村 孝他 『菊地遺跡群(Ⅰ)』 1981(昭56)年
- 17 久保泰博他 『筑縄遺跡群—小星山古墳発掘調査速報—』 高崎市教育委員会 1984(昭59)年
- 18 杉原莊介・乙益重隆 『高崎市附近の弥生遺跡』 『考古学』 第10巻第10号 1939(昭14)年
- 19 田島桂男他 『国道17号線拉中工事に伴う一頼政神社古墳の調査—』 高崎市教育委員会
- 20 藤岡一雄他 『御部入古墳群』 『群馬県史3』 1981(昭56)年
- 21 尾崎喜左雄 『乗附庵寺址』 『日本考古年報』 2 日本考古学協会 1949(昭24)年
- 22 山崎 一 『群馬県古城址の研究』 1970(昭46)年
- 23 山崎 一 『群馬県古城址の研究 補遺編』 1979(昭54)年
- 24 近藤義雄・山崎 一 『箕輪城跡』 群馬県教育委員会 1982(昭57)年
- 25 近藤義雄他 『東山道』 群馬県教育委員会 1983(昭58)年
- 26 近藤義雄他 『三国街道』 群馬県教育委員会 1980(昭55)年
- 27 近藤義雄他 『信州街道』 群馬県教育委員会 1980(昭55)年
- 28 木崎喜雄・野村啓・中島啓治 『群馬のおいたちをたずねて』 上巻 1977(昭52)年
- 29 新井房夫 『関東盆地北西部地域の第四紀編年』 『群馬大学紀要』 第10巻第4号 1962(昭37)年
- 30 相京建史 『清里・庚申塚遺跡』 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981(昭56)年
- 31 中村昌人・桜井 考 『浜尻遺跡』 高崎市文化財調査報告書第26集 高崎市教育委員会 1981(昭56)年
- 32 三渡俊一郎 『名古屋市貝冢台遺跡と附近の弥生時代濠状遺構』 『古代人—40—』 名古屋考古学会 1982(昭57)年
- 33 赤羽一郎 『常滑焼』 考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社 1984(昭59)年
- 34 岩井宏実 『曲物の用途』 『大阪市立博物館研究紀要—10—』 1978(昭53)年
- 35 安田龍太郎 『絵巻物にみえる食器類と考古民料との比較研究序論』 『文化財論叢』 同朋舎 1982(昭57)年
- 36 須藤 護 『暮らしの中の木器』 ぎょうせい 1982(昭57)年
- 37 洪澤敬三編 『新版絵巻物による日本常民生活絵引』 平凡社 1984(昭59)年
- 38 大江正行 『群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿』 『群馬県考古通信』 第7号 群馬県考古学談話会 1980(昭55)年
- 39 井上 太 『中近世の土器について』 『本宿・郷土遺跡』 富岡市教育委員会 1981(昭56)年
- 40 大江正行 『中世後半の土器群について』 『清里・陣場遺跡』 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981(昭56)年
- 41 岩淵一夫 『土師質土器及び内耳土器の変遷』 『赤塚遺跡』 栃木県教育委員会 1981(昭56)年
- 42 安田龍太郎 『中世土師器と内耳土器』 『野州史学』 第5号 野州史学会 1981(昭56)年
- 43 森田 勉・横田賢次郎 『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』 『研究論集—4—』 九州歴史資料館 1978(昭53)年
- 44 上田秀夫 『14—16世紀の青磁碗の分類について』 『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982(昭57)年
- 45 仲野泰裕 『群馬県勢多郡富士見村皆沢焼について』 『愛知県陶磁資料館 研究紀要—3—』 1984(昭59)年
- 46 赤沼多佳他 『やきもの事典』 平凡社 1984(昭59)年
- 47 橋崎彰一他 『美濃の古陶』 光琳社 1976(昭51)年
- 48 田口昭二 『美濃焼』 考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社 1983(昭58)年
- 49 『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1984(昭59)年
- 50 赤井達郎他 『世界陶磁全集5(桃山二)』 小学館 1976(昭51)年
- 51 三輪茂雄 『白』 ものと人間の文化史25 法政大学出版局 1978(昭53)年
- 52 山崎 一 『群馬県』 『日本城郭大系—4—』 新人物往来社 1979(昭54)年

図 版



遺跡全景



発掘区全景

図版 2

4号溝

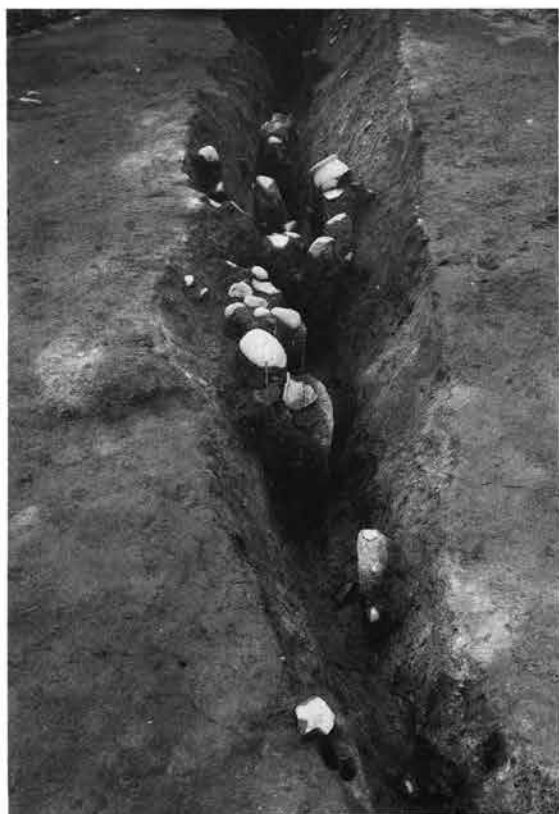


4号溝遺物出土状態



▼4号溝

▲9号溝

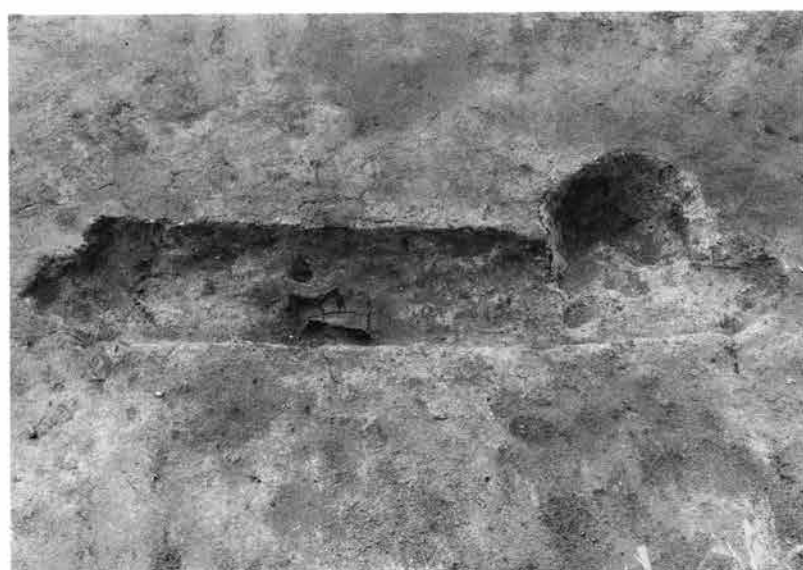




9号沟遗物出土状态



9号沟遗物出土状态



18号土坑

3・4号溝



3号溝



3号溝遺物出土状態





3号溝遺物出土状態



1号住居跡



1号住居跡炉跡

3号住居跡



3号住居跡炉跡



2号住居跡





2号住居跡遺物出土状態



4号住居跡



4号住居跡遺物出土状態

図版 8

2号溝B-B'土層断面(上部
に土壘を崩したと思われる人
為堆積土が認められる。)



2号溝西側礫出土状態



2号溝





2号溝、5号溝重複部分
土層断面（2号溝より）



5号溝土層断面（土塁を崩し
たと思われる人為堆積土が認
められる。）



5号溝

図版 10

6号溝土層断面（上部に浅間
A軽石降下堆積層、その下に
人為堆積土が認められる）



6・7号溝



6号溝テラス状平坦部





7号溝



7号溝東半



8号溝



11号溝

1号井戸



2号井戸



3号井戸





4号井戸

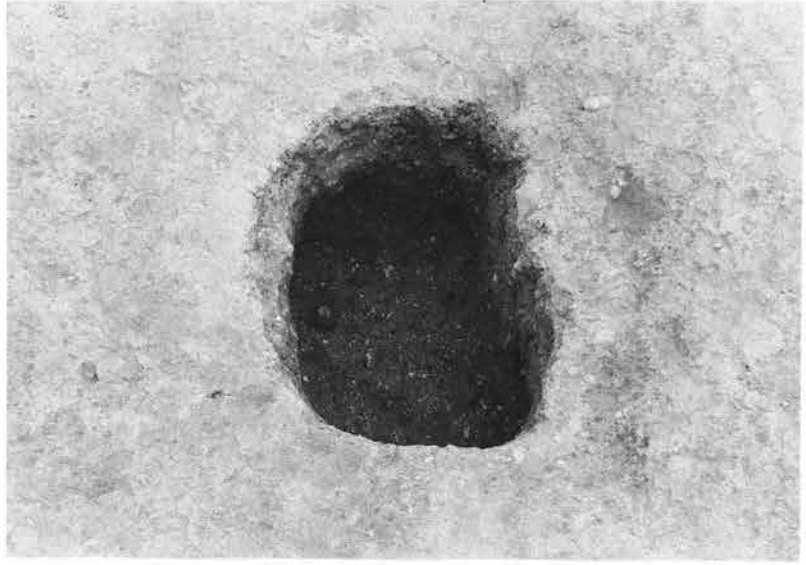


5号井戸



6号井戸

1号土坑墓



2号土坑墓

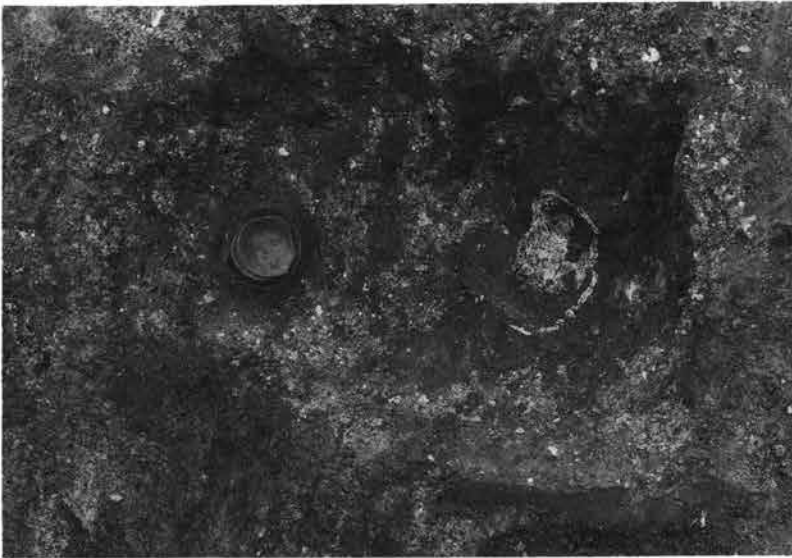


22号土坑土层断面





22号土坑



5号土坑墓



6号土坑

6号土城 遗物出土状态

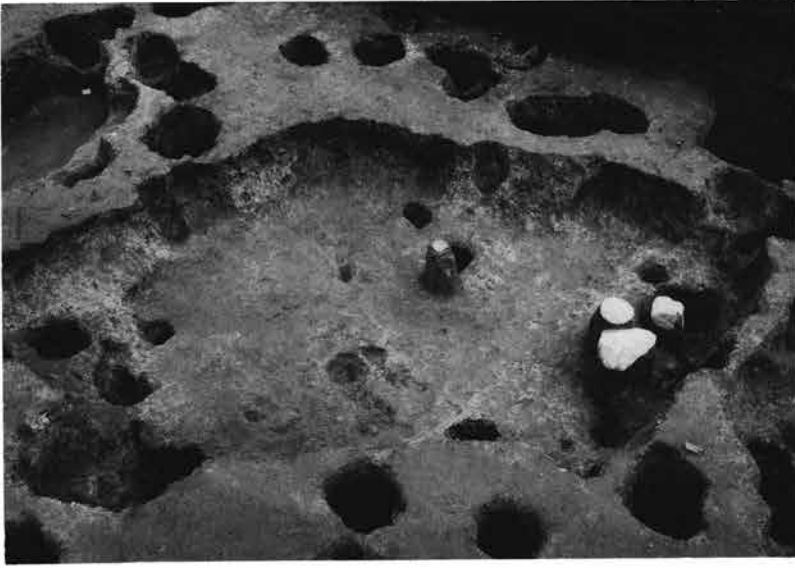


8号土城



9·10·11号土城





12号土城



12号土城 遗物出土状态



13号土城

19号土城



23号土城



26号土城





26号土坑遗物出土状态



28·29号土坑



33号土坑

35号土坑

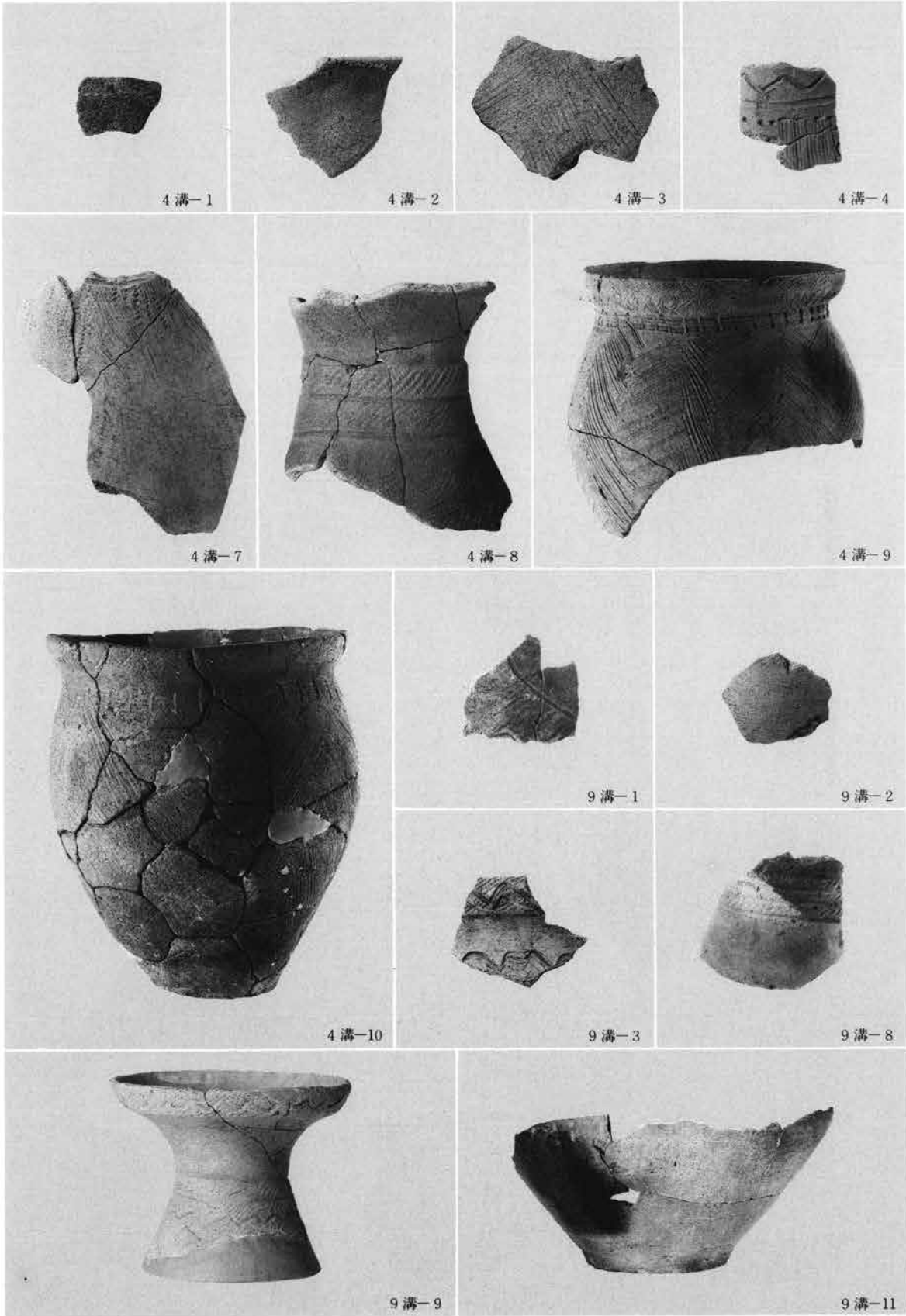


1号柱穴列

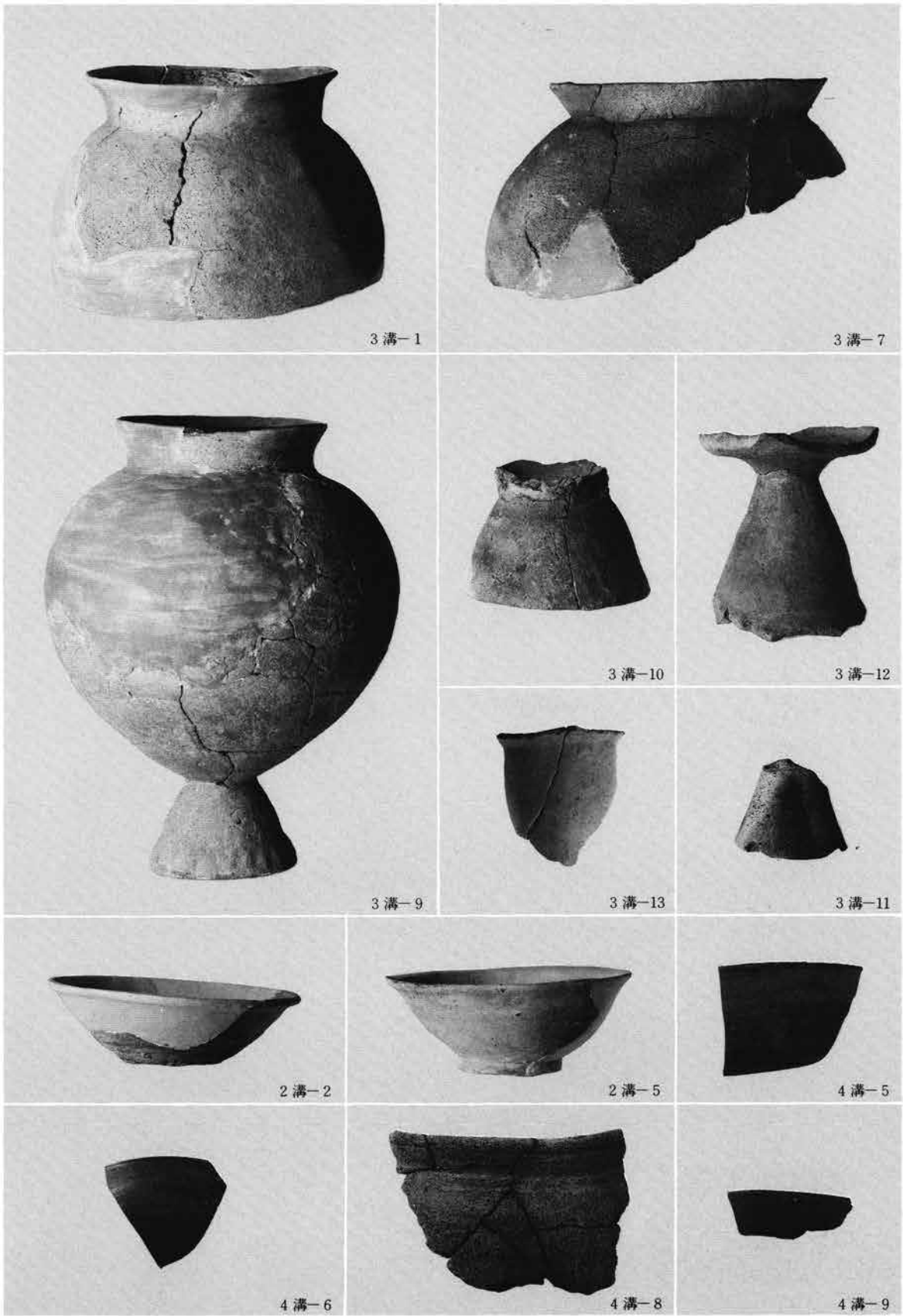


1号柱穴列近接

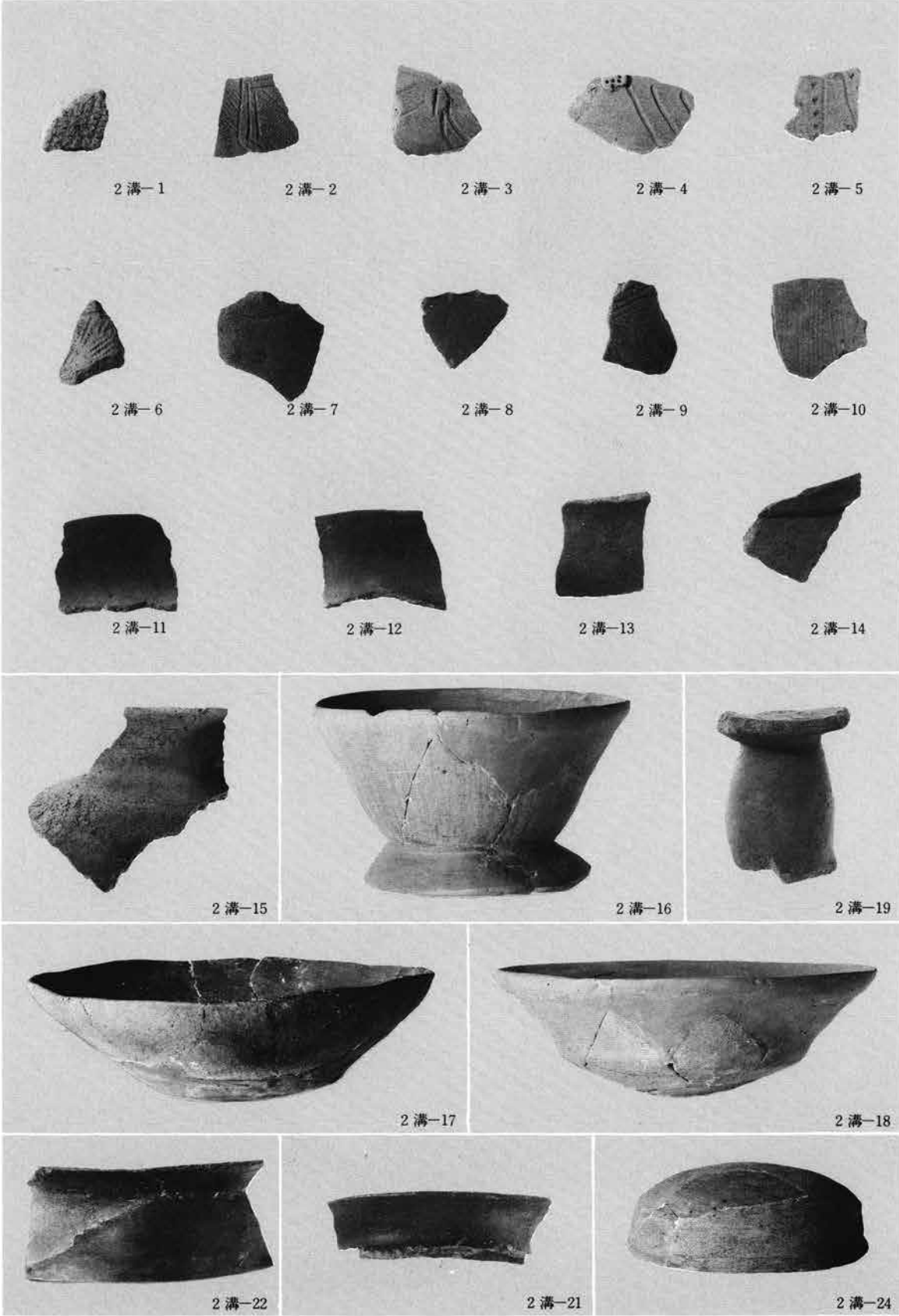




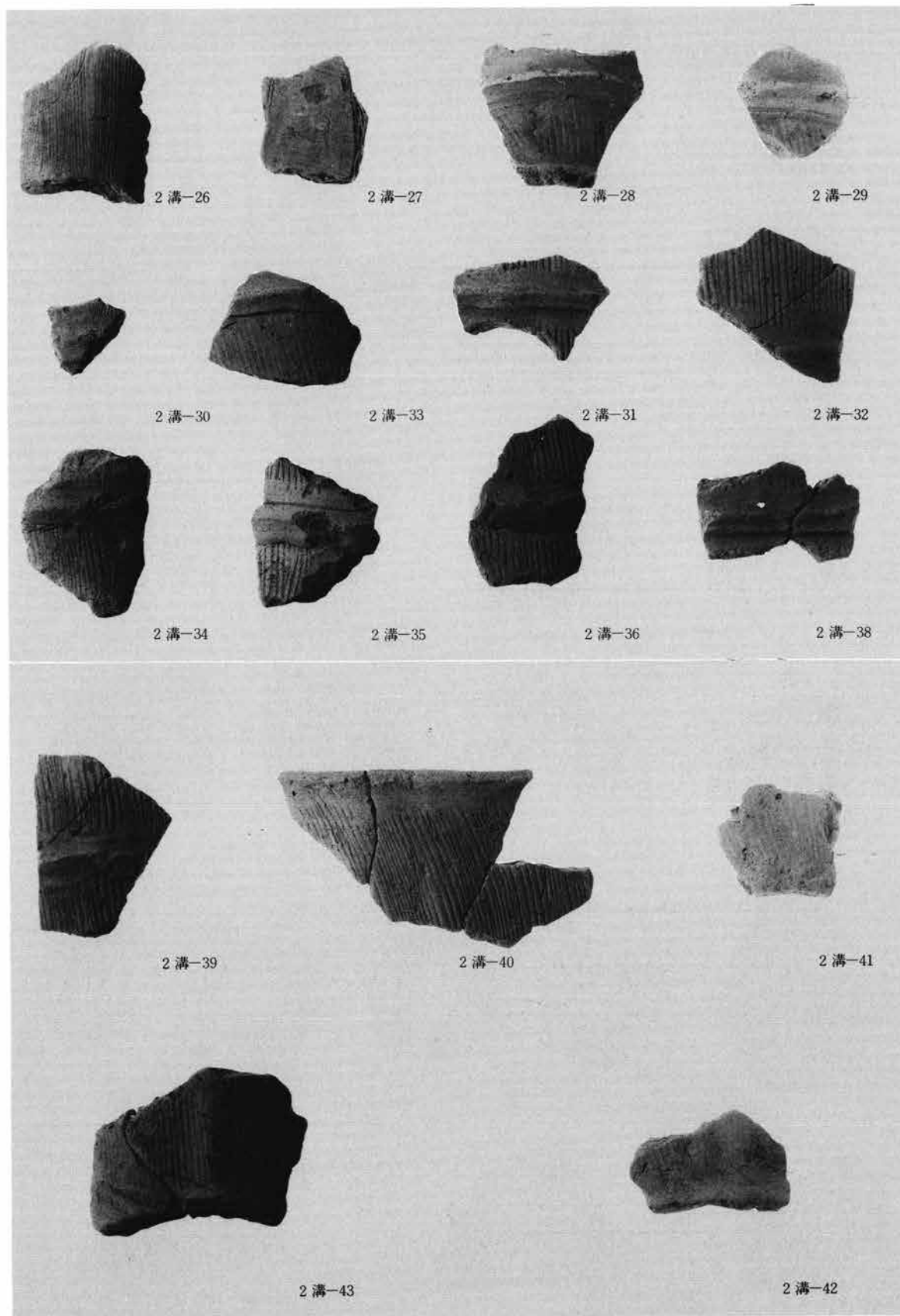
4 · 9 号溝出土遺物



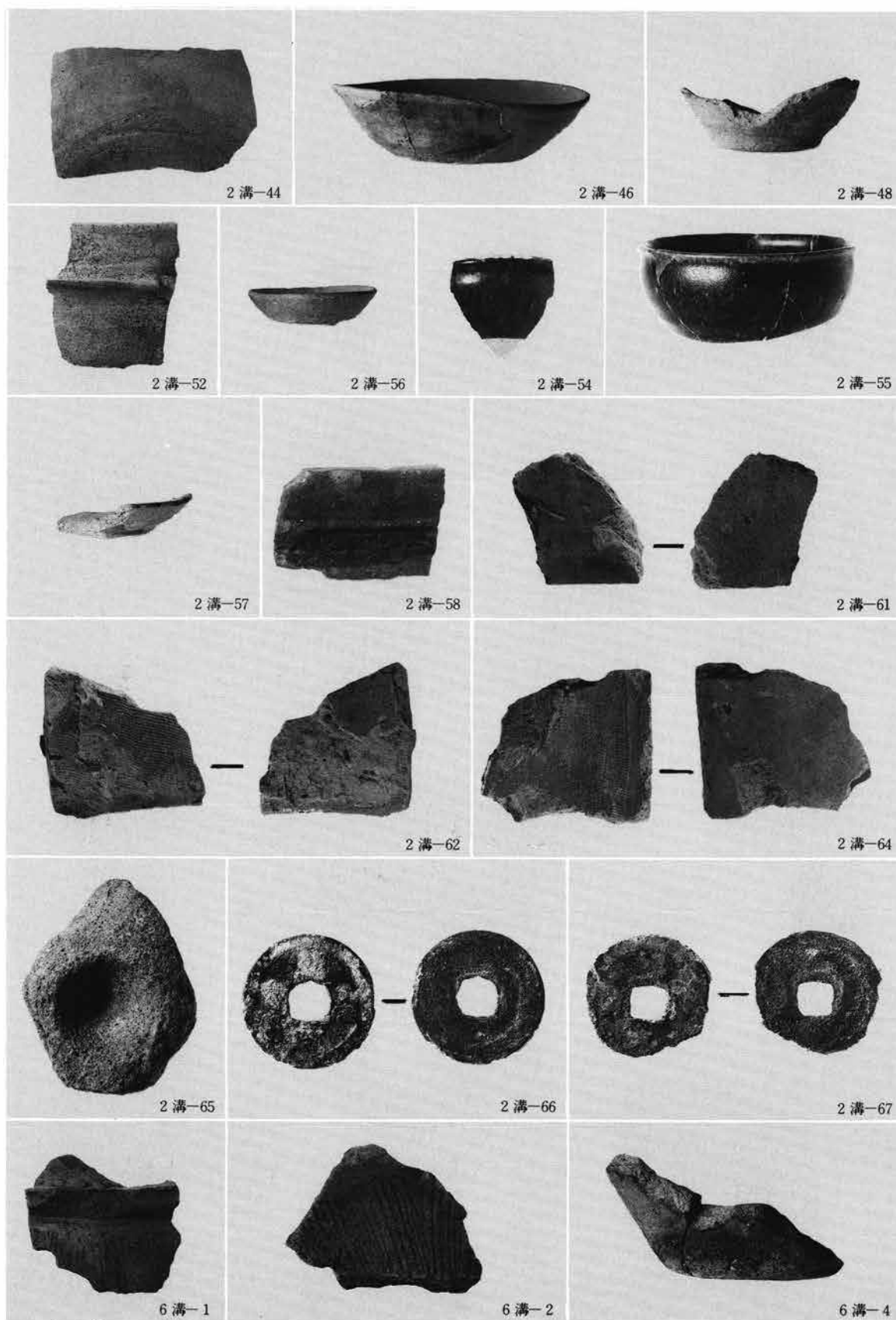
3号溝、2・4号住居跡出土遺物



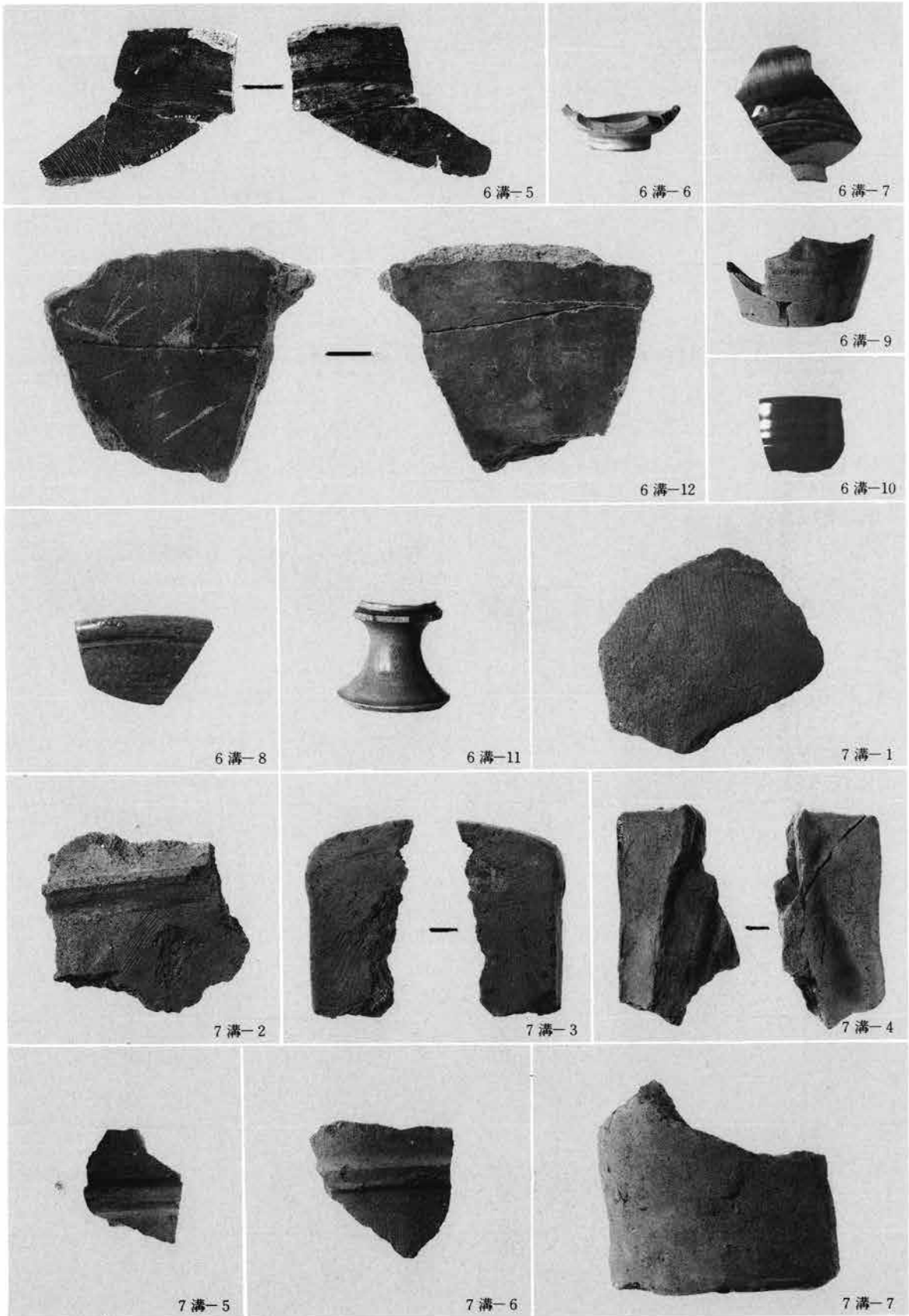
2 号溝出土遺物



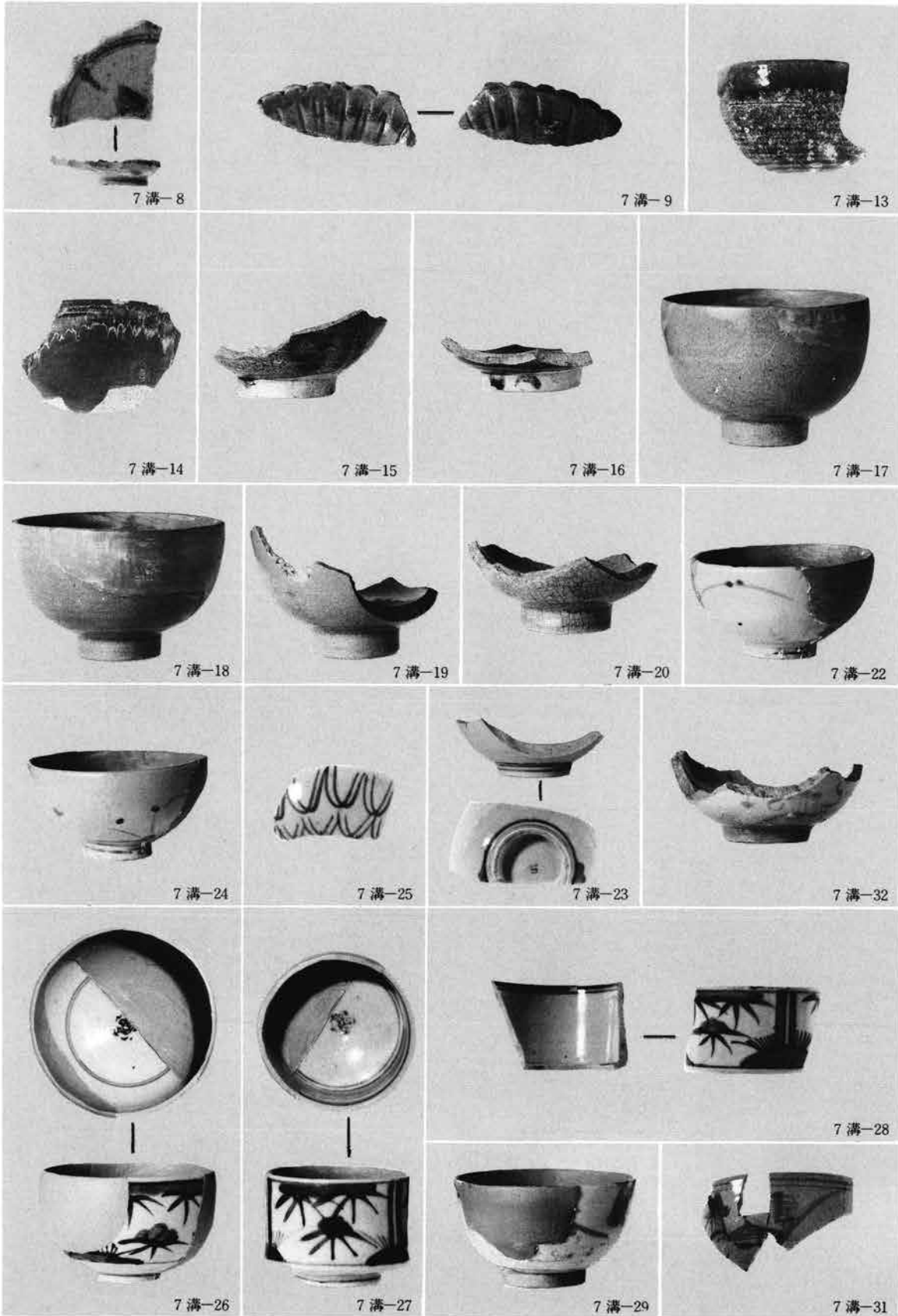
2 号溝出土遺物



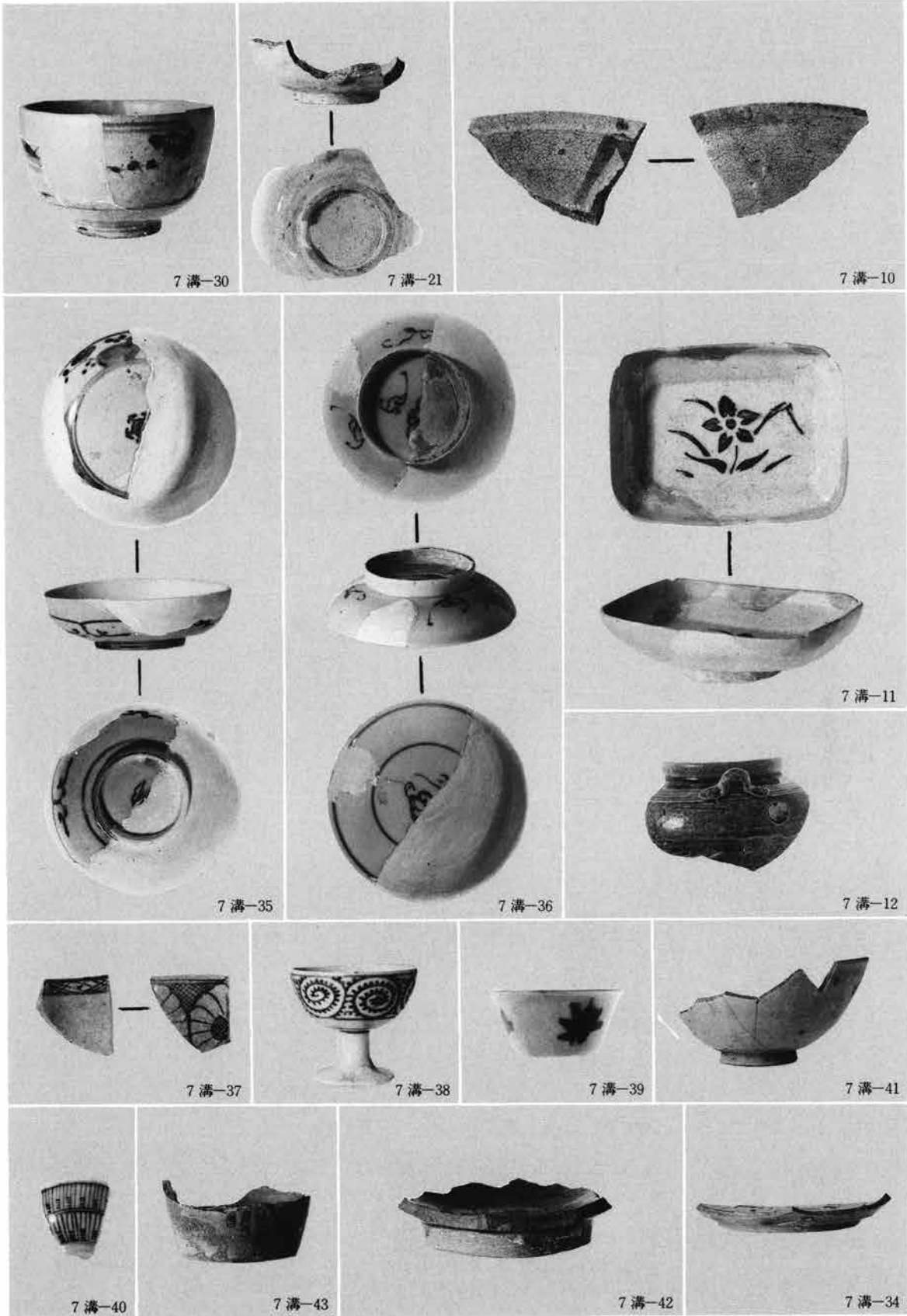
2・6号溝出土遺物



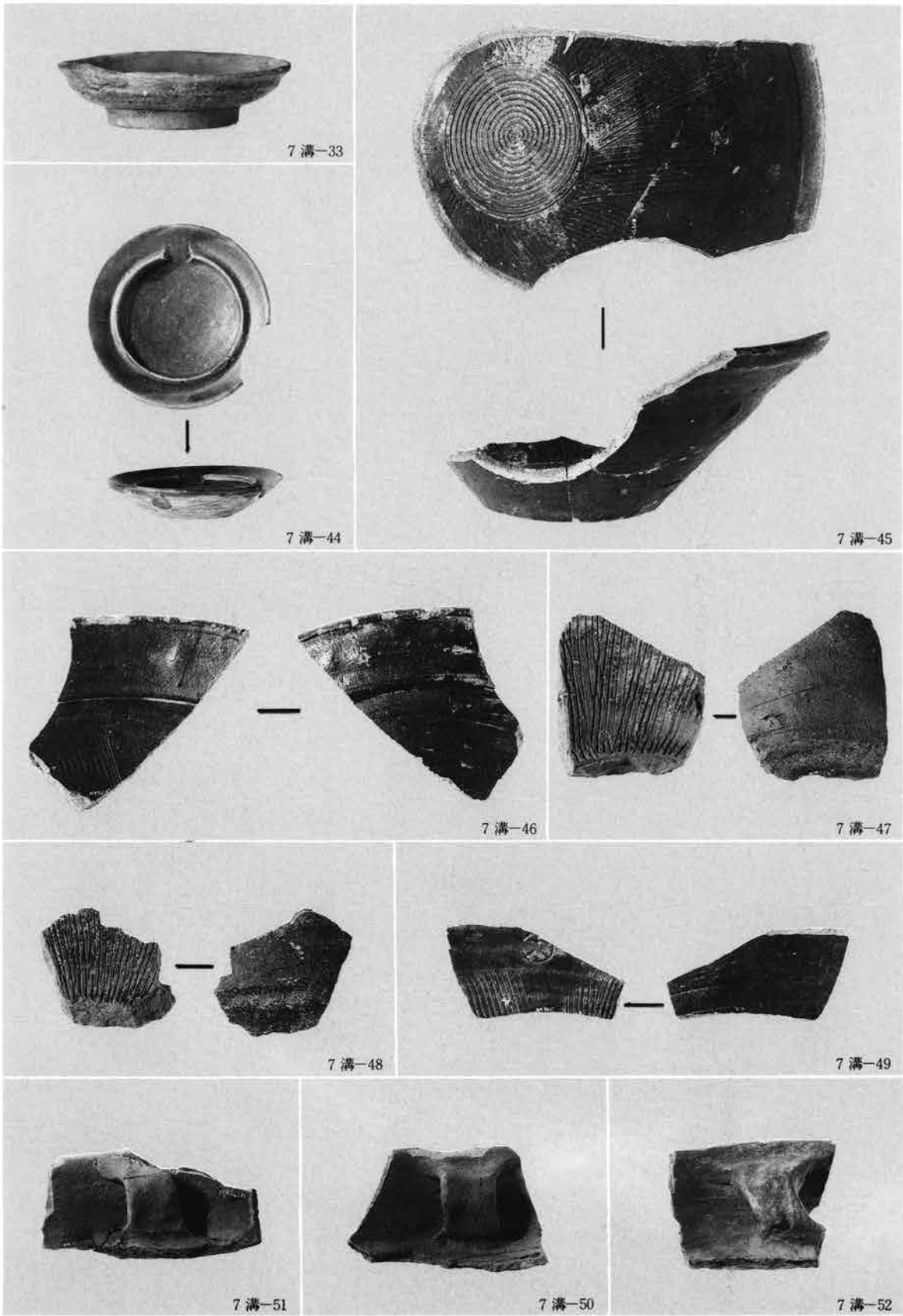
6·7号沟出土遗物



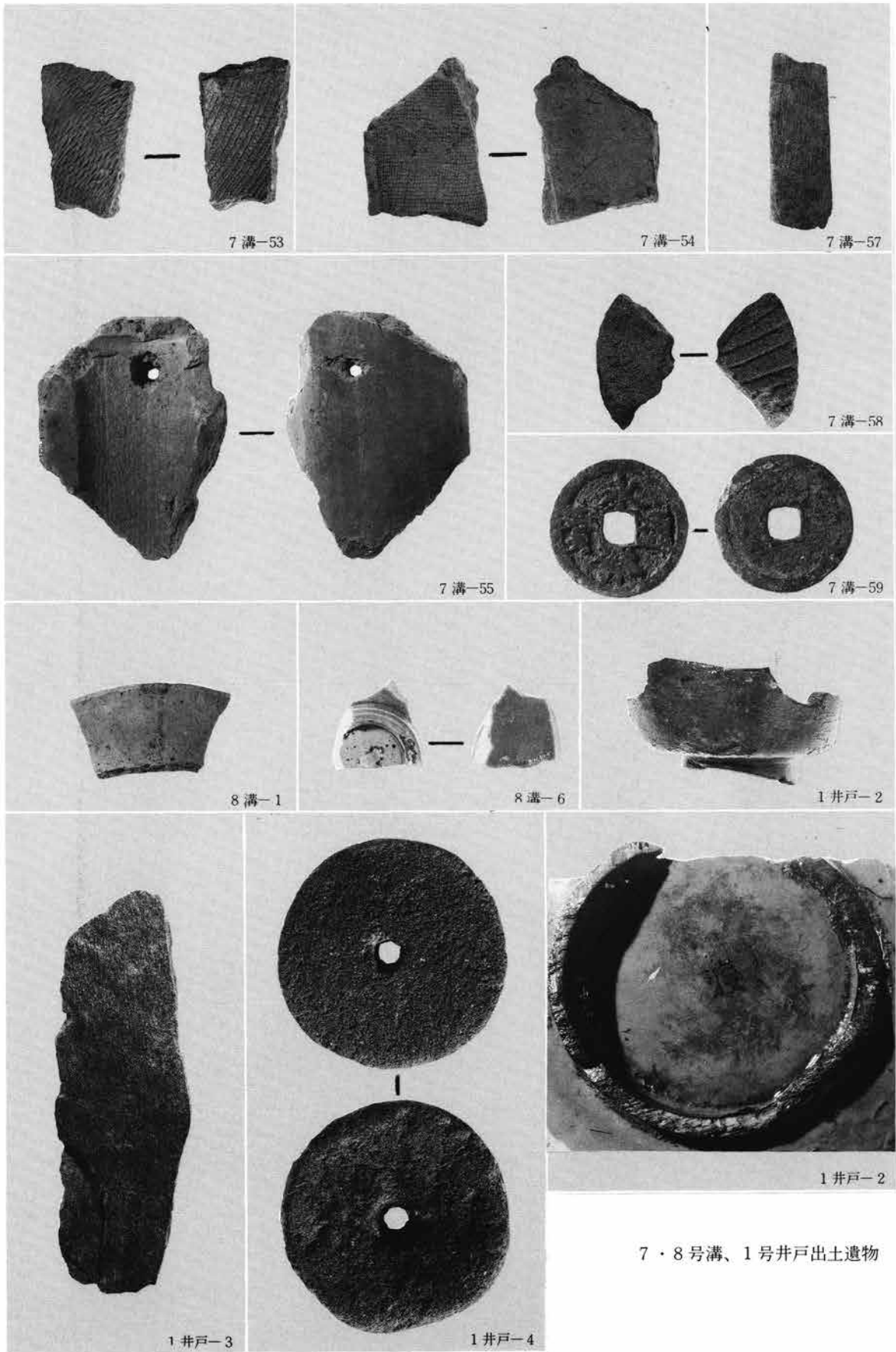
7号溝出土遺物



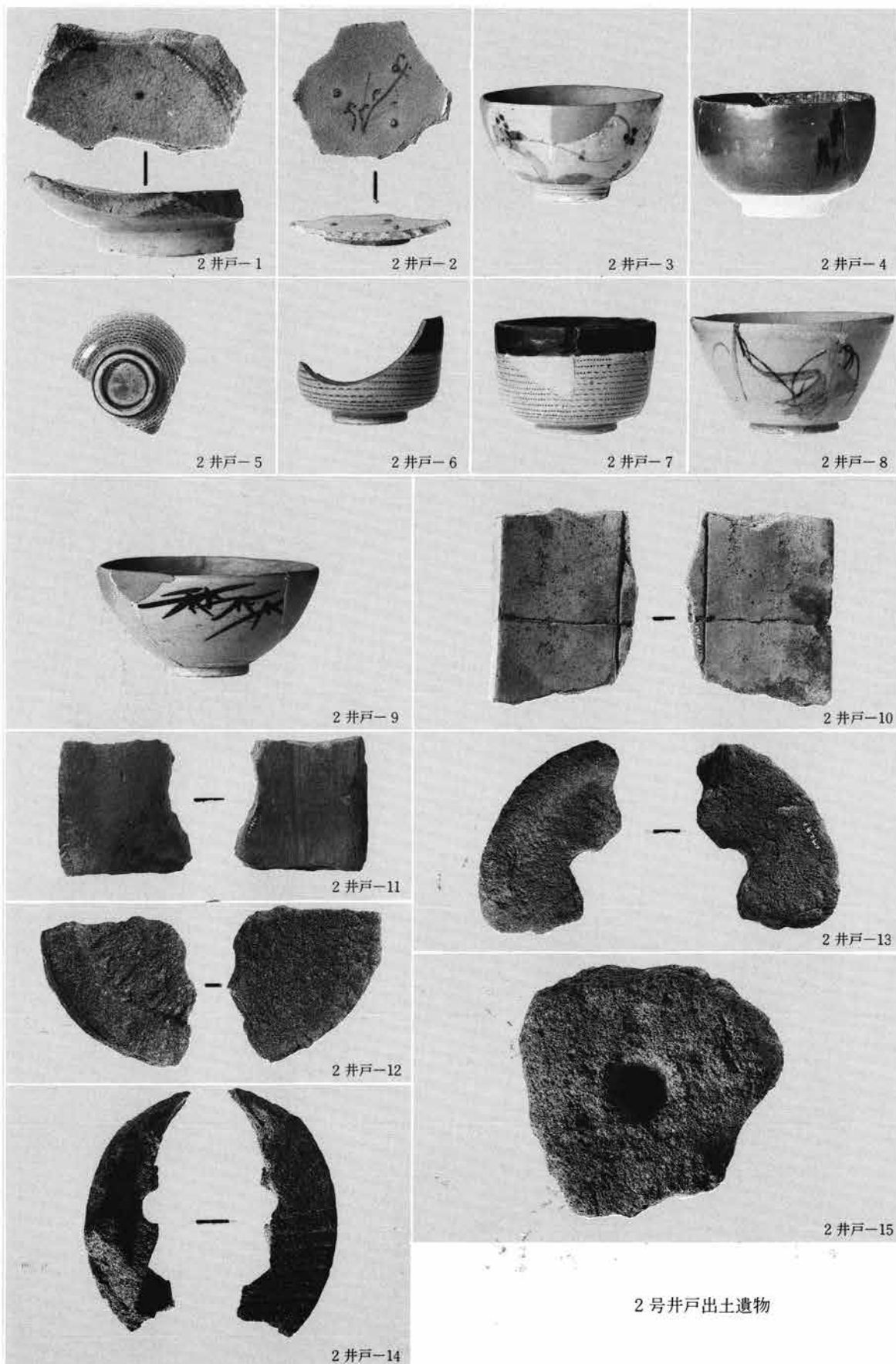
7号溝出土遺物



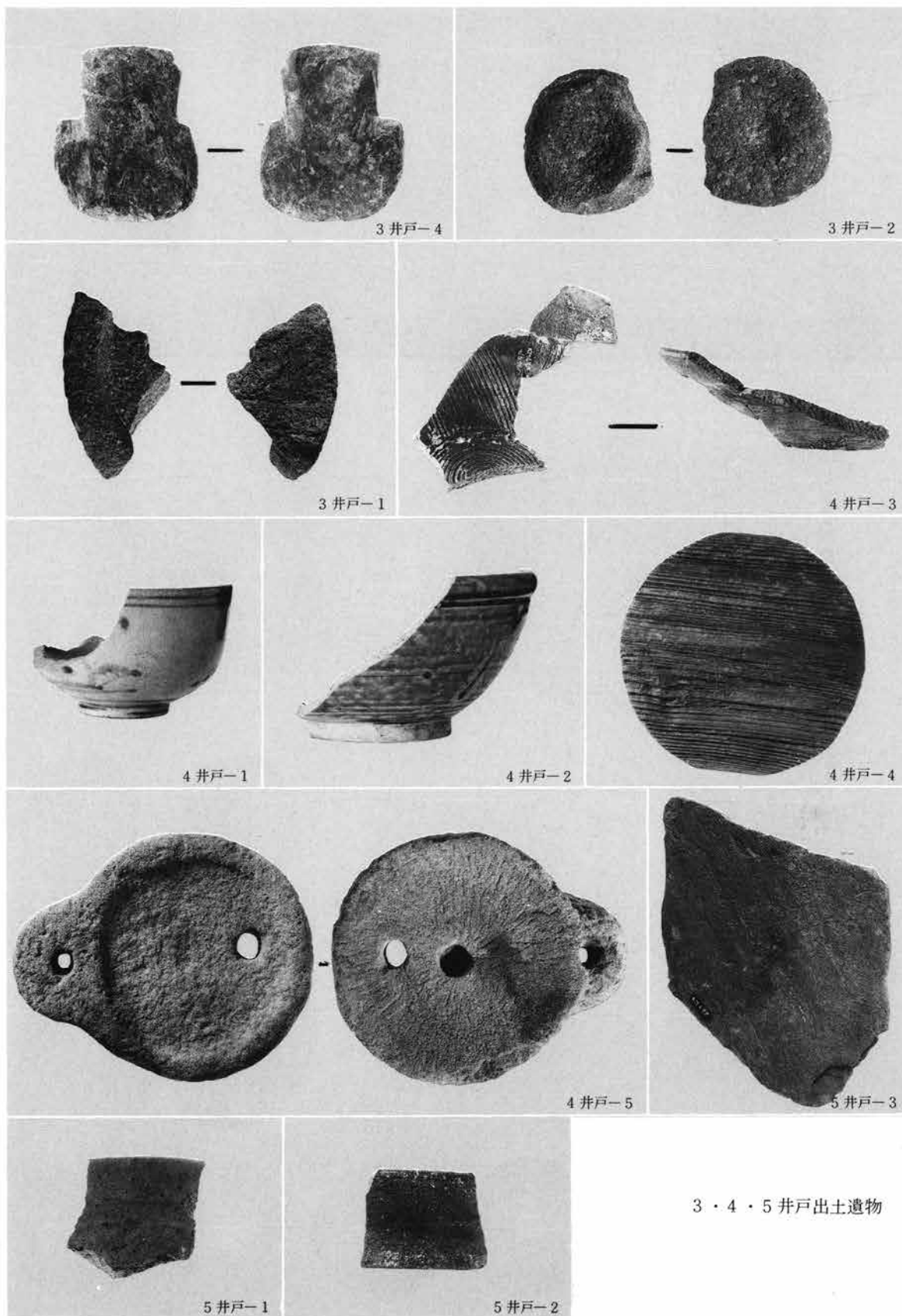
7 号溝出土遺物



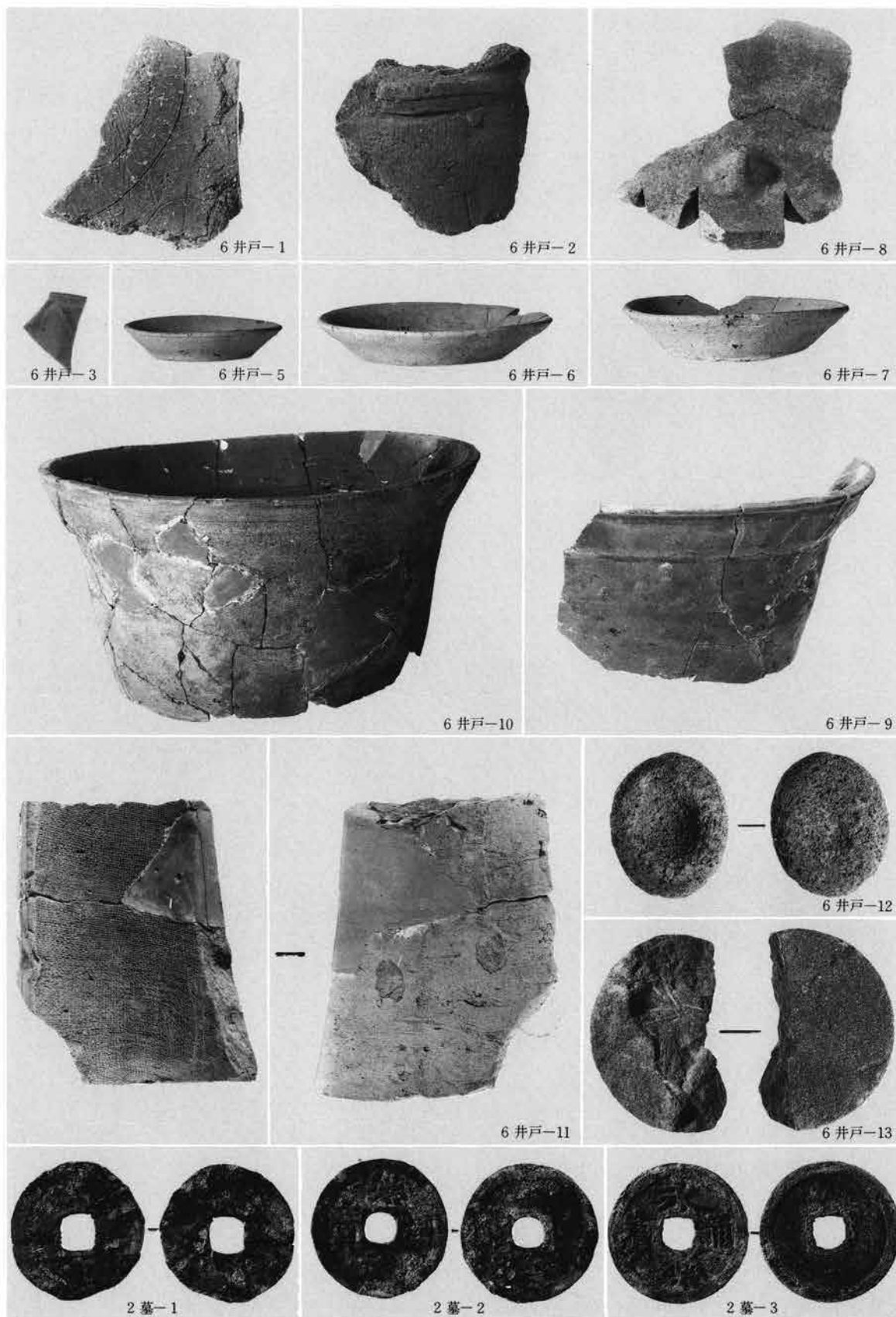
7・8号溝、1号井戸出土遺物



2号井戸出土遺物



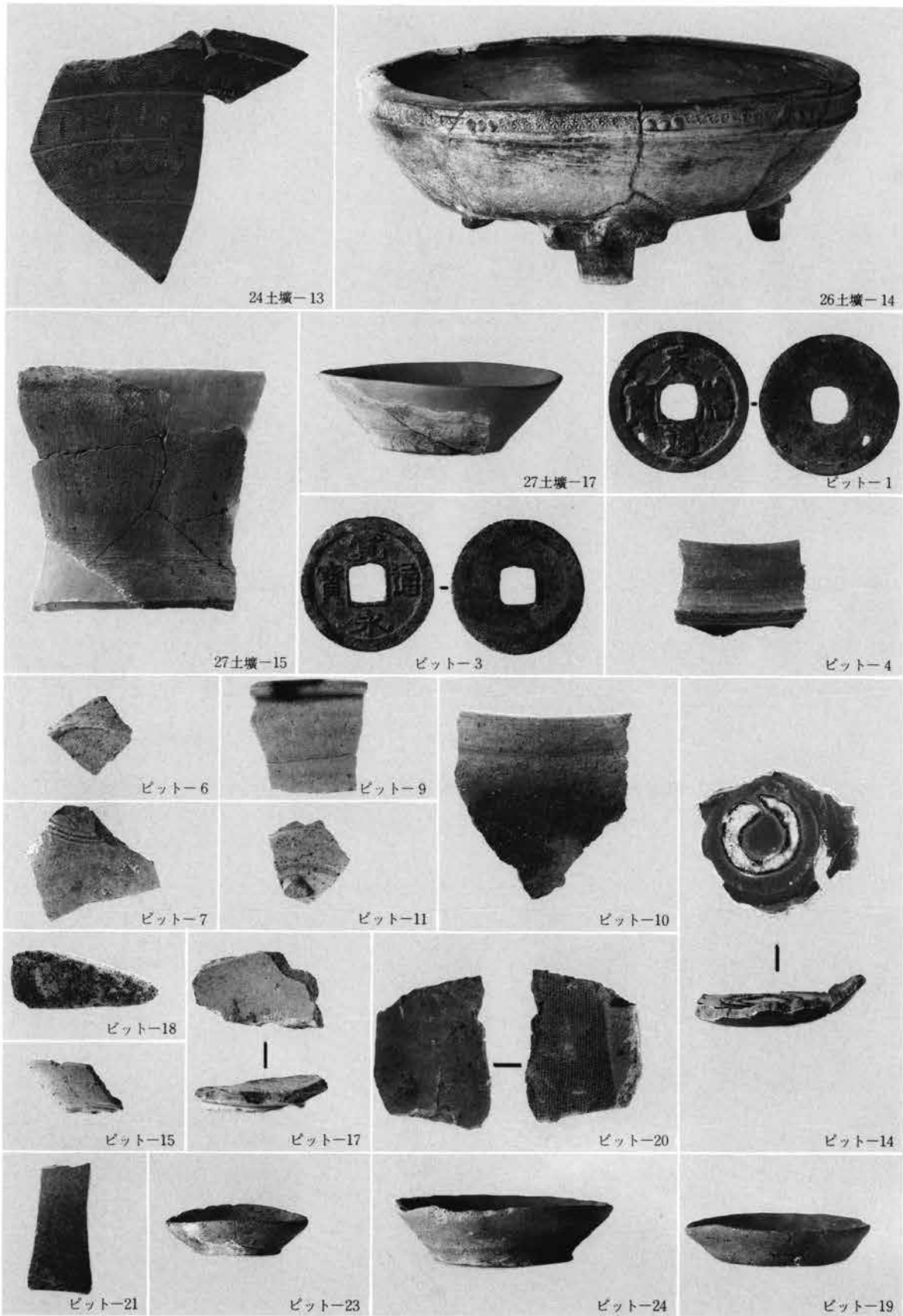
3・4・5井戸出土遺物



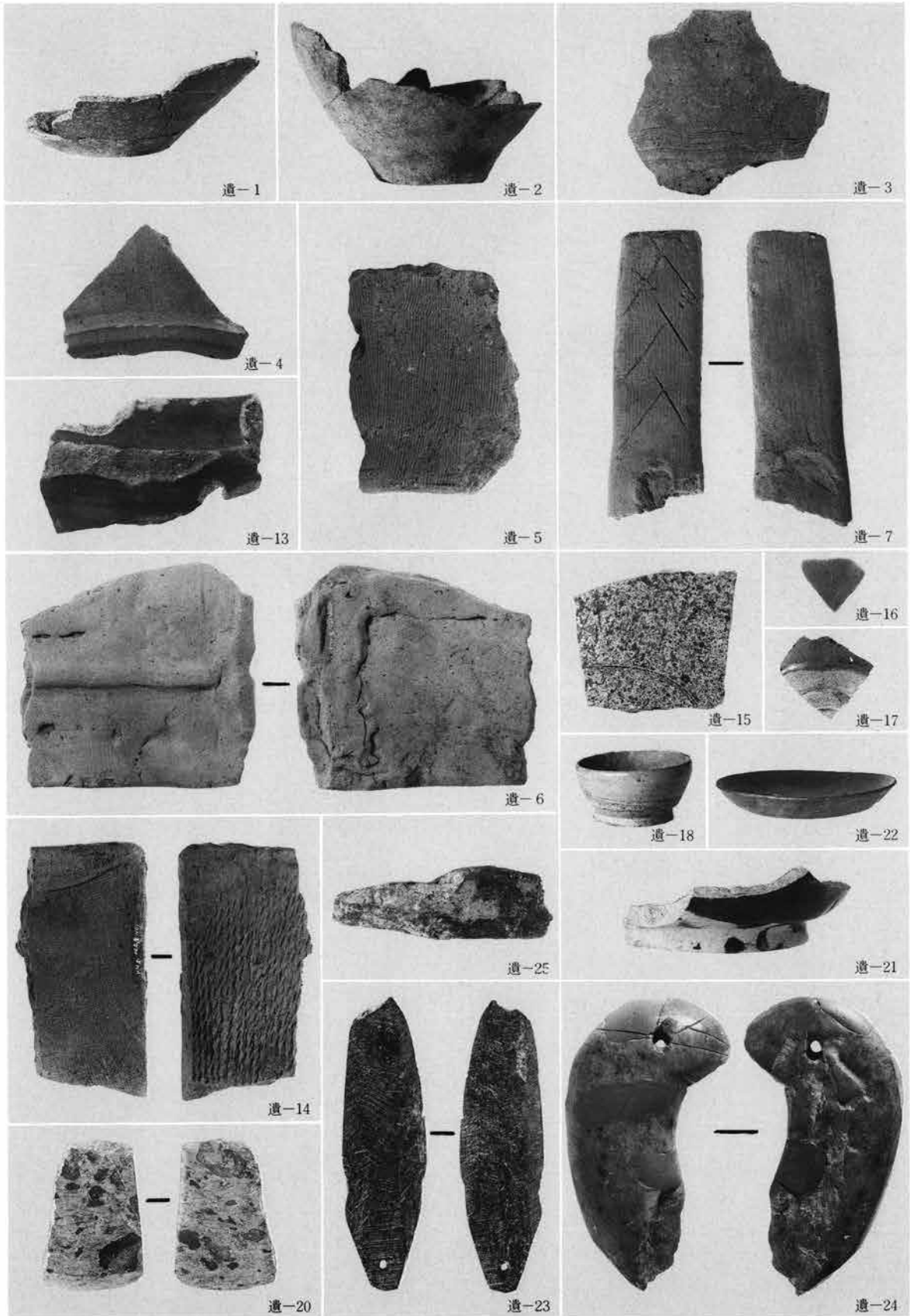
6号井戸、2号土壇墓出土遺物



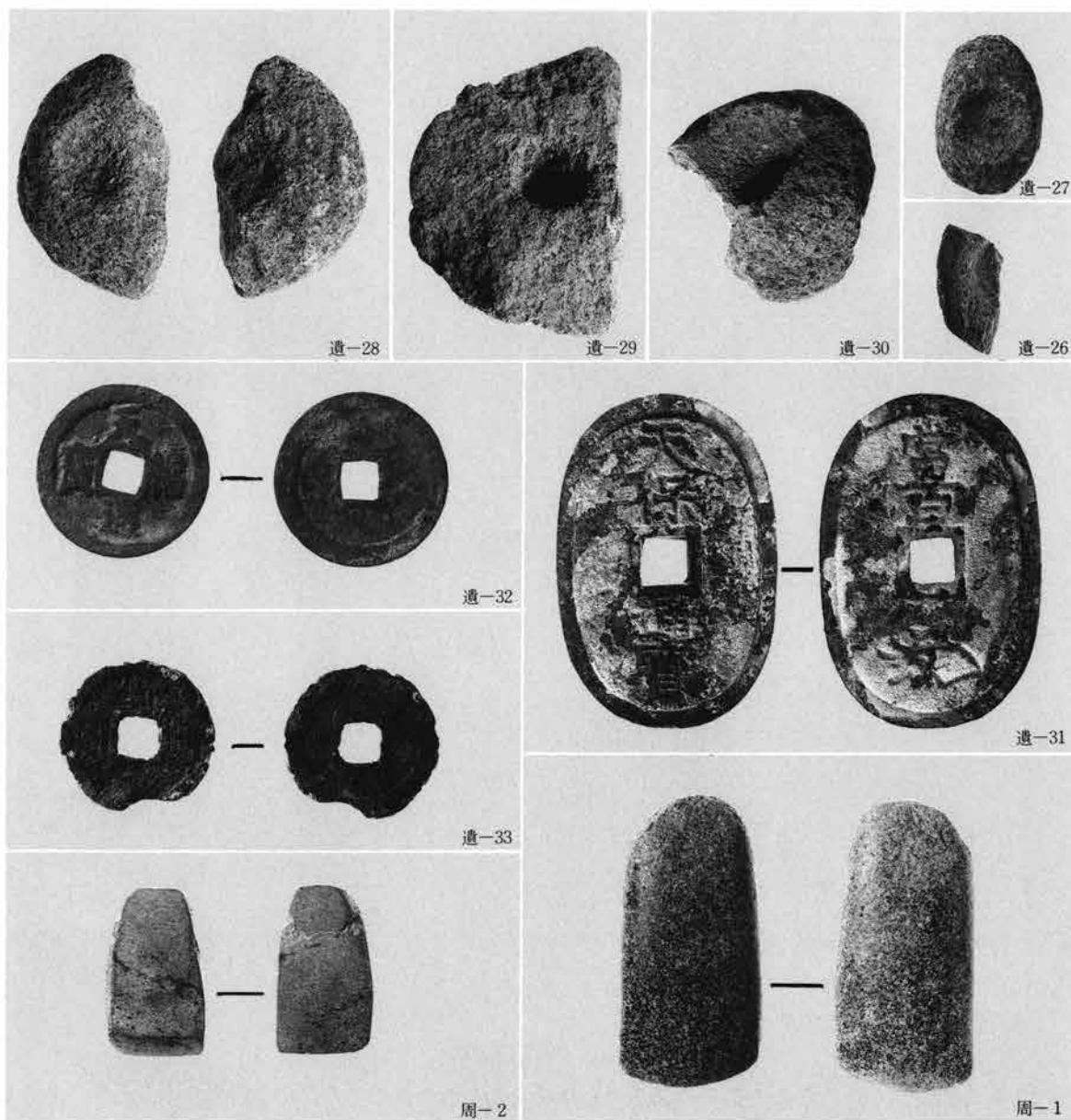
2~5号土城墓、6·10·12·17·21号土城出土遗物



24・26・27号土壙、ピット出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外・周辺表採遺物

信越本線北高崎・群馬八幡間烏川橋りょう
改良工事事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告

上 並 榎 南 遺 跡

印 刷 昭和60年3月30日
発 行 昭和60年3月30日

編集・発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電 話 (0279) 5 2—2 5 1 1 (代表)
印 刷 株式会社 前 橋 印 刷 所

正 誤 表

ページ 又は図版	行又は図	誤	正
凡例	5.	$\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{6}$	$\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{6}$
目次	付図 1	90	93
〃	付図 2	90	93
〃	付図 3	91	94
〃	付図 4	92	95
〃	付図 5	92	95
P 2	1. 9	火山に	火山灰に
〃	1.10	前橋大手町	前橋市大手町
〃	1.16	約19km	約1.9km
P 4	註 5	八幡古墳は全長12m	八幡塚古墳は全長102m
P14	第 6 図	9	10
〃	〃	10	9
P15	1.32	大形	大型
P17	第 8 図	13	15
〃	〃	15	13
P21	第12図	7	8
〃	〃	8	7
〃	〃	9	10
〃	〃	10	11
〃	〃	11	12
〃	〃	12	13
〃	〃	13	9
P26	1.18	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{3}$
P27	1. 7	交叉	交叉
〃	1. 9	埋沈	埋没
P28	1. 6	第 図	第53図
〃	1.19	L R 縄文か	L R 縄文が
P37	1. 7	埋沈状況	埋没状況
P39	1. 6	中心	中止
P41	第28図右	9	6

ページ 又は図版	行又は図	誤	正
P 56	第40図	4	5
〃	〃	5	4
P 59	1. 5	(4)	(3)
P 60	第46図		遺物番号、左上より 1. 2. 3
P 61	第47図右下		8
P 74	第60図スケール	1 : 6	1 : 60
P 82	1. 8	45.0kg	450 g
P 88	註23	上師質土器皿	土師質土器皿
P 89	1.15	上凝輝虎	上杉輝虎
図版22		9 溝—13	9 溝—14
〃		9 溝—14	9 溝—13
〃	下段	左から	3 溝 6. 5. 4
図版23		3 溝—13	天地逆
〃	下 2 段	溝	住
図版32		2 井戸—3	2 井戸—4
〃		2 井戸—4	2 井戸—3

01-352
135
(17)
群埋文

